

松山市道後城北遺跡群

祝谷アイリ遺跡

1992

財松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

松山市道後城北遺跡群
祝谷アイリ遺跡



1992

財松山市生涯学習振興財團
埋蔵文化財センター



卷頭図版 1 SK15出土遺物

序

この報告書は、医療法人聖愛会が病院建設するにともない、松山市教育委員会が委託を受け発掘調査を実施し、その結果をまとめたものです。

松山平野北東部の丘陵斜面に位置する本調査地「祝谷アイリ遺跡」は、県下でも弥生遺跡の密集する重要地域として知られるところにあります。道後城北遺跡群と称されるこの一帯には、文京遺跡、道後城北RNB遺跡、松山大学構内遺跡などをはじめ、本調査地西方に近接する祝谷六丁目遺跡、また南西方には、平行銅剣が出土した祝谷六丁場遺跡が散在しています。

今回の調査では、丘陵地での弥生期の竪穴式住居址、古墳期の掘立柱建物跡などを確認しましたが、丘陵地での竪穴式住居址検出例は、松山平野では数少なく住居址立地を研究するうえで好資料となるものです。

最後に、医療法人聖愛会の埋蔵文化財に対するご理解と、ご協力を賜り、また、調査及び出土物分析等についてご指導いただいた諸先生方に対し厚くお礼申し上げる次第であります。

本報告書が、学術・教育文化の向上、文化財保護、さらには今後の調査研究の一助になれば幸甚です。

平成4年3月31日

財団法人 松山市生涯学習振興財団
理 事 長 田 中 誠 一

例　　言

1. 本書は、松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センターが平成二年11月～三年3月に松山市祝谷6丁目1277番地他で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 遺構の実測は、梅木謙一の責任のもと、武正良浩が中心に行い、愛媛大学の学生他の援助を受けた。遺構の撮影は、梅木謙一、武正良浩、大西朋子が行った。
3. 遺構は、呼称を略号で記述した。竪穴式住居址：S B、溝：S D、土壙：S K、掘立柱建物：掘立、柱穴：S P、性格不明遺構：S Xである。
4. 遺物の実測・製図、遺構の製図は、梅木謙一、宮内慎一、武正良浩を中心に、高橋恒、水口あい、山之内志郎、白石聖子、瀬戸恭子、藤井宏枝、森田晶子、山下満佐子、好光明日香、兵頭千恵、松山桂子、三木和代、大西陽子、野口幸恵、加島次郎が行った。
5. 写真図版は、調査担当者の指示のもと、遺物の撮影、図版作成を大西朋子が行った。
6. 遺構図、遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。
7. 本書に使用した方位はすべて磁北である。
8. 本書にかかわる遺物・記録物は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。
9. 自然科学的分析は、杉山真二氏(古環境研究所)、本田光子(福岡市埋蔵文化財センター)に協力を頂き、また寄稿して頂いた。記して感謝申し上げます。
10. 本書の執筆は、田城武志、梅木謙一、武正良浩が事実報告を行い、考察では宮内慎一・山之内志郎、多田仁に寄稿していただいた。
11. 清書は、梅木謙一の責任のもと、武正良浩、高橋恒が行った。
12. 本書の編集は梅木謙一が行い、校正においては田城武志、宮内慎一、武正良浩、水口あい、高橋恒の協力を得た。

本文目次

I 調査に至る経緯	
1 経緯	(梅木謙一) 1
2 組織	(田城武志) 2
II 遺跡の概要	
1 遺跡の立地	(山之内志郎) 4
2 歴史的環境	(山之内志郎) 5
III 調査の概要	
1 調査の経緯	(梅木謙一) 9
2 層位	(梅木謙一・武正良浩) 10
3 遺構と遺物	(梅木謙一・武正良浩) 16
〔1〕堅穴式住居址	
1) 弱生時代	
2) 古墳時代	
〔2〕掘立柱建物址	
〔3〕土壙	
〔4〕溝	
〔5〕その他の遺構と遺物	
〔6〕分銅形土製品	
4 小結	(梅木謙一) 78
IV 自然科学分析	
1 瓦酸体分析	(杉山真二) 83
2 樹種同定	(杉山真二) 101
3 種子分析	(杉山真二) 105
4 分銅形土製品付着赤色顔料分析	(本山光子) 106
V 考察	
1 松山平野の石器文化	(多田仁) 108
2 道後城北地域出土の分銅形土製品	(山之内志郎) 127
3 道後城北遺跡群の須恵器	(宮内慎一・山之内志郎) 137
VI 祝谷アイリ遺跡の調査成果と課題	(梅木謙一) 153

挿図目次

第1図	祝谷アイリ出土品 (縮尺1/6)	1
第2図	祝谷地区の地質図	4
第3図	松山平野の主要遺跡分布図 (縮尺1/50,000)	7
第4図	祝谷地区の主要遺跡分布図 (縮尺1/25,000)	8
第5図	調査地位置図 (縮尺1/1,600)	9
第6図	南壁上層図 (縮尺1/60)	11
第7図	西壁土層図 (縮尺1/60)	13
第8図	遺構配置図 (縮尺1/300)	15
第9図	S B 5測量図 (縮尺1/80)	17
第10図	S B 5出土遺物実測図(1) (縮尺1/4)	19
第11図	S B 5出土遺物実測図(2) (縮尺2/3・1/4)	20
第12図	S B 2測量図 (縮尺1/80)	23
第13図	S B 2出土遺物実測図(1) (縮尺1/4・1/3)	25
第14図	S B 2出土遺物実測図(2) (縮尺2/3)	26
第15図	S B 1・7測量図 (縮尺1/80)	28
第16図	S B 1カマド測量図 (縮尺1/20)	29
第17図	S B 1・7出土遺物実測図 (縮尺1/4・2/3)	30
第18図	S B 3測量図 (縮尺1/80)	31
第19図	S B 3カマド測量図 (縮尺1/20)	32
第20図	S B 3出土遺物実測図 (縮尺1/4)	33
第21図	S B 01測量図 (縮尺1/80)	34
第22図	S K 15測量図 (縮尺1/40)	37
第23図	S K 15最下部出土遺物実測図 (縮尺1/4)	39
第24図	S K 15最下部他出土遺物実測図 (縮尺1/4)	40
第25図	S K 15III層出土遺物実測図(1) (縮尺1/4)	41
第26図	S K 15III層出土遺物実測図(2) (縮尺1/4)	42
第27図	S K 15III層出土遺物実測図(3) (縮尺1/4)	43
第28図	S K 15III層出土遺物実測図(4) (縮尺1/4)	45
第29図	S K 15III層出土遺物実測図(5) (縮尺1/4)	46
第30図	S K 15III層出土遺物実測図(6) (縮尺1/4)	47
第31図	S K 15III層出土遺物実測図(7) (縮尺2/3)	48

第32図	S K15II層出土遺物実測図(1) (縮尺1/4)	50
第33図	S K15II層出土遺物実測図(2) (縮尺1/4)	51
第34図	S K15II層出土遺物実測図(3) (縮尺1/4)	52
第35図	S K4測量図 (縮尺1/20)	54
第36図	S X010測量図 (縮尺1/80)	55
第37図	S K4出土遺物実測図 (縮尺1/4)	56
第38図	S X010出土遺物実測図 (縮尺1/4)	57
第39図	S X010・SK4関連出土遺物実測図 (縮尺1/4)	58
第40図	S X010出土遺物実測図 (縮尺2/3)	59
第41図	S K13出土遺物実測図 (縮尺1/4・2/3)	61
第42図	S K1・3・6出土遺物実測図 (縮尺1/4)	62
第43図	S X07出土遺物実測図(1) (縮尺1/4)	64
第44図	S X07出土遺物実測図(2) (縮尺2/3)	65
第45図	S X08出土遺物実測図 (縮尺1/4)	66
第46図	S X09出土遺物実測図(1) (縮尺1/4)	67
第47図	S X09出土遺物実測図(2) (縮尺2/3)	68
第48図	第III・IV・V・VIA層出土遺物実測図 (縮尺1/4)	69
第49図	第IV層出土遺物実測図 (縮尺2/3)	70
第50図	第VI層出土遺物実測図 (縮尺1/4・2/3)	71
第51図	第VII層出土遺物実測図 (縮尺1/4)	72
第52図	表採及び層不明出土遺物実測図(1) (縮尺1/4)	73
第53図	表採及び層不明出土遺物実測図(2) (縮尺1/4)	74
第54図	表採及び層不明出土遺物実測図(3) (縮尺2/3)	75
第55図	祝谷アイリ遺跡出土の分銅形土製品 (縮尺1/2)	77
第56図	祝谷アイリ遺跡の集落動態図 (縮尺1/600)	81
第57図	プラント・オパールの顕微鏡写真(1)	93
第58図	プラント・オパールの顕微鏡写真(2)	94
第59図	プラント・オパールの顕微鏡写真(3)	95
第60図	プラント・オパールの顕微鏡写真(4)	96
第61図	プラント・オパールの顕微鏡写真(5)	97
第62図	プラント・オパールの顕微鏡写真(6)	98
第63図	プラント・オパールの顕微鏡写真(7)	99
第64図	プラント・オパールの顕微鏡写真(8)	100
第65図	祝谷アイリ遺跡出土材の電子顕微鏡写真	103

第66図	釜ノ口遺跡（7次）出土材の電子顕微鏡写真	104
第67図	祝谷アイリ遺跡・釜ノ口遺跡（7次）出土の種子（縮尺1/2・1/1）	105
第68図	赤色顔料の透過画像（約500倍）	106
第69図	松山平野における主要石器出土分布図（縮尺1/180,000）	109
第70図	祝谷丸山遺跡出土上石器実測図（縮尺1/1）	111
第71図	絆石山古墳出土上石器実測図（縮尺1/1・1/2）	116
第72図	久米高畠遺跡5次調査出土石器実測図(1)（縮尺1/1）	119
第73図	久米高畠遺跡5次調査出土石器実測図(2)（縮尺1/1）	121
第74図	久米高畠遺跡5次調査出土上石器実測図(3)（縮尺1/2）	122
第75図	祝谷丸山、絆石山古墳出土上石器	125
第76図	久米高畠遺跡5次調査出土上石器	126
第77図	道後城北遺跡群出土の分銅形土製品分布図（縮尺1/25,000）	128
第78図	道後城北遺跡群出土の分銅形土製品実測図(1)（縮尺1/4）	130
第79図	道後城北遺跡群出土の分銅形土製品実測図(2)（縮尺1/4）	131
第80図	道後城北遺跡の須恵器I期(1)（縮尺1/3）	138
第81図	道後城北遺跡の須恵器I期(2)（縮尺1/3）	139
第82図	道後城北遺跡の須恵器II期前半(1)（縮尺1/3）	140
第83図	道後城北遺跡の須恵器II期前半(2)（縮尺1/3）	141
第84図	道後城北遺跡の須恵器II期後半(1)（縮尺1/3）	142
第85図	道後城北遺跡の須恵器II期後半(2)（縮尺1/3）	143
第86図	道後城北遺跡の須恵器III期（縮尺1/3）	144
第87図	道後城北遺跡の須恵器IV期（縮尺1/3）	145
第88図	道後城北地区の主要遺跡の分布図	148
第89図	道後城北遺跡の遺構・遺物分布図	149
第90図	道後城北遺跡群の須恵器（試案）	151

図版目次

巻頭図版 1 SK15出土遺物

図版1. 1 祝谷アイリ遺跡遠景（西より）

2 祝谷アイリ遺跡近景（西より）

図版2. 1 南壁土層（北より）

2 西壁上層（北東より）

図版3. 1 造構検出状況〔全景〕（南東より）

2 造構検出状況〔北部〕（南より）

図版4. 1 完掘状況〔北部〕（南より）

2 完掘状況〔北西部〕（南東より）

図版5. 1 SB5断面（南より）

2 SB5（南より）

図版6. 1 SB2①（南より）

2 SB2②（南東より）

図版7. 1 SB2炭化材検出状況（北西より）

2 SB2炭化材検出状況（南東より）

図版8. 1 SB1（南より）

2 SB1カマド内遺物出土状況〔遠景〕（南より）

図版9. 1 SB1カマド内遺物出土状況〔近景〕（南より）

2 SB1カマド（南より）

図版10. 1 SB3①（南東より）

2 SB3②（北西より）

図版11. 1 SK15砾群検出状況（北東より）

2 SK15断面（東より）

図版12. 1 SK15遺物出土状況①（東より）

2 SK15遺物出土状況②（東より）

図版13. 1 SK15遺物出土状況③（東より）

2 SK15（東より）

図版14. 1 SK4〔左下〕 SX010〔下〕 SB4〔上〕（南東より）

2 SK4遺物出土状況（東より）

図版15. 1 SK13遺物出土状況（北より）

2 SK13（南より）

- 図版16. 1 挖立1 (北より)
2 挖立1 S P12断面 (北より)
- 図版17. 1 SK2断面 (南より)
2 SK2 (南より)
- 図版18. 1 SK3断面 (南より)
2 SK3 (南より)
- 図版19. 1 SB5出土遺物
2 SB2出土遺物
- 図版20. 1 SB7出土遺物
- 図版21. 1 SK15最下部出土遺物
- 図版22. 1 SK15最下部他出土遺物
- 図版23. 1 SK15III層出土遺物①
- 図版24. 1 SK15III層出土遺物②
- 図版25. 1 SK15III層出土遺物③
- 図版26. 1 SK15II層出土遺物
- 図版27. 1 SK15最下部他出土遺物 (59・63)
SK15III層出土遺物 (84・86・105)
SK15II層出土遺物 (124・126・145)
- 図版28. 1 SK4出土遺物
- 図版29. 1 SX010出土遺物
- 図版30. 1 SK13出土遺物 (189・194・197)
SX09出土遺物 (237~240・244・245・247・248)
- 図版31. 1 第IV層出土遺物 (266・267)
第VI層出土遺物 (284)
第VII層出土遺物 (294)
表採及び層不明出土遺物 (309・310・319・320・323)
- 図版32. 1 表採及び層不明出土遺物
- 図版33. 1 分銅形土製品

表 目 次

表1 S K15器種構成と比率	52
表2 土器胎上及び土器内土壤の植物珪酸体分析	89
表3 植物珪酸体分析	90
表4 プラント・オパール顕微鏡写真	92
表5 祝谷アリ遺跡・釜ノ口遺跡（7次）出土材とその樹種	101
表6 蛍光X線スペクトル図（ $2\theta\text{deg}$ ）	107
表7 分銅形土製品出土土地名表（道後城北地域）	134
表8 須恵器 型式分類表	137
表9 道後城北遺跡群の概要一覧	147
表10 壴穴式住居址一覧	155
表11 壴穴式住居址の火・カマド一覧	155
表12 挿立柱建物址一覧	155
表13 溝一覧	155
表14 土壌一覧	156
表15 S X（不明遺構）一覧	156
表16 S B 5 出土遺物観察表（土製品）	157
表17 S B 5 出土遺物観察表（石製品）	157
表18 S B 5 出土遺物観察表（土製品）	157
表19 S B 2 出土遺物観察表（土製品）	158
表20 S B 2 出土遺物観察表（石製品）	159
表21 S B 7 出土遺物観察表（石製品）	159
表22 S B 1 出土遺物観察表（土製品）	160
表23 S B 1 出土遺物観察表（石製品）	160
表24 S B 3 出土遺物観察表（土製品）	160
表25 S K15最下部他出土遺物観察表（土製品）	161
表26 S K15Ⅲ層出土遺物観察表（土製品）	161
表27 S K15Ⅲ層出土遺物観察表（石製品）	164
表28 S K15Ⅱ層出土遺物観察表（土製品）	164
表29 S K 4 出土遺物観察表（土製品）	166
表30 S X010出土遺物観察表（土製品）	167
表31 S K 4 関連品出土遺物観察表（土製品）	168

表32 S X 010出土遺物観察表（石製品）	169
表33 S K 13出土遺物観察表（土製品）	169
表34 S K 13出土遺物観察表（石製品）	170
表35 S K 1出土遺物観察表（土製品）	170
表36 S K 3出土遺物観察表（土製品）	170
表37 S K 6出土遺物観察表（土製品）	170
表38 S X 07出土遺物観察表（土製品）	171
表39 S X 07出土遺物観察表（石製品）	171
表40 S X 08出土遺物観察表（土製品）	172
表41 S X 09出土遺物観察表（土製品）	172
表42 S X 09出土遺物観察表（石製品）	173
表43 第III層出土遺物観察表（土製品）	173
表44 第IV層出土遺物観察表（土製品）	174
表45 第V層出土遺物観察表（土製品）	174
表46 第VI A層出土遺物観察表（土製品）	174
表47 第IV層出土遺物観察表（石製品）	175
表48 第VI層出土遺物観察表（土製品）	175
表49 第VI層出土遺物観察表（石製品）	176
表50 第VII層出土遺物観察表（土製品）	176
表51 表採及び層不明出土遺物観察表（土製品）	177
表52 表採及び層不明出土遺物観察表（石製品）	179

I 調査に至る経緯

1. 経緯

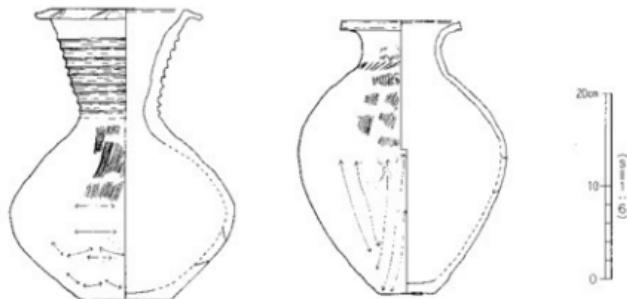
1990(平成2)年5月、医療法人型愛会(理事長益田紀志雄)より松山市祝谷6丁目1277番地他に新設の医療施設を建設するに当たって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。

申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「51. 山田池(祝谷)遺物包含地」内に当たり、周知の遺跡として知られている。申請地は、字名を祝谷敢入といい、昭和前半代の開墾の際に弥生時代中期の壺形土器が完形品で採取されている(第1図)。その後、地元研究者による踏査の結果多数の土器片が表採され、特に中期中葉の資料は岡本健児氏によりアイリ式土器と命名され松山平野の弥生土器研究に寄与している。また、近年の周辺調査では、南西350mに位置する祝谷六丁場遺跡より平形銅剣1口(埋納状況で出土)が出土しており、祝谷地区一帯は弥生時代の松山平野において重要な集落地帯の一つであったことが明らかになってきた。

これ等のことより、申請地内に於ける埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するために、1990(平成2)年7月に文化教育課は試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、弥生土器・須恵器を含む遺物包含層(三層30~130cm)と円形土壙を検出し、当該地に弥生~古墳時代の集落関連遺跡があることを確認した。

この結果を受け、文化教育課・医療法人聖愛会二者は発掘調査についての協議を行った。発掘調査は、弥生時代および古墳時代の道後城北遺跡群祝谷地区の集落構造解明を主目的とし、松山市立埋蔵文化財センターが主体となり、医療法人聖愛会の協力のもと1990(平成2)年11月20日に調査を開始した。
(梅木)



第1図 祝谷アイリ出土品

2. 組織

(1) 調査組織

〔調査地〕 松山市祝谷6丁目1277番地 他

〔遺跡名〕 祝谷アイリ遺跡

〔調査期間〕 野外調査 1990年11月13日～1991年3月29日

室内調査 1991年4月1日～1992年3月31日

〔調査面積〕 約1,400m² (申請面積 3,742m²)

〔調査委託〕 医療法人 聖愛会理事長 益田紀志雄

〔調査主体〕 松山市教育委員会 教育長 池田 尚郷

〔調査総括〕 松山市教育委員会文化教育課 (前)課長 渡部 忠平

(現)課長 岩本 一夫

松山市立埋蔵文化財センター (前)所長 森脇 将

(現)所長 和田祐三郎

〃 調査係 係長 西尾 幸則

〃 〃 主任 田城 武志

〃 〃 主事 栗田 正芳

〃 〃 調査員 梅木 謙一

〃 〃 調査員補 武正 良浩

(野外調査作業員)

高橋 恒、池内 昇、大久保英昭、浅海 誠、大野木英二、入江 宗輝、大地 俊彦、秋本 誠司、龜山 健一、川江 和弘、岸 武弘、龜山 泰昌、志賀 夏行、塚原 竜一、富山 寛之、田所 学夫、中野 譲之、西原 聖二、中島 宏、二井田高士、原田 英則、濱本 幹男、古田 耕一、福島正太郎、扶川 博、松本 剛、村上 賢樹、松崎 英仁、宮川竜二郎、山崎 司、山本 圭、渡部 秀一、渡部 弘志、坂本 佳正、黒田 令子、上西 真弓、瀬戸 恵子、白石 壽子、西平真山美、藤井 宏枝、森田 利恵、松本美知子、森田 晶子、藤沢 真美、水口あをい、大西 朋子、岡根なおみ

社団法人松山市シルバー人材センター：井ノ口正晴、東 重勝、加藤 成、蓮田 年行、重見イセ子、上田 年子、門田 一義、秀野 幸男、松野 麗朝

(室内調査作業員)

高橋 恒、加島 次郎、森田 利恵、松本美知子、黒田 令子、水口あをい、上西 真弓、白石 壽子、瀬戸 恵子、藤井 宏枝、藤沢 真美、森田 晶子、松山 桂子、三木 和代、山下満佐子、兵頭 千恵、好光明日香、西岡 早苗、大西 陽子、野口 幸恵、内山こづえ

組 織

(2) 調査指導

- 〔調査指導〕 下條 信行教授（愛媛大学）
内田 俊秀助教授（京都芸術短期大学）
上原 真主任研究員（奈良国立文化財研究所）
三辻 利一教授（奈良教育大学）
本田 光子（福岡市埋蔵文化財センター）
石川 悅雄（宮崎県埋蔵文化財センター）
吉田 寛（大分県教育委員会）
坪根 伸也（大分市教育委員会）
宮崎 泰好（砥部町教育委員会）
乗安和二三（財・山口県埋蔵文化財センター）
吉瀬 勝康（防府市教育委員会）
岡田 敏彦（財・愛媛県埋蔵文化財調査センター）
多田 仁（財・愛媛県埋蔵文化財調査センター）
村上 通恭（名古屋大学）
岡田 文男（財・京都市埋蔵文化財研究所）
杉山 真二（有・古環境研究所）
早田 勉（有・古環境研究所）

〔協力機関〕	古環境研究所	元興寺文化財研究所
	徳島県立博物館	徳島市教育委員会
	讃岐川県埋蔵文化財調査センター	讃岐山口県埋蔵文化財センター
	山口県防府市教育委員会	宮崎県立博物館
	宮崎県埋蔵文化財センター	福岡市埋蔵文化財センター
	愛媛県教育委員会	讃岐愛媛県埋蔵文化財調査センター

調査にあたっては、多くの研究者・研究機関に貴重なご指導、ご教示を頂きました。記して感謝申し上げます。

(3) 刊行組織

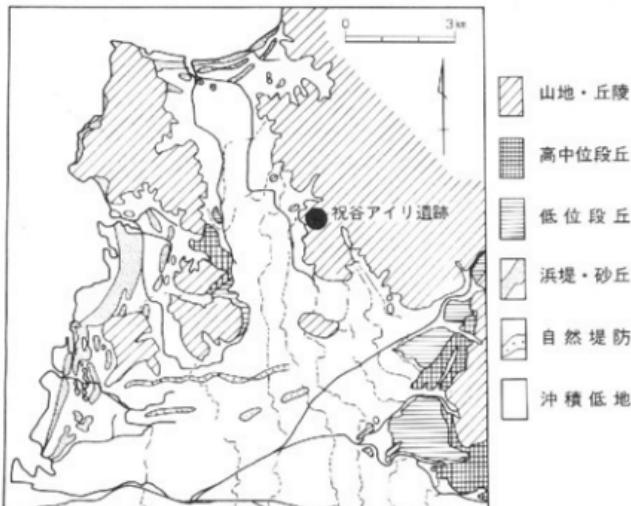
- 〔刊行主体〕 財団法人松山市生涯学習振興財團 理事長 田中 誠一
事務局長 池田 秀雄
- 〔刊行總括〕 埋蔵文化財センター 所長 和田祐三郎
次長 田所 延行
調査係長 西尾 幸則
調査主任 田城 武志
調査主事 栗田 正芳（文化教育課職員）

II 遺跡の概要

1. 地理的環境 (第2・3図)

道後城北遺跡群が立地する道後城北地区は、松山平野のはば中央部に位置する。遺跡群は、その地理的条件や遺跡の性格などから、祝谷・城北・道後の3地区に区分される。まず、祝谷地区は、高繩山地に源を発した永谷川の両岸の丘陵部と、やがて丸山川と合流し、平野部に流れ出る付近に形成した小規模な扇状地に分けられる。次に城北地区は、愛媛大学、松山大学を中心とする平野部で、道後地区は、県民文化会館付近の平野部から東へ、やや小高くなる道後温泉にかけての丘陵部を占めている。本遺跡は祝谷地区内に所在し、永谷川左岸の標高68~71mの緩斜面上に立地している。

地質学的に高繩山地は、中世代の領家帶貫入岩類の松山型花崗閃緑岩が大部分を占めてい るのに対し、勝山（城山）は白亜紀の和泉層群のレキ岩に瀬戸内系火山岩類が貫入してい る。



第2図 祝谷地区的地質図

2. 歴史的環境（第4図）

祝谷地区のうち平野部は勿論のこと、近年では丘陵部における大規模な宅地造成工事などにより、多くの遺跡が発見され、遺跡群におけるこの地域の位置付けも明かになりつつある。そこで、祝谷地区内で近年発掘調査された遺跡を中心に概説していきたい。

旧石器時代

山田池から流れ出る大川の東側にある標高50mの丘陵上で、合計13点の石器が採取されている。これらは、細石核・細石刃・搔器・台形様石器と称されているものであるが、その材質・剥離技法などに依然疑問点が残されている。この丸山遺跡出土の石器については、本書に多田氏の詳細な論考がある〔第V-1 多田 仁〕。今後の研究に期待する。

縄文時代

小規模な扇状地上に立地した土居窪遺跡、土居の段遺跡から、少量の土器が出土している。まず、土居窪遺跡の最下層からは、後期から晩期の土器片3点が出土している。土居の段遺跡では、後期の縁帯文をもつものや、注口土器の出土が伝えられている〔松山市資料集1980〕。

弥生時代

前期の遺跡では、出土状況は不明であるが、御幸寺山東麓遺跡から綾杉文が描かれた壺が出土している。

中期では、古くから中期中葉の標式土器として知られたアイリ式土器が出土したアイリ遺跡がある。また丸山川右岸の丘陵谷間に立地する祝谷六丁場遺跡は、中期中葉を中心として後期まで続く遺跡で、分銅形土製品をはじめとして、特記すべき資料が出土している〔松山市教育委員会他 1991〕。

祝谷アイリ遺跡から、分銅形土製品が2点出土している。本県出土の41点中26点が道後城北遺跡群から出土しており、その内訳は以下の通りである。なお、遺跡群出土の分銅形土製品の詳細については第V-2で論考する。

祝谷地区では、祝谷六丁場遺跡（12点）、御幸寺山東麓遺跡（1点）、祝谷アイリ遺跡（2点）で合計15点出土している。ちなみに城北地区で10点、道後地区で1点である。

また祝谷六丁場遺跡では、全国で初めて平形銅劍が埋納された状態で検出され、埋納方法が明らかにされたばかりではなく、平形銅劍が祭祀的な意味合いを持っていることの証明にもなった遺跡である。遺跡群内では、4ヶ所で22本発見されている。その内訳は、祝谷地区で祝谷六丁場遺跡（1本）の他、城北地区で道後一万遺跡（10本）、道後樋又遺跡（8本）、道

遺跡の概要

後地区で道後公園山麓遺跡（3本）になっている。

丸山川河岸段丘上の祝谷六丁目遺跡では、中期中葉から後期の臺棺墓群と円形竪穴式住居跡1棟が検出されている。その一つの臺棺から、歯牙とともにイモ貝製の貝釧が2点出土している。時期決定には多少問題を含むものの、型式からみると中期後半以前の段階に比定するのが妥当であるという〔下條信行 1991〕。

古墳時代

古墳時代には平野部の背後の丘陵に、数多くの古墳が分布している。それらは祝谷古墳群、御幸寺山古墳群、常行寺古墳群とよばれるが、近年の詳細な分布調査によって、30基余りの古墳が存在していることが明らかにされた〔愛媛県教育委員会 1991〕。その祝谷古墳群には、現在10数基の古墳が現存しているといわれているが、発掘調査された古墳は祝谷古墳5基である〔松山市史料集 1980〕。次に御幸寺山古墳群には、昭和21年頃に発掘調査され、方格規矩四神鏡を出土したと伝えられる横穴式石室を持つ円墳が存在していた〔愛媛県 1986〕。

この時代の集落は、道後今市遺跡第6次調査や松山大学構内遺跡ではあるが、竪穴式住居が検出され、狹少な範囲であるにもかかわらず、一定の住居の変遷が確認されたことにより、これまで明かにできなかった古墳時代の集落についての基礎資料が揃いつつある。また当遺跡群出土の須恵器についての一つの傾向がまとまりつつあり、今後地域ごとに、データの分析を進めていくことが肝要であろう（第V—3）。

なお、道後城北遺跡群の全体的な地理的・歴史的環境については、「松山大学構内遺跡」「II 遺跡の概要」を参考にされたい。

【文献】

松山市 1980 「松山市史料集」

愛媛県 1986 「愛媛県史 資料編 考古」

下條信行 1991 「松山平野と道後城北の弥生文化—西瀬戸内の海外交流—」「松山大学構内遺跡」

愛媛県教育委員会 1991 「愛媛県内古墳」

松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1991 「祝谷六丁場遺跡」

松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1991 「松山大学構内遺跡」

歴史的環境



⑧ 文京遺跡(愛媛大学) ⑤ 祝谷六丁場遺跡 ⑨ 道後湯築遺跡 ④ 福味立添遺跡
⑥ 三島神社古墳 ⑩ 福音寺遺跡 ⑧ 来住庵寺遺跡

第3図 松山平野の主要遺跡分布図 (S = 1 : 50,000)

遺 路 の 概 要



- | | | | |
|-------------|------------|-----------|------------|
| 1 祝谷アイリ遺跡 | 2 祝谷六丁目遺跡 | 3 祝谷六丁場遺跡 | 4 丸山遺跡 |
| 5 アイリ遺跡 | 6 御幸寺山東麓遺跡 | 7 土居ノ段遺跡 | 8 道後公園山麓遺跡 |
| 9 土居窪遺跡 | 10 道後橋又遺跡 | 11 道後一万遺跡 | 12 文京遺跡 |
| 13 松山大学構内遺跡 | | | |

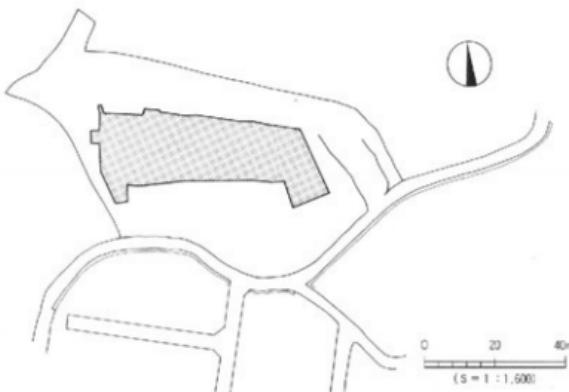
第4図 祝谷地区の主要遺跡分布図 (S = 1 : 25,000)

III 調査の概要

1. 調査の経緯

調査地は、松山市祝谷6丁目1,277番地である。対象面積は3,742m²であり、調査は施設建設により遺物が失われる約1,400m²に対して行われた。以下、調査工程を略述する。

- 平成2年 11月6日に調査事務所を設置する。地形測量及び準備作業。
- 12月 3~6日の間重機による表土及び近現代層を際去を行う。7日以降は基本層序の確認をし、包含層を掘り下げた。
- 平成3年 1月 小谷部は包含層の掘り下げ、斜面西側部は造構検出を行い、竪穴式住居址と柱穴痕を検出する。斜面部の生活関連造構の存在を知る。
- 2月 斜面部を重視した調査を行う。その結果、弥生時代~古墳時代の竪穴式住居址、溝、上塼、柱穴痕を検出する。
- 3月 上・下旬の2回に渡り愛媛大学法文学部教授下條信行先生に調査指導を乞う。23日(土)の午後に現地説明会を行う。近隣住民や考古学ファン他約60名の見学者が訪れる。30日(土)、野外調査終了。
- 4~5月 4月2日より松山市立埋蔵文化財センターにて、造構図整理を中心とする内調査を開始する。
- 6~11月 鈴田町事務所にて、洗浄~復元・実測の作業を行う。
- 12~平成4年3月 トレース、執筆、調査検討会、資料調査等の報告書作成作業。



第5図 調査地位置図

2. 層位（第6・7図）

本調査地の基本層位は、第I層表土（6～84cm）、第II層灰色シルト（5～65cm）、第III層暗灰褐色シルト（12～110cm）、第IV層暗灰褐色シルト（12～126cm）、第V層青灰色シルト（14～84cm）、第VI層暗青灰色シルト（8～124cm）であり、最下層は第VII層青灰色粗砂である。

第I層—近現代の農耕による客土である。

第II層—床土と呼ばれるものである。

第III層—微弱な土色の差異から上部層の第IIIa層暗灰褐色シルト（砂多し）、下部層の第IIIb層暗灰茶褐色シルト（砂多し）に分層される。

第IV層—第III層と同じく上部層の第IVa層灰茶褐色シルト、下部層の第IVb層暗灰褐色シルトに分層できる。ただし、第III層・第IV層は共に調査地点によっては上下が逆転する場合もある。

第V層—調査区南側の旧地形の落ち込み地点で見られる。

第VI層—一部の調査地で砂粒の包含量の違いにより第VIa層紺色シルト、第VIb層暗灰色シルト（微砂含む）に分層される。

第VII層—調査区南側で見られ、粗砂粒の包含が多い無遺物層である。

間層・A層—暗灰褐色粗砂は第III層と第IV層の間に部分的に見られる粗砂層である。

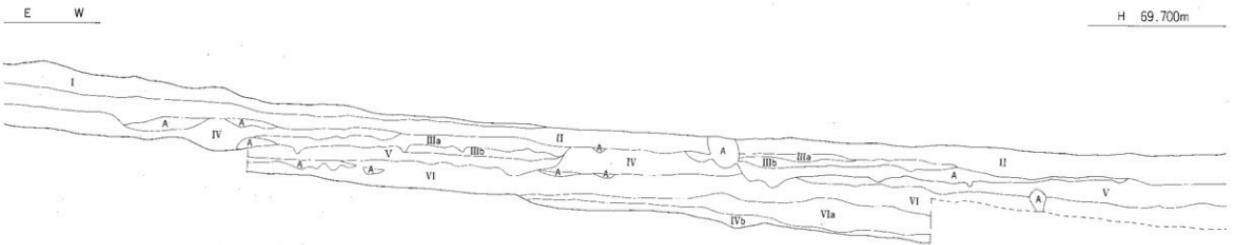
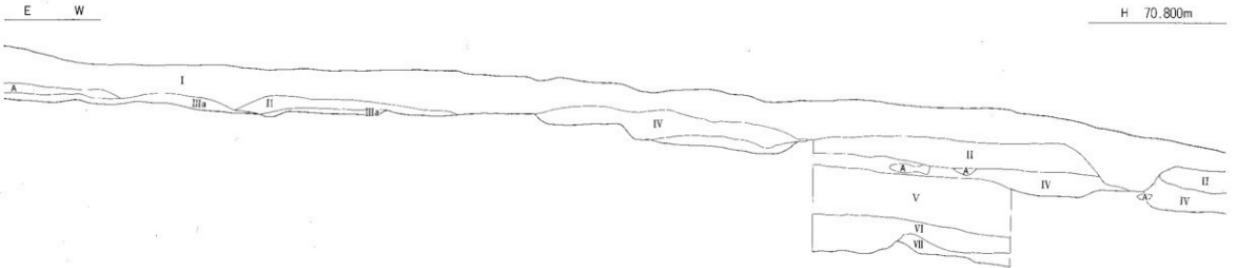
間層・B層—淡黄灰色シルト（砂多し）は第VI層と第VII層の間に限定的に（平坦な箇所及び落ち込んでいる箇所）調査区北西隅の旧地形の落ち込み地点と調査区北壁中央の際地点で検出され、堆積は10～66cmを測る。

出土遺物は第III～VI層に弥生土器・土師器・須恵器の破片が混在し包含されている。B層は弥生土器（中期～後期）を包含している。

これ等のことより各層は出土遺物、検出遺構から判断すると、第IIIa層、第IIIb層は古代、第IV～VI層は古墳時代～中世に堆積したものと判断される。

また、遺構の埋土上面に第IVa層が検出される場合もあり、当地は第IVa層堆積以前、即ち古墳時代前期以前に整備された可能性が高い。

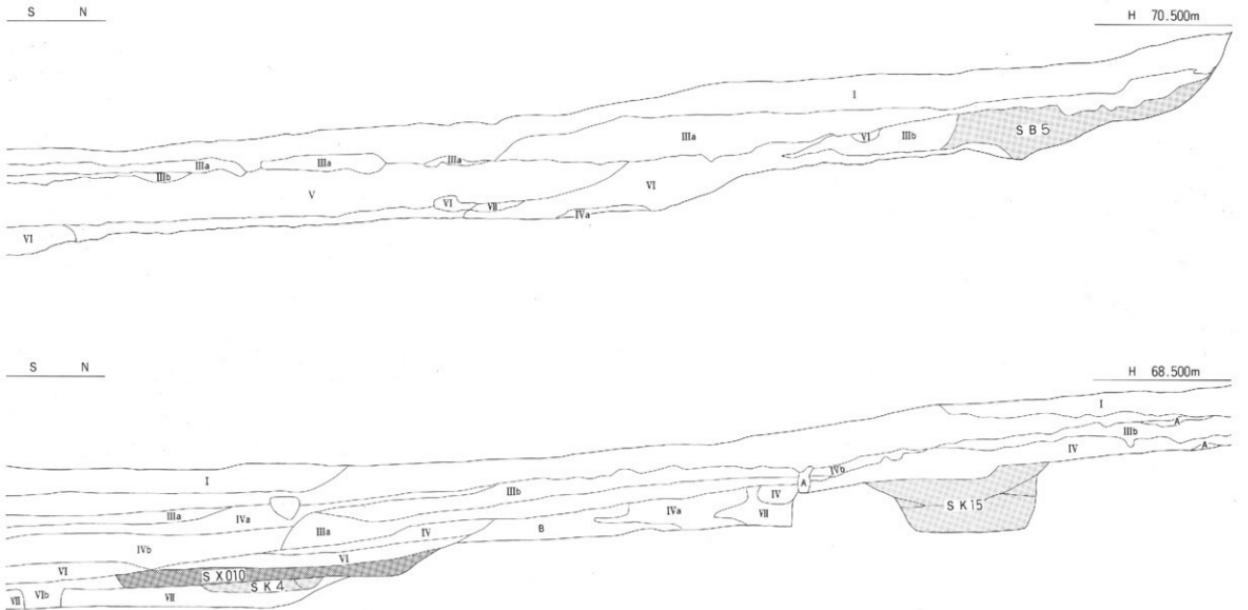
なお、調査にあたり調査地区内を8m四方のグリッドにわけた。



I 表土 II 灰色シルト III 増灰褐色シルト IIIa 増灰褐色シルト（砂多し） IIIb 増灰茶褐色シルト（砂多し） IV 増灰褐色シルト
IVa 灰茶褐色シルト IVb 増灰褐色シルト V 青灰色シルト VI 増青灰色シルト VIa 細色シルト VIb 増灰褐色シルト（微砂含む） VII 青灰色粗砂
A 増灰褐色粗砂 B 淡黄灰色シルト（砂多し）



第6図 南壁 土層図

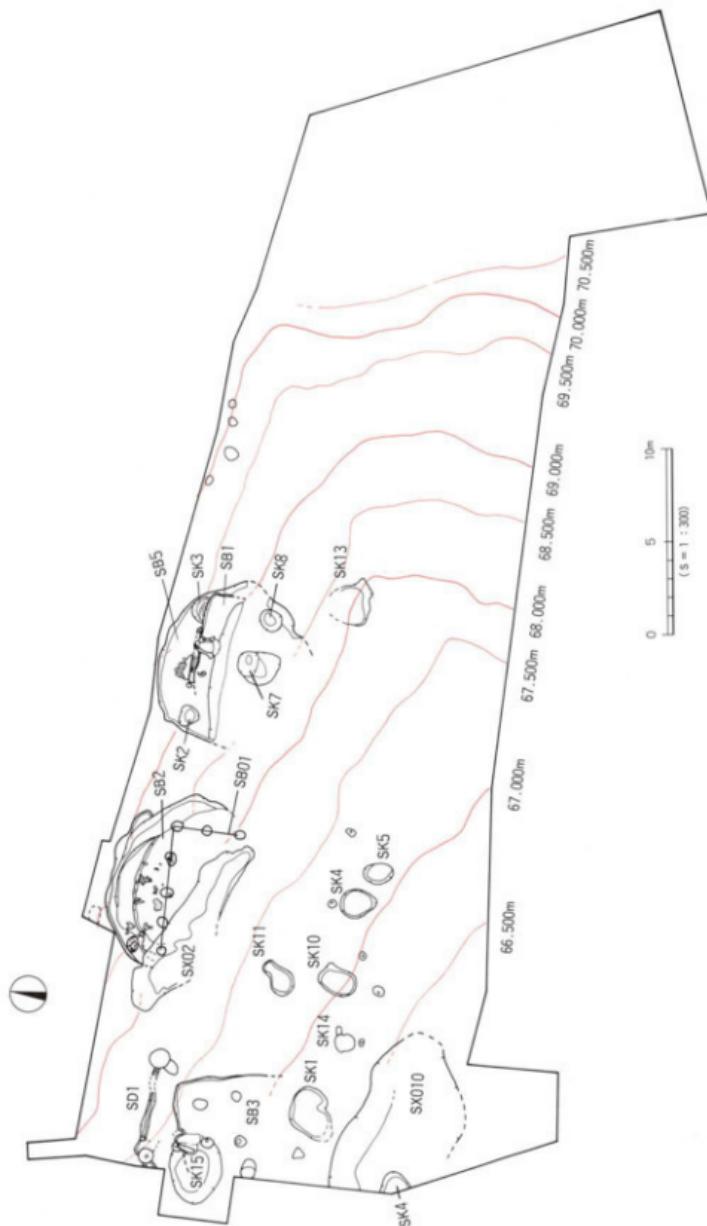


I 表土 II 灰色シルト III 噴灰褐色シルト IIIa 噴灰褐色シルト（砂多し） IIIb 噴灰茶褐色シルト（砂多し） IV 噴灰褐色シルト
 IVa 灰茶褐色シルト IVb 噴灰褐色シルト V 青灰色シルト VI 噴青灰色シルト VIa 紅色シルト VIb 噴灰色シルト（微砂含む） VII 青灰色粗砂
 A 噴灰褐色粗砂 B 淡黄灰色シルト（砂多し）

0 5m
 (S = 1 : 60)

第7図 調査区中央ベルト土層図(上)、西壁土層図(下)

層位



第8図 遺跡配置図

3. 遺構と遺物

〔1〕 竪穴式住居址

1) 弥生時代

弥生時代の住居址は2棟（SB2, 5）である。いずれも地山で、調査区北部に集中して検出された。平面形は、いずれも円形であった。

SB5号住居址（第9図、図版5）

調査区北部中央やや西よりD6, D7, E6, E7区に位置する。SB1・7に先行し、さらに後世の削平を受けて南半分が破損している。平面形は、円形を呈するものと考える。規模は、東西8.6m、壁高1.7m（最深部）を測る。本住居址の埋土は一層で灰褐色シルトである。本住居址は、古墳時代後期の竪穴式住居址（SB1・7）に先行するものである。このことは、本住居址が遅くともSB1・7構築時までに削平されていた事を示すものである。主柱穴は、未検出である。床面はやや南に傾斜し比較的軟い。

炉址は、住居址南部（やや西より）に位置する。平面形は稍円形を呈し、長軸1.15m、短軸0.79mで、深さ31cmを測る。構造は、断面形がレンズ状をなすものである。埋土は灰褐色シルト一層であるが、壁面が焼成を受けており、部分的に炭化物が検出される。

遺物の出土状況は、散在した状況である。大型破片は床面に近い地点から出土することが多い。住居址南西部（やや中央より）では、完形に近い土器が出土している。（第10図6）

また、本炭片は、いずれも床面より浮離した状況で出土している。注目すべき出土遺物として、男茎状石製品1点が床面直上から出土している（愛媛県初例）。

出土遺物（第10・11図、図版19）

変形土器（1～5） 1・2は強く折り曲がる口縁部をもつ。1は口縁部がわずかに湾曲する。2は口縁端部がやや厚く、端面を強くヨコナデする。3～5は口縁部下に凸帯を有するものである。3は凸帯上に刻目を施さず、4は指頭、5は工具による刻目を施す。

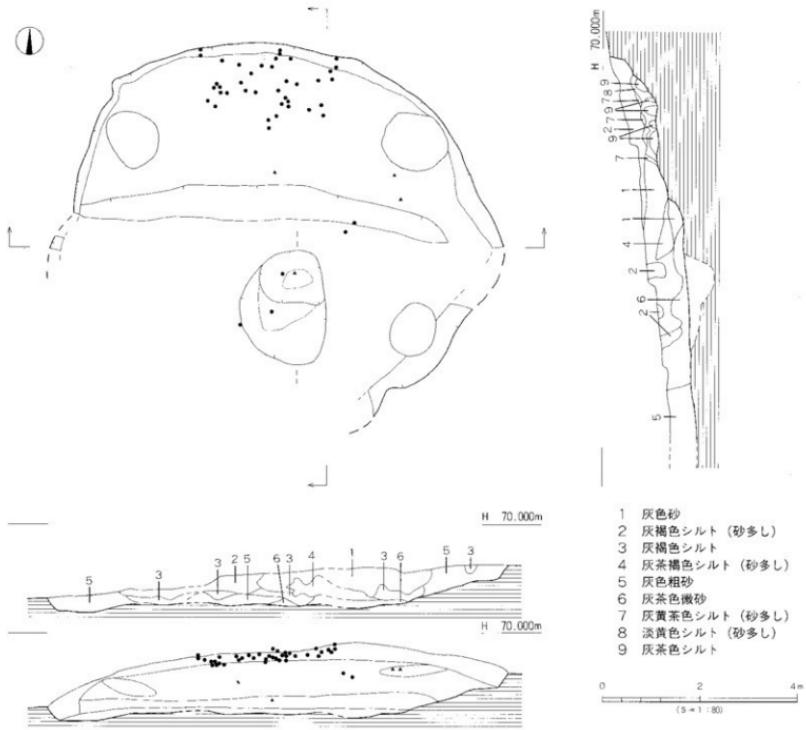
変形土器（6） 6は短頸壺である。短く直立する頸部には、指押された凸帯をもつ。

底部（7～9） 7は変形土器の底部である。平底を呈するが、わずかに凹状となる部分がある。8・9は変形土器の底部である。わずかにくびれ、上げ底を呈する。8は小形品、9は大形品の底部となるものである。

上製品（10） 10は手捏ね品である。口縁部を欠く。やや大きめの底部は、上げ底となる。器壁は薄い。

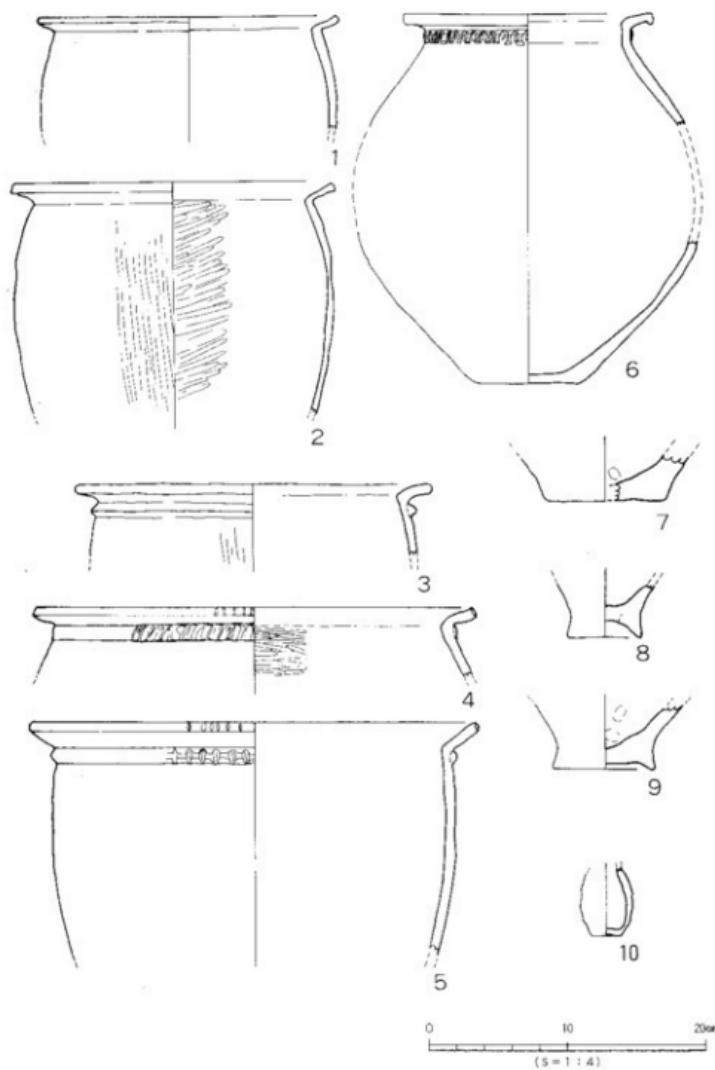
石斧（11） 11は結晶片岩製の大形の縦平片刀石斧である。

男茎状石製品（12） 12は男茎状石製品と呼ばれるものである。自然石の節理面を利用し



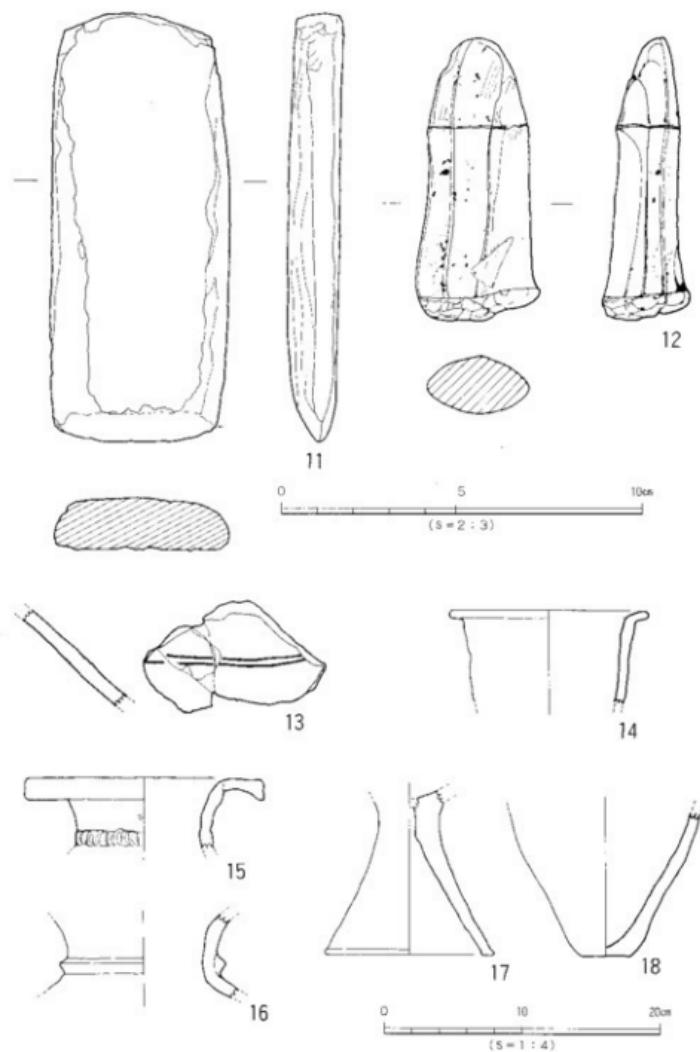
第9図 S B 5 測量図

造構と遺物



第10図 S.B.5出土遺物実測図 (I)

調査の概要



第11図 SB 5出土遺物実測図 (2)

造構と遺物

ている。断面形は菱形を呈する。

炉内出土遺物（第11図13～18）

13は弥生時代前期の壺形土器肩部片である。2条のヘラ描沈線文を施す。14は甌ないし鉢形土器片である。15・16は壺形土器片である。15は頭部に指頭押圧された凸帯文を1条巡らす。17は高環形土器脚部片である。充填技法の可能性あり。18は器種器形とも不明である。長胴で、小さい底部をもつ。

時期：埋土中の遺物は小片少量であるが、いずれも中期中葉に比定されるものである。また、炉址内の遺物も埋土中のものと時期差がない。よって、本住居址の埋没時期は出土遺物より中期中葉に比定する。

S B 2号住居址（第12図、図版6・7）

調査区北部中央やや西よりD 7～8、E 7～8区に位置する。住居址の南半部はSX 02に切られ、さらに後世の削平を受けて破損している。平面形は、円形を呈するものと考える。規模は、北西一南東9.5m、壁高1.1m（北側最深部）を測る。壁体に沿って幅43～105cm、厚さ10cmの削り出しの高床部（テラス状遺構）を検出する。本住居址の埋土は大きく四つに分層でき、上から暗茶褐色シルト、黒褐色シルト、黒灰色シルト、最下層の灰褐色シルトである。主柱穴は、未検出である。床面は平坦で比較的硬い。

住居址中央部の西側の床面から炭（灰混り）が63×53cmの範囲で検出された。炭直下の床面が焼けていない事から移動させられた炭（灰）と考えられる。この炭塊の西側に接して不整精円形状に床面が焼けている部分があり、ここに灶址が位置した可能性が高い。

遺物の出土状況は、壁体沿い、高床部直上、床面直上に散在したもので、埋土最下層からは弥生土器片、上層（暗茶褐色シルト）からは須恵器片が出土した。住居址北部中央（やや東より）の壁体沿い（最下層：灰褐色シルト）から、石庵丁が出土している。最下層出土遺物は、住居址南側が削平されている事もあるが、石庵丁を除くと土製品は小片ばかりである。

また、住居址中央部床面直上からは、住居部材に使用したと考えられる木炭片が出土している。高床部中央の落ち際にほぼ等間隔（103cm～100cm）で3個体の木炭片を検出している。中央の1個体は、落ち際に貼り付いていた。さらに2個体の延長線上にも木炭片を検出しておらず、木炭片は放射状を呈しており倒壊家屋の可能性もある（第IV-2参照）。

出土遺物（第13・14図、図版19）

壺形土器（19～21） 19、20は小片で、「く」の字状に外反する口縁部をもつ。21は底部片で、上げ底でわずかにくびれるものである。

壺形土器（22～26、29、30） 25、30以外は小片である。22は広口壺の口縁部である。口縁端面に4条の凹線文をもつ。口縁上端部は面をもつ。23は短頸壺の口縁部片と思われる。口縁端部はナデによりやや拡張する。24、25は長頸壺である。25は口縁端部を強くナデ面と

調査の概要

なす。29、30は底部片で、丸みを帯び、わずかに上がるものである。

鉢形土器（27） 27は小片で、外反する口縁部をもつ。高環形土器の环部である可能性もある。

高環形土器（28、31～33） 28、31は环部小片である。28は口縁部が直立ぎみに立ち上がり、口縁端部はナデにより面となる。31は口縁部は内傾し、外面に4条の細いヘラ描き沈線文を施す。口縁端部はマツツするも、面をもつものではない。32、33は脚部片である。32は小片であるが、柱上部に2条以上の太い沈線文を施す。柱部内面は未調整で、裾部内面はナデ調整である。33は裾部が3分の2欠ける。脚端面は丸みのある面となる。施文は施さない。

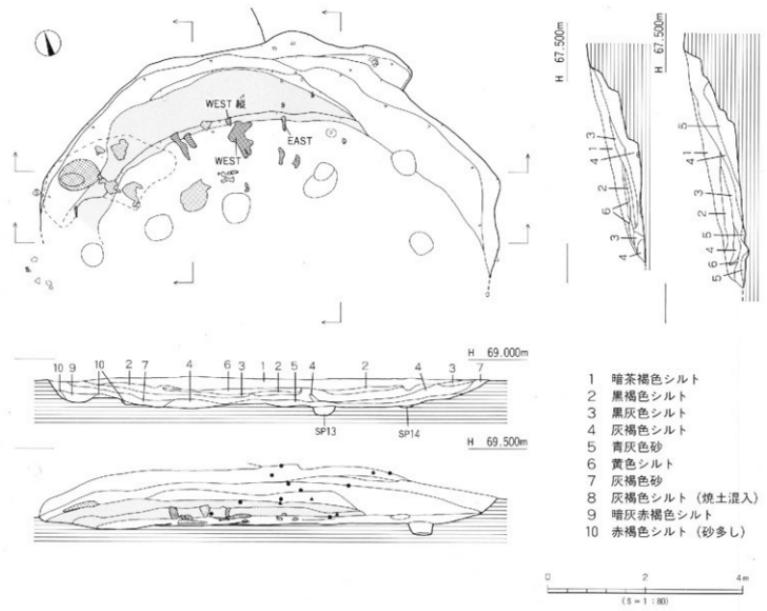
支脚形土器（34） 34は器台形土器とも呼べるものである。凹みのある面を受部としたが断定できるだけの根拠はない。調整・胎土において特別なものではなく、実用品と考える。

須恵器（35～37） 流れ込み品である。35、36は环蓋で、口縁部の屈曲には稜はない。35は口縁部を1部欠くが完形に近いものである。37は环身ではば完形品である。立ち上がりは内傾し短い。端部は細く丸い。

石庖丁（38～40） 38は完形品である。杏仁形を呈し、紐は小さく精練であり金属器による穿孔と考えられる。39は2分の1の残存である。石庖丁にしてはやや肉厚である。40は未製品の欠損品である。ただし、両側両部に磨きが加えられており、他刃器への転用があった可能性もある。

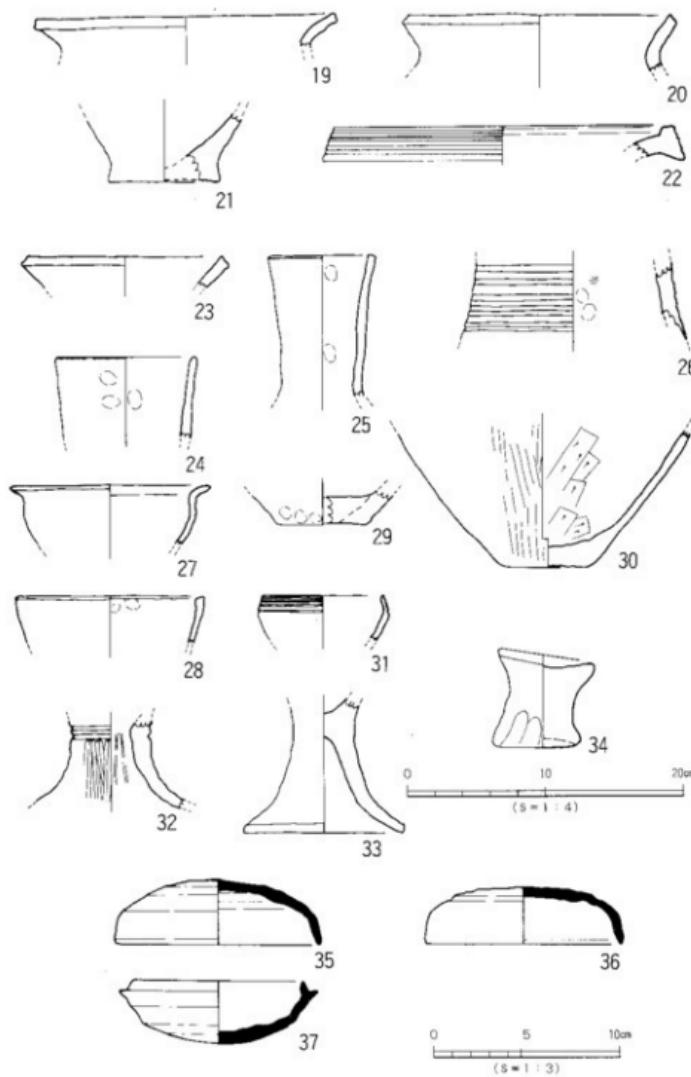
石斧（41） 41は大形後採斧である。刃部と茎部を欠く。断面形はやや扁平である。

時期：遺物の残存状況は良くないものの床面に近い埋土の土器はいずれも、後期前葉に比定されるものばかりである。よって現時点では、本住居址の埋没時期は後期前葉に比定しておく。



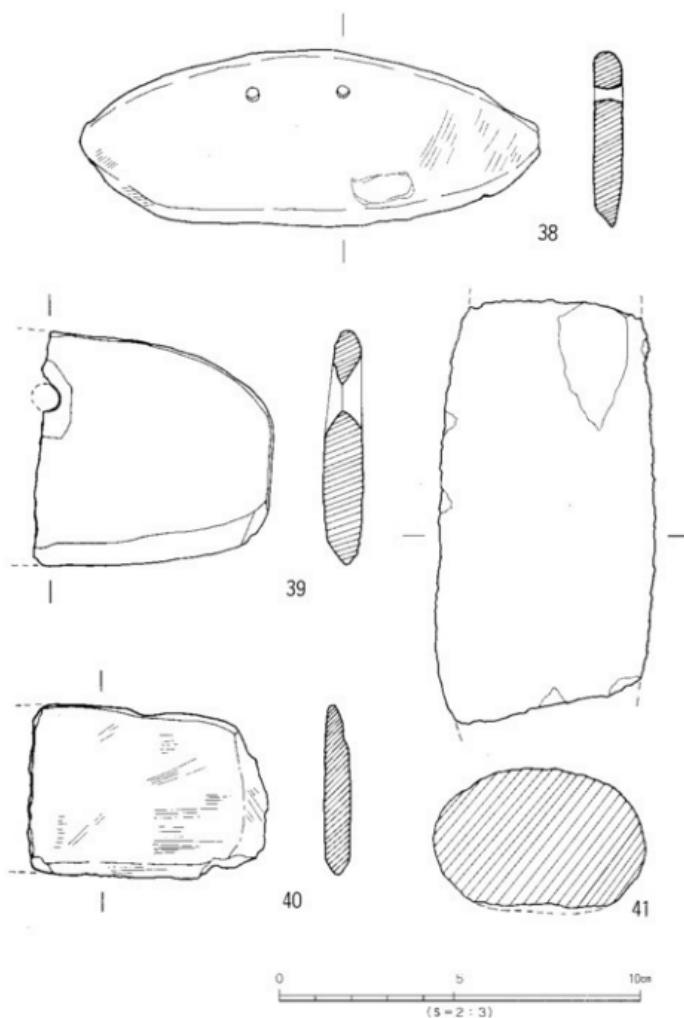
第12図 SB2 測量図

遺構と遺物



第13図 SB 2出土遺物実測図 (I)

調査の概要



第14図 S B 2 出土遺物実測図 (2)

2) 古墳時代

古墳時代後期の住居址は3棟(SB1、3、7)である。地山で検出した。

SB1号住居址(第15図、図版8)

調査区北端中央部D6区に位置する。住居址南側半分は削平を受け破損している。平面形は方形を呈する。規模は南北 $2 + \alpha$ m、東西5.14m、壁高15cmを測る。床面はやや軟質で平坦である。本住居址にはカマドが付設される。本住居址の壁体溝及び柱穴は未検出である。埋土上は一層で暗灰褐色シルトである。また、本住居址北壁体に平行して東西2.93m、幅21cm、深さ6cmの壁体溝を検出した。よって本住居址は、建て替えられた可能性が高い(SB7)。

カマド(第16図、図版8・9)は、住居址の北壁中央で検出された。削平により上部を欠く為、天井部は未検出である。平面形は馬蹄形を呈する。カマドは、造り付けて縦・横断面の観察では、住居床面と北壁を掘り回めた後に、黄色シルト(褐色混)により構築したことを確認した。黄色シルト(褐色混)は火を受けて赤く焼けている。また、カマド火床面中央からは坏部を下向きにした土師器の高坏形土器が出土している。器面がもろく二次焼成を受けている様相から、支脚代わりに使用された可能性が高い。

本住居址からの遺物は、床面からやや浮いた状態で、土師器破片と須恵器の坏身破片が出土している。

SB7出土遺物(第17図42・43、図版20)

石庖丁(42、43) 42、43いずれもわずかに一部を欠損するものの、形態は長方形を呈するものである。42、43とも刃部の右側の内面の消耗が著しく、特に中央や右が内済する。

SB1出土遺物(第17図44~48、図版20)

壺形土器(44、45) 44、45は小片である。44は胴部内面にケズリ痕はない。口縁内面にナデによる凹みがある。45は口縁部が外反の後、内済して立ち上がる。44、45とも口縁端面は丸い。

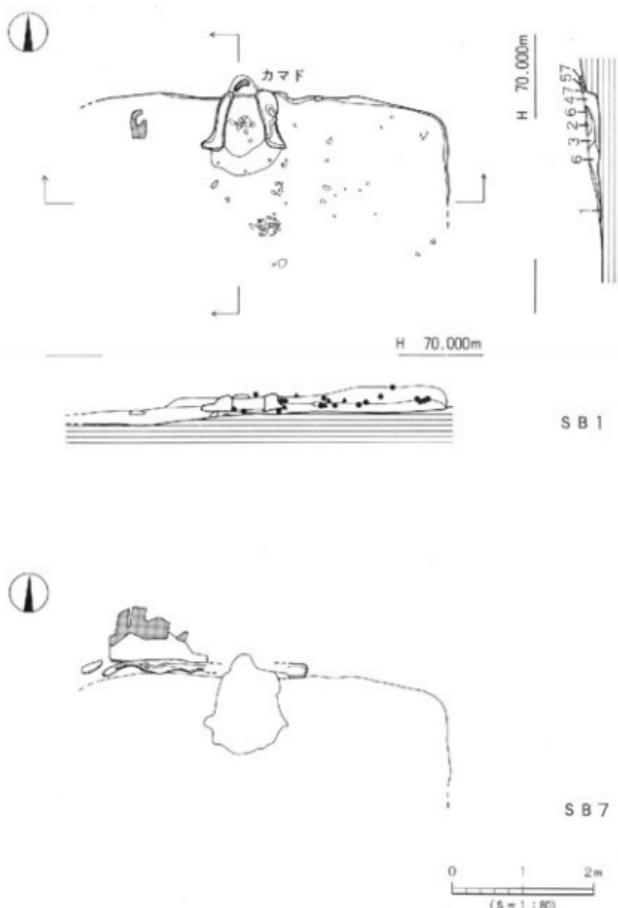
高坏形土器(46) 46はカマドの支柱として転用された可能性が高いものである。坏部は浅いボール状を呈し、長い中実の柱部に、外反する裾部をもつ。器表面は磨滅している(火力によるものか?)。

坏身(47) 47は高坏の坏身となる可能性もある。内傾する短い立ち上がりをもつ。焼成が不良である。

石鐵(48) 48は埋土中の出土品であり、流れ込みの遺物と思われる。体部に剥離面を残す、やや雜なものである。

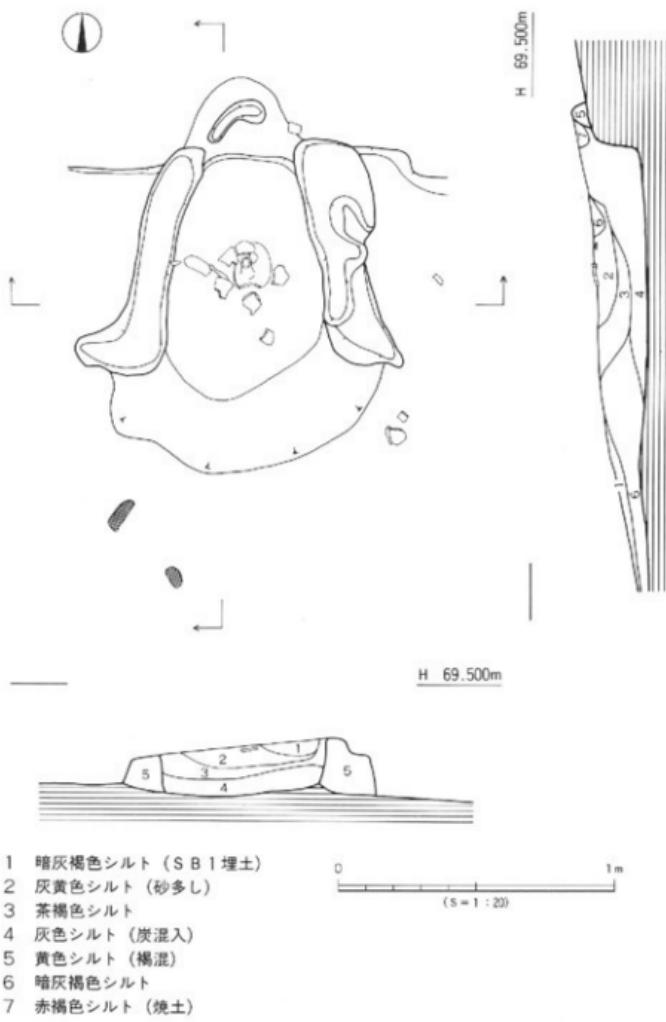
時期: カマドより出土した高坏形土器は本住居址の廃絶期を知ることができる最良の遺物である。よって、本住居址の廃絶期を6世紀代に比定する。

調査の概要



第15図 S B 1・7測量図

遺構と遺物



第16図 SB 1 カマド測量図

調査の概要

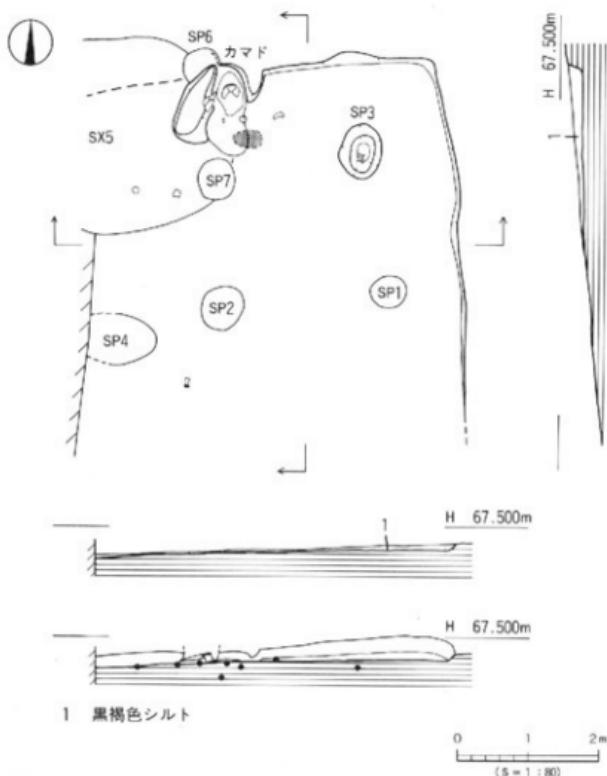


第17図 SB 1・7出土遺物実測図

造構と造物

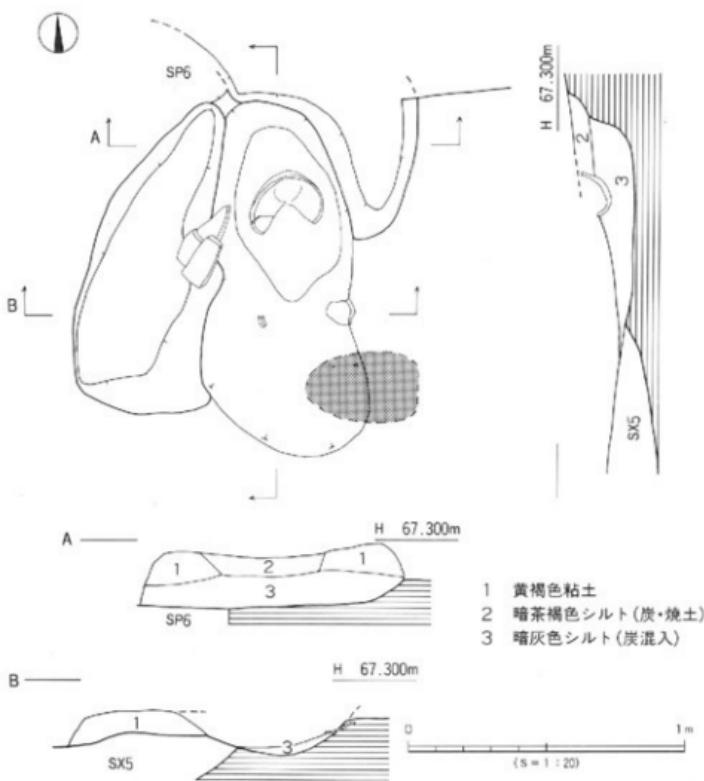
S B 3号住居址（第18図、図版10—1）

調査区西端中央部D 9区に位置する。住居址は調査区外におよぶ。南側は削平を受け破損している。平面形は方形ないし長方形を呈する。規模は南北5.3m、東西5.3+ α m、壁高20cmを測る。床面はやや軟質で平坦である。本住居址にはカマドが付設される。床面にて3基のピットを検出した。S P 6, S P 7は埋土が同様で、S P 6はカマドの袖を除去後に検出されたことより、S B 3以前のものである。S P 3は埋土が住居址のものと同様であり、よって本住居址の主柱穴の1つである可能性が高い。なお、S P 1, S P 2, S P 4は、本住居址埋土の上部から掘り込まれたものである。



第18図 S B 3測量図

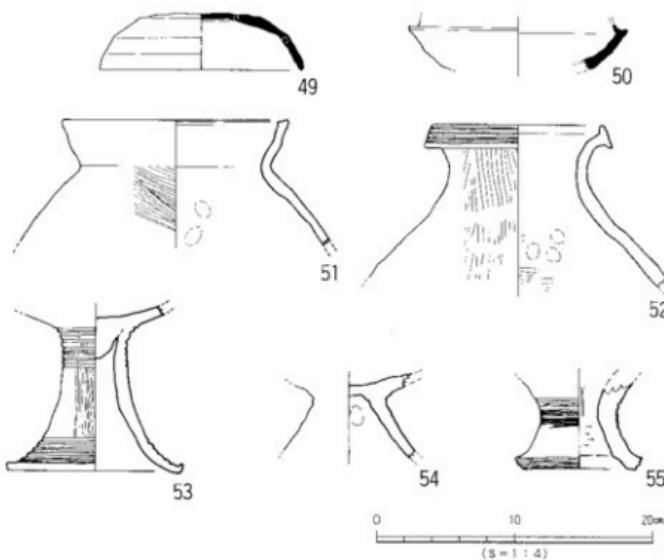
調査の概要



第19図 SB3カマド測量図

カマド（第19図、図版10—2）は、北壁に位置する。天井部と煙路部は未検出である。また、袖部東側半部が欠損している。平面形は馬蹄形を呈する。カマドは、造り付けで縦・横断面の観察では、住居址床面と北壁を掘り回めた後に暗灰色シルトを敷き、粘土をのせて構築したことを確認した。粘土は火を受けて赤く焼けている。火床面の前面（焼き口部）に楕円形の炭（径41cm、厚さ2cm）を検出した。また、炭の上部からは第20図51の變形土器の部片が出土した。

住居址埋土は、黒褐色シルト（黄泥）で上部に弥生土器片が少量混入する。床面直上からは土師器の小片数点が出土している。



第20図 S-B3出土遺物実測図

出土遺物（第20図）

カマド出土遺物

上師器（51） 51はカマド内に出土した体部片と同一体の変形土器の口縁部分である。外傾し、内湾ぎみに立ち上がる口縁部をもつ。口縁端面は内傾し、わずかに内側に突出する。

埋土出土遺物

环蓋（49） 49は口縁部を1部欠く。口縁部屈曲部の稜はなく、口縁端は丸い。

环身（50） 50は小片で、口縁端部を欠く。口縁部は内傾し短い。

旁生土器（52～55） 52は中期～後期前葉の変形土器である。口縁端部は拡張され、端面に擬凹線文（やや細い）を施す。53は高環形土器の脚部である。环底部は充填技法である。柱上部と裾部に太い沈線文を施す。柱上部のものは环部にまで施文がおよんでいる。柱部～裾部にかけては施文を施さない。54は高環形土器である。形態は不明である。55は脚付（台付）鉢ないし小型高環形土器になるものと思われる。4分の1の残存で、柱上部に6～7条の太い沈線文、脚端面に2条の凹線文を施す。

時期：カマド出土の変形土器が本住居址の埋没時期を示す資料と考える。よって本住居址の埋没時期は5～6世紀前半に比定するものである。

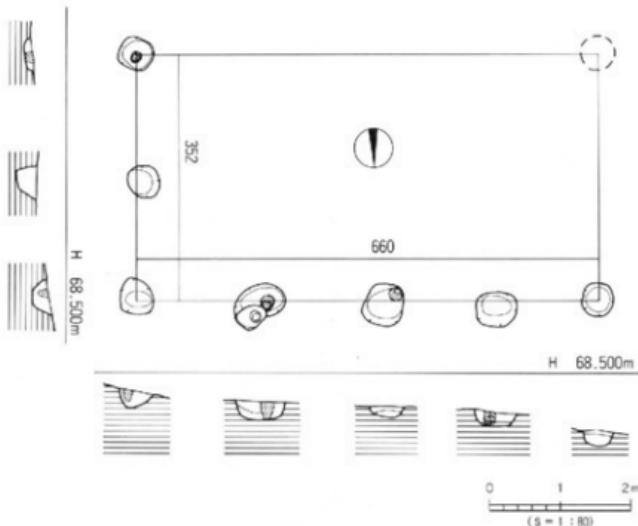
〔2〕掘立柱建物址

本調査において確認された掘立柱建物址は1棟である。

掘立柱建物址1号（第21図）

調査区北側や西D7～D8区に位置する。SB2（弥生・円形住居址）を切り、SX02の下部で検出される。南西に位置する柱穴は削平により消滅している。建物跡は、2間×4間で桁行長7.0m、梁行長3.9mであり、柱穴間は桁行(1.8、1.78、1.2、1.33)m、梁行(1.53、1.52)mである。柱穴径43～60cm、深さ10～31+αcm、柱痕径11cmである。埋土は灰褐色シルトである。

時期：本建物は、柱穴の掘り方が、SB2の埋土（黒褐色シルト）中であり、柱穴中より須恵器片が出上していることより、6c以降の構築であると考えられる。



第21図 SB01測量図

〔3〕土 壁 (P156—表14)

本調査において確認された土壁は14基である。SK5、9、10、11、14は第IVb層上面の検出で、SK1は第VI層上面の検出、SK2、3、6、8、13、15はB層(間層)上面の検出で、SK4は第VII層上面の検出であった。

SK15号土壤 (第22図、図版11~13)

調査区西壁沿い中央やや北寄りのD9区に位置する。平面形は梢円形を呈し、規模は長軸3.5m、短軸2.8m、深さ1mを測る。壁底は、ほとんど傾斜せず平坦である。断面形は、検出面から緩やかに下り、角度を変えて落ち込む、角度変換地点の平面形は梢円形を呈し、規模は長軸2.83m、短軸2.1mを測る。埋土は、大きく三つに分層でき、上からI層黒褐色シルト(黄泥)、II層黒灰褐色シルト、III層青灰褐色シルト(砂多し)である。I層黒褐色シルト(黄泥)は、SB3の埋土である。

遺物出土状況は、II層(黒灰褐色シルト)とIII層(青灰色シルト)との間、本土壁のほぼ中央部に20~30cm大の礫群が存在し、その下に折り重なるように弥生後期の土器が検出された。完形に近い大きな破片は床面に接して出土することが多い。完形品の壺56~61が出土している。

出土遺物 (第23~34図、図版21~27)

最下部出土品 (56~61)

長頸壺 (56~60) 56は完形品である。胴部中位(最大胴径)に焼成後穿孔がある。頭部下端に板状工具の押圧による「ノ」の字状文が施される(回周する)。57は一部を欠くが、本来は完形品であったと考えられるものである。胴下部に焼成後穿孔があった可能性が高い。器表面の調整は刷毛目調整である。58は完形品である。肩部と胴下部に焼成後穿孔が各々1ヶある。頭部下端に断面三角形の凸縦文を施す。器壁が薄く、焼成も良好である。59は完形品である。胴下部に焼成後穿孔がある。口縁部は、短く直立し外反(強く)する複合口縁となる。口縁外面には、ヘラ状工具による刺突文を施す。また、頭部下端にヘラ状工具による刺突文を施す。60は頭部上端以上を欠くが、体部は完存するものである。底部は短く立ち上がり、わずかに上がる上げ底を呈する。頭部下端に沈線文(擬凹線文?)3条、その下部に板状工具の木口による「ノ」の字状文を施す(回周する)。

短頸壺 (61) 61は体部の一部を欠くが、本来完形品であったと考えられるものである。口縁端部はナデによりわずかに拡張され、端面は凹む。頭部下端にヘラ状工具による押圧の「ノ」の字状文を二段施す(回周する)。

最下部関連品 (62・63)

短頸壺 (62) 62は体部の一部を欠くが、完形品であった可能性が高いものである。口縁部はナデにより面をもつ。口縁下端にヘラ状工具の押圧による「ノ」の字状文を施す(回周する)。

調査の概要

複合口縁壺(63) 63は肩部以上が完存するものである。口縁部は内傾する拡張部をもち、拡張部上端はナデによる面をもち、外方にわずかに突出する。拡張部上面には上部より櫛状工具による横方向の沈線文（2条）と波状文（2条）を施す。また、頸部下端に板状工具木口の押圧による「ノ」の字状文を施す（回周する）。

埋土Ⅲ層出土品（64～114）

変形土器（64～82）

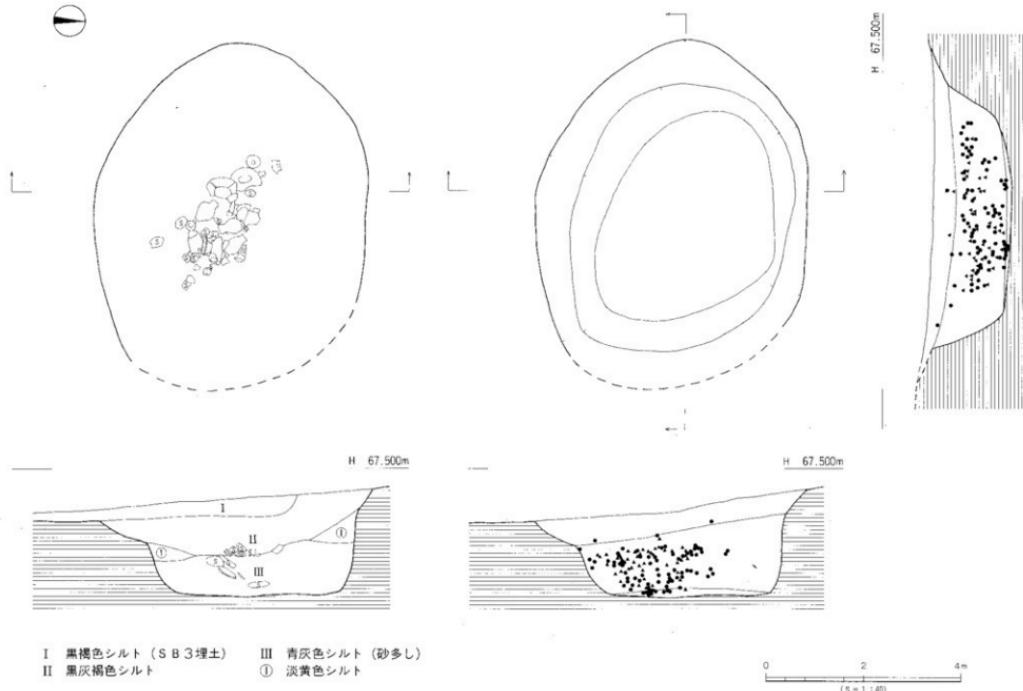
大形品（64～67） 64～67は口径が22cm以上の大形品である。64、65は最大径が胴中位と肩部の中間値に位置するもので、肩部の張りがさほど強くないものである。64は長い口縁部をもつ。65はやや厚めで、短く外反する口縁部をもつものである。頸部下端にヘラ状工具の押圧による「ノ」の字状文を施す。66・67は64・65に比べ肩部の張る形態をもつものである。口頸部は短く外反し口縁端部はナデによりわずかに拡張される。67は口縁端面はナデ凹み、頸部下端にヘラ状工具の押圧による「ノ」の字状文を施す（回周する）。

中形品（68～79） 68～79は口径が14～20cm、器高が24～29cm以上の中形品である。最大径と胴部・口縁部形態により三分類できる。68～70は、最大径が胴中位にあり、肩部の張りが弱いものである。70は口縁部がやや厚く、口縁端面はナデにより面をもつ。71～74は肩部が強く張り、最大径が肩部の下端にあるものである。口縁部は短く、口縁端部をやや拡張する傾向にある。71は口縁端面に2条の沈線文（擬凹線文）と頸部下にヘラ状工具の押圧による「ノ」の字状文がある。72は口縁端面がナデ凹む。75は中形品のなかでもやや小型のものである。肩部の張りが強く、肩部下端以下をヘラ削りする。76、77は最大径が口縁部ないし肩部の両方に求められるものである。胴部は肩部以下をヘラ削りする。77は胴上位の外面調整がヨコ刷毛目調整となる。78、79は胴部以下の破片である。78は肩部が強く張る形態のものに、79は口径と胴部径との両方に最大径が求められる形態のものの体部片である。

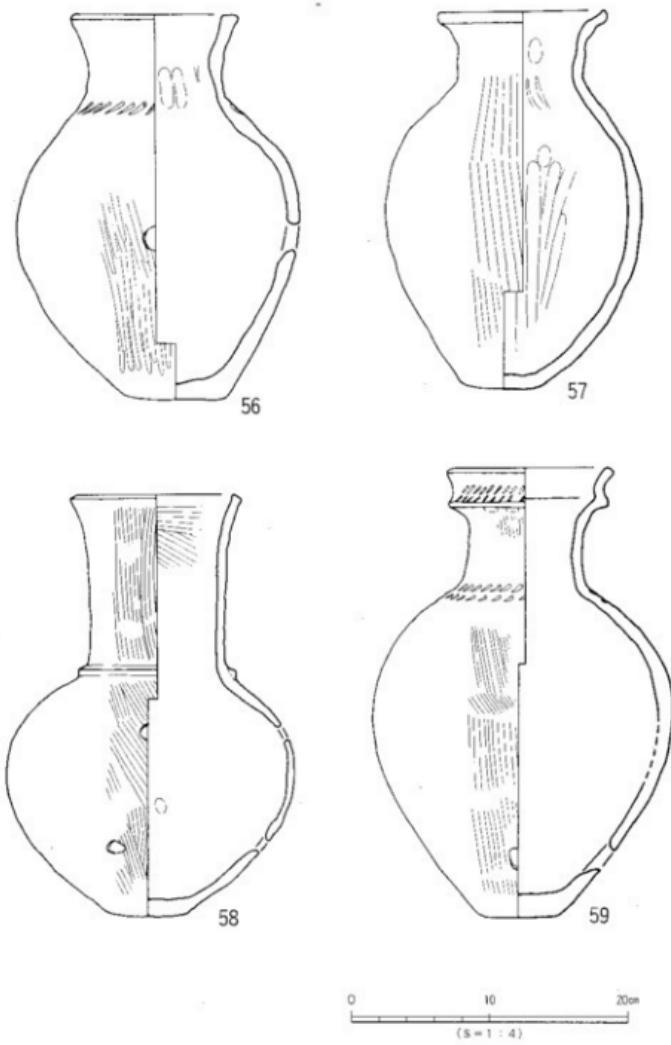
小形品（80～82） 80は2分の1の残存である。底部がくびれの上げ底である。胴部以上は、中形品の口径と胴部径の両方に最大径が求められる形態のものと同じ形状をとる。最大胴径以下はヘラ削り痕が看取される。81は肩部が張る中形品71～74の形態の小型品である。82の胴下半部内面は、指による強いナデ上げが看取される。

壺形土器（83～98） 複合口縁壺、短頸壺、長頸壺がある。

複合口縁壺（83～86） 83は複合口縁接合部が「コ」字状に仕上げられるものである。接合部には擬口縁が看取され、複合口縁部の製作技法が知れる。口縁端部は外方にわずかに突出し、端面はナデ後、沈線文（擬凹線文）2条が施される。口縁部外面には4条の沈線文（櫛状工具）と櫛状工具による山形文（4条一組）が施され、口縁接合部外面にも2条の沈線文（擬凹線文？）が施される。また、頸部にも8条の擬凹線文とヘラ状工具による列点文が施される。84は複合口縁接合部が「く」の字状を呈するものである。口縁部外面と口縁部端面に擬凹線文を施す。口縁端部はわずかに内・外方に突出する。85、86は複合口縁壺の頸～胴部

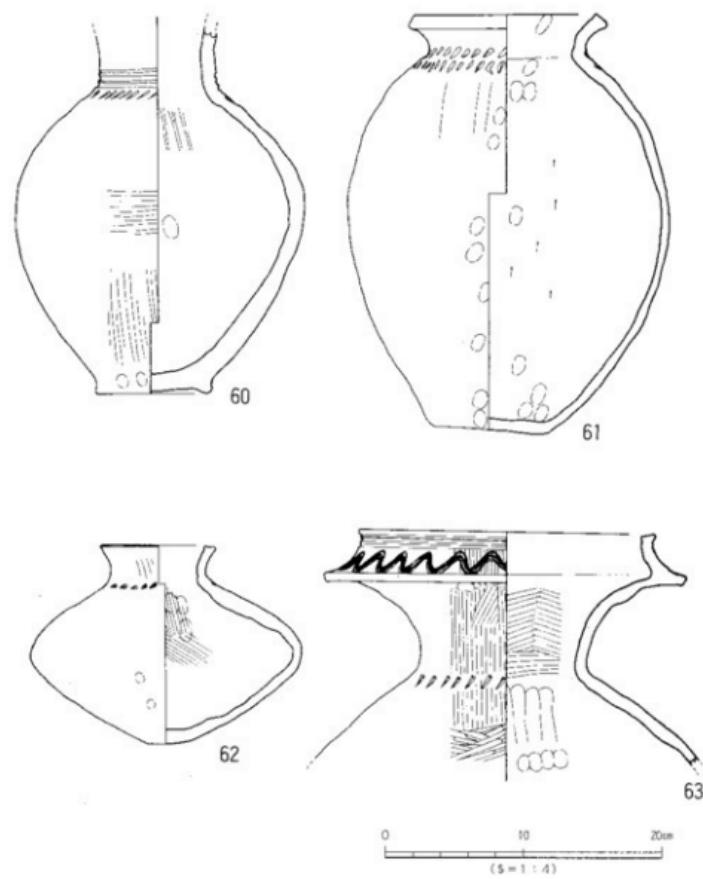


第22図 SK15 測量図



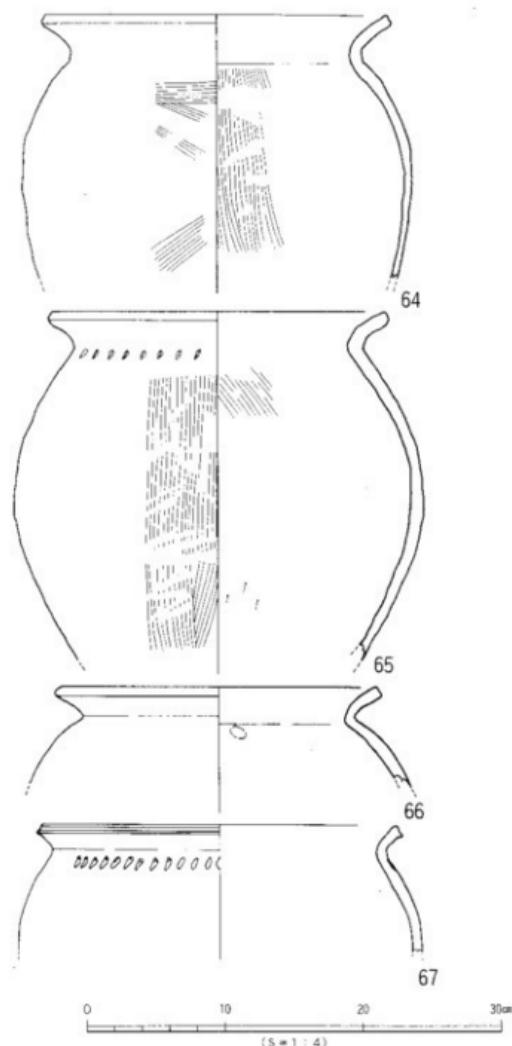
第23図 S K15最下部出土遺物実測図

調査の概要



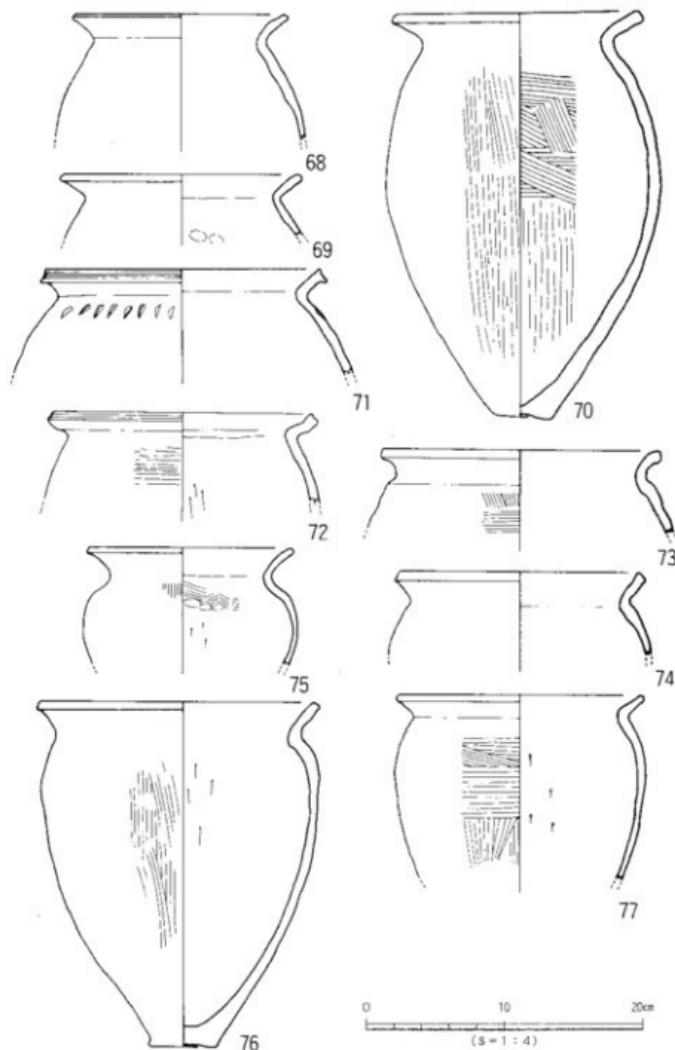
第24図 SK 15最下部他出土遺物実測図

遺構と遺物

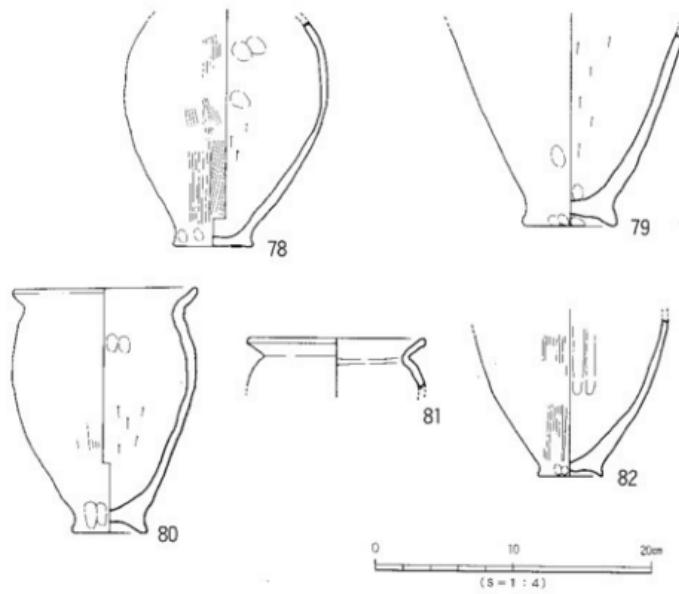


第25図 S K 15III層出土遺物実測図 (I)

調査の概要



第26図 SK 15 III層出土遺物実測図 (2)



第27図 S K 15III層出土遺物実測図 (3)

調査の概要

の破片と考えられるものである。85は頸部に断面三角形の貼り付け凸帯とヘラ状工具による刺突文がある。86は83と同形態を示す複合口縁壺の頸～胴部片の完存品である。頸部に7条の凹線文と板状工具の木口による列点文を施す。

短頸壺（87～89） 短く外反する口縁部を有する短頸壺である。87は肩部が強く張る。口縁端部はナデにより凹む。88は磨滅が著しい。口縁端部は丸みを帯びており、端面下端が下方に小さく突出する。89は小片で87と同形態を示す。口縁端面はナデ凹みである。

長頸壺（90～94） 90、91は筒状の頸部に短く外反する口縁部をもつ。90は小片である。91は2分の1の残存である。外面は頸部下をタテ刷毛目調整を行う。口縁端は丸く仕上げる。92～94は比較的長い頸部を有するものである。92は維存状況が良い。やや扁平な胴部に、細く長い頸部をもつ。頸部下端には、やや扁平な凸帯を貼り付け、凸帯はヘラ状工具により刻目が施される。93は口縁部を欠くものである。肩部が張り、頸部下端にヘラ状工具による列点文を施す。94は頸部下端にヘラ状工具による大きめの列点文を施す。

壺形土器底部（95～98） 95、96は突出するやや丸みのある半底の底部である。95はナデにより内面が大きく凹む。97、98は上げ底の底部である。

高環形土器環部（99） 99は小片である。内湾して立ち上がるるものである。ナデ調整がされる。器壁はやや薄い。

高環形土器脚部（100～107） 101～107は内傾ないし直立ぎみの柱部に短く外反する据部を有するものである。101～104、106は充填技法を看取した。105も充填技法によるものと考えられる。100は充填かと思われるが確かでない。101は脚端面が拡張され、端面に2条の擬凹線文を施す。柱一撲部間に円孔を施す。102は器壁が厚く、長脚で異形である。104、105は柱部が太く短いものである。脚端面は拡張され2条の擬凹線文を施す。105は柱上部に2条以上の擬凹線文を施す。106は柱上部内面の観察により充填技法が行われた可能性が高いと考えられるものである。脚端面はナデによりわずかに拡張される。107は小形品である。

鉢形土器（108～110） 108はやや大きい中形品の鉢形土器である。底部はやや不安定な平底である。口縁端部はナデによりやや拡張され、端面はナデ凹みとなる。109、110は鉢形土器に付く脚部片である。109はくびれの上げ底を呈する。110は器壁が厚いくびれの平底を呈する。

ミニチュア土器（111） 111は継ないし鉢形土器のミニチュア土器である。くびれの上げ底をもつ。ナデによる仕上げを行なう。

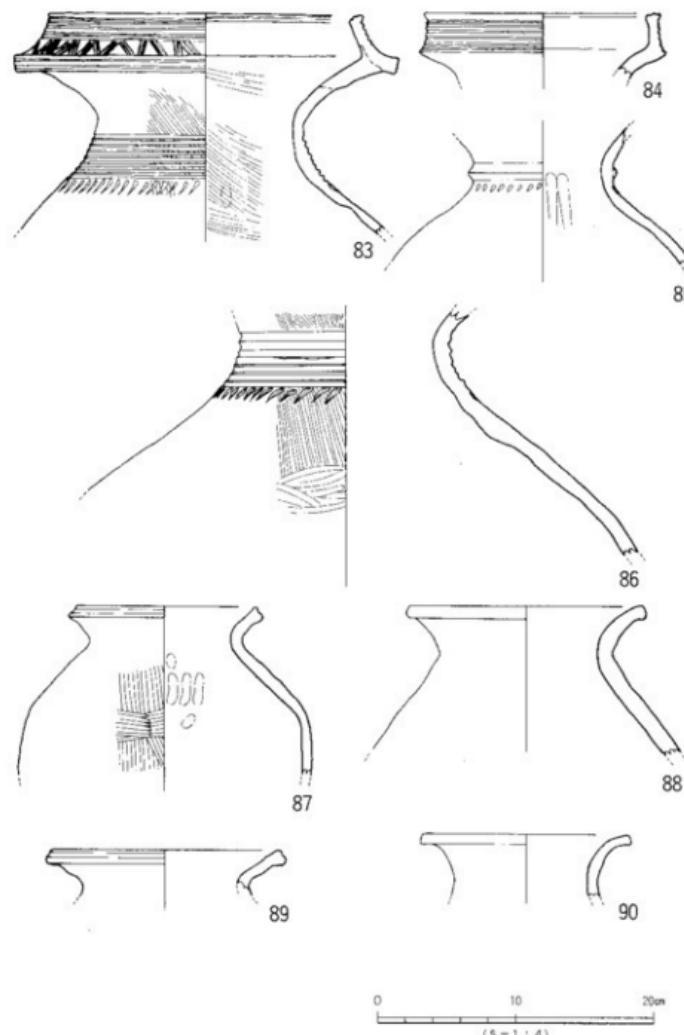
石器 3点が出上している。

石斧（112） 112は柱状片刃石斧である。刃部と基部を欠く。稜があまい仕上げである。234.3gである。

石錐（113） 113は有溝石錐の完形品である。溝は「V」字状である。245.5gである。

磨き石（114） 114はやや扁平の磨き石である。554.0gである。

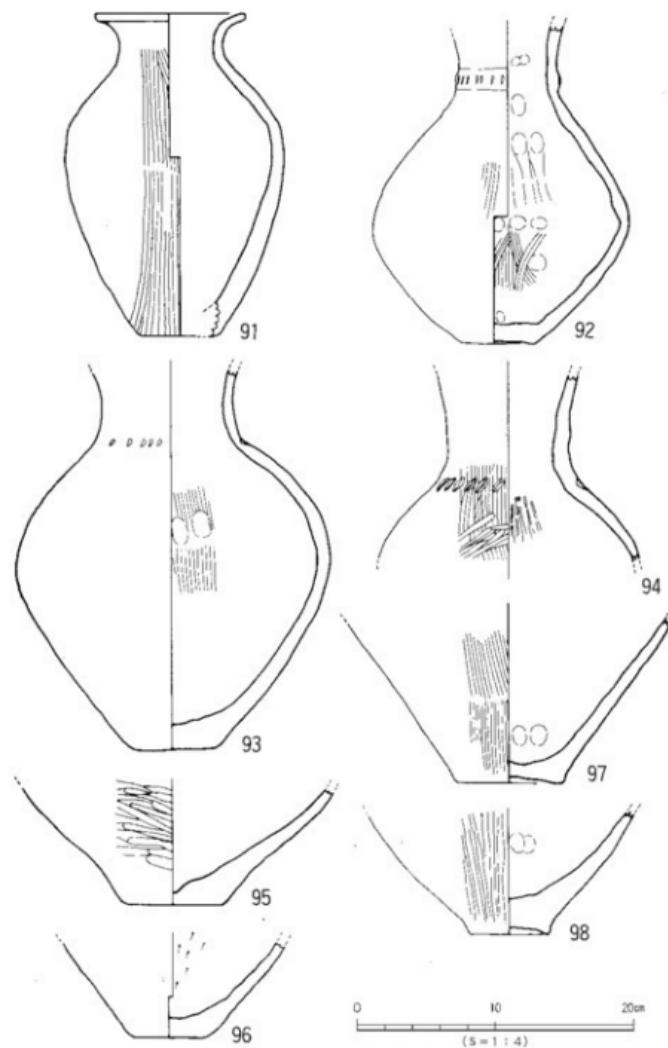
造 構 と 造 物



0 10 20m
(5 = 1 : 4)

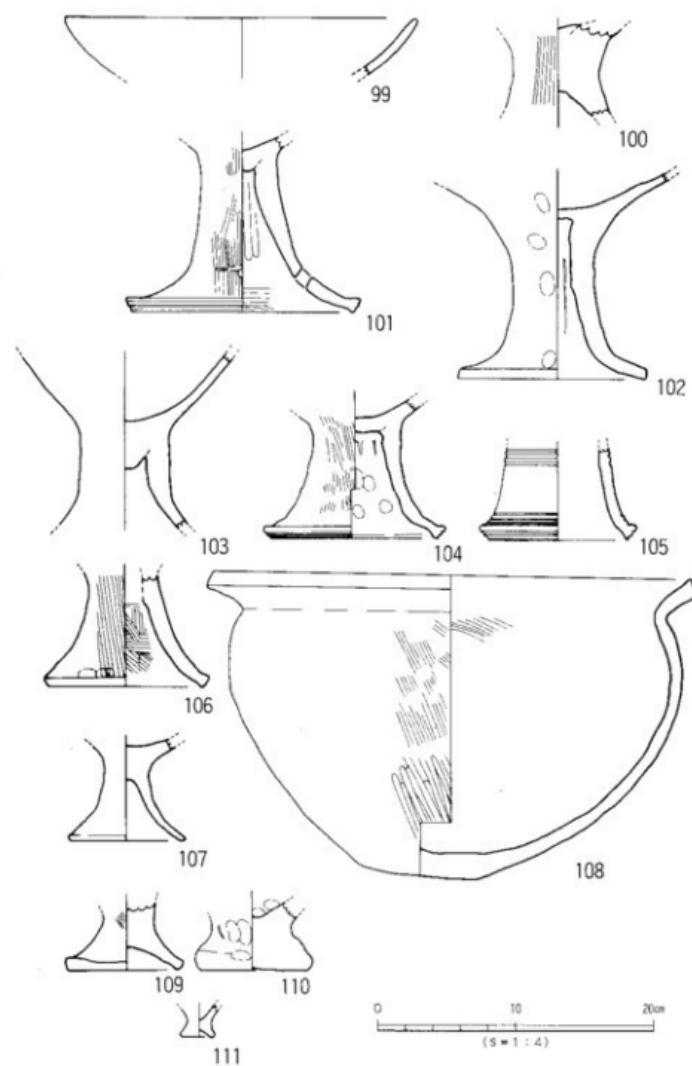
第28図 SK 15 III層出土遺物実測図 (4)

調査の概要



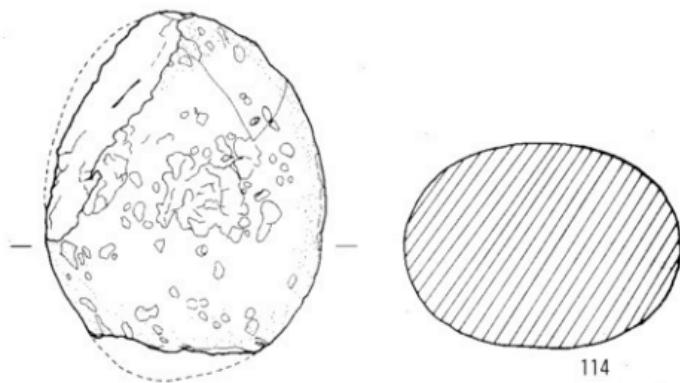
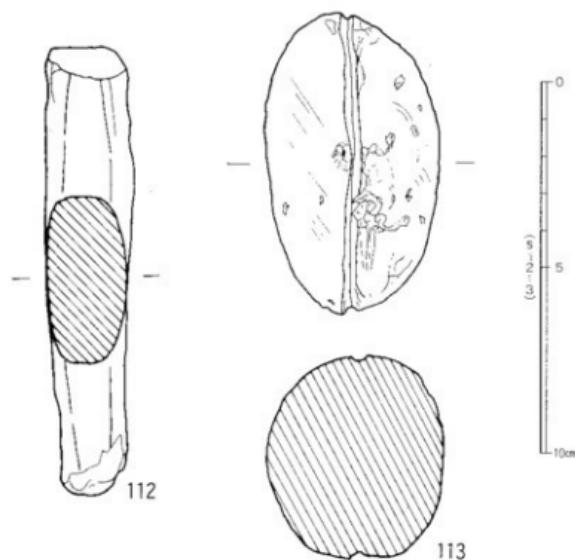
第29図 SK 15 III層出土遺物実測図 (5)

遺構と遺物



第30図 SK 15 III層出土遺物実測図 (6)

調査の概要



第31図 SK 15III層出土遺物実測図 (7)

埋土II層出土遺物 (115~148)

甕形土器 (115~118) 115、116は口縁部小片である。「く」の字状口縁で、頸部内面に弱い稜をもつ。117、118は底部片である。117はくびれの平底で、118は上げ底を呈する。

壺形土器 (119~127) 119、120は短頸壺である。119は頸部に指頭圧痕の貼り付け凸帯をもつ。口縁端部は、外下方に拡張され、端面にはヘラ状工具（2本一組）による山形文を施す（磨滅しており口縁下端面は不明）。120は器壁がやや厚い口縁部をもつ。121、122はやや長めの頸部をもつものである。121は口縁端部はわずかに拡張され、端面に2条の擬凹線文を施す。頸部下端には、板状工具（木口）の押圧による列点文が施される。122は外傾する口頭部をもつ。口縁端部はナデにより拡張され、端面はナデ凹む。123~125は広口壺である。123は頸部にヘラ状工具による沈線文4~5条と刺突文を施す。口縁端部上面はナデくばむ（複合口縁壺になる可能性は低い）。124は口縁端部が拡張される。口縁端面と頸部に竹管状工具による刺突文が施される。126は胴部片である。頸部に凸帯文を貼り付け、上面は刻目が施される。また、凸帯下部に板状工具の木口による大きめの列点文が施される。127は底部片で、わずかに上げ底となる。

高坏形土器環部 (128~132) 128、129は小片で、外傾しわざかに外反するものである。130は外傾し、大きく水平に開く口縁部を呈する。刷毛目調整が著しい。131、132は直立する口縁部を呈するものである。131は弱い稜をもつ。

高坏形土器脚部 (133~141) 133~136は長脚のものである。133は脚端部がわずかに拡張され、ナデによる凹みをもつ。135は円孔が施されていることを看取した。136は中実の柱部をもつ。円孔を2ヶ穿つ。137~141は低脚のもので、138、140は脚付鉢の脚部である可能性もある。137は脚端面は拡張されない。138は脚端面が内側に拡張され、内面に稜をもつ。137、138とも円孔が穿たれる。139は脚端部がナデによりわずかに拡張され、端面にナデ凹みをもつ。140は柱上・下部に二段4ヶの小円孔を穿つ。141は小形品の小片である。柱上部に細沈線文を12条と下部にタテ方向の沈線文（矢羽根透かしの一部か）を施す。

鉢形土器 (142、143) 142、143はくびれの上げ底をもつ胴下半部以下の破片である。

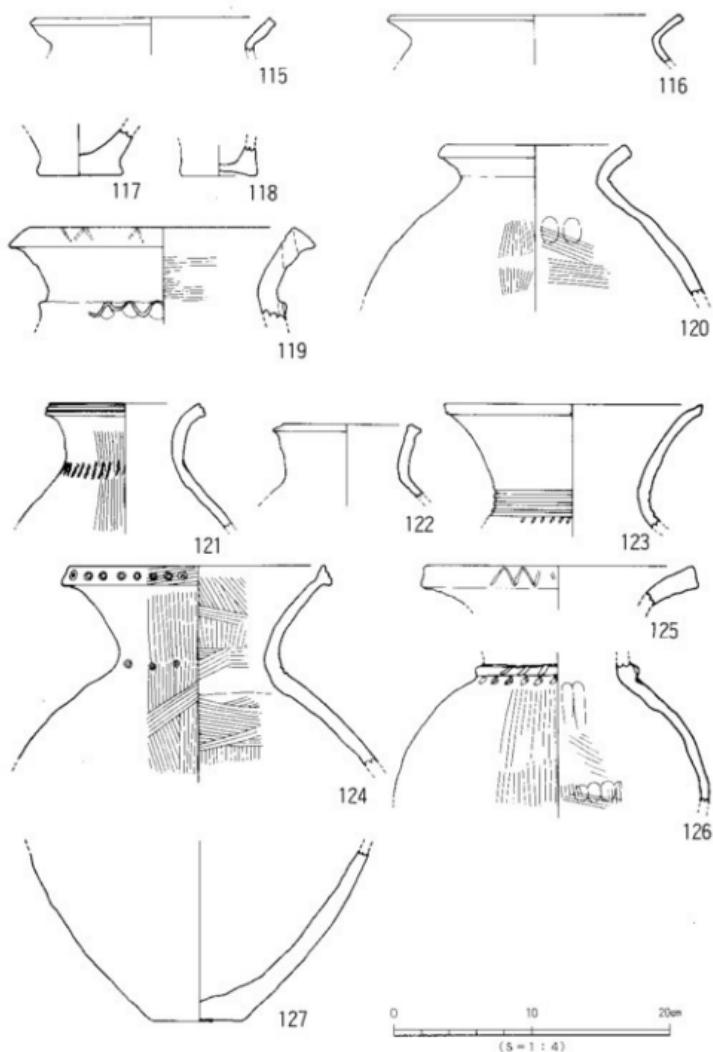
器台形土器 (144、145) 144は器壁が厚くやや人形の器台形土器の破片と考えられるものである。端部は下方に拡張され、端面に2条の擬凹線文が施される。145は器壁が薄いものである。受部上面に櫛状工具による（4本齒）による細い波状文が施される。

支脚形土器 (146) 146は受部が傾斜し、中空の支脚形土器である。

ミニチュア土器 (147) 147は甕形土器のミニチュア品と考えられるものである。

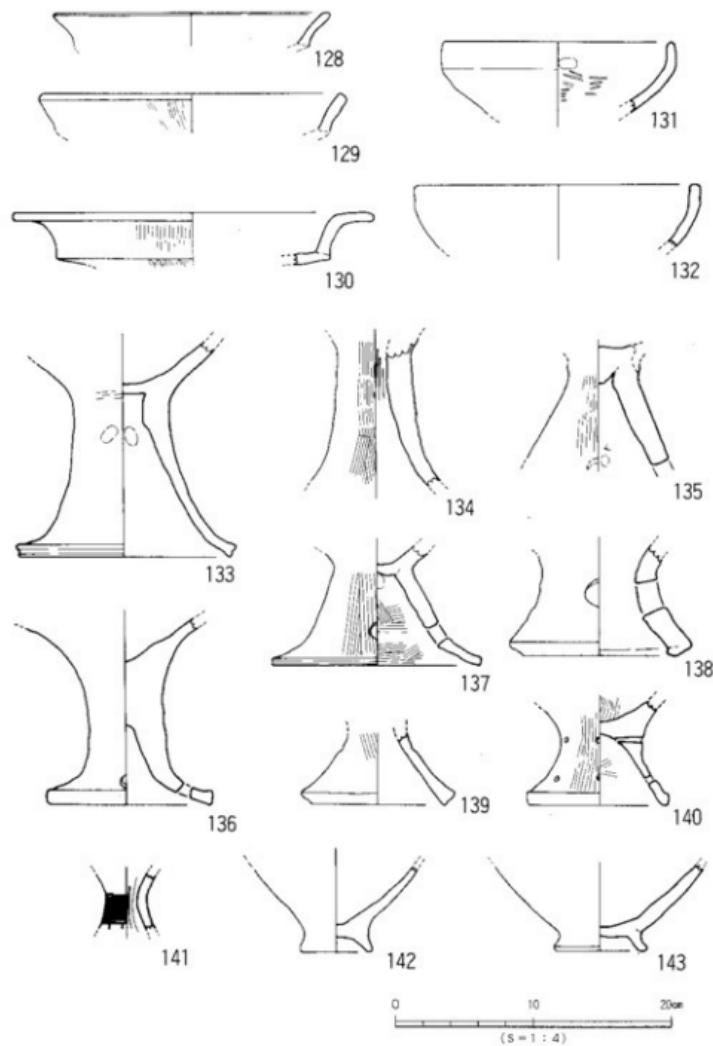
土製品 (148) 148は器種器形不明の土製品である。擬口縁部を看取しており、何かの部分品であることが知れる。側面に刻目（6~7条二組）が施される。

調査の概要



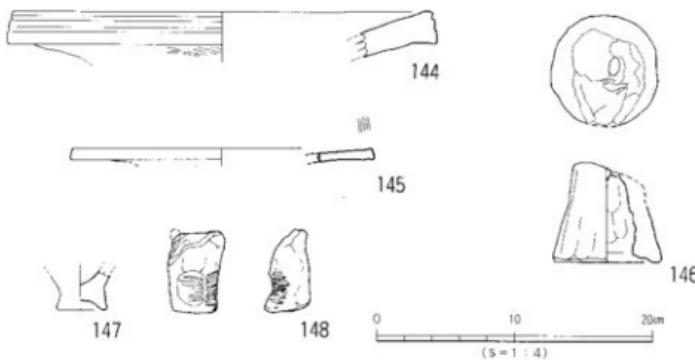
第32図 SK 15 II層出土遺物実測図 (I)

遺構と遺物



第33図 SK 15II層出土遺物実測図 (2)

調査の概要



第34図 SK 15 II層出土遺物実測図 (3)

表1 SK 15器種構成と比率

	II 層	III 層	計	比 率 (%)
壺	37 (9)	40 (24)	77	35.6
甕	50 (4)	45 (19)	95	44.0
鉢		6 (3)	6	2.8
高 壱	21 (16)	9 (9)	30	13.9
器 台	2 (2)		2	0.9
支 脚	1 (1)		1	0.5
ジョッキ形	1	1	2	0.9
ミニチュア		1 (1)	1	0.5
不 明 品	1 (1)		1	0.5
計	114 (33)	102 (57)	216	99.6

(注) 1. 個体認定は、口縁部及び底部片を対象として行った。

2. 数量は、報告書未掲載品を含めたものである。

3. ()は、報告書掲載分である。

遺構と遺物

S K 4号土壤 (第35図、図版14)

調査区西壁沿い南寄りのC 9区に位置する。遺構は調査区外に至る。S X010を切る。平面形は、円形ないし楕円形を呈すると思われ長軸172cm、短軸96cm、深さ20cmである。埋土は一層で黒灰褐色シルトである。遺物は、弥生後期の小形壺（完形品）、高坏（完形品）、壺の破片などが出土している。また、本遺構の性格については詳細は不明であるが、形状及び出土遺物がSK15号土壤と近似しており、両方が同様の目的で掘られたものである可能性は高い。なお、S X010は、SK 4の上部層になる。S X010の平面形は不整形な楕円形を呈し、埋土は大きく四層に分層ができる。上層から暗青灰色シルト層、中層黒灰色シルト層、下層黒色シルト層で、最下層がSK 4の埋土になる。

遺物は、上層と中層の間に20~30cm大の礫群が存在し、その礫群の下から弥生土器片が出土している。さらに下層からは、SK 4を中心とした周囲から完形品（153、162、179）を含む弥生土器が出土している。

出土遺物（第37図、図版28）

変形土器（149~152） 149は肩部の張りが弱く、最大径は口縁にあるものである。150は「く」の字状口縁部を有するもので、胴部最大径は胴部中位やや上にあり、口径を凌ぐものである。151は口縁端部に擬凹線文（？）が施されている。152は底部片である。わずかに上げ底を呈するものである。

壺形土器（153~157） 短頸壺、広口壺がある。

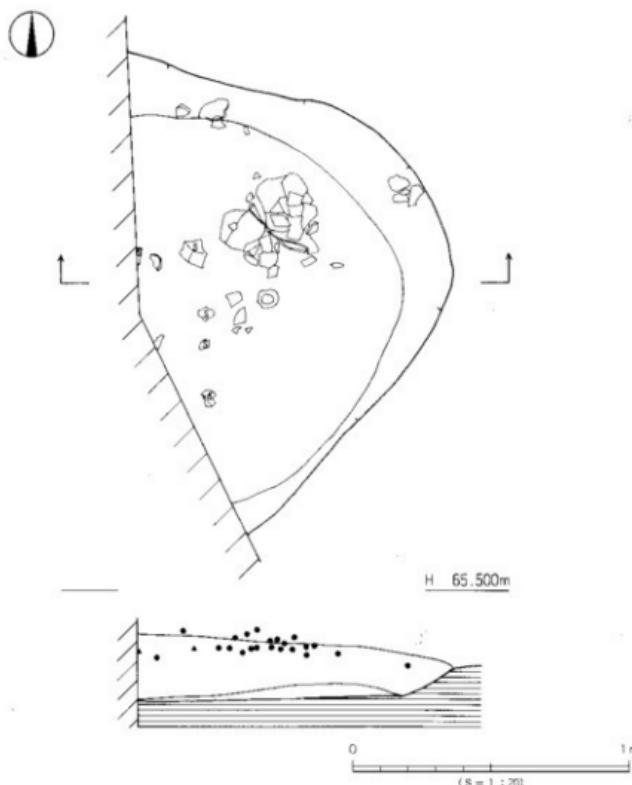
短頸壺153は肩の張った体部に強く外反する口縁部をもつ。口縁端面には擬凹線文2条が施される。外面刷毛目、内面胴下半にはヘラケズリ調整が見られる。155はくびれて短く、やや外傾する口縁部がつくものである。また、口縁接合部が「く」の字状を呈すものであり、稜が鈍く丸みのあるものである。157は小形品のほぼ完形品である。観く外反する短い口縁部をもち、頸部には小円孔を2個2対穿っている。また口縁端面にはナデ調整による凹みが看取できる。広口壺156は中形品の破片である。口縁端部がわずかに肥厚され、端面は強いヨコナデが施される。

高环形土器（158） 158は直口口縁の環部に低い脚部をつけたものである。脚部端面は強いヨコナデにより稜が形成される。

S X010出土遺物（第38・39図、図版29）

変形土器（159~161、165） 「く」の字状口縁部を有する変形土器群である。159は肩部の張りが弱く、胴部最大径は口径とはほぼ同じである。若干口縁部を欠くものの、ほぼ完形品である。外面刷毛目、内面ヘラズリ調整が看取される。底部はくびれの上げ底である。160、161は底部片である。共にくびれの上げ底を呈する。165は口縁部片である。外反する口縁端部にわずかに面をもつものである。

調査の概要



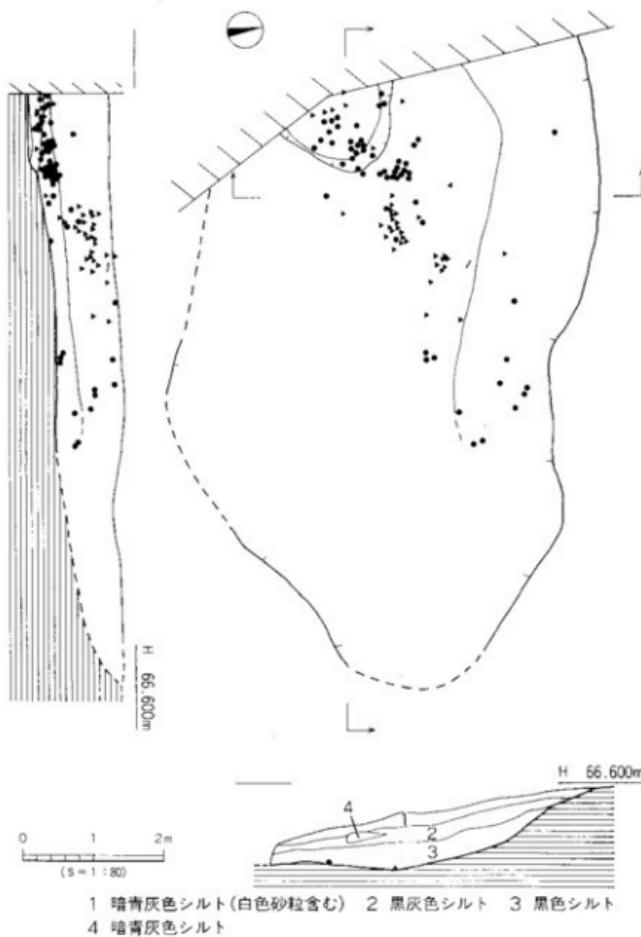
第35図 SK 4測量図

壺形土器（162～164、166～171）複合口縁壺、長頸壺、短頸壺がある。

短頸壺162は、短く内傾する頸部に外反する口縁部がつくものである。口縁端面が短く直立するものである。外面刷毛目、内面胴部中位刷毛目、胴部下位ヘラズリ調整が看取できる。広口壺163は大形品の破片である。口縁端部がわずかに肥厚され、端面には擬円線文3条が施される。

複合口縁壺164は外反後、内傾する複合口縁をもつ。166は口縁拡張部の破片である。斜格子目文が施されている。

長頸壺169は頸部にヘラ描沈線文5条が看取できる。167、168、170は胴部片である。161は胴中位やや下に届接部をもつ。164は頸部に沈線文1条とヘラ状工具による刺突文をもつ。

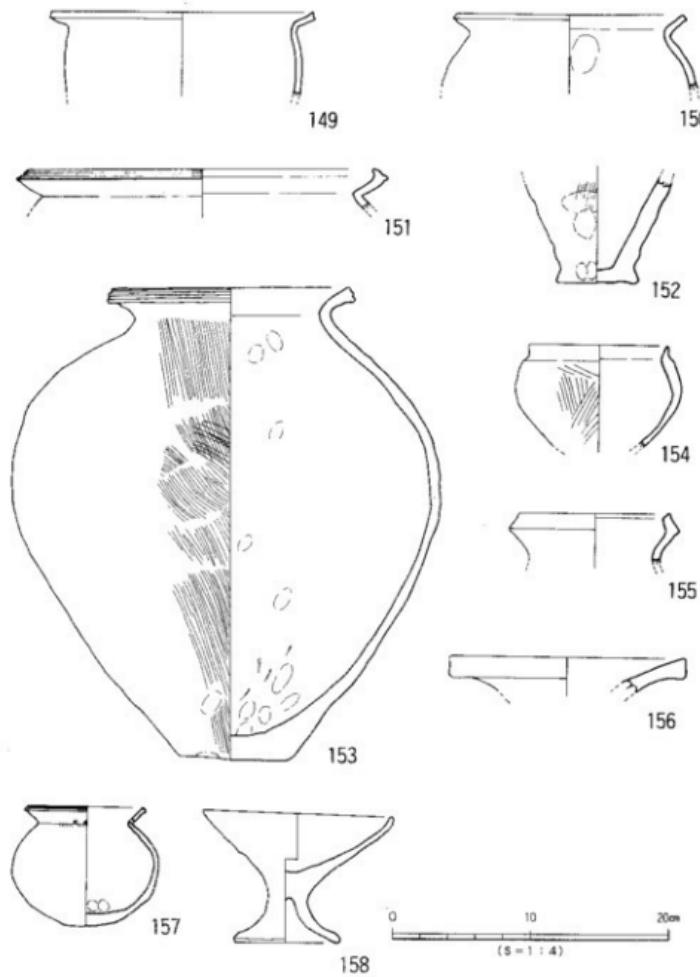


第36図 S X 010測量図

底部(171) 171は中形品の壺形土器の底部片である。やや大きめの平底でわずかにくびれ、丸みをもって突出するものである。

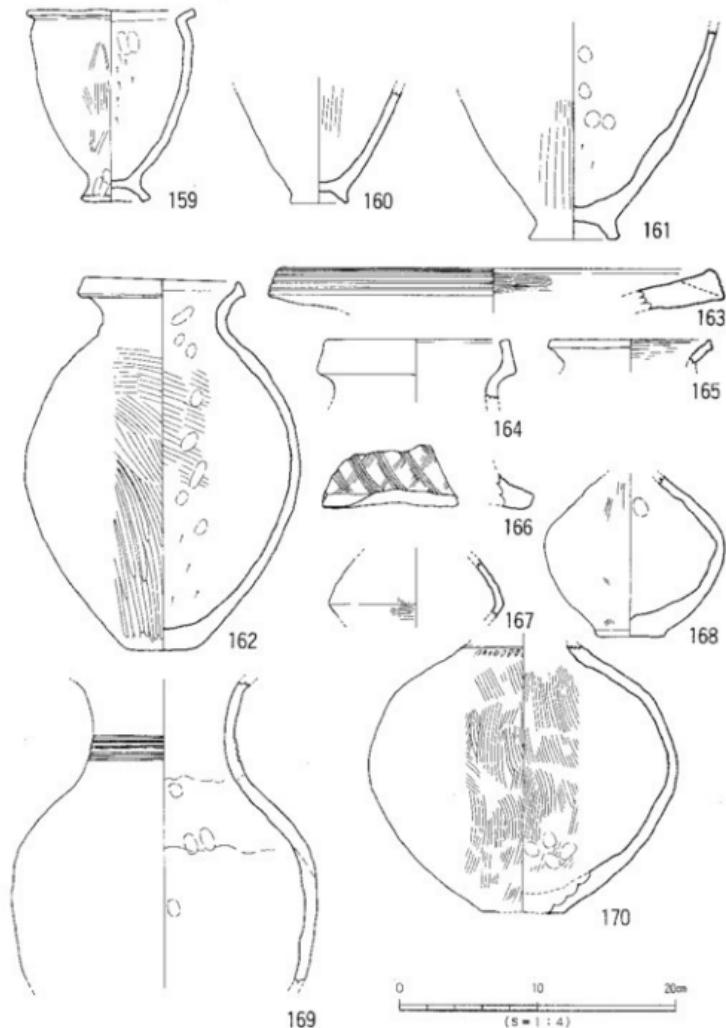
鉢形土器(172、173) 172は器高値が口径値に迫るものである。外傾して立ち上がる口縁部をもつものである。口縁端部は先細りして丸くおさまる。173は小形品の底部片である。くびれの上げ底を呈する。

調査の概要



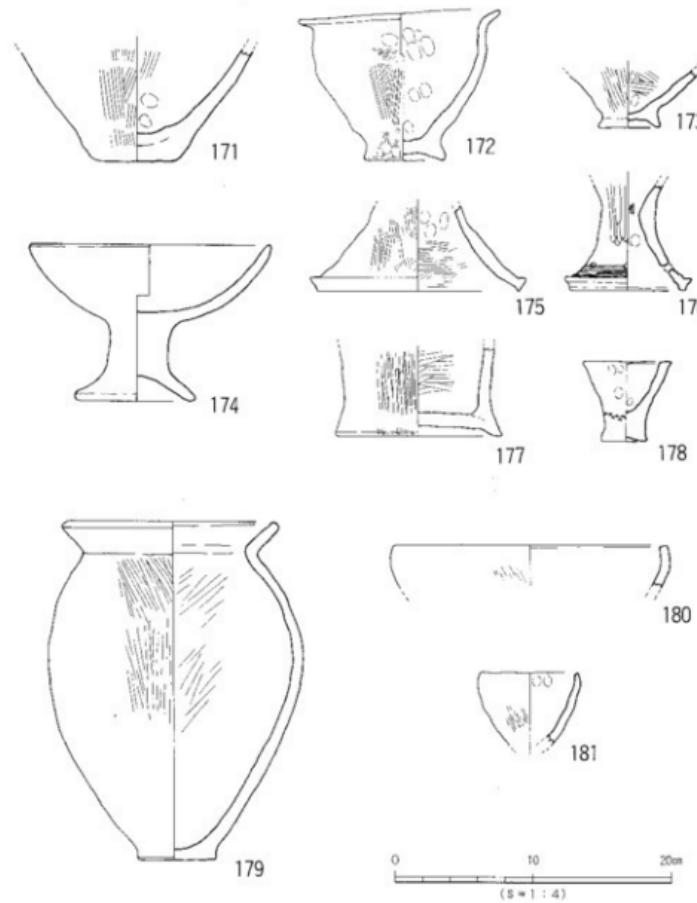
第37図 SK 4 出土遺物実測図

遺構と遺物

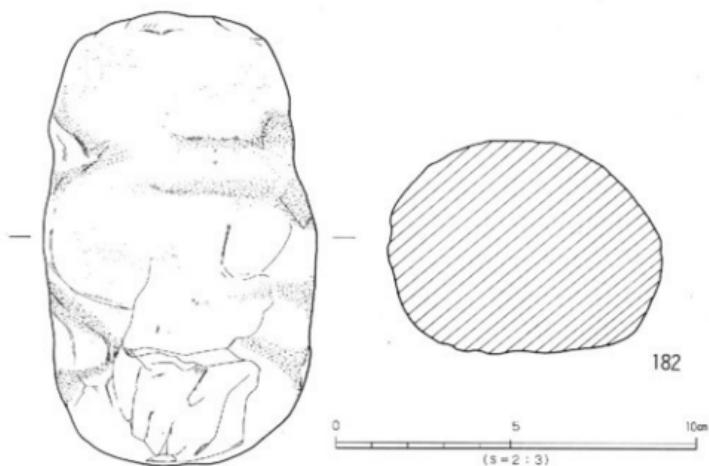


第38図 S X010出土遺物実測図

調査の概要



第39図 S X010・SK 4関連出土遺物実測図



第40図 S X010出土遺物実測図

高環形土器 (174~176) 174は直口口縁の環部に低い脚部をつけたものである。口径値は器高値を上回るものである。口縁端部は丸い。175は柱部が傾斜するもので、脚部端面は強いヨコナデをおこなう。内外面共に刷毛目調整が看取される。176は裾部下方に小円孔が穿されている。小円孔の下には擬四線文4条が施される。また脚部端面には凹線文が施されている。

ジョッキ形土器 (177) 177は底部から逆「ハ」字状に立ち上がるものである。底部はやや上げ底を呈する。

ミニチュア形土器 (178) 178は直口口縁に、厚く上げ底を呈する底部をもつ。

S K 4 関連出土遺物 (第39図)

甕形土器 (179) 179は「く」の字状口縁部を有し、肩部の張りが弱く、胴部最大径は胴部中位やや上にあり、わずかに口径を凌ぐものである。底部は平底を呈する。調整は内外共に刷毛目調整である。

高環形土器 (180) 180は口縁部の破片である。口縁端面はやや内傾し、端面にはヨコナデが施されている。

鉢形土器 (181) 181は底部を欠く破片である。直立する口縁部をもつ。

調査の概要

S K I3号土壤 (第8図)

調査区中央C 6区に位置する。B層上面で検出した。平面形は円形ないし梢円形を呈すると思われ、規模は長軸 $300+\alpha$ cm、短軸 $200+\alpha$ cm、深さ50cmを測る。断面形はレンズ状を呈し、埋土は茶褐色シルトである。

遺物の出土状況は、散在し流れ込み的様相が強い。弥生後期の土器片数点と有茎石鐵1点が出土している。

出土遺物 (第41図・図版30)

變形土器(183～188) 183～185は口縁端部を拡張しないものである。183は胴部が張らず、内外面ヨコヘラ磨きである。186は口縁端部を拡張するものである。端面に2条の擬凹線文が施される。187、188は胴下半～底部片で、いずれもくびれの上げ底を呈する。

壺形土器(189、190) 189は完形品に近いものである。短頸壺で、口縁部は短くやや厚い。190は、189と同形態の短頸壺小片である。口縁端部はナデによりわずかに拡張される。

高环形土器(191) 191は高環形土器環部片である。内湾する口縁部をもつ。口縁端部は欠ける。

鉢形土器(192、193) 192は直立し、外傾する口縁部をもつ。口縁部下に列点文を施す。193は、広口でやや浅い器形を呈す。口縁端部はナデにより拡張される。

ジョッキ形土器(194) 194はジョッキ形土器の口縁部と考えられるものである。口縁部下を強くナデるために、口縁部下に浅い凹みをもつ。

底部(195、196) 195、196は上げ底の底部片である。器形器種とも特定できない。

石鐵(197) 197は有茎鐵である。基部下端は欠損する。1.8gである。

時期：出土遺物より弥生時代後期前葉に比定する。

S K I号土壤 (第8図)

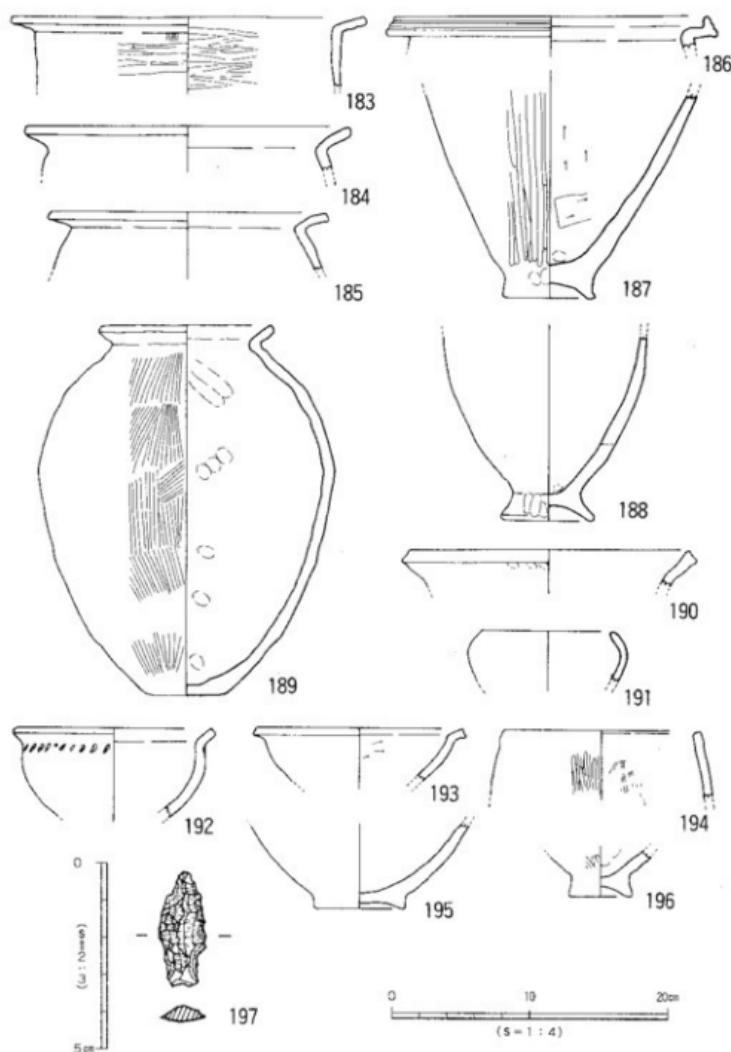
調査区西側、S B 3の南側C 9区に位置する。平面形は、不整梢円形を呈し、長軸 $3+\alpha$ m、短軸1.9m、深さ7cmである。底は平坦である。埋土は一層で灰褐色シルト(砂多し)である。遺物は弥生土器片があるが、外部からの流れ込み的様相が強い。

出土遺物 (第42図198～201)

198～200は壺形土器の底部片である。201は高環形土器の柱部片である。

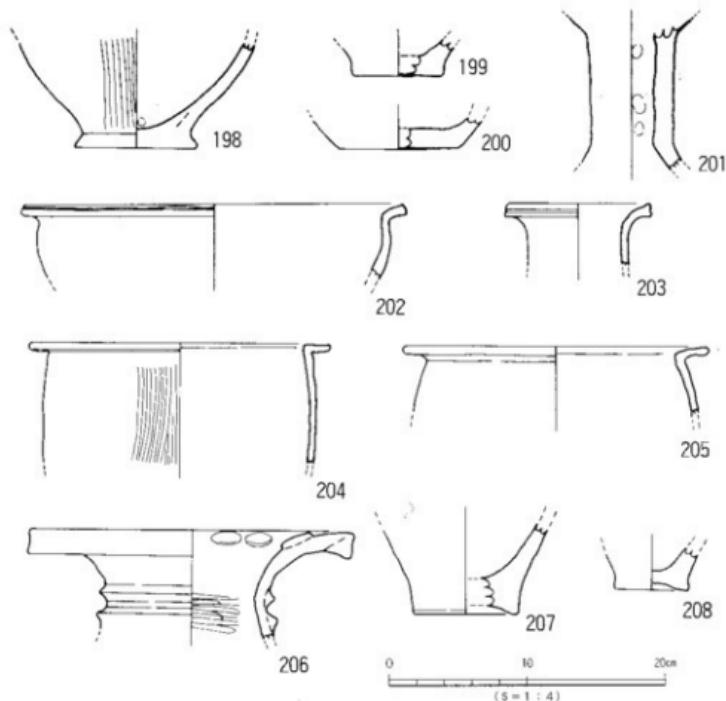
時期：弥生時代後期。

遺構と遺物



第41図 S K 13出土遺物実測図

調査の概要



第42図 SK 1・3・6出土遺物実測図

その他の土器

SK 3 出土遺物 (第42図202、203) 202は鉢形土器片である。口縁端面はナデ凹む。203は長頸壺片である。端部は丸みを帯びており、端面には1条の擬四線文を施す。

時期：弥生時代後期前葉

SK 6 出土遺物 (第42図204～208) 204、205は菱形土器口縁部片である。206は菱形土器片である。頸部に2条の凸帶を貼り付ける。口縁部上面には2ヶ1組の円形浮文を施す。207、208は、菱形土器底部片である。

時期：弥生時代中期中葉。

[4] 溝

本調査において確認された溝は1条である。

S D I (第8図)

調査区北西部に位置する。西から東へ走る溝であり、B層上面で検出したが、上部層からの掘り込みの可能性が高い。断面は舟底状を呈し、上場幅30cm、深さ $5+\alpha$ cm、検出長5.3mを測る。埋土は灰褐色シルトである。出土遺物は、須恵器・土師器の小片が少量出土した。

時期：出土遺物より、古墳時代後期（6c）以降に比定する。

[5] その他の遺構と遺物

本調査において確認されたピットは27枚である。第IVb層上面と第VII層上面で検出した。ピット中からの遺物の出土はほとんどなかった。

S X 07

調査区北壁西端付近で検出された遺物集中出土部分である。遺物検出範囲は長軸 $4+\alpha$ m、短軸 $3+\alpha$ mで不整精円状を呈するものである。掘り込み及び明確な壌底も確認できなかった。遺物は、弥生土器片、石斧1点が出上している。

出土遺物（第43・44図）

菱形土器（209～214） 209～213は「く」字状を呈する菱形土器片である。209は口縁端面に刻目を施す。211～213は口縁部下に指頭押圧された凸帯を1条貼り付ける。214は菱形土器の底部を焼成後に穿孔し、コシキとして転用使用したものである。

壺形土器（215～221） 215～218は口縁部片である。217は頸部に1条の凸帯文を施す。218は下垂した口縁端面にヘラ描きの山形文を施す。219～221は底部片である。

鉢形土器（222） 222は鉢形土器口縁部片である。

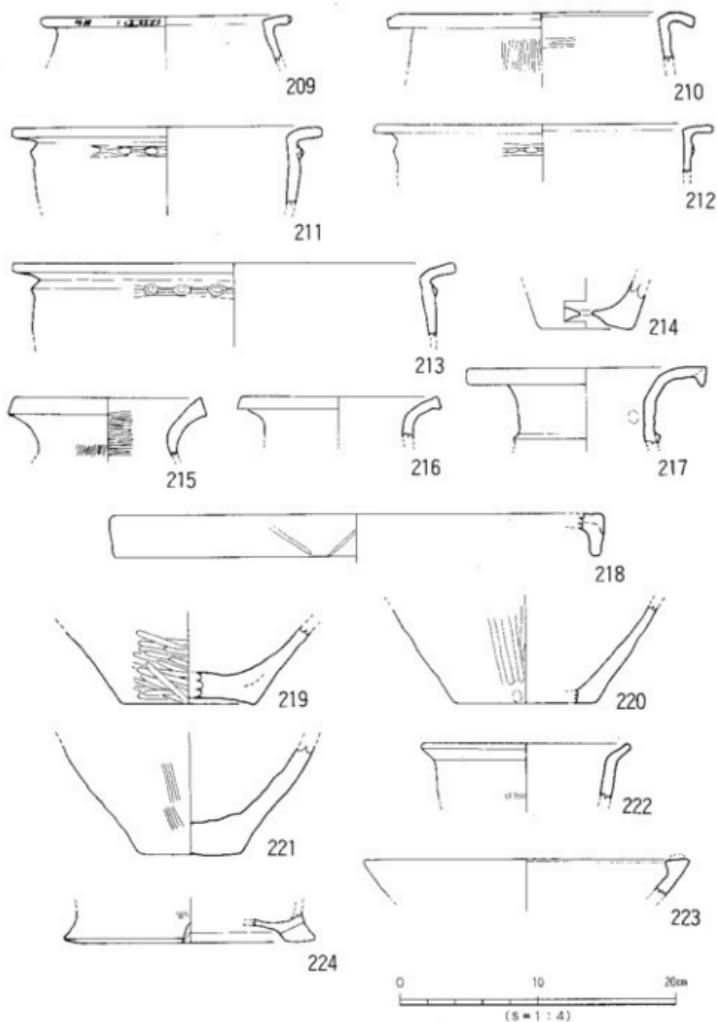
高壺形土器（223） 223は高壺形土器壺部片である。口縁部内側への拡張が著しい。

土製品（224） 224は器種器形が不明なものである。下部に三角形の透かしが施される。

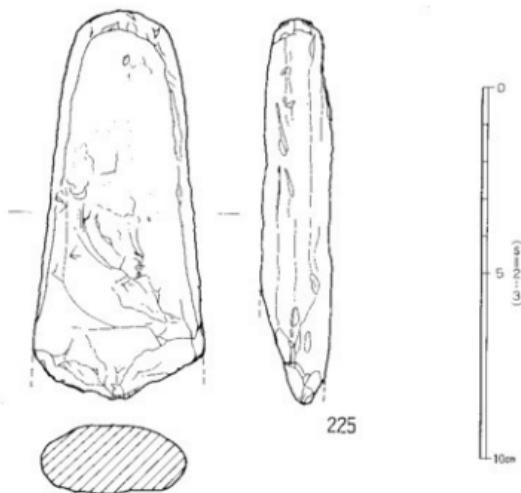
石斧（225） 225は伐採斧片である。刃部を欠く。扁平で、三角形を呈する。131.1gである。

時期：出土遺物より、弥生時代中期中葉に比定する。

調査の概要



第43図 S X 07出土遺物実測図(I)



第44図 S X 07出土遺物実測図(2)

S X 08 (第8図)

S B 2 (弥生・円形住居址) の北側やや西で検出された上器溜りで、遺物検出範囲は長軸 130cm、短軸 35cm で梢円状を呈するものであった。掘り込みは確認できず、遺物のみの検出であった。遺物は弥生土器片でいずれも小片である。

出土遺物 (第45図)

圓形土器 (226~229, 231~233) 226、227は「く」字状を呈する口縁部片である。228、229は、くびれの上げ底を呈する。231は「く」の字状を呈するものである。口縁部上面を強くヨコナデされる。232は口縁端部がわずかに拡張され、端面に 2 条の擬凹線文が施される。233は小さい上げ底の底部片である。

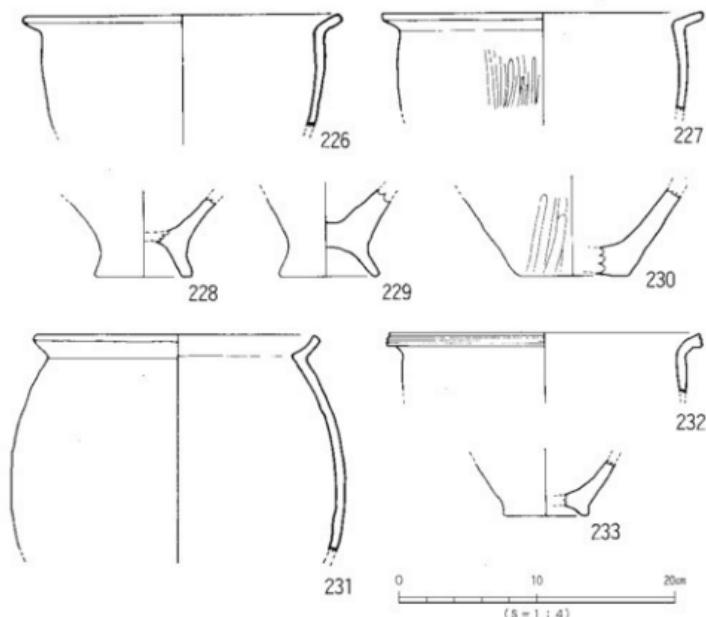
壹形土器 (230) 230はわずかに上がる上げ底の底部片である。

時期：226~230は弥生時代中期中葉、231~233は弥生時代後期前葉である。

S X 09 (第8図)

調査区中央やや東寄りの C 5 区で検出された。調査段階では南側に広がる住居址であろうと考えていたが、プランが曖昧で、床面が平坦でないこと等より、特定の判断をさける。規模は、長軸 3.8m 以上、短軸 3.15m 以上、深さ 37cm を測る。

遺物は、弥生土器片、石庖丁 3 点（うち未製品 2 点）が出土している。



第45図 S X08出土遺物実測図

出土遺物 (第46・47図)

壺形土器 (234、235) 235は口縁端部をわずかに上下拡張する。

壺形土器 (236~241) 236は口縁端部に1条の擬凹線文を施す。237は口縁部を上下拡張し、端面にヘラ状工具による波状文(1条)を施す。238は口縁端部に円形浮文(2ヶ1組)を貼り付け、浮文上に竹管文を施す。239は端面に3条の擬凹線文と刺突文をもつ円形浮文(2ヶ1組)を施す。240は複合口縁壺で、口縁接合部を欠く。口縁外側に5~6条の沈線文を施す。241は頸部に凸帶を貼り付けるものである。凸帶文上と凸帶文下に刻目を施す。

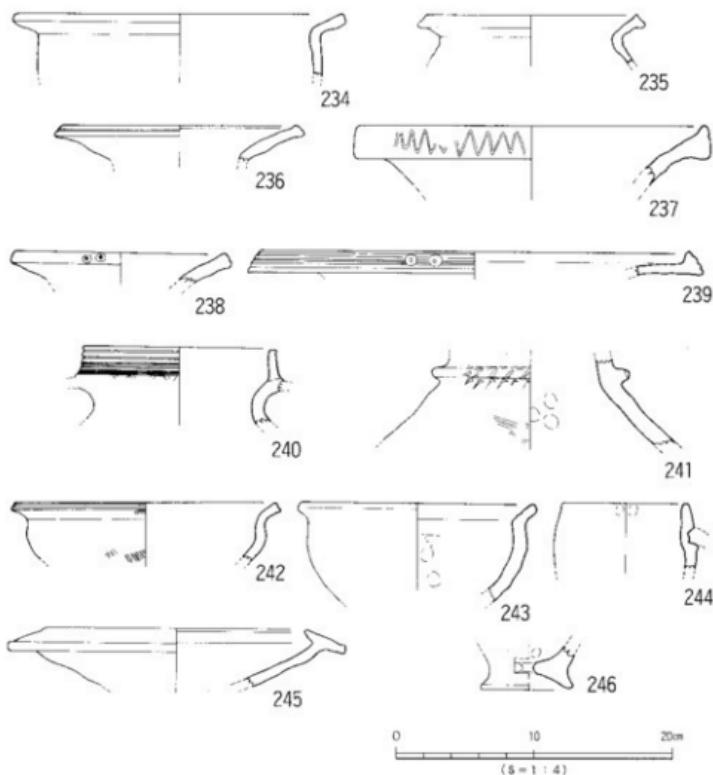
鉢形土器 (242、243) 242は口縁端部がナデにより凹む。243は頸部内面に稜をもつ。

ジョッキ形土器(244) 244は把手部の成形が差し込み技法であることが知れるものである。

高環形土器 (245) 245は高環形土器環部片である。所謂「鉤先」状の口縁部である。

壺形土器 (246) 246は壺形土器に穿孔し、壺形土器に転用されたものである。

時期：235~243は弥生時代後期前葉に比定される。



第46図 S X 09出土遺物実測図(I)

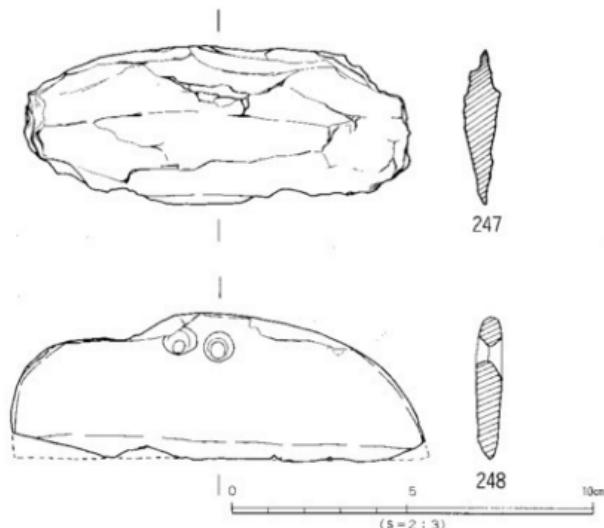
包含層出土遺物

Ⅲ章2節「層位」(P 10)で述べたように、本調査地の第III～VII層は遺物包含層となる。以下、特徴的遺物を選択し略記する。

第III層出土遺物 (第48図249～253)

249～251は弥生土器、252は上師器、253は須恵器である。249は壺形土器口縁部片で口縁端面に沈線文を4条施す。251は高壺形土器の口縁部片である。

調査の概要



第47図 S X 09出土遺物実測図(2)

第IV層出土遺物（第48・49図254～260、266～268）

254～258は弥生土器、259、260は須恵器である。257は小形の高坏形土器脚部片で、256は脚(台)付鉢の脚部片である。266～268は石器である。266は磨き石で使用痕を看取する。533.4gである。267は伐採斧である。やや扁平な形状で、基部を欠く。395.5gである。268は打製石鎌である。凹基式のもので、基部と鋒部を欠く。2.2gである。

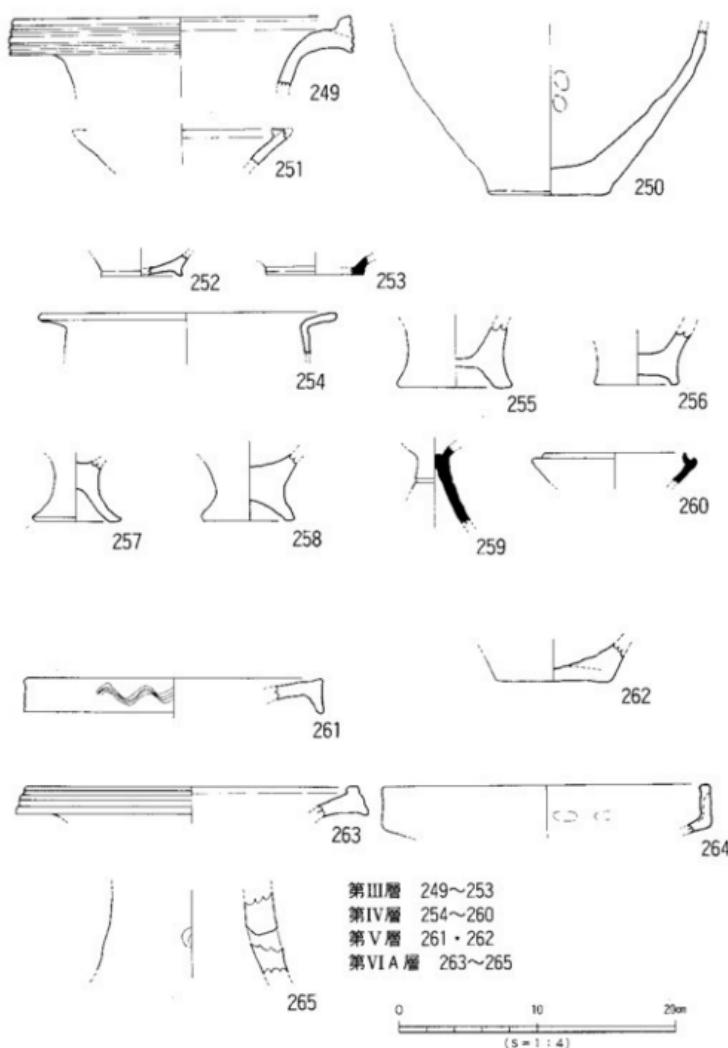
第V層出土遺物（第48図261・262）

261、262は弥生土器である。261は壺形土器片で、口縁端面と口縁部上面に櫛描き波状文を施す。

第VI層出土遺物（第48・50図263～265、269～284）

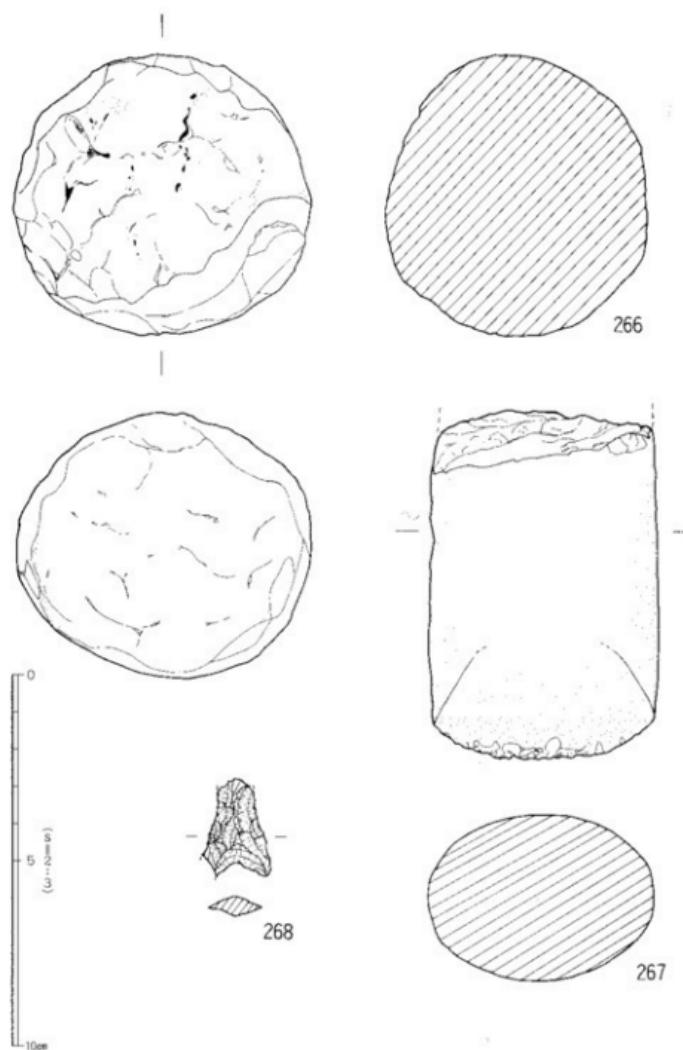
263～265はVI層上部で出土したものである。263～265は弥生土器片である。264は高坏形土器の坏部片である。265は器台形土器の脚部片で、円孔を施す。269～284はVI層出土遺物である。269～276は弥生土器、277～282は須恵器、283は瓦器碗、284は石器である。269は壺形土器の口縁部片である。口縁端面に凹線文2条と棒状の浮文を1ヶ施す。270は壺形土器の口縁部片である。口縁端部に擬凹線文2条以上と刺突文をもつ円形浮文(4ヶ1組)を施す。272は鉢形土器の口縁部片である。275・276はミニチュア土器である。277・278は坏身、279は短頸壺、280、281は長頸壺、282は高台付坏である。284は磨き石である。271.1gである。

遺構と遺物



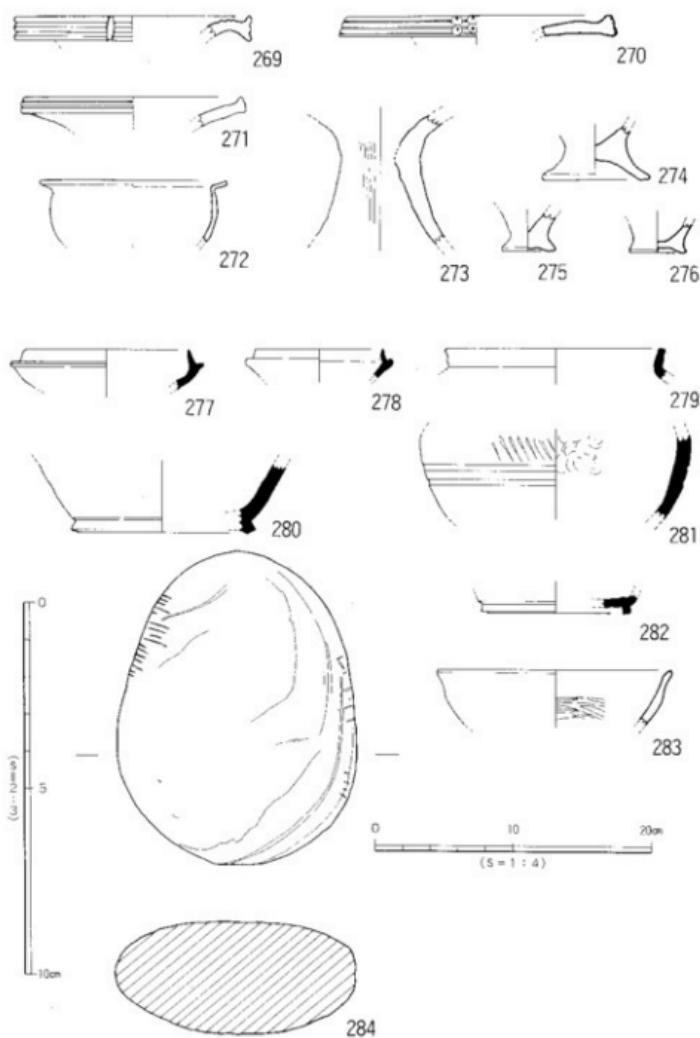
第48図 第III・IV・V・VI A層出土遺物実測図

調査の概要

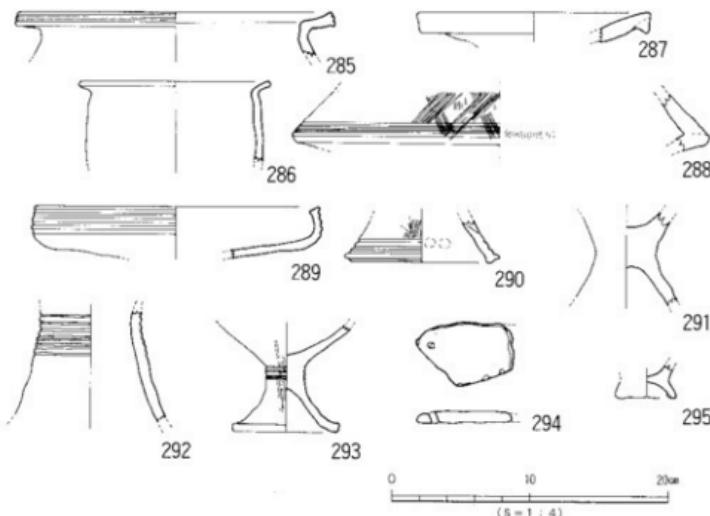


第49図 第IV層出土遺物実測図

遺構と遺物



第50図 第VI層出土遺物実測図



第51図 第VII層出土遺物実測図

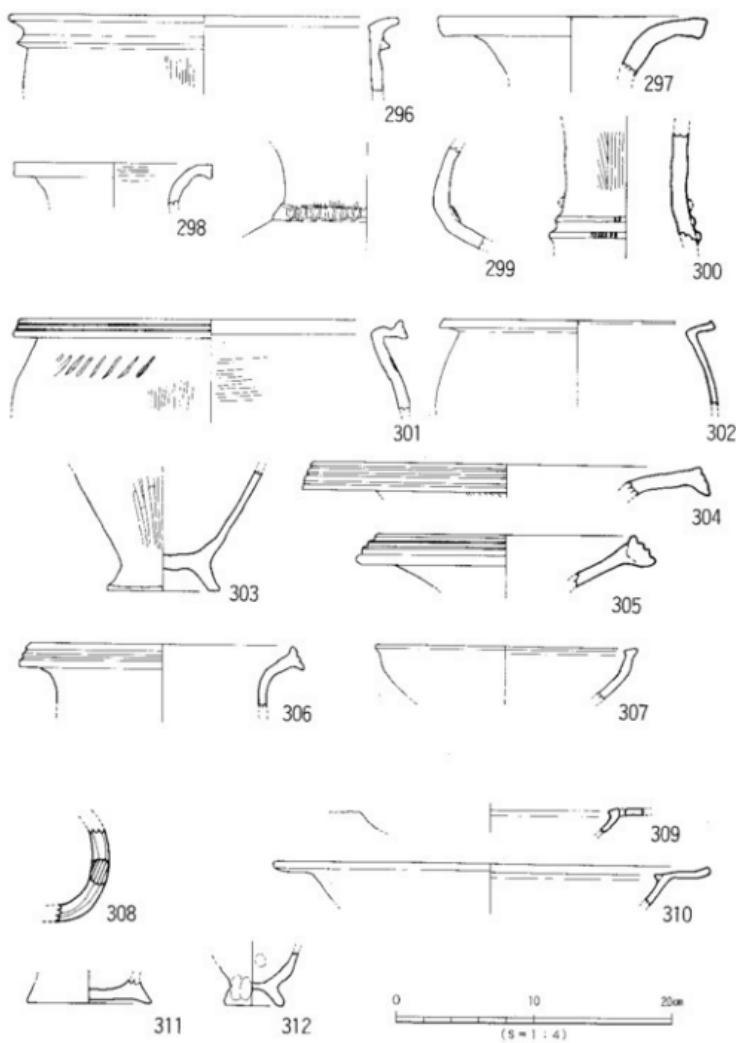
第VII層出土遺物（第51図285～295）

285～295は弥生上器である。288は複合口縁部片である。櫛状工具による（6本歯）斜格子目文とヨコ方向の沈線文（4条）を施す。294は器種器形不明品である。小円孔が貫通する。表採及び層不明品（第52～54図296～336）

土製品（296～327）296～323は弥生土器、324は縄文土器、325～327は須恵器である。296～300は弥生中期中葉、301～307は弥生中期後葉、313～323は弥生後期前半のものである。308はジョッキ形土器の把手で、309、310は高杯形土器の坏部片、311はジョッキ形土器片、312はミニチュア品である。323は器台形土器の脚部片と考えるが、平野内の出土例がない。324は縄文晩期の深鉢形土器片である。斜行沈線文が看取される。

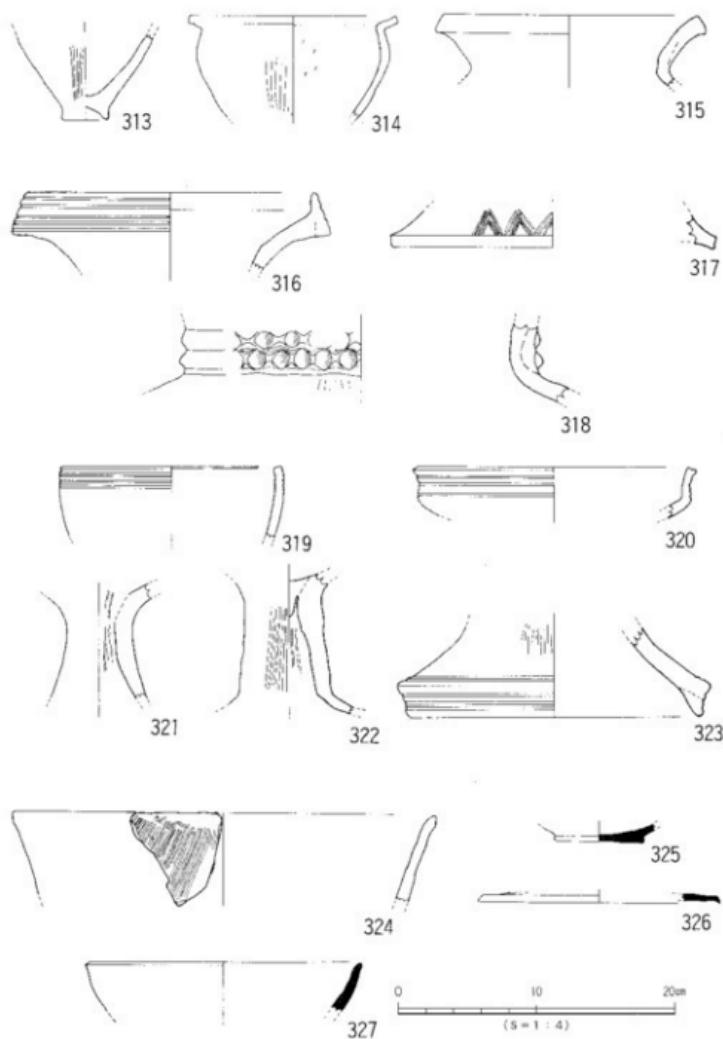
石製品（328～336）328は石庖丁の未製品である。328は磨きにより刃部をもつ。329～333は打製石鎌である。334、335は加工斧で、いずれも稜線が剥い。336は凹み石で、使用痕を顕著に残す。

造構と遺物

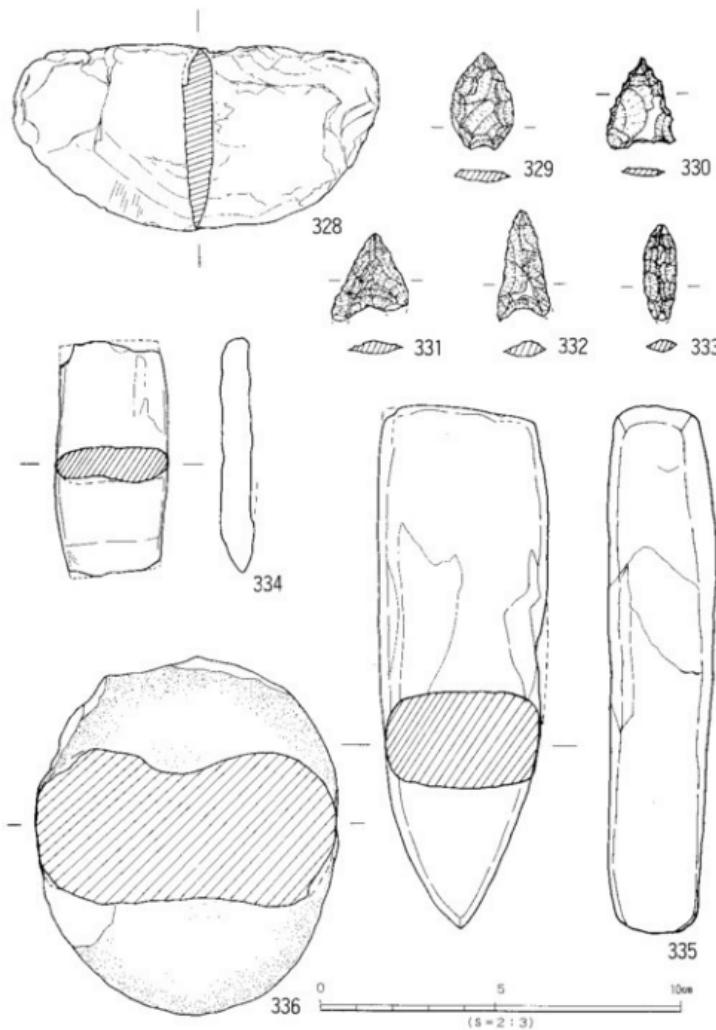


第52図 表採及び層不明出土遺物実測図 (I)

調査の概要



第53図 表採及び層不明出土遺物実測図 (2)



第54図 表採及び層不明出土遺物実測図 (3)

〔6〕分銅形土製品

当遺跡から分銅形土製品が2点出土している。整理上、資料名は谷若倫郎氏の方法に準じてアイリA、アイリBと命名した。

(1)アイリA : S B 2出土品(第55図上、図版33上)

出土状況——アイリAは、S B 2号住居址、第IV層(最下層:灰褐色シルト)中からの出土である。S B 2号住居址の床面直上であるかどうかは不明であるが、同層からは弥生時代後期に比定される弥生土器片が共伴遺物として出土している。

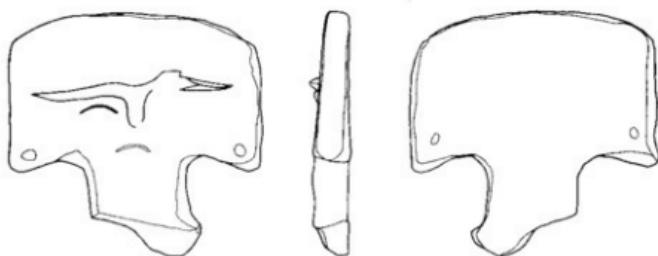
遺物——下半部を欠失した分銅形土製品である。器形は隅丸方形で、表裏とも平坦である。顔面を表現した面を表面とすると、裏面には文様がみられない。眉は断面三角形の突帯を張りつけ、鼻を一体で表現する。目と口は、同一施文具と推定される道具で半月形に線刻する。また、上半部のくり込み部両端に、左右一対で表面から裏面に穿孔しており、耳を表現したものと思われる。なお頭髪の表現はみられない。色調は表裏面ともに黄褐色である。胎土は、細かい砂粒を含むものの密である。焼成は良好で、朱彩の痕跡は見られない。残存長8.5cm、上半部最大幅9.0cm、くり込み部最大幅3.4cm、上端面厚さ0.9cm、くり込み部厚さ1.2cmを計る。

(2)アイリB : S X010出土品(第55図下、図版33下)

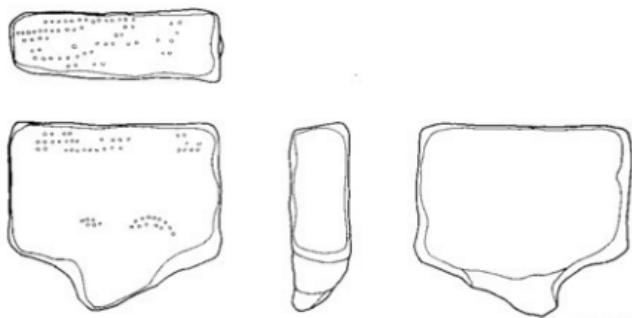
出土状況——アイリBは、S X010の埋土(黒灰褐色シルト)中からの出土である。S X010はSK 4の上部層になるため(参考:P 69)、アイリBは流れ込みの可能性もある。

遺物——くびれ部以下を欠失した分銅形土製品である。器形は方形で、表裏とも平坦である。表面と推定される面に顔面を表現し、裏には文様を表現しない。頭髪は、表面に3列、上端面に6列の刺突文を施すことによって表現する。中央や下方に、2列の円弧状の刺突文が2条並んで施され、眉を表現したものと推定される。そのほかの顔面表現は見られない。色調は表面淡黄褐色、裏面茶褐色である。胎土は1~2mmの砂粒を含み、やや粗い。焼成はやや不良で、表面の摩滅が著しい。眉と頭髪、左右側面及びくり込み部にベンガラの塗彩の痕跡がみられ、当初は全面に塗彩されていたものと推測される。残存長6.5cm、上半部最大幅7.5cm、厚さ2.0~2.2cmを計る。

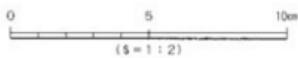
遺構と遺物



アイリ A



アイリ B



第55図 祝谷アイリ遺跡出土の分銅形土製品

4. 小 結

(1) 層序

本調査地は、傾斜部と小谷部からなる。傾斜部は、近現代の開墾により包含層及び遺構が全て削平されている。小谷部は、7層及び間層2層からなる土壌堆積を確認した。第III～VI層、間層A・B層が遺物包含層である。このうち、第VI層・B層は弥生時代の、第III～IV層・A層は古墳時代～中世の遺物包含層であった。B層は、傾斜部でも自然地形が凹地となり、後世の削平をうけなかった地点での検出に限られていることより、本来は傾斜部全面に堆積していた可能性があるものと考えている。

また、包含層出土遺物は、弥生時代中期中葉、同後期前半、古墳時代後期、中世前半期のものに限られる。時代・時期が限定でき、かつ短期間内の遺物である。検出遺構も出土遺物にはほぼ対応することから、集落經營分析の資料として注目されるものである。

(2) 弥生時代遺構

中期中葉と後期前半の遺構を確認した。

中期中葉 竪穴式住居址1棟（SB5）、土壙2基（SK7）、性格不明遺構1基（SX07）がある。

SB5は、傾斜部に立地し、炉址を付設する。松山平野の同時期同立地の住居址は、大峰ヶ台遺跡で検出事例がある（栗田茂敏 1989）。現在までに松山平野では同時期の住居址検出例は少なく、稀少資料として貴重である。

後期前半 竪穴式住居址1棟（SB2）、上壙6基（SK1～4、8、15）、性格不明遺構3基（SX08～010）がある。

SB2は、傾斜地立地で、高床部と炉址を付設する。先記した大峰ヶ台遺跡の住居址とは時期が異なるものの、両遺跡の竪穴式住居址は住居築造における掘削方法に共通点が認められる。SB2及び大峰ヶ台遺跡SB8は、高所部分の平面形が扇状を呈し、壁体が階段状に幅広く削られ、かつ傾斜をなす構造である。

SK15は、本調査において最も注目されるものである。本遺構の注目点は三項目ある。1つには本来の機能が井戸であったこと、2つには祭祀行為が行われたこと、3つには多量の遺物が出土したことである。

松山平野では、弥生時代井戸は祝谷六丁場遺跡SE1（中期中葉）、谷田遺跡SK8、12、21、32（中期後葉）の4基が確認されている（註1）。松山平野検出の井戸はいずれも素掘りであり、かつ、断面円筒状を呈し、何ら特異構造をもつものではなく、他の遺構（貯蔵穴）との区別が難しい。よって、調査における観察点と認定について、充分に考慮しなければならないことを提示する資料となった。また本遺跡と、祝谷六丁場遺跡は、地理的性質上弥生時

代においても河川から50mと離れておらず（現在約20m）、集落における水利（例えば、井戸水と河川水の利用の違い）について課題を残すものとなった。

次に、祭祀行為についてである。SK15の遺物出土状況をみると、基底部では完形（全てに焼成後穿孔あり）ないし一部欠損の土器（意識的に打ちかいたものか）が同心円状に検出された。その上部には、複合口縁壺の口頸部完存品や複合口縁部壺の頸肩部完存品が出土した。さらに、埋土堆層上面にある礫群との間では、大型の土器破片と石器が出土した。礫群中及び直上（埋土堆層下部）では高環形土器脚部片を中心とする上器片（1点を除き小型破片）が出土している。基底部より遺構上部におよぶ間に、遺物の選択と意識的な埋置が行われたことを考えさせる出土状況となっている。この出土状況は、福岡市比恵遺跡検出の井戸においてもみられる事象であり〔山口謙二 1990〕、本事例も井戸における祭祀行為として判断される可きものであろう。

SK15の出土遺物は、後期前半（梅木編年後期Ⅰ式新～Ⅱ－1式古）〔梅木謙一 1991〕に比定される。出土土器は、遺構の性格上、器種構成比率は日常生活の比率とは異なるものの、胎土・形態等祭祀具として焼成前より製作されたものではないと考える。また、器種構成では、長頸壺と高環形土器が多く、かつ高環形土器脚部が顕著に多く、壺部は小片がわずか10点に満たない出土量となり、祭祀における特定器種及び部位の選択が存在することを示唆するものであると考える。

SK2、3、8は平・断面形態、規模において大差なく、同時期同機能をもった遺構と考えている。時期は、出土遺物が小片少量であるため判断に難しいが、SK3の土器より後期前半に比定される可能性が高い。機能については、その位置関係において建物址に関するものでなはいかと調査中には考えたが、三基とも柱痕が検出されなかったことより、現時点においては特定の判断をさけるものである。

(3)弥生時代遺物

SK15出土遺物は一括りの高い遺物である。遺物の性格上器種構成比率には問題があるものの器形が知れることでは良好な資料である。器種には、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高環形土器、器台形土器、支脚形土器がある。

甕形土器は、法量に大中小の3種があり、形態には口縁部と肩部の変化により三分類が可能である（P36）。底部は、小～中型品は上げ底でくびれる傾向にある。口縁端部は、口縁端をわずかに拡張し、まれに擬圓線文を施すものがある。また、口縁部を折り曲げて成形する際に頸部を強くヨコナデする傾向にあり、頸部が直立しているかのように見える。成形及び調整は、肩部が張るものは肩部以下をヘラ削りし、胴部が張るものは刷毛目調整を行う傾向が強い。

壺形土器は、複合口縁壺では口縁接合部形態に二形態がある。施文は山形文や山形文状の

波状文が施される。壺形土器全体は、施文では頸部下端部～肩部に横沈線文や刺突文ないし「ノ」字状文を施す傾向が強い。口縁端部の加飾は極少数に見られるにとどまる。調整は、複合口縁壺と一部のものにヘラ磨きが行われるが、刷毛目調整が多数をしめる。

鉢形土器は、台付鉢が存在する。また、法量がやや大きいものもある。

高環形土器は、环部形態は外傾ないし直立する口縁部をもつものと外反するものがある。前者は屈折部の稜はきわめて弱い。脚部形態は、柱上部が太く、柱が短く、底部の開きが弱いことを共通とする。施文は円孔が施されることが多く、脚端面に1～2条の沈線文を施すものがある。

器台形土器は、器形全体は明確ではないが、受部端面がわずかにナデ拡張される。

支脚形土器は、中空で受部が傾斜面をなす。

S K15出土遺物は、高環形土器脚部と小形甌に中期後葉の形態要素を残すものの、他のものは中期の形態から、脱却している。施文は、刺突文ないし、「ノ」字状を主要素とし、沈線文（擬四線文を含む）をわずかに施す。中期後葉の施文が衰退化した様相を顕著に現したものといえる。S K15出土遺物は、後期前葉～中葉（後期前半）に比定される形態をもつ土器群である。

次に本調査出土の石器について触れる。中期中葉のS B 5からは自然石の節理面を利用した男性的石製品が出土している。弥生時代の石製品としては県下で出土例はなく、西日本においても類例が少ない。

S K15出土の石錐は出土数が一点であることで注意をひき、さらに本地点集落の海浜との関係を示す資料として注目したい。

その他弥生時代遺物で注目されるものは、S K15出土の長頸甌58とS X09出土245、包含層出土309、310の高環形土器环部片である。58は平野では初例で北部九州に類似形態がある。後者は技術的には北部九州地方のものであるが、それ以上の判断はできかねる。

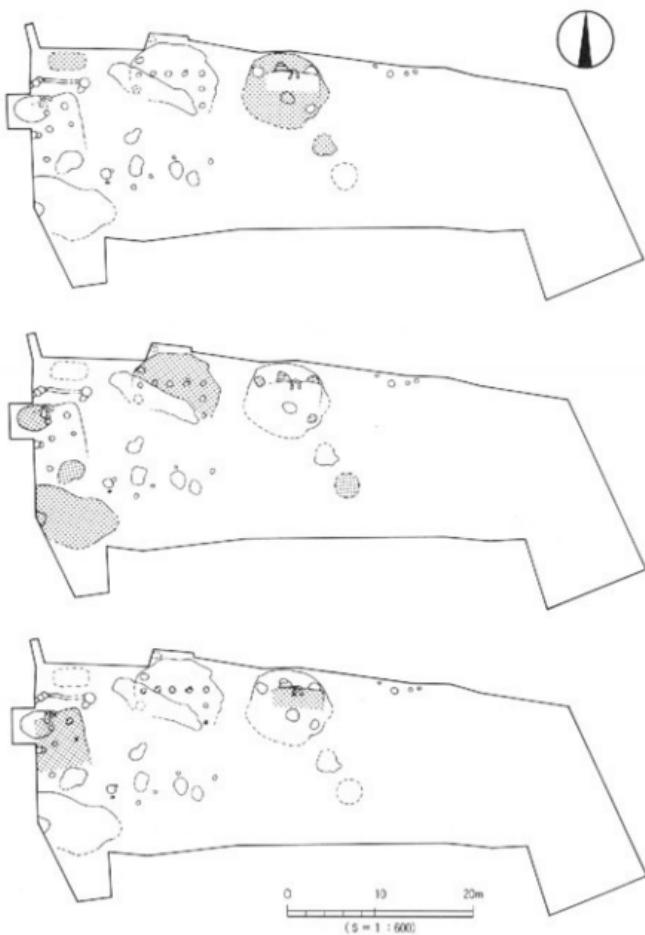
(4) 古墳時代遺構

後期の堅穴式住居址2棟（S B 1、3）が検出の主たるものである。

S B 1は、改築の様相が強いものである。改築前のものには壁体溝を付設するのに対し、改築後は付設しないことは注目される。

S B 1では、カマドが検出され、さらにカマド巾より土師器の高環形土器を利用した支脚が出土した。市内類例には、市内福音小学校構内遺跡[武正良浩 1991]に検出事例がある。ただしカマド出土の高環形土器には、高環形土器が明らかに加燃され支脚として利用されたと考えられるものと、加燃がみられずカマド廃絶に関する祭祀ではないかと考えられる出土状況のものの二者があり、その判断には調査時の出土状況と遺物観察が重要といえる。

小 結



第56図 祝谷アイリ遺跡の集落動態図

調査の概要

(5) 古墳時代遺物

S B 3 及び S B 2 墓土中層から出土した遺物は、祝谷地区を含む道後城北遺跡群内で出土例が少ないものであり、同遺跡群の集落構造を考える際の一つの資料となるものである（第V-3章参照）。

S B 1 カマド出土の土師器の高环形土器は、平野内でも出土例が少なく、稀少資料として現時点では重要視できるものである。

(6) 集落の様相

本調査地は、弥生時代中期中葉と同後期前半、古墳時代後期に、居住地として、集落が存在していたことが明らかとなった。各時代を概観すると、弥生時代中期中葉は住居址他が、後期前半は住居址、井戸、土壤が存在する。集落域を考えると、南側は谷部であり伏流水もあることより住居としての立地条件は悪く、集落の居住地は北部の高地に延びるものと考えられる。

古墳時代のものは、掘立柱建物址と竪穴式住居址の時期関係が不明確であるが、掘立柱建物址が二棟の竪穴式住居址の中間に位置することは注意しておきたい。弥生時代の傾斜地居住については、平野内においても大峰ヶ台遺跡、松山市～伊予郡砥部町に広がる祇園面山遺跡等の丘陵地帯で確認されているが、古墳時代後期のものは初例である。

本調査は、祝谷地区の土地利用を考える上で貴重な資料となるものであり、さらに、同地域や丘陵地帯の埋蔵文化財調査において課題を提示するものとなった。なお、遺構が全て西側で検出されているのは、近現代の削平が著しいことによるものであり、遺構存在の有無は判断できなかった。

〔註〕

- (1)祝谷六丁場遺跡……宮崎泰好 1991 「祝谷六丁場遺跡」松山市教育委員会他
谷田三丁遺跡……坂本安光編 1981 「愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書II」
愛媛県教育委員会
なお、谷田三丁遺跡検出井戸は、「愛媛県史 原始 古代I」では3基となっている。

【文献】

- 栗田茂敏 1989 「大峰ヶ台遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報』松山市教育委員会
山口謙二 1990 「比恵遺跡(9)」福岡市教育委員会
梅木謙一 1991 「松山平野の弥生後期上層一層年試案」『松山大学構内遺跡』
松山大学、松山市教育委員会
武正良浩 1991 「福音小学校構内遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報』
松山市教育委員会、松山市立埋蔵文化財センター

IV-1 植物珪酸体分析

古環境研究所 杉山 真二

1. はじめに

祝谷アイリ遺跡では、土壌（SK15）の底部付近から弥生時代後期前半の完形に近い土器が多量に検出された。この調査は、これらの土器胎土および土器の内部土壌などについて植物珪酸体分析を行い、土器の素材（粘土）の給源および遺跡周辺の古環境などについて検討を試みたものである。

2. 分析試料

分析の対象とした土器は、SK15遺構の底部付近から多量に出上したものであり、弥生時代後期前半と編年されていた。これらの土器の多くは完形に近いものであり、その内部には土壌が詰まっていた。胎土分析用の試料（土器片）は、このうちのNo57、92、58、62、70の5点から、土器内部の土壌はNo57、59、56、60、92、58、62、70の8点から採取された。なお、土壤分析の試料番号は胎土分析の番号及び拂団の土器実測番号とに対応している。比較試料として土器周辺の土壌（SK15埋土III層）も採取された。

また、平野出土の同時期の資料をも比較資料として分析を行った。

釜ノ口遺跡（7次）では弥生時代後期前半とされる炉跡（SB1）が出土しており、ここから検出された焼土についても試料が採取された〔高尾・真木 1991〕。試料数は計15点である。

3. 分析方法

植物珪酸体の抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法」〔藤原宏志 1976〕をもとに、次の手順で行った。なお、土器片については、前処理として土器のコア（中心部分）を抽出し、24時間水浸の後に乳鉢を用いて細粒化したものを分析試料とした。

- (1) 試料の絶乾（105°C・24時間）
- (2) 試料約1gを秤量、ガラスピーズ添加（直径約40μm、約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散（300W・42kHz・10分間以上）
- (5) 沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
- (6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1 gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率をかけて、試料1 g中の植物珪酸体個数を求めた。

4. 分析結果

表2および表3に分析結果を示す。分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は次のとおりである。イネ、イネの穀殻（穎の表皮細胞）、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属など）、ジユズダマ属、タケ亜科のA1aタイプ（ホザサ節など）、B1タイプ（クマザサ属など）、B2タイプ（メダケ属など）、その他、給源不明のAタイプ（キビ族類似）、Bタイプ（ウシクサ族類似）、Cタイプ（ウシクサ族類似、大型）、表皮毛起源、茎部起源、棒状珪酸体、その他（未分類）、樹木起源のAタイプ（ブナ科のシノキ属）、Bタイプ（ブナ科のコナラ属）、Cタイプ（ブナ科）、Dタイプ（広葉樹）である。また、海綿骨針もわずかに検出された。

以下にこれらの分類群の形態を記載し、同定の根拠を示した。写真図版に各分類群の顕微鏡写真を示す。なお、現時点では植物珪酸体標本の整備および検討が十分ではないため、記載内容は今後の研究によって訂正や追加がなされる余地を残している。

(1) イネ *Oryza sativa* Linn. (第57図 1~3)

断面の形状は扁型もしくはイチョウの葉型である。大きさは45 μm 前後。植物体中では弧の部分が葉身の裏側に、尖った部分が表側に向いていることから、前者を裏面部、後者を表面部とよんでいる。また、葉身の縦断面方向から見た面を断面、横断面方向から見た面を側面とよんでいる。裏面部には亀甲状もしくはゴルフボールの表面様の凹凸があり、側面突起が比較的明瞭で、表面先端部には溝状のわずかな凹みがある。

イネに近似したものに、サヤスカグサ属のサヤスカグサ (*Leersia oryzoides* subsp. *Sayanuka*) とアシカキ (*Leersia japonica*) がある。前者はイネに極めて近似しているが、表面先端部が丸みを帯びており溝状の凹みが見られないことや側面突起が不明瞭であることなどからイネと識別される。また後者は側面部や表面先端部に大きな突起があり裏面部の凹凸が荒いことなどからイネと識別される。

(2) イネの穀殻（穎の表皮細胞） (第58図 4)

イネの穀殻（穎）の表皮細胞には特徴的な乳様突起があり、その裏側（基部）は丸く凹んでいる。大きさは50 μm 前後。

(3) ヨシ属 *Phragmites* (第58図 5)

大きさ(縦長)は80 μm 前後と大型。裏面部の比率が非常に大きいことから、断面の形状は一部が欠けた小判のように見える。側長は30 μm 程度と比較的小さく、断面部が皿状に凹んでいるものが多い。ヨシ属に近似したものにダンチク属(*Arundo*)があるが、ヨシ属の裏面部が丸みを帯びた弧になっているのに対し、ダンチク属のそれは弧の中央部付近に1~2つの大きな凹みがあることで識別される。

(4) ウシクサ族 *Andropogoneae* (第58図 6)

断面の形状は、丸みを帯びた扁型およびその胸部の片方がくびれたものなど変異が大きい。裏面部に浅い凹みがあるものが多い。大きさは45 μm 前後。ウシクサ族にはススキ属やチガヤ属、サトウキビ属などが含まれるが、植物珪酸体の形状からここで検出されたものは、そのほとんどがススキ属(*Miscanthus*)に由来するものと考えられる。

(5) ジュズダマ属 *Coix*

表面が広く扁平な独特の断面形状で、側面突起が比較的明瞭である。裏面部に比較的大きな亀甲状の凹凸がある。

(6) タケ亞科 *Bambusoideae* (第59~60図 7~11)

タケ亞科の珪酸体は、その形態からAタイプとBタイプに大別される。前者は立体的であり比較的小型で裏面部に明瞭な稜線があるもの、後者は平面的であり比較的大型で裏面部の稜線が不明瞭なものである。

Aタイプは断面の形状などからさらにA 1、A 2、A 3の3つに細分できる。すなわち、A 1タイプは裏面部が丸みを帯びているもの、A 2タイプは裏面部が尖り気味のもの、A 3は裏面部に亀甲状の凹凸部があるものである。A 1タイプのうちA 1aタイプは側長が35 μm 前後と大きく裏面部の稜線が特に明瞭なことで他と区別される。Bタイプは断面の形状などからさらにB 1、B 2の2つに細分できる。すなわち、B 1タイプは断面の形状がヨシ属に類似したものと扇頂部が欠けた扇型様のものおよびその中間型、B 2タイプは断面の形状がやや細長い扁型のものである。

なお、A 1aタイプにはメダケ属のネザサ節とシホウチク属[†]、A 2タイプにはマダケ属とホウライチク属[†]、B 1タイプにはクマザサ属[†]、B 2タイプにはネザサ節以外のメダケ属とヤダケ属が含まれる。詳細については杉山論文〔杉山真二 1987〕を参照されたい。

(7) 不明Aタイプ (第60・61図 12、13)

基本的に丸みを帯びた直方体(食パン状)でキビ族に近似しているが、裏面の凹凸が不明瞭なもの。

(8) 不明Bタイプ

ウシクサ族に類似しているが、やや小型で表面部が広いものや横長が小さいものなど。スキ属などの機動細胞列の脇に形成される不完全な珪酸体（変形）もこれに含まれる。

(9) 不明Cタイプ

大きさ（縦長）が $80\mu\text{m}$ 前後と大型で、断面の形状がウシクサ族に近似しているもの。サトウキビ属にこれと類似したものが含まれている。

(10) 表皮毛起源（第61図 14）

刺状もしくはくちばし状の珪酸体。イネ科の葉縁などに多く見られる表皮毛に由来している。

(11) 茎部起源

扁平なかまぼこ状で、長軸方向に2～3本の棟をもつ珪酸体。長軸方向の長さはおおむね $80\mu\text{m}$ 前後である。これは赤山陣屋敷遺跡の草本質泥炭層などで見られた不明C（杉山・藤原1987）と同じ物であり、低湿地遺跡では普通に見られる。ヨシなどの葉鞘や茎に含まれる。

(12) 棒状珪酸体（第61・62図 15, 16）

長さが $100\mu\text{m}$ 前後もしくはそれ以上の棒状の珪酸体。径の太さや断面の形、側面突起の有無などからいくつかのタイプに分類できる。多くはイネ科の結合組織細胞や維管束細胞などに由来している。

(13) 不明（その他）

以上の分類群以外のもの。この中には、風化が激しく同定不能なものや珪酸体の破片なども含まれている。

(14) 樹木起源Aタイプ（ブナ科のシイノキ属 Casutanopsis）（第62図 17, 18）

塊状もしくは筋錘状で、全面にスプーンで欠いたような多数の凹みがある。大きさは $70\sim 80\mu\text{m}$ 前後と大型。シイノキ属の葉中に見られる。これと似たものにモクレン科があるが、全体の形が扁平なことや網目状の棟が細く鋭いことからシイノキ属と識別される。

(15) 樹木起源Bタイプ（ブナ科のコナラ属 Quercus）（第63図 19～21）

棒状もしくはブーメラン状で、片面にスプーンで欠いたような複数の凹みがある。一見鹿の角に似ているものがある。大きさは $100\mu\text{m}$ 前後と大型。ブナ科のコナラ属（おもにアカガ

シ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) の葉脈に見られる。

⑩ 樹木起源Cタイプ (ブナ科 Fagaceae など) (第64図 22)

枝分かれした棒状もしくはよじれかかった棒状 (ひも状) を呈する珪酸体。おもにブナ科の葉脈に見られる。

⑪ 樹木起源Dタイプ (広葉樹) (第64図 23)

はめ縫パズル状 (近藤・ピアスン 1981) の珪酸体。ブナ科やモクレン科などの広葉樹の表皮細胞に由来している。

5. 考 察

(1) 弥生時代後期前半の土器内部の土壤

遺構の底部付近から出土した弥生時代後期前半とされる土器 (No57、59、56、60、92、58、62、70) の内部土壤について分析を行った。これらの土器は完形に近いものであり、上部層から後代のものが混入した危険性は考えにくい。したがって、これらの土器内部の土壤は土器が廃棄された時期とほぼ同時期のものと考えられる。

分析の結果、すべての試料からイネおよびイネの穂殻 (穎の表皮細胞) に由来する植物珪酸体が検出された。イネの珪酸体密度は平均で3,800個/gであるが、No59では7,400個/gおよびNo58では5,100個/gと高い値の試料も見られた。水田跡 (稻作跡) の確認や探査を行う場合の判断基準は、一般に5,000個/g以上とされていることから、これらの土壤は水田もしくはその周辺の土壤である可能性が高いと考えられる。

イネ以外の分類群では、ウシクサ族やタケ亜科 A 1 a タイプ (ネザサ節など)、不明 B タイプ (ウシクサ族類似)、棒状珪酸体、樹木起源の A タイプ (ブナ科のシイノキ属) および B タイプ (ブナ科のコナラ属) が多く見られ、ヨシ属なども少量見られた。植物珪酸体の組成は試料間で大きな差異は見られず、比較試料 (土器周辺の土壤) を含めていずれもほぼ同様であった。

ウシクサ族については、上述のようにそのほとんどがススキ属に由来するものと考えられる。また、不明 B タイプとしたものの中にもススキ属が含まれている可能性があり、棒状珪酸体もその多くがススキ属の結合組織細胞に由来するものと考えられる。

一般にススキ属やヨシ属などは森林の林床では生育しにくいことから、上記の植物群がすべて同一場所に生育していたとは考えにくい。おそらく当時は、遺跡周辺にシイノキ属やコナラ属 (おもにアカガシ亜属?) などの照葉樹を主体とした森林植生があり、その縁辺部などでススキ属やネザサ節が生育していたものと推定される。また、調査地点の近辺では稻作が行われており、低地部などではヨシ属が生育していたものと考えられる。

(2) 弥生時代後期前半の土器胎土

弥生時代後期前半の土器（No57、92、58、62、70）の胎土について分析を行った。その結果、植物珪酸体組成は土器によって大きく異なっており、No57ではヨシ属や棒状珪酸体、No62では樹木起源のAタイプ（ブナ科のシイノキ属）、No70では樹木起源のAタイプおよびタケアキ科B1タイプ（クマザサ属など）が卓越して検出された。なお、土壤試料で比較的多く検出されたウシクサ族やタケアキ科はほとんど見られず、イネはいずれの試料からもまったく検出されなかった。

以上のことから、これらの土器は同一の素材（粘土）をもとに製作されたものではなく、No57ではヨシ属の生育するような湿地の土壤、No62とNo70ではシイノキ属の森林もしくはその近辺の土壤が使われていたものと考えられる。また、No92とNo58についても他の土器とは異なる素材が用いられていたものと考えられる。なお、イネの植物珪酸体がまったく検出されないことから、土器の素材として水田土壤が使われていた可能性は考えられない。

(3) 炉跡内の焼土

釜ノ口遺跡から出土したが跡内の焼土について分析を行った。その結果、ネザサ節やウシクサ族、不明Bタイプ、棒状珪酸体などが極めて多量に検出された。このうち、後者の3つの分類群については、上述と同様にその大半がスキ属に由来するものと考えられる。また、イネやヨシ属も比較的多く見られたが、樹木起源の珪酸体はまったく検出されなかった。

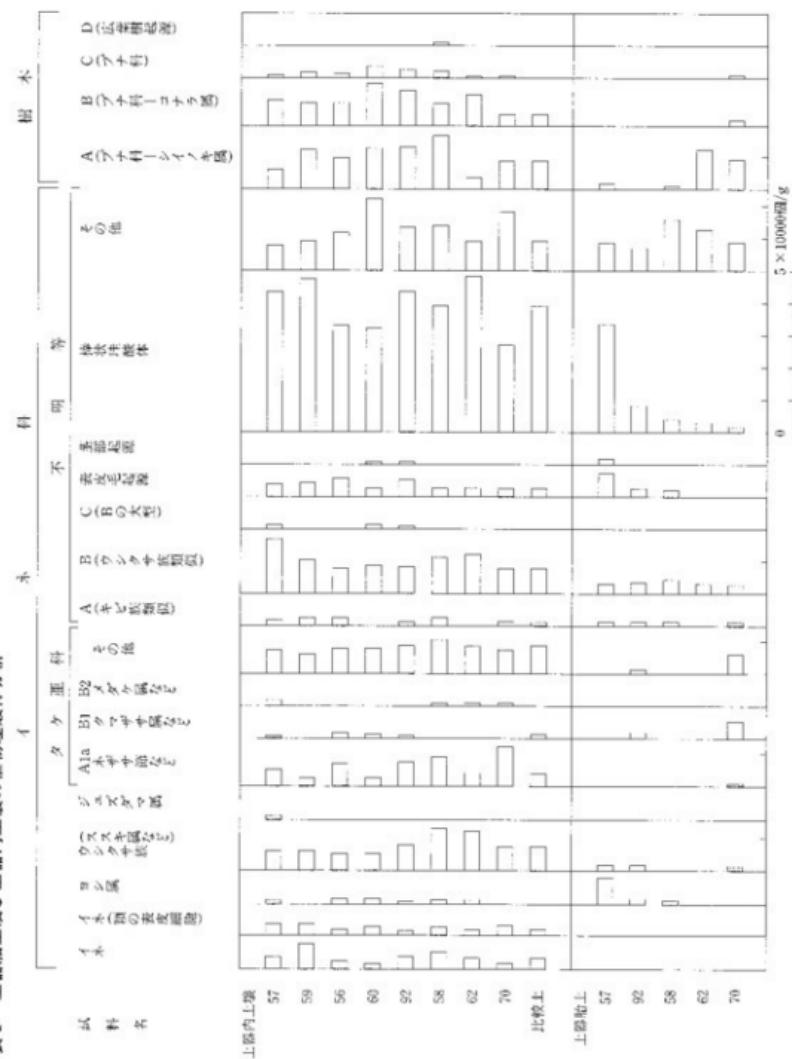
これらのことから、この炉跡では燃料としてネザサ節やスキ属、および稻藁などが利用されていたものと推定される。なお、この焼土は住居跡の屋根が焼け落ちたものとも見られていることから、住居の屋根材としてこれらの植物が使われていたことも考えられる。

【参考文献】

- 近藤鉢三・ビアスン友子 1981「樹木葉のケイ酸体に関する研究（第2報）—双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について—」『帯広畜産大学研究報』12:217-229
 杉山真二 1987 「タケアキ科植物の機動細胞壁珪酸体」『富士竹類植物園報告』第31号:70-83
 杉山真二・藤原宏志 1987 「川口市赤山陣跡遺跡におけるプラント・オバール分析」
 　　「赤山一古環境縦一」川口市遺跡調査会報告 第10集 281-298
 杉山真二・松田隆二・藤原宏志 1988「機動細胞壁珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追跡のための基礎資料として—」『考古学と自然科学』20:81-92
 杉山真二・石井克己 1989 「群馬県子持村、FP直下から検出された灰化物の植物珪酸体
 　　(プラント・オバール) 分析」『日本第四紀学会要旨集』19:94-95
 藤原宏志 1976 「プラント・オバール分析法の基礎的研究(1) 一数種イネ科栽培植物の
 　　珪酸体標本と定量分析法一」『考古学と自然科学』9:15-29
 藤原宏志 1982 「プラント・オバール分析法の基礎的研究(4) 一熊本地方における縄文
 　　土器胎土に含まれるプラント・オバールの検出一」
 　　『考古学と自然科学』第14号:55-65
 高尾和長・真木潔 1991 「釜ノ口遺跡7次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報III』
 　　松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

植物珪酸体分析

表2 土器胎土及び土器内土壤の植物珪酸体分析



注: 上段及び始上番号は神奈川の土器実測番号に対するもの。

表3 祝谷アイリ遺跡における植物珪酸体(プラント・オバール)分析結果 (単位: ×100個/g)

分類群	土器内土壤								
	57	59	56	60	92	58	62	70	比較土
イネ科									
イネ	42	74	27	14	42	51	37	15	37
イネ(穂の表皮細胞)	35	34	13	28	13	26	12	29	12
ヨシ属	7		13	14	3	6	6		
ウシクサ族(ススキ属など)	56	54	47	50	68	122	118	73	68
ジユズダマ属	7								
タケ亜科									
A 1a タイプ(ネザサ節など)	49	20	60	21	68	90	37	117	43
B 1 タイプ(クマザサ属など)	7		13	7	3				6
B 2 タイプ(メダケ属など)	14					6	6	7	
その他	70	60	80	78	91	103	87	66	81
不明等									
A タイプ(キビ族類似)	14	27	27		7	26		7	6
B タイプ(ウシクサ族類似)	154	101	73	92	88	109	124	88	75
C タイプ(B タイプの大型)	7				7	3			
表皮毛起源	42	47	53	28	52	26	25	22	19
茎部起源					7	3			
棒状珪酸体	433	463	333	313	427	385	478	264	391
その他	84	94	113	213	127	135	93	176	93
樹木起源									
A タイプ(ブナ科ーシイノキ属)	56	121	100	128	137	161	43	88	93
B タイプ(ブナ科—コナラ属)	77	67	67	135	104	71	99	29	31
C タイプ(ブナ科)	7	13	13	43	33	26	6	7	
D タイプ(広葉樹)					3	6			
(海綿骨針)								15	
植物珪酸体総数	1159	1174	1032	1181	1273	1349	1173	988	956

※上器はすべて弥生時代後期前半のもの。

※土壤及び胎土番号は神岡の上器尖端図番号に対応する。

植物珪酸体分析

土 器 胎 土					釜ノロ	分 類 群
57	92	58	62	70	焼土	
					62	イネ科
					62	イネ
						イネ (穂の表皮細胞)
75	14	7			62	ヨシ属
12	14			6	394	ウシクサ族 (ススキ属など)
						ジユズダマ属
						タケモ科
				6	1888	A 1 a タイプ (ネザサ節など)
	14				187	B 1 タイプ (クマザサ属など)
					124	B 2 タイプ (メダケ属など)
		7		55	2821	その他
						不明等
6	7	7		6	62	A タイプ (キビ族類以)
35	34	46	31	24	436	B タイプ (ウシクサ族類以)
					41	C タイプ (B タイプの大型)
75	21	20			83	表皮毛起源
12					21	茎部起源
330	82	40	31	18	2406	棒状珪酸体
87	69	152	118	85	311	その他
						樹木起源
17		7	118	96		A タイプ (ブナ科—シノキ属)
				12		B タイプ (ブナ科—コナラ属)
				6		C タイプ (ブナ科)
						D タイプ (広葉樹)
	7					(海綿骨針)
648	261	278	297	315	8900	植物珪酸体総数

表4 祝谷アイリ遺跡他から検出されたプラント・オバールの顕微鏡写真

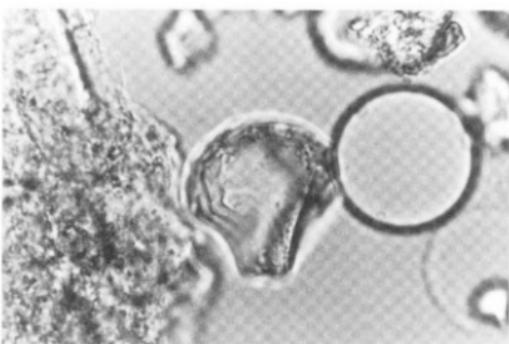
No.	分類群	試料名	倍率
1	イネ	釜ノ口遺跡、焼土	400
2	イネ	土器内土壤、No.57	400
3	イネ	比較土壤	400
4	イネの粋穀(穎の表皮細胞)	土器内土壤、No.57	400
5	ヨシ属	土器胎土、No.57	400
6	ウンクサ族(スキ属など)	釜ノ口遺跡、焼土	400
7	タケ亜科A 1 aタイプ(ネザサ節など)	釜ノ口遺跡、焼土	400
8	タケ亜科B 1タイプ(クマザサ属)	釜ノ口遺跡、焼土	400
9	タケ亜科B 1タイプ(クマザサ属)	釜ノ口遺跡、焼土	400
10	タケ亜科B 2タイプ(メダケ属など)	釜ノ口遺跡、焼土	400
11	タケ亜科B 2タイプ(メダケ属など)	土器内土壤、No.70	400
12	不明Aタイプ(キビ族類似)	釜ノ口遺跡、焼土	400
13	不明Aタイプ(キビ族類似)	比較土壤	400
14	表皮毛起源	釜ノ口遺跡、焼土	400
15	棒状珪酸体	釜ノ口遺跡、焼土	400
16	棒状珪酸体	釜ノ口遺跡、焼土	400
17	樹木Aタイプ(ブナ科—シイノキ属)	土器胎土、No.62	400
18	樹木Aタイプ(ブナ科—シイノキ属)	土器胎土、No.62	400
19	樹木Bタイプ(ブナ科—コナラ属)	土器内土壤、No.57	400
20	樹木Bタイプ(ブナ科—コナラ属)	土器内土壤、No.62	400
21	樹木Bタイプ(ブナ科—コナラ属)	比較土壤	400
22	樹木Cタイプ(ブナ科)	土器胎土、No.70	400
23	樹木Dタイプ(広葉樹)	土器内土壤、No.62	400
24	樹木	土器胎土、No.62	400

卓上器胎土上の土器番号は挿図の土器実測図番号に対応する。



1 イネ

釜ノ口遺跡（7次）、焼土



2 イネ

祝谷アイリ遺跡、57内土壤



3 イネ

祝谷アイリ遺跡、SK15III層土壤

第57図 プラント・オバールの顕微鏡写真 (1) (400倍)



4 イネの穀粒

祝谷アイリ遺跡、57内土壤



5 ヨシ属

祝谷アイリ遺跡、57土器胎上



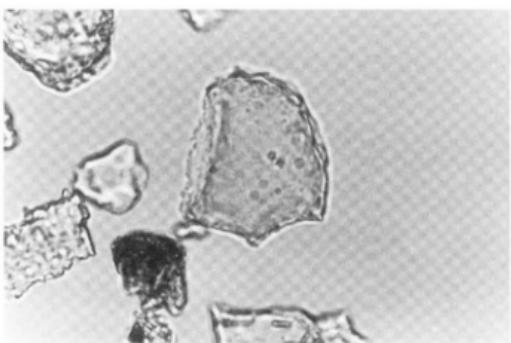
6 ウシクサ族

釜ノ口道路（7次）、焼土

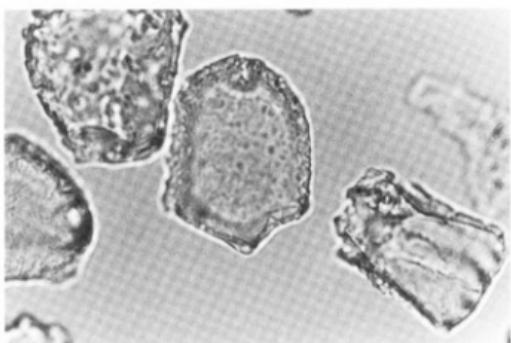
第58図 プラント・オバールの顕微鏡写真 (2) (400倍)



7 タケ亜科A 1aタイプ
釜ノ口遺跡（7次）、焼土



8 タケ亜科B 1タイプ
釜ノ口遺跡（7次）、焼土



9 タケ亜科B 1タイプ
釜ノ口遺跡（7次）、焼土

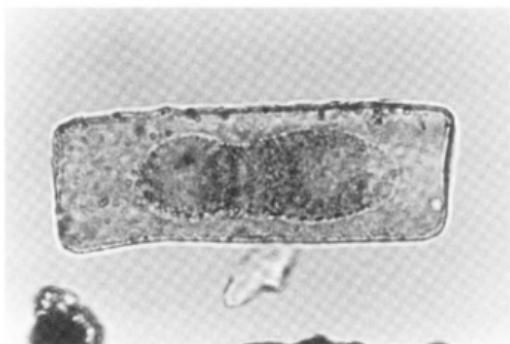
第59図 プラント・オバールの顕微鏡写真 (3) (400倍)



10 タケ亜科B 2 タイプ
釜ノ口遺跡（7次）、焼土



11 タケ亜科B 2 タイプ
祝谷アイリ遺跡、70内土壤



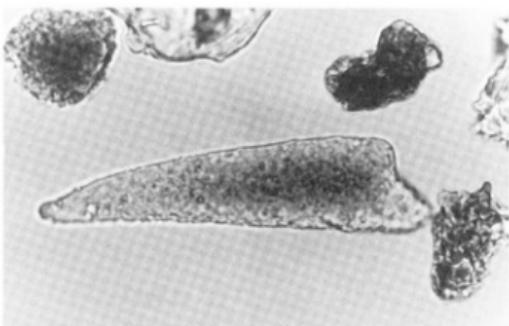
12 不明A タイプ
釜ノ口遺跡（7次）、焼土

第60図 プラント・オバールの顕微鏡写真(4) (400倍)



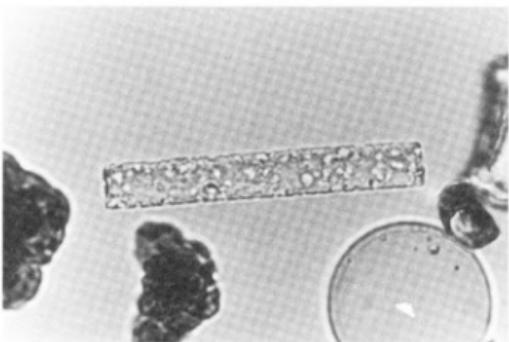
13 不明 A タイプ

祝谷アイリ遺跡、SK15III層土壤



14 裸皮毛起源

釜ノ口遺跡(7次)、焼土



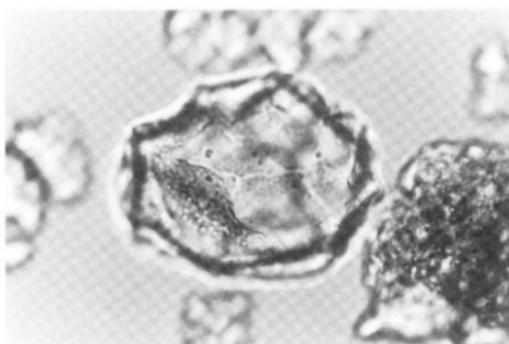
15 棒状珪酸体

釜ノ口遺跡(7次)、焼土

第61図 プラント・オバールの顕微鏡写真(5) (400倍)



16 棒状硅酸体
釜ノ口遺跡（7次）、焼土

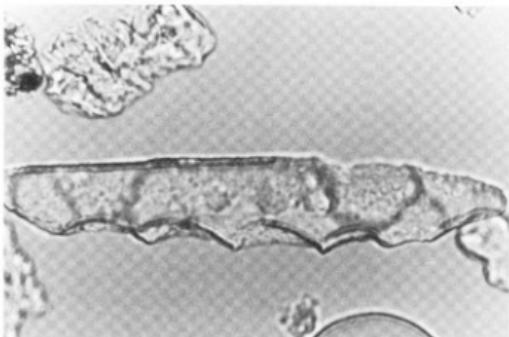


17 樹木Aタイプ
祝谷アイリ遺跡、62土器胎土



18 樹木Aタイプ
祝谷アイリ遺跡、62土器胎土

第62図 プラント・オバールの顕微鏡写真 (6) (400倍)



19 樹木Bタイプ

祝谷アイリ遺跡、57内土壤



20 樹木Bタイプ

祝谷アイリ遺跡、62内土壤



21 樹木Bタイプ

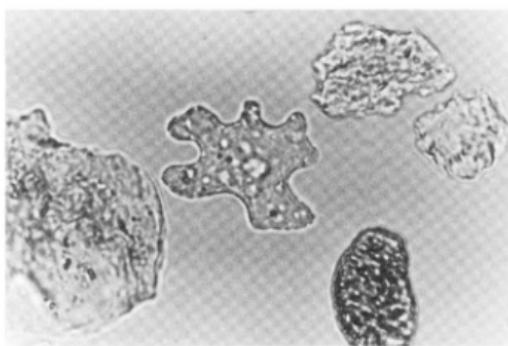
祝谷アイリ遺跡、SK15III層土壤

第63図 プラント・オパールの顕微鏡写真(7) (400倍)



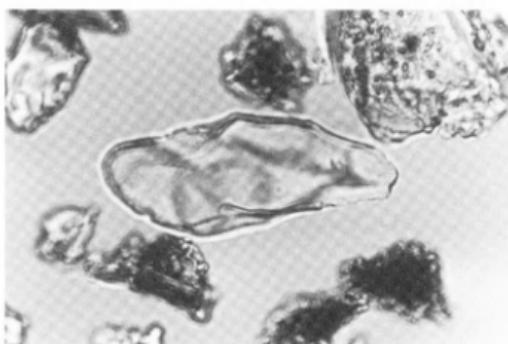
22 樹木Cタイプ

祝谷アイリ遺跡、70土器胎土



23 樹木Dタイプ

祝谷アイリ遺跡、62内土壤



24 樹木

祝谷アイリ遺跡、62上器胎土

第64図 プラント・オバールの顕微鏡写真 (8) (400倍)

IV-2 樹種同定

古環境研究所 杉山 真二

1. はじめに

方法と記載

同定を行うに当たって、生材試料は、片刃カミソリをもちいて試料の横断面(木口と同義)、接線断面(板口と同義)、放射断面(柾目と同義)の3断面についてつくり、ガムクロラール(Gum Chloral)で封入し、永久標本を作成し、光学顕微鏡下で40~400倍率で観察した。炭化材試料は、片刃カミソリをもちいて試料の横断面(木口と同義)、接線断面(板口と同義)、放射断面(柾目と同義)の3断面についてつくり、直径1cmの真鍮製の台に同定し、金蒸着を施した後、電子顕微鏡(日本電子製、JSM T-20型)で観察した。樹種の同定は、現生標本との比較により行う。表1にその結果を示す。

以下に、観察による特徴記載および樹種同定の根拠を示し、電子顕微鏡写真を示す。

表5 祝谷アイリ遺跡・釜ノ口遺跡(7次)出土材とその樹種

遺 跡	試 料	樹 種
祝谷アイリ	S B-2 West	コナラ属クスギ節(ブナ科)
	S B-2 East	アカガシ亜属(ブナ科)
	S B-2 West 縦	コナラ属クスギ節(ブナ科)
釜ノ口7次	S B-1 (No.1) -炭化材	アカガシ亜属(ブナ科)
	S B-1 (No.2) -炭化材	サカキ(ツバキ科)
	S B-1 (No.3) -炭化材	アカガシ亜属(ブナ科)
	S B-1 (No.4) -炭化材	アカガシ亜属(ブナ科)
	S B-1 か内 (No.1) 一生材	マツ属(マツ科)
	S B-4 (No.1) -炭化材	マツ属(マツ科)

(1) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

第65図1a~1c(祝谷アイリ遺跡)、第66図2a~2c(釜ノ口遺跡)

大型の管孔が放射方向に配列する放射孔材である(横断面)。道管のせん孔は單一で、チロ

ースが見られる。(放射断面または接線断面)。放射組織は、柔細胞で単列同性のものと広放射組織とがある(接線断面)。

以上の形質から、ブナ科コナラ属のアカガシ亜属の材と同定される。アカガシ亜属の樹木には関東に分布するアカガシ(*Q. acuta*)やアラカシ(*Q. glauca*)やシラカシ(*Q. myrsinaefolia*)をはじめ8種類ほどある。アカガシ亜属の樹木は、樹高20m、幹径1mに達する常緑広葉樹で、日本の暖帯の照葉樹林の主要な構成要素であり、木材は重硬、強靭であり、船舶材、車両材、農具などに用いられる。

(2) コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科

第65図2 a ~ 2 c (祝谷アイリ遺跡)

年輪のはじめに大管孔が1~2列並び、そこからやや急に径を減じたやや厚壁の丸い小管孔が放射方向に配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は單一で、時としてチロースが見られる(放射断面)。放射組織は単列同性のものと広放射組織とがあり、複合放射組織の分布型を示す(接線断面)。

以上の形質から、いずれの試料もブナ科のコナラ属クヌギ節の材と同定される(表1)。クヌギ節の樹木には関東地方に普通に見られるクヌギ(*Quercus acutissima*)と、東海・北陸以西に主として分布するアベマキ(*Q. variabilis*)があるが、識別するには至っていない。いずれの樹木も樹高15m、幹径60cmに達する落葉広葉樹で、木材は堅硬で割裂容易、耐朽性があり、器具材や車両材、下駄材、薪炭材、椎茸原本などに用いられる。

(3) マツ属 *Pinus* マツ科

第66図1 a ~ 1 c (笠ノ口遺跡)

仮道管、放射柔細胞放射仮道管、垂直および水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞からなる針葉樹で、早材から晩材への移行は緩やかである(横断面)。分野壁孔は窓状である(放射断面)。エピセリウム細胞以外は、放射仮道管を含め単列で2~12細胞高である(接線断面)。材の色調は、淡褐色を呈する。

以上の形質から、マツ科マツ属の材と同定される。マツ属は、二葉松類に区別することができるが、本試料は、保存が良くないため区別できない。マツ属の樹木には、暖帯の沿岸沿いに見られる二葉松のクロマツ(*Pinus thunbergii*)、本州の暖帯から温帯にかけて見られる二葉松のアカマツ(*P. densiflora*)、あるいは北海道から九州にかけて広く見られる五葉松のヒメコマツ(*P. parviflora*)などがある。樹高は約30m、幹径1m前後の針葉樹である。木材は、建築材や器具材などに用いられる。

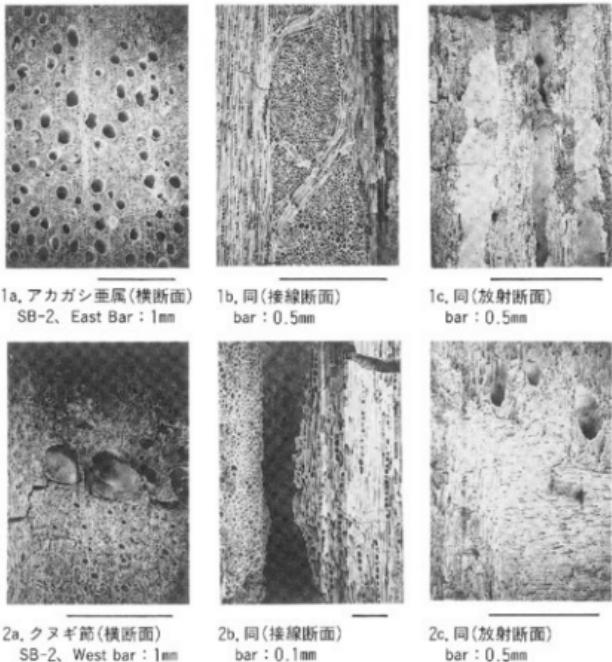
樹種同定

(4) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科

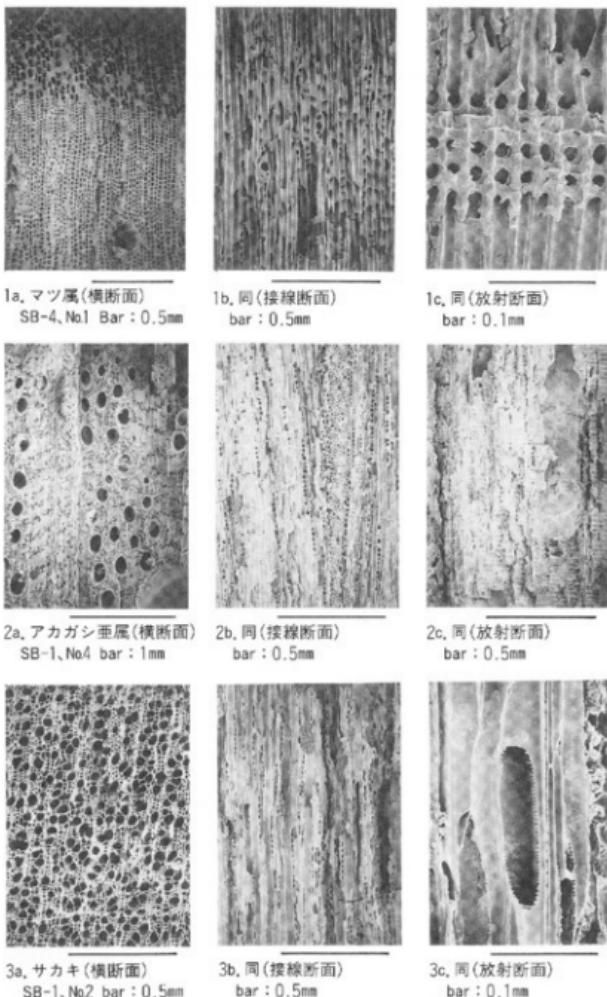
第66図 3 a ~ 3 c (釜ノ口遺跡)

薄壁で小型の管孔が放射方向またはやや斜めに2個程度複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は、40本程度以上の横棒からなる階段状セン孔である(放射断面)。放射組織は、單列異性で、2~32細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ツバキ科のサカキの材と同定される。サカキは、樹高8~10m、幹径20~30cmの常緑広葉樹で、本州(関東以西)・伊豆七島・四国・九州など暖帯や亜熱帯に広く分布する。材は、建築、器具、船材などに用いられる。



第65図 祝谷アイリ遺跡出土材の電子顕微鏡写真



第66図 釜ノロ遺跡（7次）出土材の電子顕微鏡写真

IV-3 種子分析

古環境研究所 杉山 真二

1. 祝谷アイリ遺跡出土種子

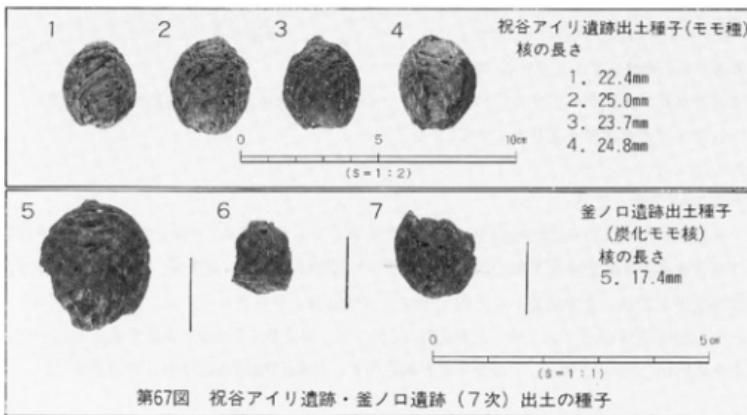
試料は全部で4点で、すべて炭化していないモモ核であった。それぞれの計測値(長さ、幅、厚さ)は、

- ① $22.4 \times 18.3 \times 14.7$
- ② $25.0 \times 20.3 \times 15.1$
- ③ $23.7 \times 19.2 \times 14.5$
- ④ $24.8 \times 21.0 \times 14.7$ (mm)

であった。1はやや小さいが、すべてほぼ普通のモモ核のサイズである。破損もほとんどなく、縦方向に流れるモモに特徴的な彫紋もきれいに残っている。時代が不明なためこれ以上の言及は出来ないが、少なくとも現在の栽培モモはこれらよりやや大きい。

2. 釜ノ口遺跡7次調査出土種子

試料は全部で3点で、すべて炭化したモモ核であった。うち2点は破片である。1点の計測値は、長さ、幅、厚さが $17.4 \times 14.7 \times 11.6$ (mm) であった。これは、モモとしてはかなり小さく、長さと幅の比は1.18と円形に近い。古代には、形態からみた2種類のモモが出土しているが、形状としては古代モモに類似している。古代モモは、小型で丸みの強い円形とされているが、中間型など変異幅があることからある程度の個体数がないと確実なことは言えない。



第67図 祝谷アイリ遺跡・釜ノ口遺跡(7次)出土の種子

IV-4 分銅形土製品付着の赤色顔料分析

福岡市埋蔵文化財センター 本田 光子
宮内庁正倉院事務所 成瀬 正和

祝谷アイリ遺跡出土分銅形土製品に認められる赤色が何によるものかを、顕微鏡観察及び蛍光X線分析を行い調査した。

試料（第55図一下、図版33）

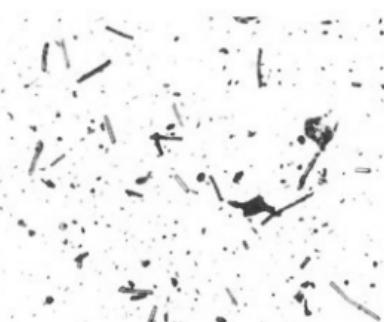
分銅形土製品の赤色部分の色調や付着の状態を肉眼で観察すると、土製品の焼成後にベンガラと思われる赤色顔料が塗布されたように判断できる。上端部刺突文中に付着している赤色物から微量をステンレス製のメスで採取した。針先に付く程度の量を探りプレパラートを作成し、検鏡用試料とした。残りはメノウの乳鉢で研和し蛍光X線分析の試料とした。

顕微鏡観察

光学顕微鏡により透過光・反射光で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類を判断するものである。一般に土器や土製品の赤彩に用いられる顔料はベンガラ（酸化第二鉄）と朱（硫化水銀）であるが、両者は特に微量のものが混在していないければ検鏡により見極めがつく。本試料には、赤色顔料としてはベンガラの粒子が認められ、朱粒子は認められなかった。このベンガラは透過写真（第68図）に示すように、いわゆるパイプ状粒子を含むものであった。

蛍光X線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したものである。宮内庁正倉院事務所設置の理学電機工業製蛍光X線分析装置を用い、X線管球：クロム対陰極、印加電圧：40KV、印加電圧：20mA、分光結晶：フッ化リチウム、検出器：シンチレーション計数管、ゴニオメーター操作範囲(2θ)：10~60°、走査速度： $2\theta 8^{\circ}/\text{分}$ 、時定数：2.5秒の条件で測定を行った。赤色顔料の主成分元素としては鉄のみが検出され、水銀は検出されなかった（表6）。



第68図 赤色顔料の透過影像（約500倍）

分銅形土製品付着の赤色顔料

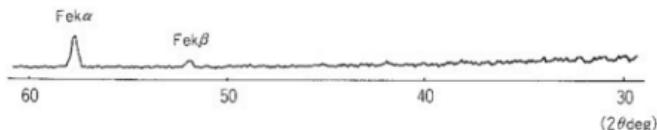


表6 蛍光X線スペクトル図

まとめ

以上の結果から推定される赤色顔料はベンガラ（パイプ状粒子含む）であり、土製品の焼成後に塗布したものである。

一般にベンガラというのは主成分元素が鉄であり、主成分鉱物は赤鉄鉱である赤色顔料を指す。出土赤色顔料の「ベンガラ」の場合は主成分鉱物として赤鉄鉱の他褐鉄鉱（針鉄鉱、鱗鉄鉱等）、非晶質の褐鉄鉱があり、これらの混合物であることも多い。そのためX線回析により赤鉄鉱が同定されない場合も少なくない。これは試料の量が主な原因であるが、赤鉄鉱と非晶質の褐鉄鉱が混合している場合、後者の量が多いと赤色が強くなるのではないかともいわれている。一方、主成分の定性分析で鉄が確認され、他に水銀、鉛が検出されなければ、主成分鉱物として赤鉄鉱（Hematite）が同定されなくともベンガラであるという判断もごく一般的になされている。さらに主成分の定量分析を行い、鉄の含有量の多少からベンガラの種類（品位・生産地）を分けることもある。また、出土ベンガラの粒子に種々の形状があることもわかってきており、本例のようにパイプ状を呈する特異な粒子は産地を示す指標ではないかという指摘もある。なお、パイプ状粒子を含むベンガラは、X線回析により赤鉄鉱の顕著なピークが認められるのだが、今回の試料はX線回析に供するには少なすぎたため、測定を行っていない。

祝谷アイリ遺跡出土の分銅形土製品に認められる赤色は、焼けによる発色あるいは鉄分の多い赤土ではなく赤色顔料「ベンガラ（含パイプ）」の塗彩によるものである。今後、分銅形土製品については赤色塗彩有無の観察が期待される。

【文献】

- | | | |
|---------|------|---|
| 中 村 忠 哲 | 1981 | 「群馬県東下および清里庚申塚遺跡出土の赤色顔料について」
『清里・庚申塚遺跡』、財群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 安 田 博 幸 | 1983 | 『古代日本の知恵と技術』、朝日カルチャーブックス28 |
| 永 鳴 正 春 | 1985 | 『繩文時代の漆工技術』、国立歴史民俗博物館研究報告6 |

V-1 松山平野の石器文化

多田 仁

1. 祝谷丸山遺跡採集の石器について

(1) 「祝谷丸山以後」の細石刃文化研究

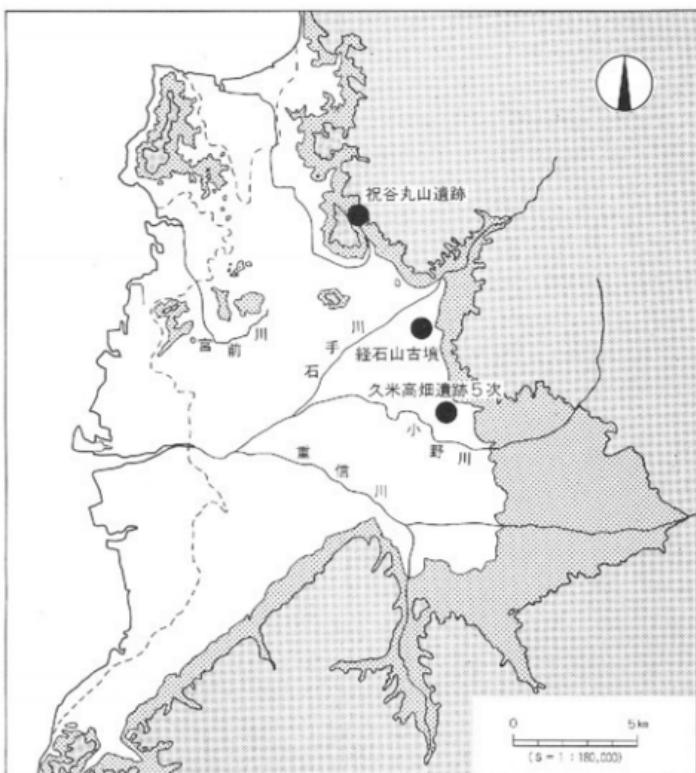
祝谷丸山遺跡の細石刃文化資料は、1978年の十亀幸雄氏による資料紹介と細石刃剥離技術の検討によって〔十亀1978〕、愛媛県内の細石刃文化を代表する資料の一つとなっている。1985年刊行の『愛媛県史』〔長井1985〕や翌年刊行の『日本の古代遺跡22 愛媛』〔正岡・十亀1986〕にも祝谷丸山遺跡の資料は取り上げられ、十亀氏の当遺跡に対する資料評価は不動のまま現在に至るまで受け継がれてきている(註1)。こうして祝谷丸山遺跡の資料が紹介されて以来、瀬戸内海沿岸地域ではどのような細石刃文化研究がなされ、その研究にどう影響したであろうか。ここでは「祝谷丸山以後」を振り返り、祝谷丸山遺跡の研究的位置づけを考えてみる。

1979年、十亀氏の論考が提示された翌年には、日本の細石刃文化研究に大きな影響を与えた『駿台史学47号』〔駿台史学会1979〕の刊行があった。ここでは10名の旧石器時代研究者が当時までの細石刃文化研究史を盛り込みながら、今後の研究課題の提示や新しい視点から細石核分類や地域単位での細石刃文化研究を行っている。さらに、「瀬戸内沿岸地方の細石器文化」〔小野1979〕と題した論考が小野昭氏によって述べられており、過去の研究を振り返りながら数々の問題点を指摘している。この中で小野氏は細石核をⅠ類とⅡ類に分け、Ⅰ類は「瀬戸内的な特徴」があるとし、Ⅱ類には福井第3層との関連を示唆した。

1980年頃には、瀬戸大橋関連の概報・本報告が相次いで発刊された。その一例を挙げると、花見山遺跡の概報〔香川県教育委員会1981〕では3分類5細分の細石核の分類が行われ、その中には福井洞穴2、3層と共に通するものや、在地性を見いだすことができるものの存在などを示唆している。この瀬戸大橋関連の報告は現在も継続中であり、その度に細石刃文化資料は増加し続けている。

この頃、九州地方では、細石刃文化資料の増加は勿論のこと様々な論考が展開され、特に木崎康弘氏は祝谷丸山遺跡の資料を「船野形細石核」の範疇としている〔木崎1981〕。また1983年にも同氏は瀬戸内海沿岸地域に「非調整打面系細石核」〔木崎1983〕が分布していることを述べている。同年、西村尋文氏が中部瀬戸内地域の細石核を取り上げ、詳細な分析と検討を行っている〔西村1983〕。ここで氏は細石核を4分類8細分し、この中に野岳・休場形細石核と福井2、3層の細石核に共通する資料があることを示した。また東九州地方に存在する船野型細石核が東海地方に分布を拡げる上で、中部瀬戸内地域がその通り道的位置づけにあることを述べ、瀬戸内海沿岸地域における細石刃文化をさらに興味深いものとしている。

松山平野の石器文化



第69図 松山平野における主要石器出土分布図

1984年には『駿台史学60号』〔駿台史学会1984〕が発刊され、副題に『特集日本細石器文化の研究II』と題し、1979年に統いてその続編が展開された。この中では全国規模での細石刃文化研究が行われており、特に注意される事は系統論的研究や起源論的研究が精力的に行われていることであろう。

この時期、愛媛県周辺では山口県旧石器文化研究会による調査・報告〔山口県旧石器文化研究会1985・1988〕や先に述べた瀬戸大橋関係の報告などによって細石刃文化資料が急増している。そして1988年には十亀氏が金ヶ崎遺跡採集の細石核を検討している〔十亀1988〕。この中で氏は細石核を第1類と第2類に分類し、前者を船野型細石核、後者を加栗山型細石核

の範疇に含めている。これは「祝谷丸山以後」に瀬戸内海沿岸地域で行われてきた他地域との細石刃文化の比較研究が、愛媛県内でも実践的なものになっていることを示唆するかのようである。

以上で瀬戸内海沿岸地域における細石刃文化の研究を簡単に述べたが、総じて「祝谷丸山以後」における本地域の細石刃文化研究は、周辺地域との関連を論究するといった系統論的研究の中で展開していったと考えられる。これらのことから愛媛県内の細石刃文化資料の増加が期待されるのは勿論のこと、これまでの資料を検討することが必要となっている。今回はその第一歩として改めて祝谷丸山遺跡の資料を検討してみる。これによって祝谷丸山遺跡に対するより正当な評価と研究の活性化を促すことを試みたい。

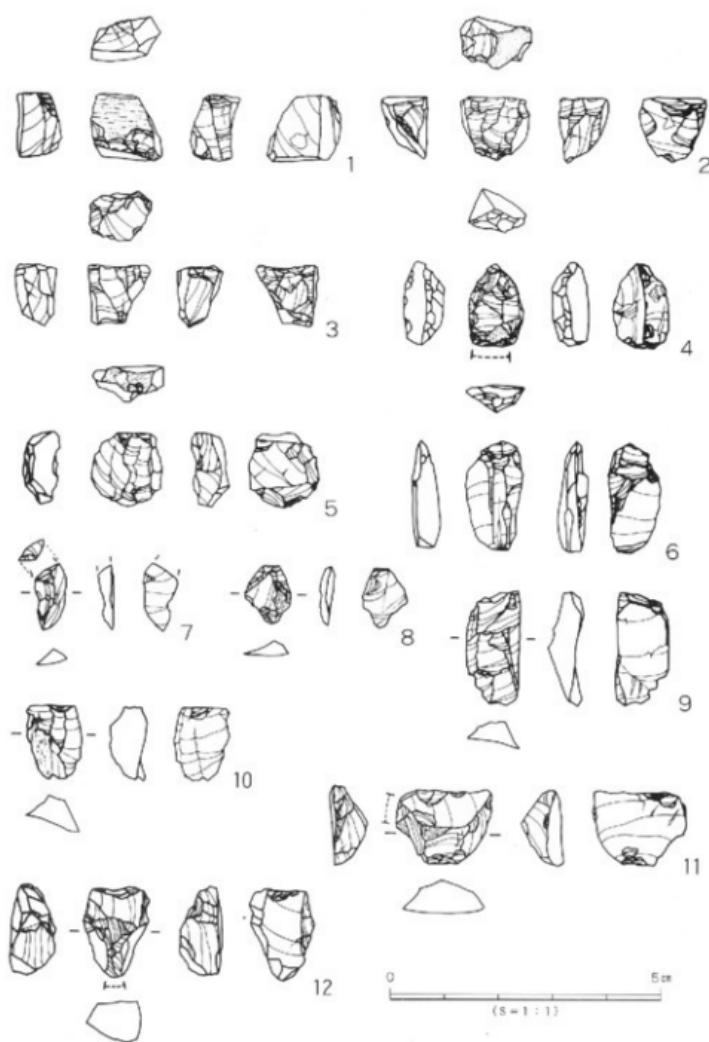
(2) 石器の観察（第70図）

ここでは十亀氏によって紹介された石器群のうちの12点について個別記載を行っていく。尚、これらの石器は再実測を行っているが、その展開方法については十亀氏の提示された方法に基づいたものである。

1はa面に縦面または節理面を残し、下半部は下方からの加撃による細かな剥離痕が残されている。b面には二条の樋状剥離が残り共に上方からの加撃によって形成されているが、右側の剥離痕は下方からの加撃による剥離痕と切り合っている。c面も上方からの加撃による2～4条の樋状剥離がみられる。b・c面の剥離痕は切り合い関係が不明瞭で一回の加撃で残された可能性が強い。d面は1枚のネガティブな剥離痕が大部分を占めており、実測図には明確に示していないがこの剥離痕は上方右隅に打点を残している。e面は大小2枚の剥離痕を残しており共にd面側からの加撃によるものである。左側の大きな剥離痕は打点部分が切られており、このことからe面の剥離からd面の剥離への新旧関係を想起できる。

2はa面に上方からの加撃によるやや横長といえる剥離痕を複数残している。また下部には下方からの加撃による小剥離痕を残している。特に左側の上下の剥離痕は切り合い関係が不明瞭である。b面は上方からの加撃による小剥離痕を残しており、これらは階段状剥離を呈している。さらには横位方向（a面より）からの加撃による剥離痕を残している。この剥離痕は上部にある小剥離痕よりも古い段階のものである。c面にも上方からの加撃による小剥離痕とそれより古い段階の横位方向（d面より）からの加撃による剥離痕が残され、さらに微細な連続する剥離痕を残している。d面には上方からの加撃によるやや横長な剥離痕がみられるが、この面の大部分を占めるポジティブな面を呈する剥離痕がその形状を崩すことなく残されている。それはb・c面観をみれば明確であろう。e面は左側にc面側からの加撃による剥離痕と右側には縦面を残している。

3はa面に上方からの加撃によるやや縦長な剥離痕が複数と、下方からの加撃による剥離痕と打点だけがみられる。上下方向からの加撃による剥離痕のうちで切り合い関係をもつ左側のものは、上下からのものが階段状剥離を呈している。尚、上下からの加撃による剥離痕



第70図 祝谷丸山遺跡出土石器実測図

の中で、右側の2枚は1回の加撃によって剥離した可能性が考えられる。b面には上方からの加撃による小剥離痕を残し、さらに横位方向(a面より)の大きな剥離痕を残している。この剥離は二次剥離(二次加工)以前の段階での切断(分割)面とも考えられる。これと類似するものがc面の横位方向(d面より)の剥離痕であろう。d面は上方と両方の横位方向からの加撃による複雑な剥離痕を残している。これらの剥離痕はその殆どが面的に行われている。e面は平坦な剥離痕が大部分を占める他、主にd面側からの加撃による小剥離痕を残している。

4はa面がほぼ周囲からの加撃による連続する小剥離痕を残している。また下部は敲打による痕跡をみせ(破線)、やや平坦な面を形成している。そして周囲の小剥離痕の中でも左側下部のものは階段状剥離を呈している。中央部は一部に節理面を残し、そのすぐ近くの小さな空白部分は敲打による痕跡である。b・c面はそれぞれa・d面によって形成される稜線をみせており、b面の中央の小剥離痕の一つはd面左部分の剥離痕の打面である。d面の左部分は先に述べた様に打面を残すポジティブな剥離面で、さらにパルバスターもみられる。右部分の剥離は平坦な下方からの加撃によるもので、打点を残していることがわかる。この加撃は先に述べたa面下部の敲打に伴うものと考えられる。e面はa・d面によって形成される先鋭性のある稜線をつくる。

5はa面に下方からの加撃による剥離痕を大きく残し、上下部に小剥離痕を残している。下部の剥離痕はあたかも打点の様なもので階段状剥離を呈している。b面は横位方向(a面より)と下方からの加撃による剥離痕がある。下方のものは、a面で述べた下部の小剥離痕と切り合い関係が不明瞭なことや打点を共有すると考えられることから同時の加撃によるものと考えられる。c面はa・d面に形成される稜線をみせている。d面はポジティブな1枚の剥離痕が大部分を占め、下半部は階段状剥離による痕跡と思われる。右側部は小剥離痕が複数残されている。またこの面の大部分を占めるポジティブな面は、右側部に打点を残していたと考えられるが小剥離痕によって失ったものと思われる。e面は疊面もしくは節理面を残しており、a面に接する部分に小剥離痕を残している。この小剥離痕はa面右部分の剥離を行った際に残されたものであろうと思われる。

6はa面に複数の槽状剥離をみせ、下端部には割れ円錐もみられる。また右側部の複数の槽状剥離は1回の加撃によって上下方向の加撃のものが形成されたと考えられ、さらに左側部から中央部にかけての下方からの加撃によるものは、先に述べた割れ円錐を共有すると思われる。b・c面はそれぞれ、a・d面によって形成された稜線をみせている。d面には中～下半部にかけて上方からの加撃による平坦な剥離痕を残し、上部には上方からの加撃による階段状剥離を呈する複数の剥離痕を残している。e面はa・d面によって形成された稜線をみせる。

7は裏面にポジティブな1枚の剥離痕をもつもので上半部は欠損している。表面は横位方

向からの加撃による剥離痕をみせ、全体形は両側縁が僅かに平行して末端の細くなるものである。

8は全体形のやや横長なものである。表面には上下方向からの加撃による小剥離痕を残し、左側には横位方向（左より）からの剥離痕と右側には節理面を見せてている。裏面はやや斜め上方からの1枚の剥離痕をみせ、打点と共に割れ円錐も残している。

9は表面に上方からの加撃による多数の剥離痕を残し、上部の剥離痕には階段状剥離を呈するものもある。裏面には上方からの1枚の剥離痕が大部分を占め、上部に切断とも思えるような小剥離痕を残している。全体形は両側縁が平行し上下辺は不安定ながらもほぼ四辺形を呈している。

10はやや綫長なもので、節理面が複雜に入る為か表面の剥離痕は不安定なものである。表面左半部は節理面で裏面は上方からの加撃による1枚の剥離痕で占められる。裏面上部には小剥離痕がみられるが、先に述べた剥離痕の形成に伴う打点と考えられる。

11のa面は左側部分・上下部分に小剥離痕を残すもので、上半部の剥離痕は横位方向（c面より）からの加撃方向を示し右側部分はポジティブな面で、これも同じ加撃方向を示している。また左側上部は敲打によるものと思われる痕跡を残しており（破線）、同様な痕跡が中央部の小剥離痕部分にもみられる。b・c面はa・d面によって形成される稜線をみせるが、前述した様にc面には上部に敲打痕を残すほかに下部には急角度の剥離痕も残している。d面は下方からの加撃による1枚のポジティブな剥離痕が大部分を占め、その加撃による小剥離痕も残している。上部右側の小剥離痕は階段状剥離を呈するものもある。

12はa面中央部に横位方向（c面より）からの加撃による小剥離痕がみられるが、これは敲打によるものと思われ、稜線が潰された状態を呈している。また同様な痕跡が下端部にも確認できる（破線）。b面は横位方向（a面より）からの加撃による大小の剥離痕があり、下半部の大きなものは平坦なものである。また上半部の4枚の剥離痕は1回の加撃で残された可能性もある。c面下半部にも横位方向からの加撃による剥離痕があるが、リングを観察するとa・d面の両方から入るものでその切り合い関係は不明瞭である。d面は1枚の平坦な剥離痕が大部分を占め上下部にそれぞれ小剥離痕を残している。上下の剥離痕は先に述べたa面の上部の剥離痕と同時に残されたもの、つまり1回の加撃で残された可能性があり、下部のものについてもa面下部にあった敲打痕に伴うものと考えられる。

(3) 検討

以上、12点の石器は十亀氏によって1～6が細石核、7～10が細石刃、11・12が台形様石器として器種認定されているものである。ここではこれらの石器についての注意しておくべき点を挙げながら検討を行っていく。

1はb面に1回の加撃によると考えられる複数の剥離痕が存在し、それに対応するかの様な下方からの加撃による剥離痕もみられる。またc面にも1回の加撃によって複数の剥離痕

が残されている。2はa面において剝離痕の切り合い関係が不明瞭なものがある。またこの面では上下で加撃方向の対応する剝離痕がある。3はa面で1回の加撃による複数の剝離痕があることや加撃方向の対応する剝離痕がある。4はa面をみると周縁に細かな剝離痕があることや下部に敲打痕を残していること、さらに敲打に伴う平坦な剝離痕の存在が注意される。5はa・b面をみると1回の加撃によって残されたと思われる複数の剝離痕があることや、a面右側下部にみられる剝離痕の様に、上下に対応する加撃方向を示すものがある。6はa面で1回の加撃による複数の剝離痕があることや、上下に対応する加撃方向を示す剝離痕がある

ここで1～6までの石器にみられる共通する要素を挙げてみると、

- ①1回の加撃による複数の剝離痕が存在する。(1、3、5、6)
- ②上下に対応する加撃方向を示す剝離痕が存在する。(1～3、5、6)

この2点の共通項は両極打法(バイポーラー・テクニック)による特長の一部であると考えられ、この技法によって製作された代表的な石器として楔形石器(ピエス・エスキュー)が挙げられよう(註2)。ただし上記の共通項に含まれなかった4であるが、これには敲打痕に伴う平坦な剝離痕に注意しなければならない。これはその状態などから判断して、楔形石器に認められる「截断面」あるいは「剪断面」に共通するものであると考えられる。またこれら6点の石器はほぼ四辺形を呈することなど、形態的にも楔形石器に共通する部分を考えることができる。しかし留意点として楔形石器に未製品が成立すると考えた場合に、これら6点中にその未製品が含まれる可能性があることも指摘しておかなければならない(註3)。

7～10については主要剝離面を残していることや二次加工が認められないことなどから、剝片・碎片として扱うことができる。ただし7、9は上部に切断面と考えられるものが残されていることから、切断剝片とも考えられる。しかしその意図がここで明確に判断できない為、現状では剝片・碎片とした方がよいであろう。また表面に残された剝離痕の状態や細石刃としての全体形などを考慮した場合、定形的な製品としての判断はできないであろう。

11はd面がこの石器の主要剝離面であり、その形状が大きく改変されていないことが挙げられる。しかしc面に二次加工を思わせる剝離痕があることや敲打痕も残されていることがわかる。これらのことからこの石器は二次加工を積極的に評価したとしても、定形的な製品とは考えられない。また別の考え方として楔形石器の未製品が存在するならば、それとすることもできる。

12はc面下半部に加撃方向が対応し、さらにその切り合い関係が不明瞭な剝離痕がある。またb面上半部には1回の加撃による複数の剝離痕があり、これらの現象はすでに述べてきた両極打法の特長とすることができる。これによって、この石器も先に挙げたものと同様に楔形石器として考えることができよう。

(4)まとめ

これまでに祝谷丸山遺跡の12点の石器について、観察・記載・検討を行ってきた。ここでもう一度まとめとして整理してみると以下の様になる。

- ① 1~6、12については残る剥離痕に両極打法の特長がみられることや形態的に判断して、楔形石器またはその未成品としての器種認定を行った。
- ② 7~10は二次加工が認められないことや形態的にみて、剝片・碎片の類であるとした。
- ③ 11は問題の残るところであるが、1つには二次加工剝片として、もう一方では楔形石器の未成品としての認定ができよう。

なお、これまでには触れてなかった石材について付記しておくと、ここで取り上げた石器の3が灰色チャート製である他は、全て緑色チャート製である。この緑色チャートは十亀氏がすでに南予地方で産出されるものであることを述べている。こうした石材利用は、その交易・運搬等から導き出せる文化の伝播論や人々の移動を考える上でも興味深い示唆を与えるものであろう（註4）。

2. 松山市桑原経石山古墳1次調査出土の石器について

(1) 出土の経緯

ここに紹介する2点の石器は、1990（平成2年）10月17日~12月19日に行われた経石山古墳1次調査によって得られたものである。この調査では後円部の北東隅に調査区が設置され、本古墳の周溝と考えられる溝状遺構（S D-1）が検出されている。本資料はこの遺構確認時に出土した。

(2) 石器の観察（第71図）

スクレイパー（第71図1）

溝状遺構内より出土したスクレイパーである。横長の平面形が四辺形となる剝片を素材としており、刃部はその底辺（下辺）の上辺右側部に設けられている。下辺の刃部は素材時の主要剥離面側から、上面の刃部は表面側から施されている。いずれも刃部は直線形で、上辺のものは微細な使用痕を残しており、下辺のものは大まかな剥離痕によって形成されたものである。なお、このスクレイパーの素材となった剝片を想定すると、單剝離打面を有する横長剝片石核より作出されたものであることがわかる。また、表面にも同様な剝片を作出した痕跡がみられ、横長剝片を連続的に作出した石核の存在が考えられる。ただし、このスクレイパーの素材は、表面右側部が折り取られている様子がわかるため、本来の素材はこれより幅広なものと考えなくてはならないだろう。石材は赤色頁岩である。

楔形石器（71図2）

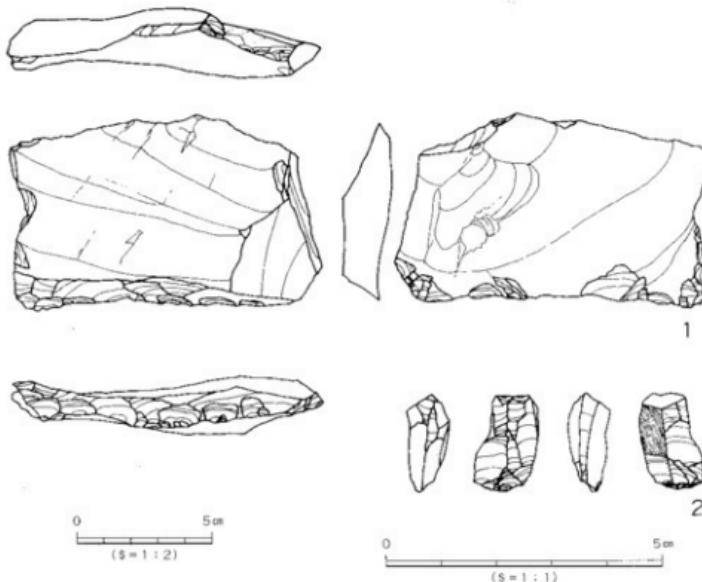
溝状遺構外出土の楔形石器である。a面には数上の桶状剥離を残し上下両端には微細な剥離痕がみられる。右側部には三角形状に、左側部には断面凸レンズ状の剥離を残しており、

考 察

これらはいずれも截断面に共通するものであろうと考えられる。裏面は下方からの加撃による剝離痕を残しており、下部の小剝離痕は表面の下部にある小剝離と打点を共有している。以上の様に截断面を有することや一回の加撃による複数の剝離痕が形成されていることなどから、バイボーラー・テクニック（両極打法）によって製作された楔形石器の特徴を表している資料であることがわかる。石材はチャート（緑白色）である。

(3)まとめ

以上2点の石器は溝状造構（SD-1）の構築時期と符合するとは考え難く、それ以前のものとして扱うことができる。しかし本遺構内に存在した土器群の検討が行われていないこともあり、時期認定についてはここでは割愛をさせていただくことにする。



第71図 経石山古墳出土石器実測図

3. 久米高畠5次調査出土の「細石刃」とチャート製石器群

(1) 出土の経緯

久米高畠遺跡は1988年10月26日～12月24日まで約1700m²の調査を行っている。この年行われた5次調査区は米住庵寺の南西にあり、米住台地上の微傾斜をもつ場所である。主な遺構・遺物には弥生時代の住居や土器・石器の他に古墳時代の住居や土師器などが確認されており、さらに7世紀初頭～8世紀初頭の遺構・遺物においては久米郡衙の様相を検証する良好な資料とされている。

今回ここに紹介する石器類は、本調査において上記の遺物の包含層より出土したものである。

(2) 石器の観察

碎片（第72図1）

この石器は概報の中で「細石刃」として認定されたものである。平面形は長方形を呈しており、下半部は折損している。表面には縦位に1条の稜線が残り、大小2枚の剥離痕はそれぞれ横位方向（左側より）の加撃であることがわかる。側面観は薄手の直線的な形状で、やや主要剥離面側に湾曲している。裏面（主要剥離面）は垂直方向（上方から）の加撃であることがわかる。この石器は先に述べた様に「細石刃」としての器種認定が行われたものであるが、表面の剥離痕の不安定さ、つまり横位方向からになることなどから、細石刃としてではなく、碎片として扱うこととした。黒曜石（黒色）製である。

周縁加工石器（第72図2）

チャート製の剥片を素材としたもので、上半部が欠損しているために全体形を知ることはできないが、その周縁に二次加工を施して尖鋭性のある製品に仕上げたものである。二次加工はすべて裏面側からの加撃によって施されており、その打角は直角に近くなる。この石器はナイフ形石器または角錐状石器に共通するものとも考えられるが、全体形が把握できることなどから、ここでは周縁加工石器として扱うこととした。チャート（緑色）製。

楔形石器（第72図3～第73図17）

楔形石器としたものは15点あるが、その形状などから以下のように分類される。

第A I類楔形石器……側面観が凸レンズ断面状になり、截断面を有する。（3～5）

第A II類楔形石器……側面観が凸レンズ断面状になり、截断面を有しないもの。（6～8）

第B I類楔形石器……側面観が方形もしくは不定形となり、截断面を有するもの。（9～13）

第B II類楔形石器……側面観が方形もしくは不定形となり、截断面を有しないもの。（14～17）

このように2分類4細分されるが、これらを各類ごとに観察してみる。

第A I類楔形石器（第A図3～5）

3は左側部に截断面を有しており、表裏面にはそれぞれ上下方向からの加撃による剥離痕を残している。表面は中央の剥離痕の中に棱線状になるフィッシャーが確認されている。さ

らにこのフィッシャーの基部には打点がみられ、この石器の截断面の打点と同じであることがわかる。4は右側部に截断面をみせ、その下端部には打点のみが残されている。5は右側部に截断面をみせており、その形状はやや内側に湾曲する状態である。節理が入っているためか、全体形はやや不安定である。全てチャート製である。

第A II 類楔形石器（第72図6～8）

6は平面形がわずかに長方形状となるもので、側面観はやや裏面側に湾曲している。裏面中央の縦位に走る稜線は上端部の打点からのびるものである。7も平面観はやや長方形状になる。この石材に節理が複雑に入るために、明確な稜線はとらえにくい。また表面には横位方向からの加撃による小剥離痕もみられる。8はやや正方形に近い形状であるが、上下両辺は一方へ傾斜した状態である。表裏両面ともに平坦な剥離を残している。全てチャート製である。

第B I 類楔形石器（第72図9～13）

9は截断面が左側部と裏面に残されている。左側部の方は節理面となっているために剥離しやすい箇所であったとも考えられ、裏面の方はややポジティブな剥離面となっている。また表面にみられる下方からの加撃による剥離痕と截断面としての特徴を有しているが、そうなれば截断面によって囲まれた状態を想定しなければならない。10は両側部に截断面を持つもので、左側部の方は縦位に、右側部の方は横位に稜線を形成されるものである。表面上部の剥離痕は段階状剥離を呈しており、これは加撃方法によるばかりでなく、節理の複雑さであるとも考えられる。11は表面左側部に節理面をみせる截断面を残している。裏面はポジティブな一枚の剥離痕が大部分を占め、下方からの加撃による小剥離痕も残している。12は右側部に截断面を有し、上下方向の加撃によって形成されたために中央には横位に入る稜線を残している。形状は下部が凸レンズ状断面形になり、上部は方形状となる。13は裏面左半部の剥離痕が截断面となる。この面はネガティブな面となっており、両側面観をみるとその様子をとらえることができる。全てチャート製である。

第B II 類楔形石器（第73図14～17）

14は平面がわずかに長方形状を呈し、断面が不定形なものである。表裏面ともに上下方向からの加撃が残り、樋状となっている。15は平面観・側面観とともに不定形で、剥離痕も大まかなものが残されている。また表面の大部分を占める一枚の剥離痕はポジティブな面を形成している。16は表面にみられる下方からの加撃によって段階状剥離を呈しているため、側面観は不定形な状態となっている。裏面は二条の樋状剥離がみられるが、これを形成する縦位の稜線は打点からのびるものである。17は平面・側面観とともに不定形なもので、表面をみると、中央に縦位にのびる稜線は上下両端に打点を有するものであることがわかる。裏面には礫面を残している。全てチャート製。

楔形石器未成品（第73図18・19）



第72図 久米高畠遺跡5次調査出土石器実測図(1)

ここでは大まかな剥離を有し、楔形石器の中では大形のものを未成品としてあつかった。ただし、楔形石器としてまとめた一群の中にも未成品の範疇に含まれるもののが存在することも示唆できるが、この2点は特に大形品であるために区分しておくこととした。

18は節理面が複雑に入るため稜線が複雑な状態となっている。加撃は主に上下両端から行われているが、裏面には横位方向からの加撃による剥離痕も確認される。また左側部には截断面も残されている。19は節理面を露出させている部分もあるため、剥離痕の切り合いが不明瞭な状態もみられる。加撃は表裏とともに上方から行われており、上端は平坦面も残されている。2点ともにチャート製である。

両極剥片（第73図20～22）

3点ともにチャート製で、上下両端に打点を残すものである。20は主要剥離面が節理面と平行しているもので、下端には階段状剥離を呈する剥離痕もある。21は主要剥離面の上部がポジティブで下部がネガティブとなるものだが、上下の境界である稜線がやや不明瞭である。22は主要剥離面側に打点から伸びる稜線状のフィッシャーを残している。形状は縱長で、楔形石器にみられる樋状剥離の形状と共通するとも考えられる。

右核（第74図23）

チャート製のもので、打面部と底面部は縦面を大きく残している。表面は剥片剥離作業面で、作出された剥片はやや縱長の不安定なものであろうと考えられる。剥片作出に伴う打面調整は行われておらず体部調整とその痕跡をみるとことはできない。背面は分割面で占められており、この分割面は礫を荒削りした段階で残されたものであろうと思われる。この右核から想定される剥片剥離技術を考えてみると、素材はレンガ状もしくは厚手の板状の原石（母岩）を用意し、それを荒削り作業によって分割する。この時、対応する2面は縦面を残したものである。そしてその分割された礫片の一面を作業面に設定し、打面再生や打面細調整をすることなく一方へ後退しながら剥片剥離作業を行っていく。ただし残る問題として底面にみられる剥離痕があるが、これらの剥離痕の一部が剥片剥離作業面にかかるものであるため、剥片作出に伴う下端部の調整が存在するとも考えられよう。

(3) まとめ

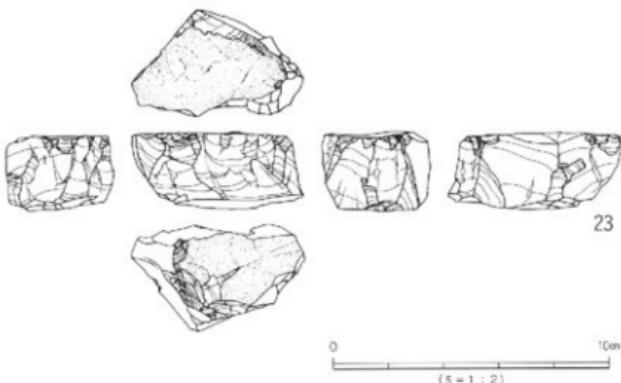
久米高畠5次調査において確認されたチャート製石器群は楔形石器を主体としたものであることが理解されるが、これらの石器群についてここで考えてみることとする。

まず15点の楔形石器であるが、筆者はこれを2分類4細分してその特徴をとらえ観察してきた。この分類は完成された状態での楔形石器のバリエーションというより、楔形石器が製作され、当時の人々の手を離れて遺棄された過程を示していると考えている。つまり第B II類楔形石器→第B I・第A II類楔形石器→第A I類楔形石器といった工程を想起できるのである。これを説明すると、第B II類楔形石器がその未成品よりもわずかに完成に近づいた状態を示している。これはその形状的な不安定さからも考えられる。これからさらに作業が進

松山平野の石器文化



第73図 久米高畠遺跡5次調査出土石器実測図(2)



第74図 久米高畠遺跡5次調査出土石器実測図(3)

行すると、第A II類楔形石器のような形状を呈したものに仕上がる。ただし完成に近づく直前に加撃のみだれが生じた時には、第B I類楔形石器のように截断面を残す状態でその石器は放置されると考えられる。形状の安定した第A II類楔形石器はやがて使用されることになるが、その際の破損による結果、截断面を残した状態で遺棄されると思われる。しかし、以上のような経過の前段階に、今回紹介した楔形石器未成品の存在を忘れてはならない。これらはその大きさなどからも礫片もしくは剥片を素材としたものと考えられ、このことを示すかの様に本遺跡ではチャート製石核が出土している。石核の項目の中で剥片が生産される前に礫を荒削りする段階があることを述べたが、このことは楔形石器の素材となる剥片生産が石核より作出されたものに頼るばかりでなく、原石(母岩)の荒削り段階での礫片をもその素材として扱っていることを示唆するものである。

以上の様に本遺跡では、楔形石器の製作から遺棄に至るまでを考えることのできる良好な資料を確認できたといえるであろう。また楔形石器の製作にはバイポーラー・テクニックによって行われているが、このことを示す資料として20~22の両極制片の存在が指摘できる。

周縁加工石器(第76図)であるが、これは他に類例を持ってその評価をえていきたいと考えている。ただしこの石器は角錐状石器あるいは小形のナイフ形石器とも考えられるため、充分な注意が必要となろう。

黒曜石製の碎片であるが、今回紹介したのはこれまで本資料が「細石刃」として評価されていたことにある。この石器をみる限りでは外的に細石刃として扱うことには問題はないと考えるが、表面に残された剥離痕から考えて細石刃として認定できないであろう。

今回の執筆では、久米高畠5次調査出土の資料中より、主にチャート製石器群の紹介を試みた。これらの資料は弥生時代の上器・石器とともに出土しているが、松山平野における弥生時代の石器にチャートが普遍的でないことから、その時期決定は今後の問題として残るであろう。

4. おわりに

今回は祝谷丸山遺跡、経石山古墳、久米高畠遺跡の3遺跡より得られた資料を基に、資料紹介と弱子の検討を行ってみた。これらに共通していえることは全てが楔形石器を備えていることであり、この石器が松山平野でどういった時間的位置づけにあり、また、どう展開していくかを検討していく必要性を感じている。

これら諸遺跡における石器類の記載・検討については、筆者自身の不勉強さから誤った解釈となっている点があるかもしれない。これについては数々の御批判を願うものである。

最後になったが、祝谷丸山遺跡の石器実測については十亀幸雄氏に長期間にわたって貴重な資料をお借りした上に、今回の記載についても心よく御承諾を得た。また、経石山古墳の調査内容等については田城武志氏に、久米高畠5次調査の概要については宮崎泰好氏に御教示いただいた他に、松山市教育委員会の重松伴久氏、財団法人松山市生涯学習振興財團埋文センター梅木謙一氏、山之内志郎氏、大西朋子女史（写真岡版）各位にも今回の執筆の機会と御助言をいただいた。ここに感謝する次第であります。

〔註〕

- (1) 現在までに祝谷丸山遺跡の評価は変わらないとしたが、「愛媛県史」の長井数秋「一光上器時代遺跡解説」では「細石器は松山丸山遺跡で発見されたといわれているが、現状では判断するまでは至っていない」と述べながらも、文2の中では細石刃文化の存在を積極的に認めている。さらにこれは浜崎であることも考えられるが、17ページの図1-4のキャプションには「丸山遺跡出土の楔形石器」とある。これらの事実は本遺跡を評価する上での混乱をひきおこすもので、充分な注意が必要とされよう。
- (2) 楔形石器（ピエス・エスキュー）としての器種認定については、岡村道雄「ピエス・エスキューについて」『東北考古学の諸問題』1976、同「ピエス・エスキュー、楔形石器」「縄文文化の研究7」1983が大変参考になった。また楔形石器の製作に直接的関係をもつ両面打刃（バイボーラー・テクニック）の諸特徴については小林博昭「バイボーラー・テクニックについて」『考古学ジャーナル78』1973も参考になる。
- (3) 他に注意しておかなければならない点として、1・3・5の様に上下両端もしくはどちらか一端に平坦面を残している場合があることが挙げられる。楔形石器にこうした特徴を見い出すことができるかは疑問の残ることであり、先に述べた様に未完成としての解釈が可能であるならば、楔形石器そのものの充分な検討を行った上で本資料を評価しなければならないであろう。
- (4) 本文執筆中に、愛媛県東宇和郡城川町歴史民俗資料館を訪れる機会を得た。この館内には城川町内の洞穴遺跡より採集・出土した資料が数多く展示されていたが、その中でも菊野谷岩陰遺跡の資料中にこの緑色チャートと肉眼観察において共通するものが含まれていた。祝谷丸山遺跡と菊野谷岩陰遺跡に直

考 察

接的な関連を見いだす訳にはいかないが、この事実は祝谷丸山遺跡の石材利用を考える上でも興味深いものがある。なお城川町内の遺跡に関しては、愛媛県東宇和郡城川町教育委員会「城川の遺跡」1979を参考にされたい。

【参考文献】

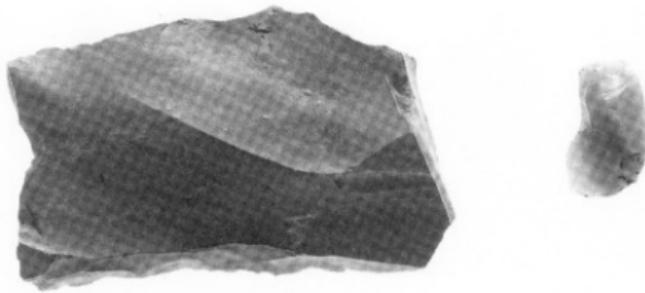
- 十 亀 幸 雄 1978 「愛媛県祝谷丸山遺跡の細石刃剥離技術」『古代学研究第88号』
十 亀 幸 雄 1988 「芸予諸島の先土器時代資料」『遺跡第31号』
長 井 敦 秋 1985 「七 丸山遺跡」『愛媛県史 資料編考古』
正岡陸大・十亀幸雄編 1986 「日本の古代遺跡 愛媛」
駿 台 史 学 会 1979 「駿台史学第47号」
小 野 昭 1979 「瀬戸内沿岸地方の細石器文化」『駿台史学第47号』
香川県教育委員会 1981 「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(IV)」
木 崎 康 弘 1981 「九州地方の細石核」『熊本史学55・56合併』
木 崎 康 弘 1983 「東日本細石核技術展開についての一理解」『旧石器考古学26』
西 村 翁 文 1983 「中部瀬戸内地域における細石刃生産技術の検討」『旧石器考古学26』
駿 台 史 学 会 1984 「駿台史学第60号」
細石刃文化資料が多量に採集されている遺跡を取り上げる。
山口県旧石器文化研究会 1988 南方遺跡……「宇部台地における旧石器時代遺跡(7)」
「古代文化49—3」
山口県旧石器文化研究会 1985 長門遺跡……「宇部台地における旧石器時代遺跡(3)・(4)」
「古代文化37—2、37—8」
大森一成・田城武志 1991 「経石山古墳1次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』
宮 崎 奉 好 1989 「34. 久米高畠遺跡(5次)」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』

松山平野の石器文化



祝谷丸山遺跡出土旧石器

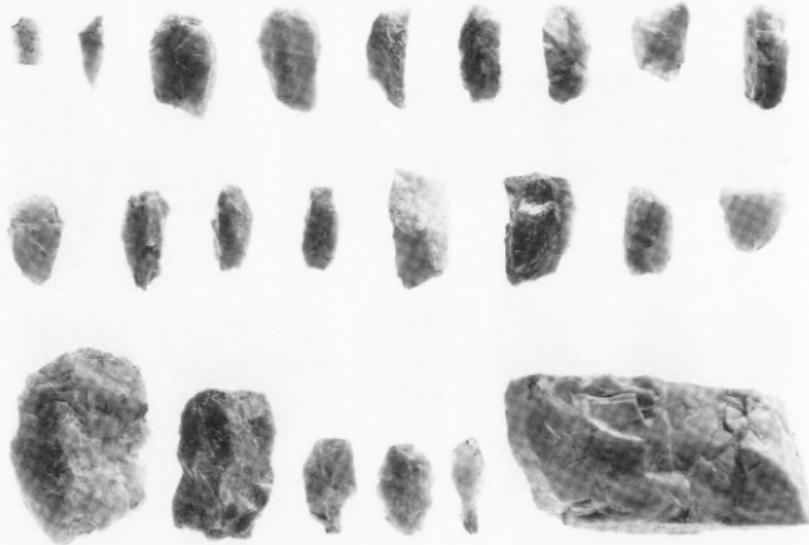
(約1:2)



経石山古墳出土旧石器

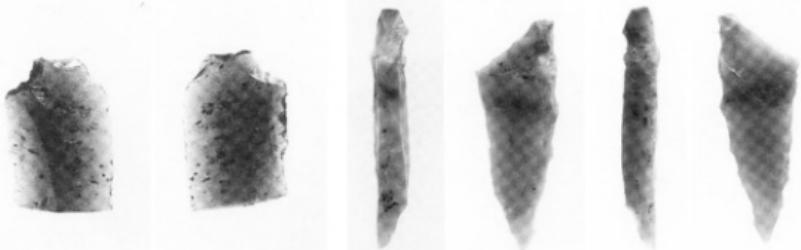
(約1:1.4)

考 察



久米高畠遺跡5次・出土旧石器

(約1:0.9)



No. 1 表面

裏面 (約1:3)

No. 2 左側面 表面

右側面 裏面 (約1:3)

V-2 道後城北地域出土の分銅形土製品

～顔面の表現方法を中心として～

山之内志郎

1. はじめに

道後城北遺跡群では、祝谷アイリ遺跡で出土した2点の新出資料を加えて、これまでに5遺跡26例の分銅形土製品が出土している。現時点での県内の総出土点数が17遺跡41例であることを考えると、当地域での集中度に改めて驚かされる。しかしそのうちのはとんどが、近年の開発に伴う緊急発掘調査による出土であり、調査地点に偏りがあるのも事実である。本稿では、顔の各部分の表現方法について分類し、この遺跡群におけるその方法の傾向や諸特徴について明らかにしていくことをとするものである。

なお慣例により、顔面表現があるものを表面とし、その裏を裏面とした。また両端の孔等の顔面表現があるものは上半部、ないものは下半部と考え、実測図もそれに従った。

分銅形土製品は周知の通り、完成品が少なく、そのほとんどが破損品であるため、全貌をうかがえないものが多く存在する。そこで出土地名表では、顔面表現の各部分を表現していないものは「なし」、欠失しているため不明なものについては「不明」と区別した。また、顔面表現または文様が認められない場合は、「顔面表現なし」や「文様なし」としたことを予め断っておく。なお、資料名及び出土地名表は谷若氏の論文を参照し、追加資料については順次記号を追加した。

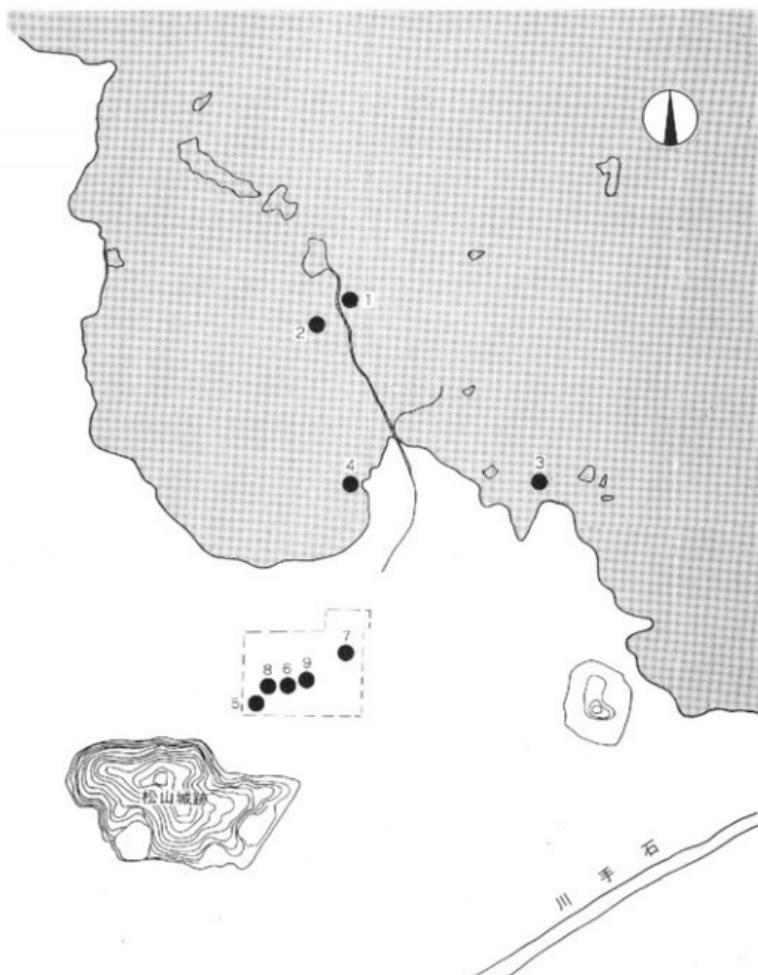
2. 顔面の表現方法

今回再検討した資料の中で、外縁に文様が施される資料は5遺跡8例で、そのうち頭髪と推定される文様をもつ資料は、アイリB・文京B・御幸寺山・六丁場B・E・F・鷺谷〔註1〕例の合計5遺跡7例である。これらの頭髪と推定される外縁の施文はすべて刺突文であり、その施文位置は、表面・上端面・裏面の3面であることが一つの特徴としてあげられる。なお、それぞれの全体の形状を分類すると、I〈円形〉が3例（御幸寺山・六丁場E・F）、II〈隅丸方形〉が1例（文京B）、III〈方形〉が2例（アイリB・六丁場B）、VI〈丸〉が1例（鷺谷）であった。

外縁に文様のみが施される文京D例の櫛歯刺突文の場合、頭髪の可能性も考えられるが、破損品であるため断定は避け、一つの文様形態として認識している。

次に眉の表現がある資料は、4遺跡15例にのぼる。そのうち刺突文のアイリB例を除き、全て粘土紐を張りつけた突帯文である。分銅形土製品全体の形状から次のように区分できる。I〈円形〉が4例（文京A・G・御幸寺山・六丁場E）、II〈隅丸方形〉が6例（アイリA・文京B・C・F・H・六丁場A）、III〈方形〉が4例（アイリB・六丁場B・C・D）、V〈長

考 察



- 1 祝谷アイリ遺跡 2 祝谷六丁場遺跡 3 道後鷺谷遺跡 4 御幸寺山東麓遺跡
 5 文京遺跡1次 6 文京遺跡3次 7 文京遺跡4次 8 文京遺跡10次
 9 文京遺跡11次

第77図 道後城北遺跡群出土の分銅形土製品分布図 (S = 1 : 25,000)

方形〉が1例（文京I〔註2〕）であった。

そのうち六丁場E例の、眉の周辺を刺突文で囲む方法以外は全て、突帯文の単独表現である。また必ず眉は鼻と同一の突起物として一体で表現する。これら全ての眉は、中央部から左右に半円形・横一線・斜め上がりのいずれかの形状で上端面または側面に至る。その内訳は、半円形が10例（アイリB・文京B・C・F・G・H・御幸寺山・六丁場A・D・E）、横一線が3例（アイリA・文京I・六丁場C）、斜め上がりが2例（文京A・六丁場B）であり、圧倒的に半円形の例が多い。

前述したアイリB例は、上半部中央部のやや下方で半円形に刺突を施しており、当該地域内における分銅形土製品の眉の表現方法としては他に例をみないものである。現在では、両半円形の中央部分がとぎれているが、これはもともととぎれていたものか、あるいは一体のものが後に中央のみ摩滅したのかは判断しかねる。

次に目の表現は、ヘラ状工具または半裁竹管状工具による施文であり、その中でアイリA、文京Gと鶯谷例については、後者の工具による施文と判断しても間違いないと考えられる。目の形状はいずれの例も下弦の半月形を描き出している。

口の表現も目のそれと同様で、ヘラ状工具または半裁竹管状工具による施文方法がとられる。その形状の種類として4種類ある。1〈半円形〉が2例（アイリA・文京G）、2〈横一線〉が5例（文京H・御幸寺山・六丁場A・B・C）、3〈刺突〉が1例（文京A）、4〈横円形〉が1例（鶯谷）であった。

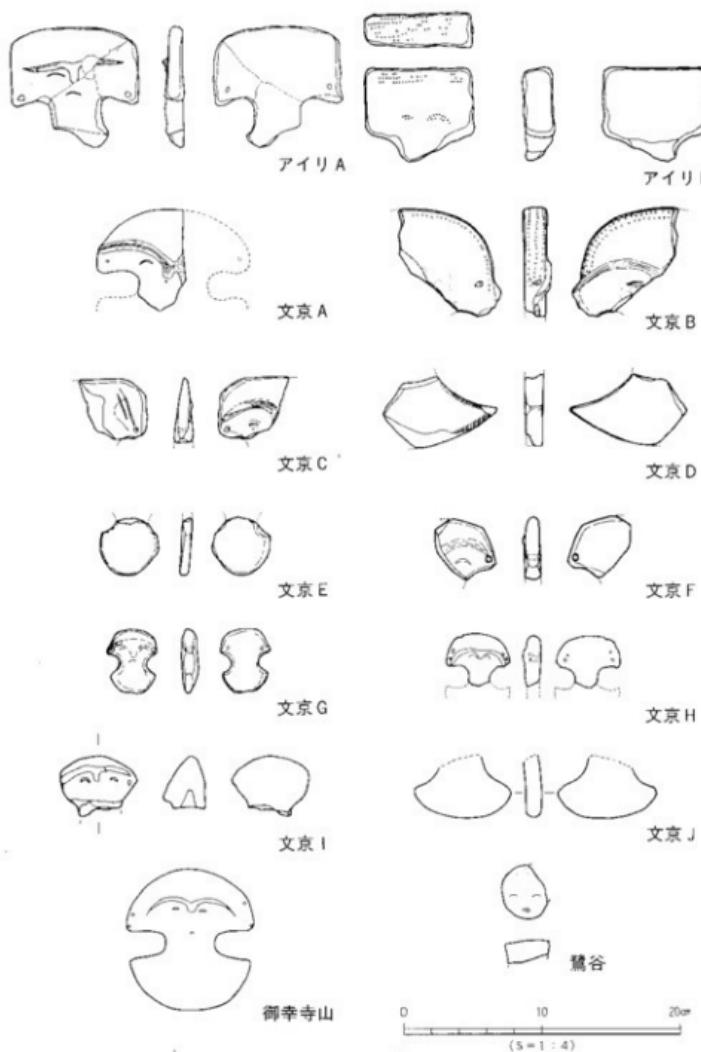
全体として口の表現は申し訳程度に表現され、鶯谷例のように横円形をなす例は希である。またアイリA・文京G例の場合、目と口は同一施文具による線刻表現である可能性が高い。

他県の資料をみると、上半部裏面上部近くから外縁に沿って、上端面に斜めに針穴状の小孔が多数穿たれている場合がある。しかしこれまでのところ道後城北地域では、上半部左右両端に小孔が穿たれている事例しか確認されていない。後者の場合をその穿孔方向から分類すると4種類になる。例えば表面から裏面まで貫通している場合、表面→裏面と裏面→表面の2方向があるが、その区別は困難であるため、同一のものとして次の通りとした。

まず表面から裏面まで貫通している場合で、一孔はアイリA・文京A・C・F・G・I・六丁場Aがあり、二孔は文京H・御幸寺山がある。三孔はなく、四孔は六丁場Dがある。次に表面から側面まで貫通している場合は、一孔は六丁場Cがあり、二孔・三孔はなく四孔は六丁場Kがある。また裏面から側面まで貫通している場合は、一孔は文京B、二孔はなく、三孔は六丁場Bがある。最後に上端部端面又は側面からくりこみ部端面まで貫通している場合は、一孔は文京Bがある。

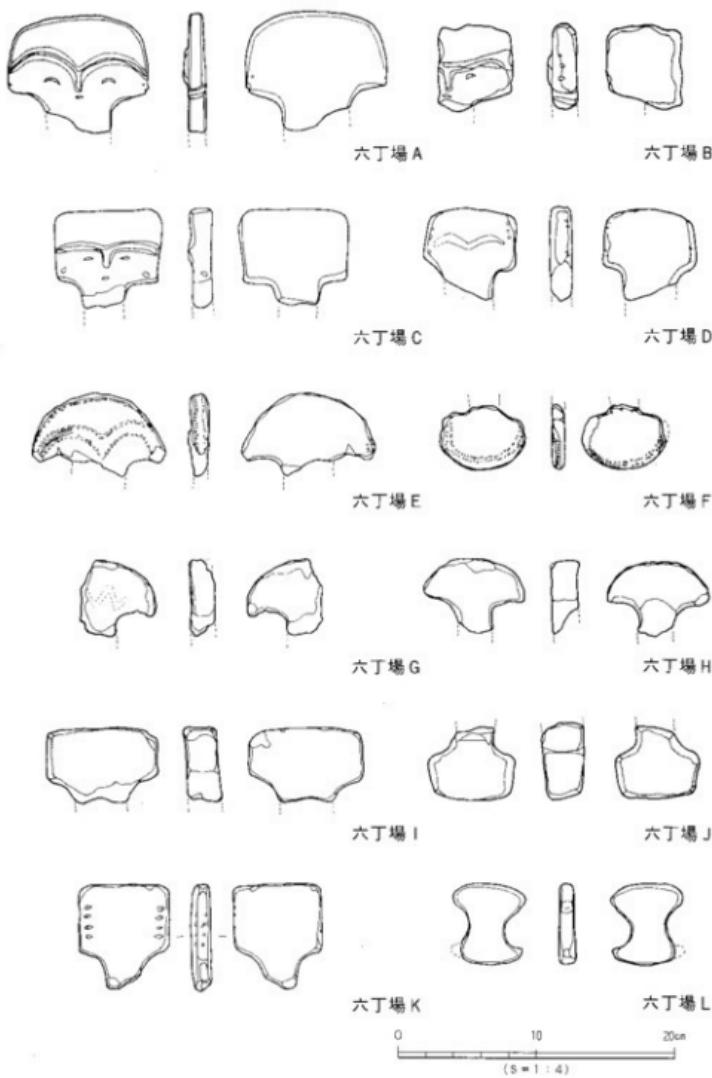
孔の位置は、分銅形土製品の形状がI〈円形〉の場合、眉よりも下位に表現され、またII〈隅丸方形〉またはIII〈方形〉の場合、上半部の左右側面に表現されるが、上端面まで穿孔されることはない。

考 察



第78図 道後城北遺跡群出土の分銅形土製品実測図 (I)

道後城北地域出土の分銅形土製品



第79図 道後城北遺跡群出土の分銅形土製品実測図 (2)

耳状の表現は、本来耳であることを意図して穿孔されたならば、左右一対で十分であるが、六丁場K例のように左右側面に四孔を穿つのみで、他に顔面表現は見当たらない。これは、眉が鼻と一体化して誇張表現されるのと同様に一孔で十分のものが、装饰的な意味合いをもつことによって過大に表現されたものと推定することができる。

3. 顔面表現がない資料

顔面表現はないが文様があるものは文京D・六丁場G・Jの3例の資料があげられる。前述した通り、いずれも顔面表現がないため、下半部として取り扱っている。文京D例は、端部に櫛歯刺突文が刻まれ、この地域内ではその類似例を見ない。形態も残存部分から推測すると、IVの楔形に近い。六丁場G例は、細かな文様が刺突文と波状文の組み合せで、表・裏・側面の3面を飾っている。六丁場J例は、くびれ部に二条の沈線文を施す。これらはいずれも分銅形土製品の上半部を顔に見立てて表現するという、顔面表現のある分銅形土製品の定義とはかけ離れており、上半部における顔面表現の存在をうかがわせるものではない。そのため、これらは分銅形の上板を装飾した土製品であり、一般にいわれる顔面表現された分銅形土製品とは区別する必要がある。

また顔面表現・文様が共に認められない文京J・六丁場H・I・Lの4例の場合、実際に下半部であるのか、それとも上半部であったのが、何等かの理由で顔面表現部分が剥離したり欠損したために下半部として取り扱われているのか、現時点では判断できない。

4. 最大厚

当地域の分銅形土製品の厚みは、各形態によって違う特徴がみられる。なお、この場合の厚みとは、眉を張りつけた部分を除き、平坦な表面から裏面までを計測した最大厚である。まず、I〈円形〉は、0.7~1.4cmの薄手タイプと1.8cmの厚手のタイプに2分される。またII〈隅丸方形〉は、1.2~1.6cmの薄手のタイプのみである。III〈方形〉は、1.3~1.5cmの薄手のタイプと2.1~2.8cmの厚手のタイプとに2分できる。

以上のようにIIタイプは、1.2~1.6cmの範囲内でほとんど厚みに大差ないことが分かる。IとIIIタイプは、薄手と厚手の2つのタイプに分けられ、厚手のものは薄手のものに比べ、顔面表現されにくい傾向があることがうかがえる。またIIIタイプはIに比べて全体的に厚手で、六丁場I・Jのように2cmを越える厚手のものが特徴的である。

これまで分銅形土製品の厚みに関しては、論議されることがほとんどなく、報告書などの図面にも断面図が掲載されていない場合があるが、今後は表裏の平面図及び断面図は必ず掲載して議論の対象としたい。また厚みに関連して一言つけ加えると、当該地域のみでなく松山平野で出土する分銅形土製品は、凹凸がほとんどなく、表裏とも平坦であることも一つの特徴としてあげられるであろう。

5. 赤彩

今回実現した資料の中で赤彩が認められる資料は、アイリB・文京B・G・御幸寺山・六丁場A・D・E・H・I例の9点である。これ以外にも本来赤彩されていたが、摩滅によって剥落したものも相当数存在すると思われ、肉眼観察できた上記の9点を対象に赤色顔料の塗布位置と方法について考えたい。まず、その塗彩位置には、全面の場合と部分的な場合との2種類がある。全面塗布と部分塗布に、どのような意味の違いが存在していたかは知る由もないが、はっきり区別していた点は明確である。ここで問題になるのは後者で、特に眉や頭髪のような部分に塗布する場合である。次に塗布方法では、表面に塗る場合と、胎土そのものに顔料を混入させている場合の2種類がある。例えば、六丁場Eの資料は、眉の表面に塗布するのではなく、顔料を混入させた粘土紐で眉を作り、張りつけたものと推定される。

6. 小結

分銅形土製品の出土点数の増加とともに、形態そのものや分布圏についての分類・検討はかなり進んできたが、顔面表現や文様の分類についてはまだ浅く、今回の再検討を試みた結果、一つの枠の中ではとらえきれないものが多いことが明らかになった。この地域で出土する分銅形土製品の顔面表現の特徴としては、頭髪は刺突文、眉と鼻を一体で突帯文で表現し、目と口は、ヘラ状工具又は半裁竹管状工具による施文で、耳の穿孔方向には4種類あるが、そのほとんどが表面から裏面への穿孔である。

また今回の再検討によって、厚みの点や赤彩についても言及できたことは大きな成果であった。よって、赤彩の有無についても明確な報告を希望するものである。

最後に本稿では、対象を道後城北地域出土の資料に限定したため、狭小な範囲での資料の顔面表現の方法解明に終始した。今後は対象範囲を広げ、松山平野全体、瀬戸内沿岸地域全体の中での分銅形土製品の形態、顔面表現方法、厚み、赤彩などについて追求していくと考えている。また分銅形土製品だけではなく、同時期の土製品や木製品などの顔面表現方法の対比等も試みたいと考えている。本稿の執筆に際し、ご指導を頂きました愛媛大学教授下條信行先生、赤色顔料の鑑定についてご助言を頂きました福岡市埋蔵文化財センターの本山光子女史と宮内庁正倉院事務所の成瀬正和氏に厚くお礼申しあげます。

〔註〕

(1・2) 燕谷・文京I資料は、形態からみると、本来は人面形土製品と呼ぶべきものであるが、顔面の表現方法に分銅形土製品に類似する点があり、当地域の分銅形土製品の諸特徴を備えた資料として、一応分銅形土製品の範疇に含まれるものとする。

表7 分銅形土製品出土地名表 (道後城北地域)

No	資料名	遺跡名	所在地	形態	顔面表現		
					頭髪	眉	目
1	ア4ラA	祝谷アイリ遺跡	祝谷6丁目1277地	II	なし	突唇・鼻一休	縫制(半圓竹管状工具)
2	アイタB	祝谷アイリ遺跡	祝谷6丁目1277地	III	刺突 表面3例 上面6例	刺突2例(左右)	不明
3	文京A	文京遺跡1次	文京町3	I	なし	突唇・鼻一休	縫制
4	文京B	文京遺跡3次	文京町3	II	刺突 表面3例 側面3例 裏面1例	突唇	縫制
5	文京C	文京遺跡3次	文京町3	II	なし	突唇(半圓)	縫制
6	文京D	文京遺跡3次	文京町3	I or IV	顔面表現なし・表面裏面刺突あり		
7	文京E	文京遺跡3次	文京町3	I	顔面表現なし		
8	文京F	文京遺跡3次	文京町3	II	なし	突唇	縫制
9	文京G	文京遺跡3次	文京町3	I	なし	突唇(刺離)・鼻一休	縫制(半圓竹管状工具)
10	文京H	文京遺跡4次	文京町2	II	なし	突唇・鼻一休	縫制
11	文京I	文京遺跡10次	文京町3	I	なし	突唇・鼻一休	縫制
12	文京J	文京遺跡11次	文京町3	I	顔面表現・文様あり		
13	御寺寺山	御寺寺山東麓遺跡	祝谷3丁目	I	刺突 表面2例	突唇・鼻一休	縫制
14	六丁場A	祝谷六丁場遺跡	祝谷6丁目1122地	II	なし	突唇・鼻一休	縫制
15	六丁場B	祝谷六丁場遺跡	祝谷6丁目1122地	III	刺突 表面2例	突唇・鼻一休	縫制
16	六丁場C	祝谷六丁場遺跡	祝谷6丁目1122地	III	なし	突唇・鼻一休	縫制
17	六丁場D	祝谷六丁場遺跡	祝谷6丁目1122地	III	なし	突唇(刺離)・鼻一休	不明
18	六丁場E	祝谷六丁場遺跡	祝谷6丁目1122地	I	刺突 表面1例 側面2例	突唇(一部残存) ・背面に刺突	不明
19	六丁場F	祝谷六丁場遺跡	祝谷6丁目1122地	I	刺突 表面2例 側面2例 裏面2例	なし	なし
20	六丁場G	祝谷六丁場遺跡	祝谷6丁目1122地	I	顔面表現なし・文様あり		
21	六丁場H	祝谷六丁場遺跡	祝谷6丁目1122地	I	顔面表現・文様なし		
22	六丁場I	祝谷六丁場遺跡	祝谷6丁目1122地	III	顔面表現・文様なし		
23	六丁場J	祝谷六丁場遺跡	祝谷6丁目1122地	III	顔面表現なし・くびれ部に刺離2条		
24	六丁場K	祝谷六丁場遺跡	祝谷6丁目1122地	III	なし	なし	なし
25	六丁場L	祝谷六丁場遺跡	祝谷6丁目1122地	IV	顔面表現・文様なし		
26	蒙谷	道後蒙谷遺跡	道後蒙谷町5-32	VI	刺突 表面2例	なし	縫制(半圓竹管状工具)

口	耳	赤 彩	最大厚 (cm)	時 期	参考文献	資料名	No.
縫刻(半月形)、平轍竹管状工具	一孔(両側) 〔表面-裏面〕		1.2	後・前		アイリA	1
不明	なし	全 面	2.1	後・前		アイリB	2
鉤突	一孔(右のみ) 〔表面-裏面〕		1.4	中・後	①②⑤	文京A	3
不明	二孔(右のみ) 〔裏面-裏面〕 〔裏面-くひれ部〕	全 面	1.6	中・後	①②⑤	文京B	4
不明	一孔(右のみ) 〔表面-裏面〕		1.3	中・後	①②⑤	文京C	5
			1.3	中・後	①②⑤	文京D	6
			0.7	中・後	①②⑤	文京E	7
不明	一孔(左のみ) 〔表面-裏面〕		1.2	中・後	①②⑤	文京F	8
縫刻(半月形)、平轍竹管状工具	一孔(両側) 〔表面-裏面〕	全 面	1.2	中・後	①②⑤	文京G	9
縫刻(横一線)	二孔(両側) 〔表面-裏面〕		1.2	中・後	②⑤	文京H	10
なし	一孔(左のみ) 〔裏面しない〕		3.0	中末~後期	⑤⑦	文京I	11
			1.2	?	⑤	文京J	12
縫刻(横一線)	二孔 〔表面-裏面〕	全 面	1.1	?	①⑤	御幸寺山	13
縫刻(横一線)	三孔(左) 〔表面-裏面・一孔は未貫通〕 一孔(右) 〔表面-裏面〕	表 面	1.2	中・中	②⑤⑧	六丁場A	14
縫刻(横一線)	側面三孔(左のみ) 裏面四孔 〔表面-裏面〕		1.5	中・中	②⑤⑧	六丁場B	15
縫刻(横一線)	一孔(両側) 〔表面-裏面〕		1.3	中・中	②⑤⑧	六丁場C	16
不明	四孔(右) 五孔(左) 〔表面-裏面〕 〔裏面-裏面〕	裏 面	1.4	中・後	②⑤⑧	六丁場D	17
不明	なし	周部分	1.2	中・後 中・後	②③④	六丁場E	18
なし	なし		0.8	中・中	②⑤⑥	六丁場F	19
			1.8	中・後	②⑤⑥	六丁場G	20
		全 面	1.8	中・中	②⑤⑥	六丁場H	21
		全 面	2.5	中・後	②⑤⑥	六丁場I	22
			2.8	中・後	②⑤⑥	六丁場J	23
なし	四孔(両側) 〔表面-裏面〕		1.4	中・中	②⑤	六丁場K	24
			1.1	?	③	六丁場L	25
縫刻(横円形)	なし		1.5	中・後	②③⑤	篠谷	26

考 察

【参考文献】

- ①愛媛県 1986 「愛媛県史 資料編 考古」
- ②古代学協会四国支部 1988 「松山道後城北の弥生遺跡をめぐって」(シンポジウム資料)
- ③宮崎泰好 1989 「道後駒谷遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会
- ④財愛媛県埋蔵文化財調査センター 1989 「駒谷六丁場遺跡」
- ⑤谷若倫郎 1989 「分銅形土製品にみる地域相」『花園史学10号』
- ⑥愛媛大学埋蔵文化財調査室 1989 「文京遺跡第8・9・11次調査」
- ⑦愛媛大学埋蔵文化財調査室 1990 「文京遺跡第10次調査」
- ⑧松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター 1991 「駒谷六丁場遺跡」

V-3 道後城北遺跡群の須恵器

宮内 慎一・山之内志郎

1. はじめに

道後城北遺跡群は松山平野のやや北寄り、松山城を擁する勝山の北に広がる平野部と丘陵部で構成されている。これまでの発掘調査結果の蓄積とその研究によって、この地域を「道後城北遺跡群」と呼ぶにふさわしい複数集落の様相が浮かび上がってきた。しかし、その研究は緒についたばかりで、特に古墳時代の集落經營の様相は極めて不明な点が多い。そこで本稿では、これまで出土した須恵器の形態や分布状況より5～7世紀の古墳時代集落の一端を見たいすべく論を進めていくことにする。

まず時期区分であるが、これについては須恵器の型式によりI・II・III・IV期の4区分として型式分類を行った。I期については、初期須恵器と呼ばれる段階の須恵器以降のものがこれにあたる。II期は出土資料が多く、その必要性から前後の2段階に区分した。また、III・IV期については出土資料が少なく、あえて区分はしなかった。加えて、現在、松山平野の須恵器の編年については、不明瞭な点が多く、各型式を細分類することは困難であるため、今回は、この5区分におさめた。また、各型式の須恵器を論ずるにあたり本稿では、造構に伴う遺物を基準資料とした上、蓋環を中心実測図を掲載し型式分類を行った。そのため一般的な須恵器編年に照らし合わせるならば、表8のように中村編年に併行するものと考えられる。

〔宮内・山之内〕

表8 須恵器型式分類表

型 式(期)	I	II		III	IV
段 階		前 半	後 半		
中 村 編 年 (型式・段階)	I	II	II	III	IV・V
絶 对 年 代	4・5	1・2	3・4・5・6		
	5世紀		6世紀		7世紀以降

2. 型式分類

(1) I期(第80、81図)

この型式の須恵器は、道後姫塚遺跡(現にぎたつ会館敷地内)と若草町遺跡(現松山市総合福祉センター敷地内)、東雲神社遺跡他から出土したものである。

环蓋(第80図1～6、第81図7・8)

口径は10～11cmのものと12～13cmのやや大型のものがある。天井部は丸みをもつものと、

やや扁平のものがある。天井部と口縁部を分ける稜は断面三角形の鋭いものとやや鈍いものがある。口縁部は直下に下がるもの、外反するもの、内湾気味に下がるものがあり、端部は尖るものと尖り気味に丸いものがある。口縁部の高さは2cmを越える。内面は内傾する段をなし、中凹みの面を有するものが多くみられる。天井部外面は、その2分の1程度に回転ヘラ削り調整が施されている。

坏身（第81図9～12）

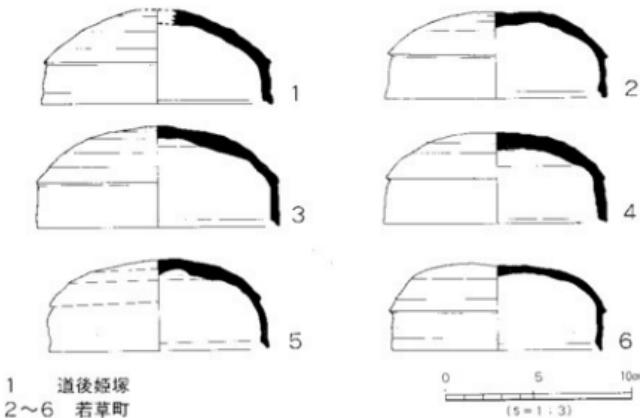
坏蓋と同様、口径に差がみられる。たちあがりは内傾するものと内傾して後直立するものがある。たちあがり高は1.6～1.8cm程度のものが多い。端部は尖り気味で内傾する段をなす。坏蓋と同様に端部に中凹みの面がみられるものが多い。受部は水平にのびるもの、やや上外方にのびるものがあり、端部は尖り気味である。受部基部に沈線が巡るものが多くみられる。底部は丸いもの、扁平なものがあり、底部外面へラ削りは2分の1前後である。

高坏（第81図13～17）

小型の有蓋高坏である。蓋は天井部は丸みをもち、中凹みのつまみが付く。断面三角形の稜をもち口縁端部は内傾する中凹みの面を有する。坏部は坏身と同様の形態をなす。脚部はハの字形に外反し、端部付近で段をなし裾部は甘く内傾する。脚体部には、台形状のスカシ窓が三方向にみられる。

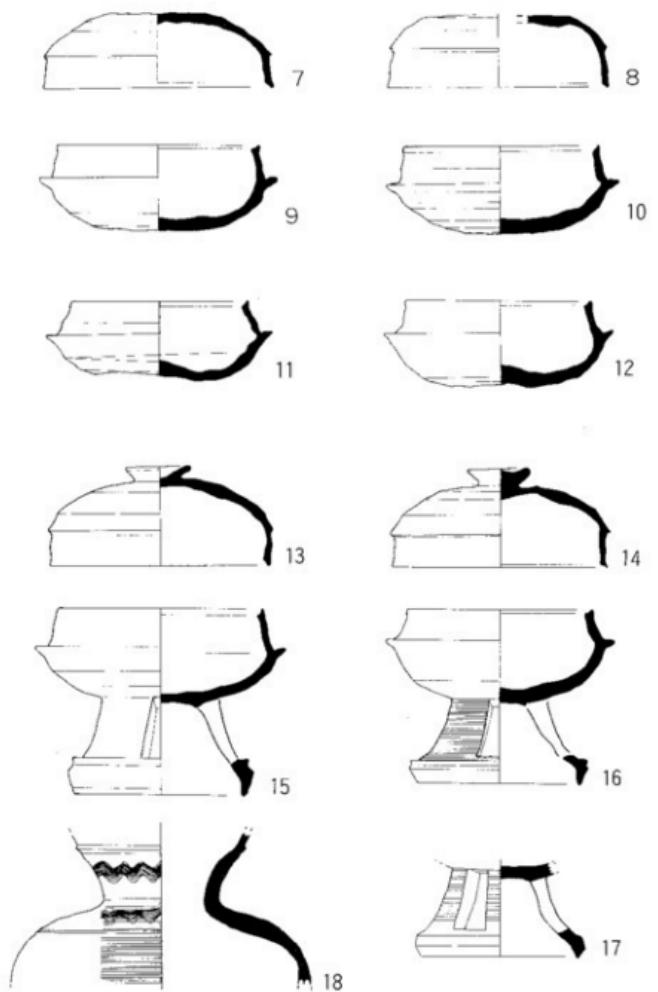
甌（第81図18）

大型の甌である。口頭部には1条の明瞭な凸線が巡り、凸線下に櫛描の波状文がみられる。体部は肩が張り、体部上半にその最大径を求めることができる。体部上部に1条の凹線が巡る。肩部にも櫛描きの波状文がみられ体部外面には回転カキ目調整が施されている。



第80図 道後城北遺跡の須恵器Ⅰ期(I)

道後城北遺跡群の須恵器



7・8 10~14・17 若草町
9・15・16 道後姫塚 18 東雲神社

0 5 10cm
(S = 1 : 3)

第81図 道後城北遺跡の須恵器 I 期 (I)

(2) II期(第82~85図)

全体としてI期に較べ、やや器形が大型化する。環蓋は稜の有無、环身は、たちあがり・器高の高低により前後半に分けた。

II期 前半(第82・83図)

この型式の須恵器は、道後今市遺跡、文京遺跡、祝谷六丁目遺跡、若草町遺跡、祝谷古墳群、桜谷古墳群他から出土している。

环蓋(第82図19~22・第83図23・24)

口径は13~15cm程度になり、天井部はやや扁平のものが多くみられる。天井部と口縁部を分ける稜はI期に比較して明瞭でなく代わって凹線が巡るものもある。口縁部は外反するもの、直下に下がるものがあり、端部は尖り気味で内傾する段をなす。但し、幅広の凹線が巡るものについては端部は丸く仕上げられ内傾する段のみられないものがある。また、この器種に、口唇部に刻目が施されているものがある(第83図23)。天井部外面2分の1前後に回転ヘラ削り調整がみられる。

环身(第83図25~32)

环蓋と同様にやや大型化している。たちあがりは、I期に比較してやや低く内傾し端部は内傾する段をなすものと丸いものがある。たちあがり高は1.5~2.0cm前後である。受部は水平もしくはやや上外方にのびる端部は尖り気味に丸い。底部は丸みをもつものと平底風のものがあり、底部外面の回転ヘラ削りは2分の1から3分の1程度である。

高环(第83図33・34)

この型式の高环の類例は少ない。わずかに桜谷1号墳出土の無蓋高环をあげることができる。小型の高环で形態的には、やや外反気味にのびる口縁部をなし、环体部中位や下方に稜をなす。脚基部は細く外反しながら下がり端部に至る。脚体部には凹線が巡るものもあり、1段の細長い台形状の透かし窓がみられる。



19



20



21



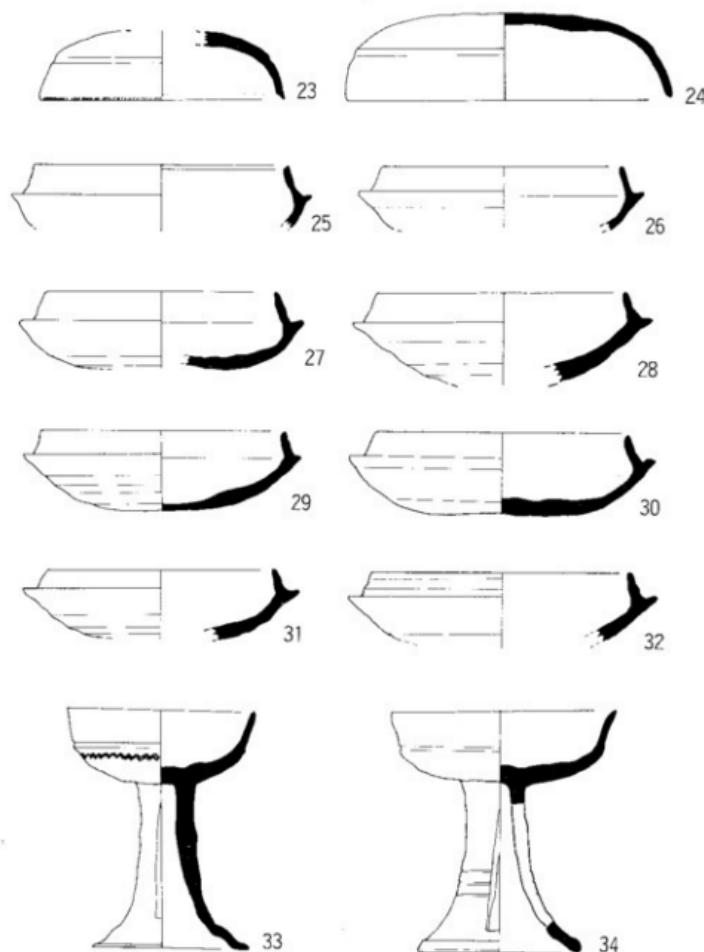
22

19・20 文京2次 21・22 若草町



第82図 道後城北遺跡の須恵器II期前半(1)

道後城北遺跡群の須恵器



23・26・28 道後今市I次 32 道後今市II次
24・30・32 道後今市III次 25・31 祝谷六丁目
27 若草町 29 文京6次 33・34 桜谷1号墳

0 5 10cm
(S = 1 : 3)

第83図 道後城北遺跡の須恵器II期前半(2)

II期 後半（第84・85図）

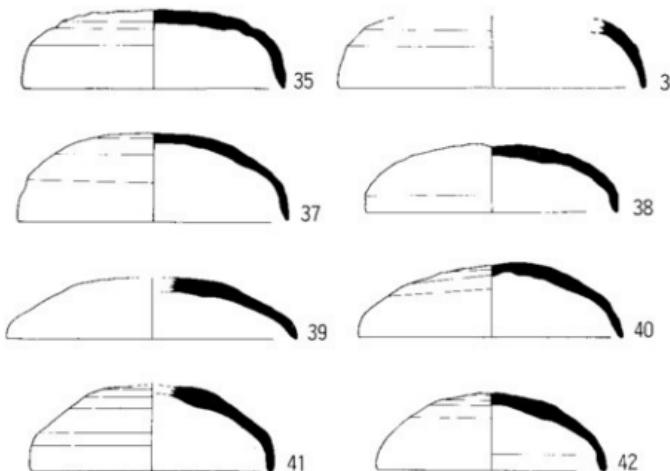
この型式の須恵器は道後今市遺跡I～IV・VI次調査地点、若草町遺跡、祝谷アイリ遺跡他から出土している。

壺蓋（第84図35～42）

天井部と口縁部を分ける稜のようなものは全く消え、天井部から口縁部にかけて丸くなだらかなカーブを描いている。但し、口径11cm前後のものについては天井部が丸みをもつが尖り気味で外面にはヘラ切り痕が残るものが多くみられる。口縁部はやや直立気味に下がるもの、外反気味に下がるものがあり端部は丸く仕上げるものが多い。天井部外面のヘラ削りは3分の1程度である。

壺身（第85図43～50）

前半に較べて器高が低くなる。たちあがりはより短く内傾し、たちあがり高は0.5～1cm程度である。端部は丸いもの、尖り気味に丸いものがあるが段をなすものはほとんどみられない。受部は比較的短くなり端部は尖り気味なもの、丸いものとがある。底部は丸底のものや扁平のものがあるが、たちあがり高が0.5cm程度の器種については平底風のものが多く、外面にはヘラ切り痕が残るものが多くみられる。底部外面のヘラ削りは2分の1から3分の1程度である。



35 祝谷アイリ 36 文京8次 37 道後今市III次
38 道後今市IV次 39～42 若草町

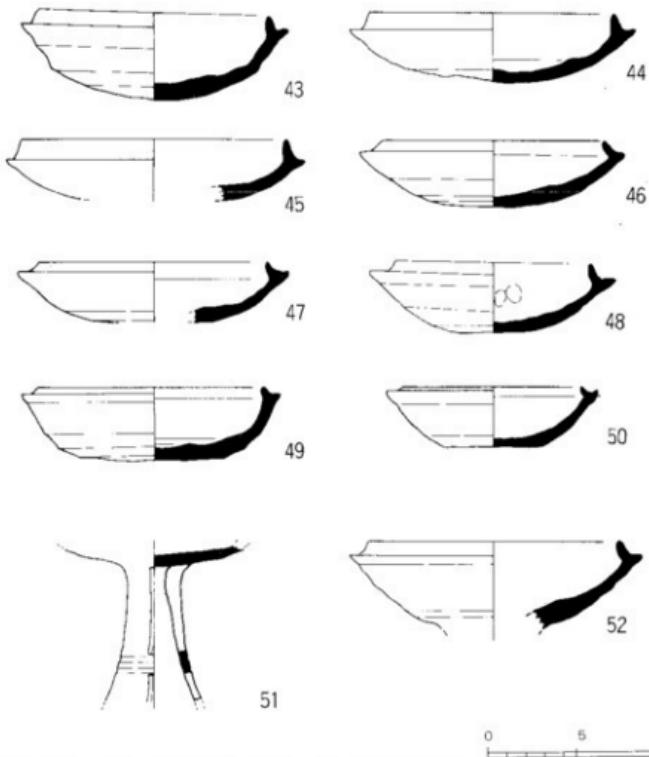
0 5 10cm
(5 = 1 : 3)

第84図 道後城北遺跡の須恵器II期後半(1)

道後城北遺跡群の須恵器

高环 (第85図51・52)

环部は环身と同様の形態をなす。脚基部は細く緩やかに外反する。脚体部には2本の凹線がみられ、その上下に長方形の透かし窓が2方向にみられる。



43・52 祝谷アイリ 45 道後今市II次 46 道後今市III次
49 松山北高2次 47・48・50・51 若草町

第85図 道後城北遺跡の須恵器II期後半 (2)

(3) III期(第86図)

この型式の須恵器は前段階の蓋坏の形態が全く逆転する段階のものである。坏蓋は、つまみが付き、かえりが出現し、坏身については前段階の蓋を逆転させたようなものと、高台の付くものとがある。道後今市遺跡I・II・IV次調査地点、若草町遺跡、松山大学構内2次調査地点他から出土した数点である。

坏蓋(第86図53・54)

口径は10cm前後のものと13~14cmのやや大型のものがある。天井部は丸みをもつもの、扁平なものがあり、内面にはかえりを有する。口縁端部及びかえりの端部は、やや尖り気味である。天井部外面のヘラ削りは2分の1程度である。

坏身(第86図55・56)

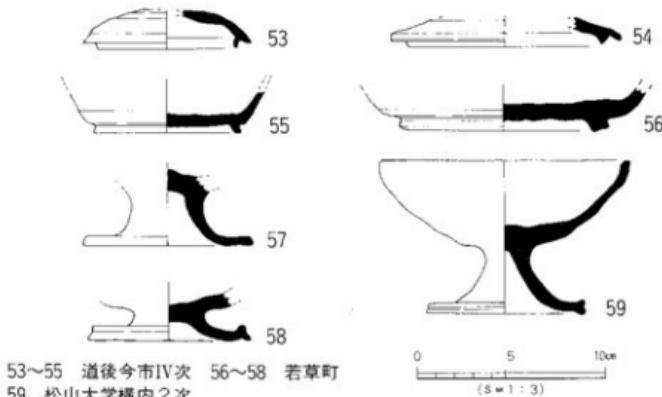
前段階の蓋を逆転させたかのような形態のものと高台の付くものがある。前者は資料がわずかであるため図示していない。後者については比較的高い高台がハの字形に付き端部はわずかに段をなし、内端部が接地する。高台から底体部端にかけて回転ヘラ削り調整を施しているものがある。

高坏(第86図57~59)

小型で高さの低い高坏である。脚部は2~4cm程度である。やや椀形に近い坏部をもつ。口縁端部は丸く仕上げられている。脚部は短く裾を広げるものと、端部で下方へ屈曲させ段をなすものとがある。

(4) IV期(第87図)

この型式は、前段階の蓋にみられるかえりが消失する形態の出現をもってはじまる。道後今市遺跡I次調査地点、若草町遺跡、松山北高2次調査地点他から出土したものである。



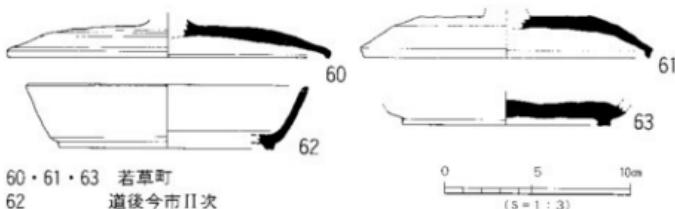
第86図 道後城北遺跡の須恵器III期

环蓋（第87図60・61）

口径16~18cm程度になり、前段階に較べて器形が大きくなる。天井部は扁平になり、前段階にみられたようなかえりはなくなる。代わって口縁端部に鈍い稜を持ち、それより短く屈曲するつまみだしがみられるようになる。その端部は尖り気味である。天井部外面には肩部付近まで、ほぼ2分の1前後に回転ヘラ削り調整が施されている。

坪身（第87図62・63）

平底のものはあまりみられない。高台の付くものは直立気味な高台を伴う。その貼り付けする位置は前段階のものより底部端になり、接地面はほぼ平らであり、凹面をなすものもみられる。体・底部外面には回転ヘラ削り調整が施されているものが多い。〔宮内〕



第87図 道後城北遺跡の須恵器IV期

3. 遺構と遺物

道後城北遺跡内でこれまでに検出された古墳時代の遺構と遺物について、出土資料の評価をその出土状況より、①遺構、②包含層、③遺構+包含層の3種類に分けた（表9）。

- ①遺構——住居址・溝・土壙等の集落に関連するものと古墳である。
- ②包含層——明確な遺構に伴わず、包含層から出土したものである。他に表採資料、出土地点不明のものも含む。

③遺構+包含層——同じ時期の資料が遺構からも包含層からも出土している場合である。

このようにして、道後城北地区の古墳時代の遺構・遺物の分布状況から集落の立地や様相を考えることにする。

(1) 地区割り（第89図）

谷若倫郎氏の地区割に準じ、遺跡群内を城北・道後・祝谷の3地区に区分した。そのうち主要な遺跡は次のとおりである。

城北地区 扇状地には文京遺跡、松山大学構内遺跡、松山北高遺跡、道後橋又遺跡、若草町遺跡が、丘陵地には東雲神社遺跡がある。

道後地区 扇状地には道後今市遺跡が、丘陵地には道後姫塚遺跡がある。

祝谷地区 丘陵地には祝谷アイリ遺跡、祝谷六丁目遺跡、祝谷六丁場遺跡、祝谷本村遺跡等があり、古墳は祝谷古墳群、桜谷古墳群がある。

(2) 遺構・遺物の分布 (第89図、表9)

I期 城北地区一若草町遺跡、東雲神社遺跡がある。若草町遺跡では竪穴式住居址や周溝 (S D12) 他と遺物が検出されている。丘陵地には東雲神社遺跡があり遺物が包含層中より出土している。道後地区一扇状地では道後今市遺跡I次調査があり、包含層中より遺物が出土している。丘陵地では道後姫塚遺跡の竪穴式住居址 (S B 1) より遺物が出土している。祝谷地区一祝谷六丁目遺跡、祝谷山田遺跡において包含層中より遺物が数点出土している。

この時期は祝谷地区においては明確な遺構は確認されておらず、丘陵地では、わずかに道後姫塚遺跡に集落関連遺構が検出されているのみである。扇状地では若草町遺跡周辺の地域に集落が営まれていたものと考えられる。

II期 前半 城北地区一松山北高2次調査地点、文京遺跡2、6、10次調査地点、若草町遺跡がある。松山北高遺跡2次調査地点からは上器溜りよりこの時期以降IV期までの遺物が混在して出土している。文京遺跡2、6次調査地点では包含層中より遺物が出土しており、若草町遺跡からは竪穴式住居址や溝と遺物が出土している。道後地区一道後今市遺跡I～IV次調査地点では遺構と遺物が検出されている。道後今市遺跡1次調査地点では、II期前半の遺物が包含層より出土しており、口縁端部に刻目が施されている坏蓋が数点出土している。同II・III次調査地点では土壙及び包含層からの出土である。同IV次調査地点からは竪穴式住居址、掘立柱建物址と遺物が検出されている。祝谷地区一祝谷六丁目遺跡、祝谷六丁場遺跡、祝谷山田遺跡があり、古墳では祝谷古墳群、桜谷古墳群がある。古墳以外はすべて包含層からの出土である。

この時期は祝谷丘陵において古墳の經營がみられる。そして扇状地では道後今市遺跡及び若草町遺跡周辺地域に集落が経営されていたものと考えられる。

II期 後半 城北地区一松山北高2次調査地点、文京遺跡8、10次調査地点、若草町遺跡がある。文京遺跡8次調査地では自然流路より遺物が出土している。同10次調査地点では包含層中からの出土である。若草町遺跡からは、竪穴式住居址、溝の他、包含層より遺物が出土している。道後地区一道後今市遺跡I～IV、VI次調査地点で、遺構、遺物が検出されている。道後今市遺跡I、IV次調査地点では包含層中よりの出土であり、同II次調査地点では土壙 (SK13)、同III次調査地点では土壙 (SK25) より遺物が出土している。同IV次調査地点では竪穴式住居址 (S 102) より遺物が検出されている。祝谷地区一祝谷アイリ遺跡、祝谷六丁場遺跡がある。祝谷アイリ遺跡では竪穴式住居址 (S B 2) と遺物が検出されている。他に祝谷六丁場遺跡からは包含層中より遺物が出土している。

この時期は、祝谷地区において明確な集落関連遺構が検出されたのは初例であり、扇状地では道後今市及び若草町遺跡周辺において集落が継続して営まれていたことがうかがわれる。

道後城北遺跡群の須恵器

表9 道後城北遺跡群の概要一覧

番号	遺跡名	立地 (標高:m)	種類	型式				備考
				I	II	III	前後	
A	祝谷アイリ	丘陵(65.0)	包・集		●	○		住居址
B	祝谷本村	"(45.0)	包・集			○	○	
C	祝谷六丁目	"(90.0)	包・集	○		○	○	
D	祝谷六丁場(市)	"(63.3)	包・集	○	○			
E	祝谷六丁場(縣)	"(60.0)	包・集		○			
F	祝谷山田	"(80.0)	包含層	○	○			
G	祝谷丸山	"(55.0)	包含層		○			
H	松山北高2次	扇状地(24.0)	包・集	○	○	○	○	
I	文京2次	"(27.9)	包・集		○			
J	文京6次	"(29.0)	包含層	○				
K	文京8次	"(30.5)	包・集		○			溝
L	文京9次	"(27.5)	包・集			○		
M	文京10次	"(29.0)	包・集	○	○	○		
N	松山大学2次	"(25.5)	包・集			○		住居址
O	道後桶又II	"(29.3)	包・集			○		溝
P	東雲神社	丘陵(65.0)	包含層	○				
Q	若草町	扇状地(23.5)	包・集・墓	●	●	●	○	住・溝
R	道後姫塚	丘陵(49.0)	包・集	○				住居址
S	道後今市I次	扇状地 (33.8~ 34.5)	包・集	○	○	○	○	
T	道後今市II次		包・集・墓	●	●	●		土壙
U	道後今市III次		包・集	○	○	○	○	住居址
V	道後今市IV次		包・集	●	●			住居址
W	道後今市VI次	扇状地(31.0)	包・集		○			
X	祝谷古墳群	丘陵(90.0)	古墳	○				古墳
Y	桜谷古墳群	"(218)	古墳	○				古墳

※ ○遺構 ○包含層 ●遺構+包含層

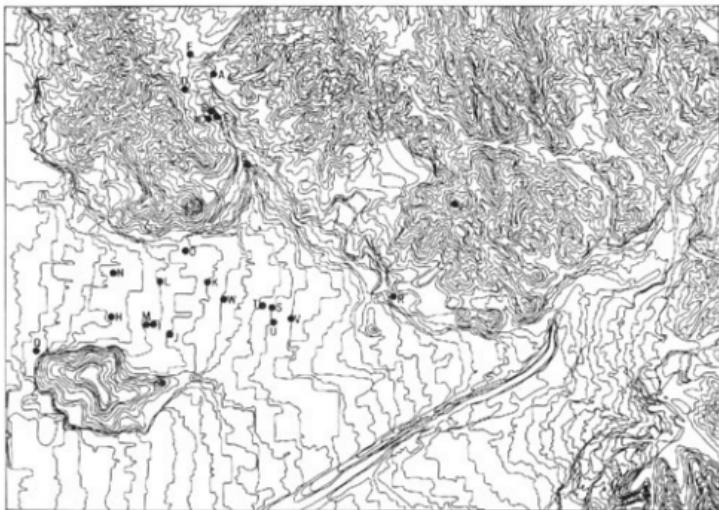
III期 城北地区—松山北高2次調査地点、文京遺跡9、10次調査地点、松山大学構内遺跡2次調査地点若草町遺跡がある。文京遺跡9、10次調査地点では包含層からの遺物の出土である。松山大学構内遺跡2次調査地点からは竪穴式住居址よりこの時期の遺物が出土している。この他、若草町遺跡では竪穴式住居址の他、包含層中からの遺物の出土がある。道後地区—道後今市遺跡I、III次調査地点があるが、すべて包含層からの出土である。祝谷地区—祝谷六丁目遺跡、祝谷本村遺跡があるが包含層からの出土であり、その量は少ない。

この時期になると集落関連遺構の検出が各地区とも少なくなり、わずかに若草町遺跡周辺において集落が継続して営まれていたものと考えられる。

IV期 城北地区—道後樋又II遺跡、若草町遺跡がある。道後樋又II遺跡では自然流路内より遺物が検出されている。若草町遺跡では包含層からの出土である。道後地区—道後今市遺跡I、III次調査地点があるが、これらもすべて包含層中からの出土である。祝谷地区—祝谷六丁目遺跡、祝谷本村遺跡がある。包含層からの出土であるが、その量はごくわずかである。

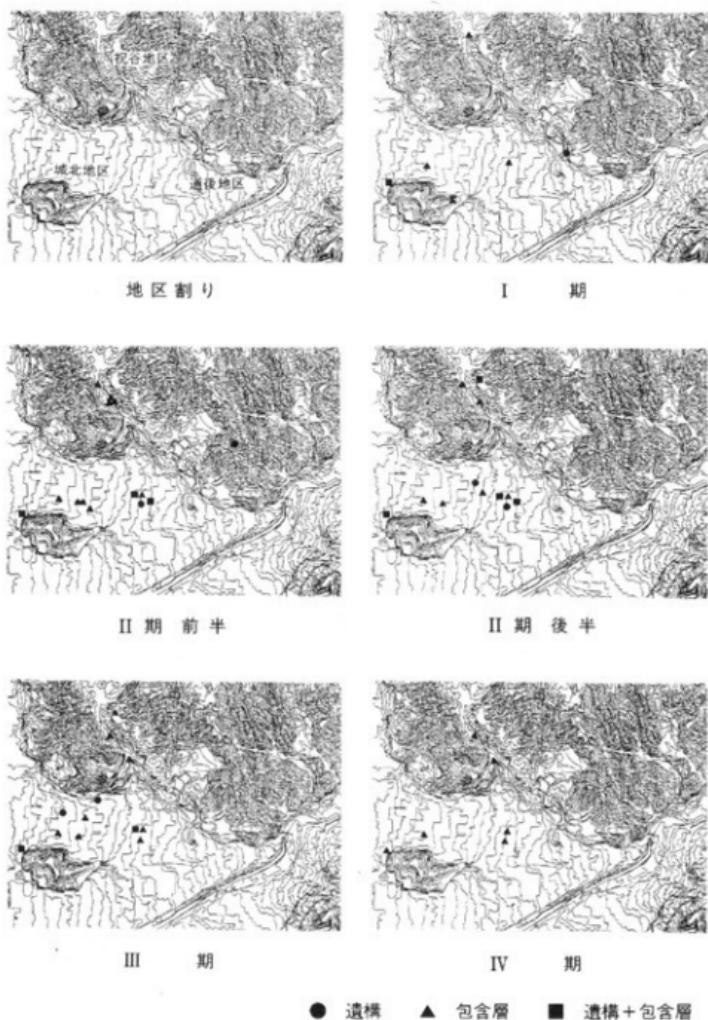
この時期になると扇状地においても集落関連遺構の検出はわずかになり、遺物の出土量も減少化している。

〔宮内〕



第88図 道後城北地区の主要遺跡の分布図

道後城北遺跡群の須恵器



第89図 道後城北遺跡の遺構・遺物分布図

4. 小 結

本論では道後城北遺跡群の古墳時代における集落の立地や動態を須恵器の分布等をもとに考えてみた。それによると、道後城北地区全体としての須恵器の出現は、それをⅠ期に求めることができる。それに対して衰退はⅢ期後半のはじまりにあると考えられる。遺物の出土量が減少し、その出土範囲も限られてくる。第90図は各時期における壺蓋、壺身、高壺、その他の器種の編年試案である。同一遺構内から各器種が共存している例が少なく、同一時期で多遺構の資料を採用したため、多少問題点はあるが、各器種のおおまかな形態変化はつかむことができた。次に、集落の形成については、丘陵地と扇状地ではその性格に多少の差異が認められる。祝谷丘陵では出土資料の多くがⅡ期に集中しており、古墳もまたⅡ期前半の時期に限られていることから生活と墓が近接した位置に営まれていたことがわかる。道後・城北両地区的丘陵では、道後姫塚遺跡、東雲神社遺跡においてⅠ期の資料が出土しているにすぎず様相については不明である。扇状地における初現は城北地区的若草町遺跡である。Ⅰ期からⅢ期にかけ長期にわたり集落を形成していたものと考えられる。次の段階に集落関連遺構が集中して検出されるのは道後地区の道後今市遺跡周辺である。Ⅱ期からⅢ期前半にかけてその最盛期をなし、Ⅲ期後半でほぼ終末期を迎える。

これらのことから判断すると丘陵地においては、Ⅱ期を中心とした短期間での集落の営みがうかがわれる。それに対して扇状地では、若草町遺跡を別にするならばⅡ期前半からⅢ期前半を中心としながらも長期間にわたり、繁栄・衰退を繰り返していたものと思われる。その他、特筆すべき資料として「3. 遺構と遺物」の分布でもふれたが⁶、道後今市遺跡Ⅰ次調査地点で出土した口縁端部に刻み目が施されたⅡ期前半の壺蓋をあげることができよう。この資料は当該地域は勿論のこと、松山平野内でも類例がみられず、他地域との交流を物語る資料として注目されるものである。以上のように、本論では集落の立地・動態や変遷を、須恵器の分布をもとに考えてみたわけであるが充分に追求されたものとはいせず、概観するにとどまった。今後は本論を新しい資料で補強しつつ、遺構の面からも丘陵地や扇状地における集落の様相や動態を明らかにし、古墳時代における当地域の集落の変遷を考えいかねばならないであろう。

また、今回は、論考の範囲を道後城北遺跡群に限ったわけであるが、今後は桑原地域、福音寺、米住庵寺など他地域との関連性を求め、松山平野における古墳時代の集落の変遷を論考していくかなければならないであろう。資料調査にあたり、愛媛県教育委員会、財愛媛県埋蔵文化財調査センターの皆様方には多大の協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

〔宮内・山之内〕

道後城北遺跡群の須恵器(試案)

(S=1:6)

	坏 蓋	坏 身	高 坏	その 他	主要遺跡
I 期	1	2	3 4	5 6 7	若草町遺跡 道後姫塚遺跡 東雲神社遺跡 道後今市遺跡I次調査 祝谷六丁目遺跡
II 期 (前)	8 9	10 11	12		松山北高遺跡 文京遺跡2・6・10次調査 祝谷六丁場遺跡 若草町遺跡 道後今市I～IV次調査 祝谷古墳群・桜谷古墳群
II 期 (後)	13 14	15 16	17 18	19	文京遺跡8・10次調査 若草町遺跡 祝谷アイリ遺跡 祝谷六丁場遺跡
III 期	20	21	22	23 24	松山大学構内遺跡2次 若草町遺跡 祝谷六丁目遺跡
IV 期	25	26		27	道後塙又遺跡 祝谷六丁目遺跡 祝谷本村遺跡

[遺跡・遺構] 若草町遺跡 S D 12 ①②③、S D 2 ⑥、S D 26 ⑦、S B 18 ⑭、S D 8 ⑯、包含層出土 ⑰⑱⑲⑳⑳⑳ 道後姫塚遺跡 S B 1 ④

東雲神社遺跡 ⑤ 文京遺跡2次調査地 ⑧ 道後今市遺跡I次調査地 ⑪⑫⑬ 道後今市遺跡II次調査地 S K 32 ⑯ 道後今市遺跡III次

調査地 S B 3 ⑨ 道後今市遺跡IV次調査地 S 102 ⑩ 桜谷1号墳 ⑮ 祝谷アイリ遺跡 S B 2 ⑬ S B 1 ⑮ 松山大学構内遺跡2次調査 S B 9 ⑯

古代学協会四国支部 1988「道後城北遺跡をめぐって」シンポジウム資料 松山市教育委員会「松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ・Ⅲ」・「松山市埋蔵文化財調査報告書 松山大学構内遺跡」1991

松山市「松山市史料集－考古編」1981 愛媛県教育委員会「道後姫塚遺跡埋蔵文化財調査報告書」1977 「愛媛県立松山北高等学校遺跡埋蔵文化財調査報告書」1981

愛媛県「愛媛県史 資料編 考古」1986 愛媛県埋蔵文化財調査センター「道後今市松山市埋蔵文化財調査報告書」1985 「一般県道「菅沢一松山線」埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」1980

愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛大学「文京遺跡8・9・11次調査」1990 「文京遺跡10次調査」1991

第90図 道後城北遺跡群の須恵器

VI 祝谷アイリ遺跡の調査成果と課題

祝谷アイリ遺跡調査は、道後城北遺跡群祝谷地区の弥生時代の集落構造解明を目的として実施した。調査・研究の結果、(1)祝谷地区の弥生～古墳時代の集落様相、(2)道後城北遺跡群の集落様相、(3)祝谷地区の自然環境を追究するものとなった。

(1) 祝谷地区では、祝谷六丁場遺跡・祝谷六丁目遺跡等の調査より弥生時代中～後期と古墳時代の遺構・遺物が確認され丸山川右岸の集落様相が明らかとなっていた。一方、本調査地のある丸山川左岸の様相は、本格的な調査に恵まれなかったことから、その様相は不鮮明であった。今回の調査では祝谷六丁場遺跡と同時代同時期(弥生時代中期中葉、同後期前半)の遺物、遺構を確認した。よって、当該期に祝谷地区では丸山川両岸に居住地が存在していたことを確認するものとなった。また、弥生時代に限らず、古墳時代においても傾斜地を居住地として利用していたことを確認したことは、祝谷地区に限らず平野内の同地形立地の遺跡研究や埋蔵文化財調査に対して大きな課題を提示するものとなった。

次に、本調査では、祝谷地区遺跡の出現期について一つの資料を提示するに至った。祝谷地区では、以前より表採及び包含層遺物として縄文時代後期の遺物が確認されていた。本調査においても縄文時代晚期の土器片一点が出土しており、加えて丸山遺跡出土の石器を分析(考察V-1 多田仁)することで、縄文時代以前の祝谷地区における集落存在の可能性がより高いものとなった。また、多田氏の考察は祝谷地区に限らず松山平野の縄文時代以前の石器文化及び石器研究に大いに寄与するものであると考える。今後の継続的な調査と研究に期待するものである。

(2) 道後城北遺跡群内では、平行銅劍22口、石戈1点、イモ貝製縦型貝輪2点、青銅鏡(「日光鏡」)1面が出土しており、弥生時代集落として西日本においても注目される遺跡地帯であることが近年明かとなってきた〔下條信行 1991〕。

本調査では、調査地より出土した分銅形土製品を含め、道後城北遺跡群内出土の同資料を施文形態を中心に分類し、道後城北遺跡群の地域性の分析を試みた〔V-2 山之内志郎〕。分銅形土製品の新たな分析視点を提示し、道後城北群内出土品の施文様相について詳細に分析したことは評価されよう。今後は、平野内外の資料を分析し、分銅形土製品の施文レベルにおける技術論及び文様論を展開し、地域性を追究することが課題であろう。くわえて、本調査出土の分銅形土製品に付着した赤色顔料分析は〔第IV-4 本田光子〕、顔料分析にとどまらず、着色時が明らかになったことで分銅形土製品のひとつの分析方法となりえることを提示できたことは大きい。

祝谷アイリ遺跡調査の成果と課題

次に、本調査では道後城北遺跡群内出土の須恵器とその分布による集落構造分析を試みた〔第V-3 宮内慎一、山之内志郎〕。遺跡群内の須恵器については論考が少なく、また同遺跡群の古墳時代集落研究も低迷している。論考では、遺跡群内出土品(既調査出土品を主に)を資料化し、時間軸を設定した後、各時期における分布と集落の様相を概観した。須恵器の時間軸設定については、これまで部分的に試みられたが、在地品による編年案の提示は皆無に等しい。論考は、道後城北遺跡群という狭い範囲に対する編年案であったが、松山平野の古墳時代研究にとってはその意義は大きいと考える。今後、今回の方法を用い、対象地域を平野全域に広げ、松山平野の須恵器研究を進めなければならないだろう。

(3) 本調査では、土器胎土及び造構内・上器内埋土、建築部材の分析により弥生時代後期前半における祝谷地区の植生復元を試みた。これは、道後城北遺跡群の集落構造や文化を自然環境より解明しようとする試みの一つである。

S K15、S B 2 出土資料を珪酸体と樹種に着目し分析を実施した〔第IV-1・2 杉山真二〕。分析の結果、調査地の植生と土器胎土の採集地に違いがあることなどが判明し、ひとつの成果が得られた。また、比較資料として、同時期(弥生時代後期前半)の平野部遺跡である釜ノ口遺跡7次調査の竪穴式住居址資料を分析した。検出品種や検出値に違いが認められた点は興味深いものであった。今後は、分析を重ね、かつ分析対象や方法を改善し、自然環境の復元を多方面から進めなければならないと考える。

以上、祝谷アイリ遺跡調査より祝谷地区及び道後城北遺跡群の集落様相を追究した。また、新しい視点や分析を提示した。祝谷地区では、平形銅劍や貝輪が出土するなど注目される遺跡が多い。本調査は今後の祝谷地区的調査及び研究の一つの指針となるものであり、調査の意義は大きい。さらに、幾つかの資料分析は各々の研究者が継続し調査、研究していくようとするものであり、今後の成果に期待するものである。

【文 献】

- 下條信行 1991 「松山平野と道後城北の弥生文化」『松山大学構内遺跡』
松山市文化財調査報告書20

遺構一覧

遺構・遺物一覧

- (1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
- (2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。
例) 縄文→縄文土器、弥生→弥生土器、上師→上師器、須恵→須恵器。
- (3) 遺物観察表の各記載について。
 - 法量欄 () : 復元推定値
 - 形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、柄→柄部、胴底→胴部～底部。
 - 胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製度。() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。例) 砂・長(1～4) 多→「1～4 mm大の砂粒・長石を多く含む」である。焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表10 窪穴式住居址一覧

整穴(S8)	時 期	平 面 形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	主柱穴 (本)	内 部 施 設				廻壁構	備 考
					高床	土 塗	炉	カマド		
5	弥生中期中葉	円 形	8.60×6.99×1.70				○			
2	弥生後期	円 形	9.30×4.99×1.10	○		○				
7	古 増	方 形	2.93×0.23×0.06					○	S B7・S B1 改築	
1	古墳後期	方 形	5.14×2.06×0.15				○			
3	古墳後期	方 形	5.30×5.30×0.29	3(1)			○			

表11 窪穴式住居址の炉・カマド一覧

整穴(S8)	時 期	炉	カマド	位 置	平 面 形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	備 考	
							地 四 角	地 三 角
5	弥生中期	○		遺構中央やや南北寄り	地 四 角	1.13×0.79×0.31		
2	弥生後期	○		遺構中央やや南北寄り	地 四 角	2.93×1.30×0.28		
1	古墳後期	○		北壁中央	馬 鞍 形	1.05×1.17×0.22		
3	古墳後期	○		北壁中央	馬 鞍 形	1.13×1.23×0.23		

表12 捩立柱建物址一覧

建物 番号	規 模 (間)	桁 行		梁 行		床面積 (m ²)	時 期	備 考
		実長(cm)	柱間寸法(尺)	実長(cm)	柱間寸法(尺)			
1	2 × 6	760.0	6・5.9・4・4.3	390.0	3・5	27.3	古墳後期	

表13 溝一覧

溝 (SD)	地 区	断 面 形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土 (シルト)	出 土 遺 物	備 考	時 期
1	D8-D9	舟底状	5.30×0.30×0.05	灰褐色	網敷器小片		古墳後期

造構一覧

表14 土壌一覧

土壌 (SK)	地区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	備 考	時 期
1	C9	不整縦円形	直状	3.00×1.90×0.97	灰褐色	骨生		先住後期
2	D6～D7	無凹円形	複数断続	1.13×0.90×0.68	灰褐色		SBSを切る	先住
3	D6	横円形	横円形	1.35×1.07×0.59	灰褐色		SBSを切る	先住後期
4	C9	不整圓形	直状	1.72×0.96×0.22	灰褐色	骨生	SK4・SX010	先住後期
5	C7	横円形	直状	1.58×1.15×0.25	灰褐色	土師		古墳
6	D8	横円形	レンズ状	0.50×0.30×0.40	灰褐色	赤生	SK6→SX02	先住中期
7	D6	不整縦円形	レンズ状	2.29×1.74×0.64	灰褐色砂	骨生	SBSの切跡	先住後期以前
8	D6	横円形	凸凹形状	1.05×0.90×0.56	灰褐色		SBSを切る	先住後期
9	C8	横円形	直状	1.83×1.48×0.24	黒褐色	骨生、土師		古墳以降
10	C8	調大長方形	直状	1.97×1.40×0.19	灰褐色	骨生、土師		古墳以降
11	C8～D8	不整縦円形	直状	1.93×1.25×0.14	灰褐色	骨生、土師		古墳以降
13	C6	横円形	レンズ状	3.00×2.00×0.50	茶褐色	骨生		先住中期以前
14	C8～C9	不整縦円形	直状	0.96×0.90×0.15	灰褐色	骨生		
15	D9	横円形	レンズ状	3.50×2.80×1.00	灰褐色	骨生、石器		先住後期以降

表15 SX(不明造構)一覧

(SK)	地区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	備 考	時 期
02	D7～D8	横円形	レンズ状	10.20×2.30×0.32	暗青灰色		器の方不明	古墳後期以降
07	D9、E9	不整縦円形	円み	4.00×3.00×0.32	B層	骨生、石器	器の方不明	先住中期
08	E8	不整縦円形	円み	1.30×0.35	B層	骨生	器の方不明	先住後期
09	C5	横円形	円み	3.80×3.15×0.37	暗青灰色	骨生、石器	器の方不明	先住後期
010	HR・C9	不整縦円形	レンズ状	8.20×6.20×1.20	暗青灰色	骨生	SK4L層	先住後期

出土遺物観察表

表16 SB5 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 烧 成	備 考	回版
				外 面	内 面			
1	甕	口徑(21.2)	折り曲げの口縁部、底部内面にやわらかな棱をもつ。口縁部は丸い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~5) ○		
2	甕	口徑(22.4)	折り曲げの口縁部、底部内面にやわらかな棱をもつ。口縁部は丸い。	ハケ・ナゲ	ヘラミガキ (ヨコ方向)	石・長(1~4) ○	黒 斑	
3	甕	口徑(25.0)	折り付けの口縁部、口縁部下に断面三角形の凸唇1枚。	①ヨコナゲ ②ハケ・ナゲ	①ヨコナゲ ②磨滅の為不明 (ミガキの可能性あり)	石・長(1~3) ○		
4	甕	口徑(30.9)	折り曲げの口縁部。底部の凸唇又は唇頭部分を施す。	①ヨコナゲ ②ナゲ	①ヨコナゲ ②ミガキ(ヨコ方向)	石・長(1~2) 全 ○		
5	甕	口徑(31.4)	折り曲げの口縁部。底部の凸唇又はヘラ(工具)による削り、口縁部に削り目。	①ヨコナゲ ②磨滅の為不明	①ヨコナゲ ②磨滅の為不明	G・長(1~5) ○		
6	甕	口徑(17.8) 底径(7.4)	底部内面をかく壊す。底部の凸唇は、唇頭部分を施す。	①ヨコナゲ ②ヘラミガキ(擦滅) ③ナゲ	①ヨコナゲ ②ヘラミガキ(擦滅) ③ナゲ	石・長(1~4) ○		
7	甕	直徑(8.6)	平底(わずかに上げる)。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	密 ○		
8	甕	底径(5.2)	くびれの上げ底、支脚。底面部外縁が取り除かれている。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~3) ○		
9	甕	底径 7.3	上げ底。底部外縁が取られ、底面に凹部がある。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~8) ○	黒 斑	
10	ミニチュア	直徑 2.0 底径 5.0	手保ね。上げ底。底面部外縁が取られ、底面に凹部がある。	ナゲ	ナゲ	G・長(1~3) ○		

表17 SB5 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残 寸	材 質	法 量				備 考	回版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
11	石 研	ほぼ完成	緑泥片岩	11.5	4.7	1.35	138.5		19
12	男革狀 完 形			7.3	2.75	1.6	60.2		19

表18 SB5 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 烧 成	備 考	回版
				外 面	内 面			
13	甕	残高 6.0	直縁向平。大豊頬。肩部にヘラ括き文2条。	ナゲ	ナゲ	石・長(1~4) ○		
14	甕	口徑(12.5) 底高 6.6	折り曲げの口縁部。口縁部下に削痕。口縁部丸い。	①ヨコナゲ ②ナゲ	ナゲ	石・長(1~5) ○	黒 斑	

出土遺物観察表

SB 5 出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
15	壺	口径(16.5) 残高 5.0	口縁部貼り付けによる 延縫、側面側面に土痕を施す内面文1条。	④ヨコナデ ⑤焼減の為不明	焼減の為不明	石・長(1~3) ○		
16	壺	残高 5.0	側面に断面三角形の貼り 付け内面文1条。	焼減の為不明	焼減の為不明	石・長(1~4) ○		
17	高杯	口径 12.2 残高 11.0	充填技法。脚端面ナデに よる延縫。底をもつ。	ナデ	焼減の為不明	石・長(1~4) ○		
18	小壺	底径 3.5 残高 10.0	焼減著しい。上げ底の底 部になる可能性がない。	焼減の為不明	焼減の為不明	石・長(1~4) ○		

表19 SB 2 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
19	壺	口径(21.5)	折り曲げの口縁部、口縁 端ナデによる延縫。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~3) ○		
20	壺	口径(18.2)	折り曲げの口縁部、口縁 端ナデのみ。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~3) ○	黒 焼	
21	壺	底径(7.8)	くびれの上げ底。	ヨコナデ	焼減の為不明	石・長(1~4) ○		
22	壺	口径(24.0)	口縫端部貼り付けによる 延縫、断面に周面文4条。 口縫端上部面取り。	焼減のみ不明	焼減の為不明	石・長(1~4) ○		
23	壺	口径(13.8)	短瓶颈。口縫端面ナデ回 み。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~3) ○		
24	壺	口径(9.8)	長瓶颈口壺。口縫端面丸 い。	ナデ	焼減の為不明	石・長(1~4) ○		
25	壺	口径 7.6 残高 10.9	組立発見。口縫端面は曲 取り。	焼減の為不明 (ミガキの可能性あり)	ナデ	石・長(1~2) ○		
26	壺	残高 5.6	断面片。6条以上の凹縫 文。	ナデ→施文	ナデ	石・長(1~3) 全 ○		
27	杯	口径(14.2) 残高 4.2	折り曲げ口縫。口縫端部 丸い。側面内面にゆるや かな模様。	④ヨコナデ ⑤焼減の為不明	④ヨコナデ ⑥焼減の為不明	石・長(1~3) ○		
28	高杯	口径(13.2) 残高 3.3	内口縫。口縫端部面取 り。口縫端外側に所焼痕。	ナデ	ナデ	石・長(1~3) ○		
29	壺	底径(6.3) 残高 2.2	平底(わずかに丸る)。	ハケ→ナデ	ナデ	石・長(1~4) ○	黒 焼	
30	壺	底径 6.8 残高 9.5	丸みのある平底。	ハケ(横方向)	ヘラケズリ	石・長(1~3) 全 ○		

出土遺物観察表

SB 2 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 売 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
31	高杯	口径 6.0 器高 3.2	内側する口縁部、口縁外 面に細文4周。口縁端 丸い。	磨滅の跡不明	ヨコナゲ	石・長(1~2) ○		
32	高杯	口径 5.8	シボリ瓶。柱上部に太い 沈線文を2本以上。	ハラカガキ(縦方向)	シボリ瓶脚 ヨコナゲ	石・長(1~2) ○		
33	高杯	底径(11.5)	組み合せ技法。脚端面は 丸みのある「コ」字状。	磨滅の跡不明	磨滅の跡不明	石・長(1~5) 雲母 ○		
34	支脚	受脚径 6.7 器 高 7.0 底 径 6.2	中央、受面が凹む。	ナゲ		石・長(1~4) ○		
35	环盖	口径 14.4 器高 4.7	回転へき裂り。	①ヨコナゲ ②△ヘラケズリ	ヨコナゲ	石・長(1~5) ○		
36	环基	口径(25.6) 器高 4.1	回転へき裂り。	①ヨコナゲ ②△ヘラケズリ	①ヨコナゲ ②△ヨコナゲ→ナゲ	密 ○		
37	环身	口径 11.9 器高 4.5	回転へき裂り。刃以上 立ち上り内接し、端面丸 くとがる。	①ヨコナゲ ②△ヘラケズリ	①ヨコナゲ ②△ヨコナゲ→ナゲ	石・長(1~4) ○		

表20 SB 2 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残 存	材 質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
38	石壺丁	完 形		12.2	4.7	0.75	66.4		19
39	石壺丁	△		6.1	6.3	1.0	28.65		19
40	石壺丁	△	結晶片岩	6.4	4.4	0.7	44.0	本製品	19
41	石斧	△	安山岩	11.2	5.7	4.2	453.2		19

表21 SB 7 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残 存	材 質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
42	石壺丁	完 形	結晶片岩	13.0	4.0	0.5	50.15		20
43	石壺丁	完 形	結晶片岩	11.7	4.1	0.6	64.2		20

出土遺物観察表

表22 SB1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 燃 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
44	甕	口径(19.8) 残高 5.6	内凹して立ち上がる口縁部。 口縁部上面にナガ削みがある。	①磨滅の跡不明 ②ハケ6本/cm(縦方向)	①ヨコナデ ②ナダ	石・瓦(1~2) 金 ○	一	
45	甕	口径(18.4) 残高 4.5	内凹して立ち上がる口縁部。 口縁部は内側に外反する。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・瓦(1~3) ○		
46	高環	口径(19.1) 基高 17.2 底径(12.9)	中実の柱部、脚端部が上方に上る。	磨滅の跡不明	磨滅の跡不明	砂粒 ○		20
47	高環	口径(13.6) 残高 4.5	口縁部外面に鋭口縁。 口縁部は内側に外反する。	①ヨコナデ ②ハラヘタズリ	①ヨコナデ ②ナダ	密 八		26

表23 SB1 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残 存	材 質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
48	石 瓶	ほぼ完璧	赤色 变石	2.7	1.45	0.23	1.1		29

表24 SB3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 燃 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
49	环垂	口径(14.2) 基高 4.0	口縁部ハラ削り。口縁端部 丸い。	①ヨコナデ ②ハラヘタズリ	①ヨコナデ ②ヨコナデ・ナダ	石・瓦(1~3) ○		
50	环身	残高 3.3	口縁端部を丸く。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ○		
51	甕	口径(18.9) 残高 9.9	口縁部は外側内凹。口縁部 の内ナガによりわずかに肥厚する。	①ヨコナデ ②ハケ(7~8本/cm)	①ヨコナデ ②ナダ	砂粒 ○		
52	甕	口径(11.9) 残高 11.5	口縁端部、上方に貼り付 けたる板張、腹面に複 雑な文様。	①ヨコナデ・筋文 ②ハケ(6本/cm縦方向)	①ヨコナデ ②ナダ ハケ(8本/cm)	石・瓦(1~3) 金 ○		
53	高環	底径(12.1) 残高 11.3	先環状。柱部上部に7条、 柱部に6条の洗掘文。	ハケ(8~9本/cm)	ナダ	石・瓦(1~3) ○		
54	高環	残高 5.1	器形、加工とも異質。 差し込み式。	磨滅の跡不明	ナダ	長(1~3) ウソモ 空		
55	高環	底径(7.9) 残高	先環状。柱部上部に6~ 7条の洗掘文。柱端面に 圓錐文2点。	磨滅の跡不明	ハラヘタズリ ①ヨコナデ	石・瓦(1~4) ○		

出土遺物観察表

表25 SK15 最下部他出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 烧 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
56	壺	口径 12.0 器高 26.2 底径 7.2	尖形。側面部中位に焼成後穿孔。腹部に木口による「ノ」字状文。	①ヨコナゲ ②ヘラミガキ(施減)	ナゲ	石・長(1~5) 多合 ○	出 売	21
57	壺	口径(11.4) 器高 26.6 底径 5.4	口縁部を3分の2近く、側面部下部に焼成後穿孔の可視性が一部で確認された。	①縦ハケ・ヨコナゲ ②縦ハケ	①ナゲ ②強ナゲ上り	石・長(1~2) ○	黑 売	21
58	壺	口径 11.2 器高 39.0 底径 5.8	口縁部を一部欠く。肩部と側面部下位に焼成後穿孔2ヶあり、側面に凸脊文。	①縦ハケ(6本/1cm) ②縦ハケ	①縦ハケ(6本/1cm) ②ナゲ ③ナゲ	石・長(1~2) 全 ○	黑 売	21
59	壺	口径 10.8 器高 31.9 底径 5.4	尖形。側面部下位に焼成後穿孔1ヶあり、口縁部に焼成後穿孔2ヶある「ノ」字状文2段。	①ヨコナゲ ②縦ハケ ③縦ハケ(5本/1cm)	①ヨコナゲ ②ナゲ ③ナゲ	石・長(1~4) ○	出 売	21 27
60	壺	底径 8.2 器高 26.0	口縁部を欠く。底部に焼成後穿孔3条と木口による「ノ」字状文。	(斜上)横ハケ (斜上)横ハケ	(斜上)横カキ・ナゲ (斜上)ナゲ	石・長(1~4) 多合 ○	黑 売	22
61	壺	口径 14.1 器高 30.0 底径 8.2	肩部にヘラ状の唇の押出による「ノ」字状文2段。	①ヨコナゲ ②板ナゲ	①ヨコナゲ (斜上)ナゲ (斜上)カヌリ	石・長(1~6) 多合 ○	黑 売	22
62	壺	口径 8.1 器高 14.2 底径 3.1	口縁部を約2分の1欠く。 底部小さい平底。底部にヘラ状凸出による押出文。	①ヨコナゲ ②ハケナゲ消し	①ヨコナゲ ②ナゲ	石・長(1~7) 草 ○	黑 売	22
63	壺	口径 20.5 器高 16.5	口縁部完全。口縁部:横 沈線と波状文(輪2本)。瓶 底:木口押出	①縦ハケ・施文 ②縦ハケ ③縦ハケ・ヘラミガキ	①ハケ・ヨコナゲ ②縦ハケ(8本/1cm) ③ナゲ上り	石・長(1~5) 多合 ○	—	22 27

表26 SK15 III 層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 烧 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
64	壺	口径(24.7) 器高 18.8	口縁部「ヨ」字状。 縫合ナガリみ。	①ヨコナゲ ②ハケ	①ヨコナゲ ②ハケ	石・長(1~4) 全 ○	—	23
65	壺	口径(24.0) 器高 24.9	口縁部丸みのある「ヨ」 字状。 縫合部へラ工具による押 出文。	①ヨコナゲ ②ハケ(8本/1cm)	①ヨコナゲ ②縦縫合の有無確認でない ③ハケ・一端カヌリ	石・長(1~2) ○	黑 売	23
66	壺	口径(22.6) 器高 7.6	肩部の張り出い。 口縁部ナガリみ。	①ヨコナゲ ②ナゲ	①ヨコナゲ ②ナゲ	石・長(1~5) ○	—	—
67	壺	口径(25.2) 器高 9.0	口縁部ナガリみ。 縫合下外周「ノ」字状文。	①ヨコナゲ ②ナゲ	①ヨコナゲ ②縫合の有不明	石・長(1~4) ○	—	—
68	壺	口径(14.8) 器高 9.0	口部の張り出い。 口縁部丸みのある「ヨ」 字状。	—	縫合の有不明	石・長(1~5) ○	—	—
69	壺	口径 16.6 器高 4.5	口縁部丸みのある「ヨ」 字状。	ヨコナゲ	①ヨコナゲ ②カヌリナゲ	石・長(1~4) ○	出 売	—
70	壺	口径(17.0) 器高 28.6 底径 4.2	小さい口縁部。 口縁部や 中頸部に 口縁部丸みのある「ヨ」 字状。	①ヨコナゲ ②ハケ(縦方4) ③ナゲ	①ヨコナゲ ②ハケ	石・長(1~3) 多合 ○	—	23

出土遺物観察表

SK15 III層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 烧 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
71	甕	口径(19.2) 残高 7.5	口縁部下方に軽微。口縁部裏面に朱色「ノ」字状文。	①ヨコナゲ ②ナゲ	①ヨコナゲ ②ケズリ→ナゲ	石・長(1~2) 全 ○		
72	甕	口径(18.3) 残高 6.4	口縁部内側溝。口縁部やや厚い。腹面ナゲ凹み。	①ヨコナゲ ②ハケ	①ナゲ ②ナゲ(口部ケズリ)	石・長(1~6) ○		
73	甕	口径(19.3) 残高 3.9	腹部強いナゲによる凹み。	①ヨコナゲ ②ハケ	①磨滅の為不明 ハケ	石・長(1~3) 全 ○		
74	甕	口径(17.2) 残高 6.6	口縁部ナゲにより面をもつ。	①ヨコナゲ ②磨滅の為不明	①ヨコナゲ ②ナゲ	石・長(1~7) 全 ○		
75	甕	口径(14.3) 残高 8.5	紅茶が強く張る。肩部以下をケスる。	①ヨコナゲ ②ハケ	①ヨコナゲ ②ハケ、ケズリ	G・長(1~3) ○	黒 底	
76	甕	口径 19.5 高さ 24.8 底径 5.0	口縁部や内面。 口縁部裏。下方にやや突起。 わずかに上げ底。	①ヨコナゲ ②ハケ・ナゲ	①ヨコナゲ ②ハケナゲ ③ナゲ	石・長(1~4) 全 ○	黒 底 23	
77	甕	口径(17.8) 残高 13.0	底部はヨコ方向の斜毛目調査。口縁部や腹に凹み。 口縁部裏丸みのある「コ」字状。	①ヨコナゲ ②ハケ(5~6本/cm)	①ヨコナゲ ②ケズリ	石・長(1~3) 全 ○	黒 底	
78	甕	口径 5.7 残高 16.2	器壁薄い。平底(わざかに上り)。	②ハケ(8~9本/cm) ③ナゲ	④ハケナゲ ⑤ケズリ→ナゲ ⑥ナゲ	石・長(1~6) 全 ○	黒 底 23	
79	甕	底径 6.3 残高 15.5	くびれの上げ底。	④板ナゲ ⑤ナゲ	⑥板ナゲ ⑦ナゲ	石・長(1~5) ○	黒 底	
80	甕	口径 12.8 高さ 17.6 底径 5.3	上げ底。口縁部や下端で突出し、丸い。	①ヨコナゲ ②ハケ・ナゲ ③磨滅の為不明	①ヨコナゲ ②ケズリ→ナゲ ③ナゲ	石・長(1~2) ○	黒 底 23	
81	甕	口径(17.3) 残高 3.5	紅茶が強く張る。口縁部丸い。	①ヨコナゲ ②ナゲ	①ヨコナゲ ②ケズリ	石(4~5) ○		
82	甕	口径 4.6 残高 11.2	くびれの上げ底。沿壁がやや薄い。	④ハケ ⑤ナゲ	ナゲ↑↑↑	石・長(1~5) ○	黒 底	
83	甕	口径 22.0 残高 16.3	無地: 褐内模様文2箇、ヘラによる「ノ」字文。 口縁部: 指4条の山形文、横凹5条。	①ヨコナゲ ②ハケ(5本/cm) ③ハケ	①ヨコナゲ ②ハケ ③ハケ	石・長(1~3) ○		
84	甕	口径(16.6) 残高 4.8	口縁部に褐色文6条。 口縁部裏に褐色文2条。	①ヨコナゲ ②ヨコナゲ	磨滅の為不明	石・長(1~5) ○		27
85	甕	残高 9.7	腹出し斜面二角形の内部文1条。腹部下に「ノ」字状文。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~5) 全 ○		
86	甕	残高 20.6	複合口縁部削痕部。腹出し内縫文2条と木口による「ノ」字状文。	④ハケ(4本/cm) ⑤ハケ ⑥ハケ→ミガキ	ナゲ上げ器	石・長(1~6) ○	黒 底 27	
87	甕	口径(12.7) 残高 13.5	口縁部強いヨコナゲ。 腹面ナゲ凹み。	①ヨコナゲ ②ハケ(5本/cm)	①ヨコナゲ ②ナゲ(ケズリか)	石・長(1~5) ○		

出土遺物観察表

SK15 III層出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 烧	備 考	図版
				外 面	内 面			
88	壺	口径(16.2) 残高 10.5	口縁部はナゲにより、 やや下端が突出する。	①ヨコナゲ ②ナゲ	①ヨコナゲ ②ナゲ	石・長(1~3) ○		
89	壺	口径(16.2) 残高 3.4	口縁部強いヨコナゲ。 口縁部ナゲ凹み。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	石・長(1~4) ○		
90	壺	口径(14.6) 残高 4.4	口縁部はマメとしているが、 わずかにナゲ凹みする。	ハケ・ナゲ	ナゲ	石・長(1~5) ○		
91	壺	口径(9.8) 最高 23.0 底径(5.5)	小手平底。口縁部 「つ」字状。2分の1段存 在。	①ヨコナゲ ②ハケ(5本/1cm幅方向)	ナゲ	石・長(1~4) 金 ○	24	
92	壺	底径 5.0 残高 22.5	口縁部と胴部2分の1次 屈曲。 断面の内側にはヘラに 2列凹目。	②ナゲ ③ハケ→ナゲ ④ナゲ	③ナゲ ④ハケ→ナゲ ⑤ナゲ	石・長(1~9) 多合 ○	24	
93	壺	底径 5.8 残高 27.2	丸みのある平底。	磨滅の為不明	ハケ(磨损)	石・長(1~9) 多合 ○	24	
94	壺	底径 13.1	やや無い長脚壺。ヘラと 片の押圧による「ノ」字 状文。	②ハケ→ナゲ ③ハケ・ミガキ	②ナゲ ④ナゲ	石・長(1~5) 金 ○	24	
95	壺	底径 7.2 残高 8.2	突出溝みで、丸い平底。	②ヘラ・ガキ ③ナゲ	ナゲ	石・長(1~4) 金 ○	黒周	
96	壺	底径 5.2 残高 6.7	丸みのある平底。	磨滅の為不明	ケズリ(擦痕)	石・長(1~7) 多合 ○		
97	壺	底径 7.7 残高 11.4	上部折。	②ハケ(縦方向) ③ナゲ	ナゲ	石・長(1~3) ○		
98	壺	底径(5.2) 残高 8.7	上部折。	ハケ(5本/1cm、縦方向)	磨滅の為不明	石・長(1~5) ○	黒周	
99	高杯	口径(23.0) 残高 4.0	口縁部丸い。	ハケ→ナゲ	ミガキ(縦方向)	石・長(1~5) ○		
100	高杯	残高 6.2	光擦技法か? 器壁内凹み。	ハケ(7本/1cm、縦方向)		石・長(1~3) 金 ○		
101	高杯	底径 15.6 残高 11.8	光擦技法。シボリ。 輪廓部表面剥落2箇所。 焼成前穿孔4ヶ。	縦ハケ(8本/1cm)	②ナゲ ③ハケ(横方向)	石・長(1~4) ○	25	
102	高杯	底径(12.8) 残高 15.0	光擦技法。器壁面凹みの ある「コ」字状。	磨滅の為不明 (ミガキの可能性あり)	②ナゲ ③ヨコナゲ	石・長(1~3) ○		
103	高杯	底径 11.8	光擦技法。	ヘラミガキ(縦方向)	ナゲ	石・長(1~4) ○		
104	高杯	底径(11.9) 残高 9.4	光擦技法。鋸歯部は板張 し、鋸川面2条施す。	ハケ(6本/1cm、縦ハケ)	②ナゲ ③ヨコナゲ	石・長(1~4) ○		

出土遺物観察表

SK15 III層出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
105	高杯	底径(11.0) 残高 6.5	柱上部に縦円彫文2条以上。 底部に瓦文2条。 側面に縦円彫文2条。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~3) ◎		27
106	高杯	底径 11.4 残高 2.9	灰岩質。 側面ナメによる面取り。	ハケ(5~7本/cm)、羅方 彫	ハケ(5本/cm)	石・長(1~5) ◎		
107	高杯	底径 8.5 残高 6.8	小型な、器壁やや薄い。 脚頃丸い。	磨滅の為不明	ヨコナメ	石・長(1~4) ◎		
108	鉢	口径(35.2) 高さ 21.8 底径 8.6	やや突出ぎみの平底。 口縁板面ナメ凹み。	①ヨコナメ ②ハケ(5本/cm) ③ハケ→ヘラミガキ	①ハケ→ナメ ④磨滅の為不明	石・長(1~3) ◎	復元	25
109	台付鉢	底径 7.9 残高 5.0	上げ底。組み合せ式。	磨滅の為不明	ナメ	砂粒(石・長) ◎	黒塗	
110	台付鉢	底径 7.6 残高 4.0	器壁厚い。平底。	(微細な施文)		石・長(1~4) ◎		
111	ミニチュア	底径 2.4 残高 2.0	蒙皮土器か。くびれの上 平底。	ナメ	ナメ	石・長(1~3) ◎		

表27 SK15 III層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残 存	材 質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
112	石斧	刀形欠損	結晶片岩	12.0	4.5	2.1	234.3		25
113	G 鋸	完 整	安山岩	8.0	5.5	4.7	265.5		25
114	磨き石	%	安山岩	9.2	7.4	5.5	554.0		25

表28 SK15 II層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
115	甕	口径(17.4) 底高 2.4	口縁部は、わずかに内凹して立ち上る。口縁端面は曲張り。	ヨコナメ	ヨコナメ	砂粒(石・長) ◎		
116	甕	口径(21.0) 底高 3.0	器壁やや薄い。口縁端面は「コ」字状。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~3) ◎		
117	甕	底径 6.0 残高 2.8	くびれの平底。やや厚い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~2) ◎		
118	甕	底径 5.4 残高 2.0	高台状の上げ底。	ナメ	ナメ	石 ◎		
119	甕	口径(24.8) 底高 6.8	剥離著しい。口縁端面にヘラによる山形文か、均等削付による凸脊文1本。	①ヨコナメ ②磨滅の為不明	ハケ・ヨコナメ	石・長(1~3) ◎		

出土遺物観察表

SK15 II 層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
120	壺	口径(12.7) 残高 10.6	口縁端部ナギにより、やや下方に突出をする。	①ヨコナギ ②ハケ	①ヨコナギ ②ハケ	密(石・長1) 金 ○		
121	壺	口径(10.8) 残高 9.6	口縁(4cm)で規則的深く切られ、腹部は本口押正による「ノ」字状文	①ヨコナギ ②ハケ (4本/1cm縦方向)	①ヨコナギ ②ハケ	石・長(1~2) ○		
122	壺	口径 9.2 残高 5.2	口縁端部強いヨコナギ。	①ヨコナギ ②ハケ・ナギ	ナギ	密(長1) ○		
123	壺	口径(18.1) 残高 8.4	腹部ヘテ様化模様4~5条。 刻文。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~3) ○		
124	壺	口径 18.0 残高 14.0	口縁端部と肩部に骨質文。 口縁端部下にやや拉張。	①ハケ・施文 ②(施文)ハケ (6本/1cm縦方向)	①(ハケ→ヨコナギ 施文)ハケ (6本/1cm)	石・長(1~4) ○	26 27	
125	壺	口径(19.0) 残高 1.8	口縁端部にヘラ磨山形文。	ヨコナギ	磨滅の為不明	石・長(1~2) ○		
126	壺	残高 10.0	腹部に凸唇文1本。本口によると「ノ」字状文。	ハケ (6本/1cm縦方向)	ハケ・ナギ	石・長(1~3) 金 ○	黒 瓶	27
127	壺	底径 6.5 残高 12.2	丸みのある平底(わずかに上る)。		磨滅の為不明	石・長(1~5) 多合 ○	出 現	
128	高杯	口径(19.3) 残高 2.5	外反口縁。回接部の擬口縁看取。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~3) ○		
129	高杯	口径(20.8) 残高 2.3	回接部の擬口縁看取。	ハケ	磨滅の為不明	石・長(1~5) ○		
130	高杯	口径(25.0) 残高 3.7	大きく外反する口縁部。	ハケ	磨滅の為不明	石・長(1~6) ○		
131	高杯	口径(16.0) 残高 5.2	回接部に弱い接あり。口縁端部丸い。	磨滅の為不明	ハケ・ナギ	石・長(1~4) 金 ○		
132	高杯	口径(20.0) 残高 4.5	口縁端部丸い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~2) 金 ○		
133	高杯	底径 15.0 残高 15.0	充填技法。脚端部ナギ回り。 脚端部内面強いヨコナギ。	磨滅の為明確でないが縦 方向のハサカハラミガキの可能性あり。	ナギ	石・長(1~7) 多合 ○	黒 瓶	
134	高杯	残高 10.4	充填技法。シボリ軋。	ハケ (10本/1cm縦方向)	磨滅の為不明	石・長(1~3) ○		
135	高杯	残高 8.3	龙珠紋。組み合せ式。 結合部の擬口縁看取。円孔1ヶ以上。	ハケ (縦方向)	ナギ	石・長(1~2) 金 ○		
136	高杯	底径 11.5 残高 12.6	焼成前円孔(直1.4cm)2ヶ。 底部中央だが、环部底部は充填技法。	磨滅の為不明	ナギ	石・長(1~6) 金 ○		26

出土遺物観察表

SK 15 II層出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 烧 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
137	高杯	底径 14.7 残高 8.9	複数円孔(直径1.4cm)6ヶ。 光焼技法の可能性あり。	ハケ(5本/cm、縦方向)	ハケ(5~6本/cm)	素(4~5) 金(○)	石・長(1~4) ○	
138	高杯	底径(10.6) 残高 7.0	器壁が厚い。側面部内面 わざかに突出する。縁部 絞部。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~4) ○		
139	高杯	底径(9.4) 残高 5.1	脚端部ナゲ凹み。	ハケ(6本/cm)	ハケ→ナデ	石・長(1~2) 金(○)		
140	高杯	底径 9.7 残高 7.0	柱上部円孔4ヶ、側部圓孔 8ヶ。底床前穿打で底径5 mm削除。	ハケ(6本/cm、縦方向)	(1)ハケ (2)ハケ→ヨコナゲ	石・長(1~4) ○		26
141	高杯	残高 3.8	小型品。頸次横程文12条。 光刷捺状文と思われるダ ラ沈漫文2条以上。	ヘラミガキ・施文	ナデ	素 ○		
142	鉢	底径 5.6 残高 6.0	くびれの上げ式。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~6) ○		
143	鉢	底径(6.3) 残高 5.9	くびれの上げ式。	ナデ	ナデ	石・長(1~2) ○		
144	器台	口径(29.7)	器台ないしは蓋とそえら れる。 口縁端部に擬円輪文2条。	ハケ(8本/cm)	ナデ	石・長(1~3) ○		
145	器台	口径(21.2)	器による(4本筋)細かい 波紋文。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~4) 金(○)		27
146	支脚	底径 7.6 残高 7.1	器壁厚い。中空。底部2分 の1次削。光部削削する。	ナデ	ナデ	石・長(1~3) ○		26
147	ヒュニア	底径 3.5 残高 2.5	器壁7番目。くびれの上 げ式。	ナデ	磨滅の為不明	石・長(1~2) 金(○)		
148	不明	底径 3.1 器高 5.8	器種器形不明。6~7条の 刻みを2組もつ。			石・長(1~2) ○		26

表29 SK 4 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 烧 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
149	甌	口径(18.5)	口縁端部はナデにより下 方にわざかに拡張する。	(1)ヨコナデ (2)ナデ	(1)ヨコナデ (2)ナデ	石・長 金(1~4) ○		
150	甌	口径(16.5)	口縁端部はナデにより下 方にわざかに拡張する。	(1)ヨコナデ (2)ヨコナデ	(1)ヨコナデ (2)ナデ	石・長 金(1~3) ○		
151	甌	口径(24.3)	上方に拡張された口縁端 部には4条の圓筒模様が 施される。	(1)ヨコナデ→施文 (2)ナデ	(1)ナデ	長・金(1~2) ○	黒面	

出土遺物観察表

SK 4 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 烧	土 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
152	甕	底径(5.7)	わざかに上がる七げ底。	④ヨコナゲ ⑤ハケ ⑥指揮印痕 ⑦ナゲ	⑩ヨコナゲ	長(1~2) ○			
153	甕	口径 16.8 高さ 33.9 底径 7.6	わざかに膨張された口縁 縁面には、2条の觸引痕 が施される。	④ヨコナゲ ⑤ハケ ⑥ヨコナゲ ⑦ナゲ ⑧ハケ	⑩ヨコナゲ ⑨タゲ ⑩ヘラケズリ	石・瓦 金(1~6) ○		28	
154	甕	口径(10.0)	外反する口縁部は肩部が 先廢りする。	④ヨコナゲ ⑤ハケ→ナゲ	⑩ヨコナゲ ⑪ヘラケズリ	石・瓦 金(1~4) ○		28	
155	甕	口径(10.5)	口縁膨脹部は口にそ る。口縁端部は「コ」字 状を呈する。	膨脹のため不明	⑩ヨコナゲ ⑪ナゲ	石・瓦 金(1~3) ○		28	
156	甕	口径(16.7)	外反する口縁部をもつ。 口縁端面はナゲによる凹 みをもつ。	⑩ナゲ	⑪ナゲ	石・瓦 金(1~4) ○			
157	甕	口径 8.2 高さ 8.5 底径 3.7	口縁端部はナゲにより凹 みをもつ。腹部には門札 2ヶ所を貯蔵する。	⑩ナゲ ⑪ナゲ ⑫磨滅のため調整不明	⑩ヨコナゲ ⑪ナゲ ⑫指揮印痕	石・瓦(1~4) 金 ○		28	
158	瓦	口径 13.7 高さ 9.5 底径 7.6	2部はゆるやかに立ち上 り、口縁端部は丸い。	⑩シガキ ⑪シガキ	⑩シガキ ⑪ナゲ	石・瓦(1~8) 金 ○		28	

表30 SX010 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 烧	土 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
159	甕	口径 11.8 高さ 23.7 底径 5.9	くびれの七げ底。棱をも つて折れ曲がる口縁部。	④ヨコナゲ ⑤ハケ ⑥指揮印痕→ナゲ	⑩ヨコナゲ ⑪ハケ ⑫ヘラケズリ	石・瓦(1~5) ○	黑 瓦	29	
160	甕	底径 4.9	小さいくびれの七げ底。	⑩ヨコナゲ ⑪ヨコナゲ	⑩ハケ ⑪ナゲ	石・瓦(1~4) ○			
161	甕	底径 6.4	小さいくびれの七げ底。 内面は凹凸が著しい。	⑩ハケ ⑪ナゲ	⑩ハケ 指揮印痕	石・瓦(1~5) ○			
162	甕	口径 5.4 高さ 26.5 底径 2.5	口縁端面は上方にわざか に膨張し、ナゲ凹む。	④ヨコナゲ ⑤ハケ ⑥ヘラミガキ	⑩ヨコナゲ ⑪ハケ ⑫ヘラミガキ	石・瓦 金(1~6)	正 瓦	29	
163	甕	口径(30.4)	口縁端面や底面、端面 に3本の觸引痕。	⑩ヨコナゲ、ハケ	⑪ハケ	砂(石・瓦) (1~3) ○			
164	甕	口径(13.0)	口縁端部は「コ」字状を 呈する。	⑩ヨコナゲ	磨滅のため不明	石・瓦(1~5) ○			
165	甕	口径(11.2)	口縁端部はナゲによりわ ざかに膨張される。	⑩ヨコナゲ	⑪ハケ	石・瓦 金(1~4) ○			
166	甕	残高 3.4	口縁端部外面は櫛(木舟) による割れ目(木文)施す。	⑩ナゲ	⑪ナゲ	石・瓦 金(1~1) ○			

出土遺物観察表

S X 010 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 烧 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
167	壺	瓶高 4.8	肩下に捺目がある。	(④) ハケ (⑤) ハケ	ナデ	石・貝 金(1~5) ○	-	-
168	壺	瓶径 5.1	扁平の体形にわずかに突出する下瓶をもつ。	⑥ハケ→ナデ	⑦ナデ	石・長(1~5) ○	黒面	-
169	壺	瓶高 22.0	底部下に沈縞文を5束	⑧ナデ	⑨ナデ	石・長(1~5) ○	-	-
170	壺	底径 5.8	肩部に沈縞文1束とヘラ 取て具による「ノ」字状 文を施す。	⑩ハケ	(⑪) ハケ (⑫) ハケ→ナデ	石・長(1~4) ○	-	-
171	壺	底径(5.4)	丸みがあり、突出する平 底をもつ。	(⑬) ハケ	(⑭) ハケ ⑮ナデ	石・貝 金(1~4) ○	黒面	-
172	鉢	口径 13.5 瓶高 10.7 瓶径 5.8	くびれの上げ鉢。	⑯ヨコナデ ⑰ハケ ⑯ヨコナデ	⑯ヨコナデ ⑰ナデ	石・長 金(1~3) ○	-	29
173	鉢	瓶径 4.2	くびれの上げ鉢。	⑯ヨコナデ	(⑲) ハケ ⑳ナデ	石・長(1~6) ○	黒面	-
174	高环	11径(8.3) 器高 11.2 底径 4.2	环延はゆるやかに立ち上 り、11径端部は丸い。	(㉑) ナデ (㉒) ナデ (㉓) ヨコナデ	㉔ナデ (㉕) ヨコナデ	石・貝 金(1~6) ○	黒面	29
175	高环	底径(14.2)	脚端面はナデによる凹 み。	㉖ハケ ㉗ヨコナデ	㉖ハケ ㉗ヨコナデ	石・長(1~5) ○	-	-
176	高环	底径 8.1	脚下部に7ヶの円孔(4mm 大)を瓶周縁文4束。	㉘ハラミガキ ㉙ナデ	㉚ナデ	石 ○	黒面	-
177	ショコ形	底径(12.2)	わずかな上げ鉢。	(㉛) ハケ→くガキ ㉜ナデ	(㉝) くガキ ㉜ナデ	石・長(1~3) ○	黒面	-
178	ヒチャフ	11径(6.2) 器高 5.8 底径 3.2	厚い上げ底。やや延張さ れた口縁端部は水平。	㉞ヨコナデ ㉟ナデ ㉟ナデ	㉟ヨコナデ ㉟ナデ	石・長(1~5) ○	黒面	-

表31 S K 4 関連品出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 烧 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
179	壺	口径 15.6 器高 24.3 底径 5.6	口縁端部はナデにより内 面に小さく突出する。	(㉑) ヨコナデ (㉒) タテハケ	(㉓) ヨコナデ	石・長 金(1~4) ○	僅	-
180	鉢	口径(19.3)	やや内溝する口縁部。口 縁端部はナデにより凹み をもつ。	㉔ヨコナデ	㉔ヨコナデ	長(1~2) ○	黒面	-
181	鉢	口径(6.8)	丸彫りし、直立する口縁 部をもつ。	㉕ナデ・ヨコナデ ㉖ハケ	ナデ	石・長 金(1~4) ○	黒面	-

出土遺物観察表

表32 S X010 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
182	はば穴形	安山岩		12.0	7.35	5.8	831.2		29

表33 SK13 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土成	備考	図版
				外 面	内 面			
183	甕	口径(26.0) 残高 5.0	口上部丁字型。折り曲げの 内面。底部内面にゆるやか な模様。	①ヨコナデ ②ハケ・ミガキ	①ヨコナデ ②ヘラミガキ	石・長(1~4) セ ○		
184	甕	口径(23.0) 残高 3.0	折り曲げの口縁部。底部 内面にゆるやかな模様。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石(右・長1) ○		
185	甕	口径(19.4) 残高 4.0	折り曲げの口縁部。底部 内面に模様。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~2) ○		
186	甕	口径(22.0) 残高 2.1	口縁部下部を折り曲げに より括弧。口縁部面に複 雑模様。	ヨコナデ	ヨコナデ	石(右・長1) ○		
187	甕	底径 6.5 残高 14.5	わざかにくびれる上げ 底。	ヘラミガキ(縦方向)	ヘラミガキ	石・長(1~4) セ ○	萬葉	
188	甕	底径 6.4 残高 13.2	くびれの上げ底。底部外 曲はナデ。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~5) 多合 ○		
189	甕	口径(12.1) 器高 26.3 底径 5.5	丸みのある半底。	①ヨコナデ ②ハケ ③ナデ	①ヨコナデ ②ナデ	石・長(1~5) セ ○		30
190	甕	口径(19.7) 残高 1.9	口縁端部ナデによる括 弧。	ヨコナデ	磨滅の為不明	石・長(1~2) 金 ○		
191	高杯	口径(9.1) 残高 3.7	内凹する口縁部。口縁端 部は欠損するが、括弧は しないものと思われる。	ナデ	ナデ	石・長(1~2) ○		
192	甕	口径(15.8) 残高 6.0	折り曲げの口縁部。ヘラ 王字による「ノ」字状文。 口縁端部ナデ。	①ヨコナデ ②ナデ	①ヨコナデ ②ナデ	石・長(1~3) ○		
193	井	口径(14.6) 残高 3.9	折り曲げの口縁部。端面ナ デによる括弧。底部内面 に模様。	①ヨコナデ ②ナデ	①ヨコナデ ②カギ	石・長(1~3) ○		
194	ショッケ野	口径(13.8) 残高 5.5	直口口縁部。口縁端部「コ」 字状。口縁外曲。ナデに よる凹み。	①ヨコナデ ②ハケ→ヘラミガキ	①ヨコナデ ②ハケ・ナデ	石(右・長1) 金 ○		30
195	不規	底径(6.3) 残高 6.0	上げ底。底部外曲ナデ。	ナデ	磨滅の為不明(ケズリ有)	石・長(1~5) セ ○		
196	不規	底径 4.2 残高 3.0	小型品の底部。くびれの 上げ底。	ミガキナデ	板状の工具痕あり	石・長(1~2) セ ○		

出土遺物観察表

表34 SK13 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
197	石鉗	ほぼ完形	安山岩	3.1	1.3	0.48	1.8		30

表35 SK1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土成	備考	図版
				外面	内面			
198	壺	底径 8.8 残高 7.5	くびれの平底。	側ハケ(6本/1cm、縦方向) ◎◎ナデ	ナデ	石・灰(1~5) ○		
199	壺	底径(6.4) 残高 2.1	くびれの平底。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・灰(1~3) ○		
200	壺	底径(8.4) 残高 2.0	平底。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・灰(1~3) ○		
201	高环	残高 10.2	柱状中空がわずかにみえる。 先端抜けか。	磨滅の為不明	ナデ	石・灰(1~5) ○		

表36 SK3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土成	備考	図版
				外面	内面			
202	鉢	口径(33.0) 残高 5.4	折り曲げの口縁。口縁端 面ナデ同じ。顕出内面に なるやかな棱。	ナデ	磨滅の為不明	石・灰(1~4) ○		
203	壺	口径(10.0) 残高 4.4	ナデによる1脚筋部折張。 頸部に複凹窪文1条以上。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・灰(1~4) ○		

表37 SK6 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土成	備考	図版
				外面	内面			
204	甌	口径(21.4) 残高 8.5	折り曲げの口縁。口縁端 面丸い。口縁上面僅いナ デやや凹む。	①ロコナデ ②ハケ(11本/1cm、縦方 向)	①ロコナデ ②ハケ(11本/1cm、縦方 向)	石・灰(1~3) ○		
205	甌	口径(21.6) 残高 4.7	折り曲げの口縁。口縁端 面丸みのある「コ」字縁。	①ロコナデ ②磨滅の為不明	①ロコナデ ②磨滅の為不明	石・灰(1~2) ○		
206	壺	口径(23.0) 残高 7.5	口縁は弱く付けるによる垂 下、瓶底内縁次第水以上。 内縁浮立2ヶ前で2組以 上。	ナデ	①ヘタミガキ→ナデ ②ヘタミガキ	石・灰(1~5) ○		
207	甌	底径(7.4) 残高 6.9	短い上げ底。	ナデ	磨滅の為不明	石・灰(1~3) ○		
208	甌	底径(5.4) 残高 2.5	上げ底。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・灰(1~4) ○		

出土遺物観察表

表38 S X07 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 燃	土 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
209	壺	口径(13.6) 残高 3.0	貼り付け口縁、口縁部にヘラ工具による刮削。 ①ヨコナデ ②ナデ		ナデ	石・長(1~4) 多合 ○			
210	壺	口径(21.7) 残高 3.2	折り曲げによる口縁、口縁の折り曲げ無い。施文は丸みのある「フ」字状。	①ヨコナデ ②ナデかミガキ(横方)	①ヨコナデ ②ナデ	石(石・長1) 金 ○			
211	壺	口径(21.7) 残高 5.5	貼り付けによる口縁の可能性あり。頸部に指添押印による凸部文1点。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石(石・長1) ○			
212	壺	口径(24.0) 残高 3.4	貼り付けによる口縁の可能性あり。頸部に指添押印による凸部文1点。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~4) ○			
213	壺	口径(31.2) 残高 3.3	貼り付けによる口縁の可能性あり。頸部に指添押印による凸部文1点。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~3) ○			
214	壺	底径(6.4) 残高 3.5	底部上部焼成後の穿孔。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~3) ○			
215	壺	口径(13.2) 残高 4.2	貼り付けによる口縁頸部抜支。	ヨコナデ (一部ハケあり)	ミガキ(横方向)	石・長(1~3) ○			
216	壺	口径(13.8) 残高 3.0	口縁下部端部折彎。	磨滅の為不明	磨滅の為不明 (ミガキの可能性あり)	石・長(1~2) ○			
217	壺	口径(17.6) 残高 5.5	口縁端下方に貼り付けによる施文。底部に凸部文1点以上。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~4) ○			
218	壺	口径(35.0)	口縁端下方に貼り付けによる施文。縁面にヘラ工具による凸部文。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~5) 金 ○			
219	壺	底径(9.5) 残高 5.2	口縁端	ハラミガキ(横方向)	ナデ	石・長(1~5) ○			
220	壺	底径(10.0) 残高 6.8	むずかに生け底か。	ハラミガキ(縦方向)	ナデ	石・長(1~4) ○			
221	壺	底径(7.2) 残高 7.5	丸みのある平底。器頸部 い。	①ハケ ②焼成の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~5) ○			
222	杯	口径(14.5) 残高 4.0	折り曲げ口縁、頸部内面の縫裂い。	①ヨコナデ ②ナデ(一部ハケあり)	①ヨコナデ ②ナデ	石・長(1~3) ○			
223	高杯	口径(22.9) 残高 2.6	口縁端部折彎。縁面に凸部文の大落痕あり。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~4) ○			
224	不明	底径(17.9) 残高 2.3	ヨコカタツヒ型の底部折彎。 二角形の貫通孔3ヶ所以上。	ヨコナデ	ナデ	石・長(1~2) ○	黒 商		

表39 S X07 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残 存	材 質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
225	石 壺	弓	自然砂岩	10.4	3.9	1.6	131.1		

出土遺物観察表

表40 SX08 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 烧成	備 考	図版
				外 面	内 面			
226	甕	口径(22.8) 残高 8.0	折り曲げ口縁。上方に酒 ぬきみ、腹面丸みのある 「コ」字状。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~7) ○		
227	甕	口径(23.0) 残高 7.0	折り曲げ口縁。腹面は丸 みのある「コ」字状。	①ヨコナデ ②ヘラミガキ(底方向)	①ヨコナデ ②ナデ	石・長(1~5) ○		
228	甕	底径(7.0) 残高 5.2	くびれの上げ底。	制削痕の為不明 ③ヨコナデ	磨滅の為不明	黄(石・長1) ○		
229	甕	底径 7.1 残高 5.4	くびれの上げ底。	磨滅の為不明	ナデ	石・長(1~4) ○		
230	甕	底径(7.2) 残高 5.7	上げ底。	ナデ	磨滅の為不明	石・長(1~4) ○		
231	甕	口径(19.6) 残高 15.5	内凹する口縁部。底部内 面に厚膜な模様。	①ヨコナデ ②磨滅の為不明	①ヨコナデ ②ナデ	石・長(1~3) ○		
232	甕	口径(21.9) 残高 4.4	折り曲げ口縁。口縁端部 に横彫文2条。	①ヨコナデ ②シケ	①ヨコナデ ②カキ取り	黄(石・長1) ○		
233	甕	底径(6.0) 残高 3.8	錐形上部の可能性もあ る。上げ底。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・灰(1~4) ○		

表41 SX09 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 烧成	備 考	図版
				外 面	内 面			
234	甕	口径(23.0) 残高 4.5	折り曲げ口縁。底面小 なナゲ向み。	①ヨコナデ ②ナデ	①ヨコナデ ②熱ナデ	石・長(2~3) ○		
235	甕	口径(14.6) 残高 3.5	口縁部わずかに弧状。底 面ナゲ向み	ヨコナデ	①ヨコナデ ②ケズリ	石・長(1~4) 金 ○		
236	甕	口径(16.5) 残高 2.5	口縁端部に横彫文1条 見付。	磨滅の為不明	出滅の為不明	石・長(1~3) ○		
237	甕	口径(24.2) 残高 4.0	口縁部強張し、端面に ヘラ抹玉具による1条の 波状紋。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~7) ○	30	
238	甕	口径(14.7) 残高 2.0	口縁端部ナゲ向み、2ヶ1 組の内側突起は、浮突と を付けて押記。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~6) ○	30	
239	甕	口径(32.0)	口縁端部は複列突起3 条、内側2条+2ヶ1組。 浮突上に筋突起を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~2) 赤 色 料	30	
240	甕	口径(13.5) 残高 5.1	口縁外周に5~6条の浅彫 文。2条の山形文。	ヨコナデ	磨滅の為不明	石・長(1~4) ○		30

出土遺物観察表

S X 09 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調査		胎焼成	備考	図版
				外面	内面			
241	壺	残高 6.0	側部に「ノ」字状の凸唇文。凸唇部に斜口。凸唇部に斜口。凸唇部に斜口。	ハケ(5本/1cm) (一部ナデ)	ナデ	石・長(1~5) ○		
242	鉢	口径(18.3) 残高 4.2	折り曲げ口縁。口縁端部にはナデ凹み。無端内面はゆるやかな曲。	①ハケ→ヨコナデ ②ハケ(1本/cm)	磨滅の為不明	石・長(1~4) ○		
243	鉢	口径(11.8) 残高 5.0	折り曲げ口縁。端部内面に接。	①ヨコナデ ②磨滅の為不明	①ヨコナデ ②ナデ	石・長(1~3) ○		
244	ショキ形	口径(8.8) 残高	口縁端部丸み。差し込み式	①ヨコナデ ②ナデ (ミガキの可能性あり)	①ヨコナデ ②ナデ	石・長(1~3) ○		30
245	高杯	口径(18.5) 残高 4.1	撇先状口縁。口縁部上面にやや圓錐。	磨滅の為不明	ヨコナデ	石・長(1~5) ○		30
246	瓶	底径(6.4) 残高 3.0	腹上部器、椎底後穿孔。円孔直径7mm。	ナデ	①脱カキ ②ナデ	石・長(1~3) ○		

表42 S X 09 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版	
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)			
247	石壺	丁	結晶片岩	10.3	4.2	0.9	55.2	B14 C6	30	
248	石壺	I	ほぼ完形	結晶片岩	11.0	3.8	0.7	48.0	B14 C6	30

表43 第III層 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調査		胎焼成	備考	図版
				外面	内面			
249	壺	口径(23.8) 残高 4.8	口縁端部は貼り付けにより上方に膨張。口縁外面に施文文様。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~3) ○		
250	壺	底径 8.3 残高 11.7	突出する丸みのある平底。	調離の為不明	ナデ	石・長(1~4) ○		
251	高杯	残高 2.5	口縁端部軽微。	ナデ	ナデ	石・長(1~4) ○		
252	杯	底径 1.9 残高 1.5	上部器部。高台「ハ」字状。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石 ○		
253	瓶	底径(7.0) 残高 1.3	頸部器の痕ないしむ。高台付き。	ヨコナデ	ヨコナデ	石 ○		

出土遺物観察表

表44 第IV層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 烧	土 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
254	甕	口径(21.0) 残高 3.0	折り曲げ口縁。瓶形内面 ゆるやかな後。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	石・長(1~4) ○	一	一	一
255	甕	底径(8.4) 残高 1.2	くびれの上げ底。側端面 は直取り。	ナゲ	ナゲ	石・長(1~3) 金 ○	一	一	一
256	甕	底径 6.0 残高 3.6	くびれの上げ底。	磨滅の為不明	ナゲ	石(石・長1) ○	一	一	一
257	高杯	底径 6.4 残高 2.6	小堅底、組み合せ式。 側端面を直取り	シガキ(縦方向・アメツ)	ヨコナゲ	石・長(1~4) ○	一	一	一
258	台付杯	底径 6.5 残高 4.2	笠型厚い。側端面はわずかに直取り。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~4) ○	黒 瓷	一	一
259	高杯	残高 5.0	直口器。側柱上部に浅刻 文1點。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	石 ○	一	一	一
260	环身	口径(9.9) 残高 2.2	直口器。内輪外反するた ちあがり。端部は屈く丸 い。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	石 ○	一	一	一

表45 第V層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 烧	土 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
261	甕	口径(21.2)	垂下口縁。口縁上面と底 面に施書き文(4本筋)。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	石・長(1~3) 金 ○	一	一	一
262	甕	底径(8.1) 残高 2.9	丸みのある平底。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~3) ○	一	一	一

表46 第VI A層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 烧	土 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
263	甕	口径(25.0)	口縁横屈曲。口縁外肉回 転文2列以上。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~3) ○	一	一	一
264	高杯	口径(23.2) 残高 3.5	口縁端部「ヨ」字状。	磨滅の為不明	ヨコナゲ	石・長(1~3) ○	一	一	一
265	器台	残高 5.7	器台と考える。小円孔(直 径 1.1cm) 2ヶ以上。	磨滅の為不明	ナゲ	石・長(1~3) ○	一	一	一

出土遺物観察表

表47 第IV層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 面				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
266	石斧	完形	安山岩	7.5	7.9	7.5	533.4		31
267	石斧	%	安山岩	9.3	6.1	4.4	395.5		31
268	石斧	%	安山岩	2.7	1.9	0.99	2.2		

表48 第VI層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		施 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面			
269	壺	口徑(16.8)	口縁部粗証、端面に凹溝及支条と棒状浮突1ヶ。口縁上面に凹溝3条以上。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~3) ◎	施入品 か	
270	壺	口徑(18.6)	口縁端面に複列線文2条以上。斜支文入り内縁浮突4ヶ1組。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~4) ○		
271	壺	口徑(15.4) 残高 2.3	口縁端面に複列線文2条。	ヨコナデ	磨滅の為不明	石・長(1~3) ○		
272	鉢	口徑(13.1) 残高 4.5	折り重ね口縁。器壁はきわめて薄い。	②ヨコナデ 側磨滅の為不明	①磨滅の為不明 ヨコナデ	石・長(1~3) 金 ○		
273	高杯	残高 8.5	支渠技法。	ハケ(5本/1cm幅ハケ)	ナデ	石・長(1~4) ◎		
274	合口鉢	底径 7.6 残高 4.0	上口底。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~4) ○		
275	印彫壺	底径 3.7 残高 2.4	蓋付上器か。上げ底。	ヨコナデ	磨滅の為不明	石・長(1~8) ○		
276	壺	底径 3.9 残高 2.9	小型品。上げ底。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~3) ○		
277	环身	口徑(11.0) 残高 2.8	周邊部、内部や中内がみのうちあがり。口縁部部頗る丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	素 ◎		
278	环身	口徑(9.1) 残高 1.8	周邊部、内傾外反するたちあがり。口縁部出丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	素 ○		
279	壺	口徑(15.6) 残高 1.7	頸部器。肩部並びに口縁端面は「ヨ」字状。	ヨコナデ	ヨコナデ	素 ○		
280	壺	底径(13.0) 残高 4.6	長脚壺。ハササギの高台。	ヘラヅリ	ヨコナデ	素 ○		
281	壺	残高 3.6	長脚壺。肩部に凹線文2条。斜点文。	ヨコナデ	タタキ・ヨコナデ	素 ○		

出土遺物観察表

第VI層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎焼	土成	備考	図版
				外 面	内 面				
282	环甌	底径(10.6) 残高 4.6	高台付甌身。(ハ)の字状 高台。脚部周回む。	ヨコナデ	ヨコナデ	素 ○			
283	甌	口径(16.5) 残高 4.0	瓦器柄。口縁部外反。	ヨコナデ	ヘラミガキ	素 ○			

表49 第VI層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
284	磨き石	完形	結晶片岩	8.5	6.5	3.0	271.1		31

表50 第VII層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎焼	土成	備考	図版
				外 面	内 面				
285	甌	口径(22.8) 残高 3.1	口縁部、わずかに抹加。 口縁部に施因縫文2束。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・黄(1~3) ○			
286	甌	口径(12.4) 残高 5.5	肩を削り口縁。	磨滅の為不明	ナデ	石・黄(1~3) ○			
287	甌	口径(16.6)	口縁部貼り付けによる垂 下。口縁部ナデ凹み。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・黄(1~3) ○			
288	甌	残高 4.0	複合口縁部。口縁外面に 4条の横切縫文と、6条の 斜側面に日文を施す(物)。	ヨコナデ	ハケナデ	石・黄(1~3) 全 ○			
289	高甌	口径(20.0)	口縁外面に因縫文4束。 口縁部はナデ凹み。	ヨコナデ	①ヨコナデ ②ヨコナデ	石・黄(1~3) ○	出発		
290	高甌	底径(16.0) 残高 3.0	縦筋因縫文3束。欠損根 溝1ヶ所。脚部に因 縫文1束。	ハケ・施文	ナデ	素 ○			
291	高甌	残高 6.6	塑形。	磨滅の為不明	ナデ	石・黄(1~3) 全 ○			
292	高甌	残高 8.0	シボリ筋。柱上部に7条 の成縫文。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・黄(1~3) 全 ○			
293	高甌	底径 7.4 残高 7.6	組み合せ式。性上部に洗 縫文3束。	ヘラミガキ	ナデ	石・黄(1~3) 全 ○			
294	不明	残高 4.5	沿縁唇形不明。 焼成用円孔(Φ4mm)1ヶ。	ナデ	ナデ	石・黄(1~3) 全 ○			31
295	レシテュア	底径 4.3 残高 2.4	便形土器か。くびれの上 に切紋。	ナデ	ナデ	石・黄(1~3) ○			

出土遺物観察表

表51 表採及び層不明出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調査		焼成	備考	図版
				外 面	内 面			
296	甕	口径(27.6) 残高 5.2	縁付付け口の可能性あり。器部内面わずかに突出する。縁付口部凸部なし。	正 [○] ヨコナデ 斜 [△] ハケ(底方向)	磨滅の為不明	G・K(1~4) ○	K-6ト	
297	甕	口径(18.6) 残高 4.2	口縁部わずかに膨張。磨滅の為不明	磨滅の為不明	磨滅の為不明	G・K(1~2) ○	表採	
298	甕	口径(14.0) 残高 3.0	口縁部膨張。端面ナデ 凹み。	ヨコナデ	ハケナデ	G・K(1~3) ○	C-8	
299	甕	残高 7.5	強烈な剥離付口部(口 部)。内部上に指印押捺。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~4) 多 [△] 合	C-4	
300	甕	残高 8.0	底部に縁付内袋文3 本以上。2本は欠落。	ハケ(7本/1cm幅方向)	ヨコナデ(1ガキの可 能あり)	G・K(1~3) ○	西壁ト レンチ	
301	甕	口径(27.2) 残高 6.3	口縁部を上方に拡張。 口縁前面に鋸刃痕文2条。 木口による「フ」字文。	正 [○] ヨコナデ 斜 [△] ハケ(底方向)	正 [○] ヨコナデ 斜 [△] ハケ(底方向)	G・K(1~4) 全 [○]	C-9	
302	甕	口径(19.6) 残高 6.0	口縁部加厚ね上げ状。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	短(12) ○	大ベル トII	
303	甕	直径 7.8 残高 6.7	くびれの上げ底。	1ガキ	ナデ	短(12) ○	C-6 E-8	
304	甕	口径(27.4)	口縁部毛下。口縁部 に凹痕文4条。	ヨコナデ 一部ハケ	磨滅の為不明	石・長(2~5) ○	C-8	
305	甕	口径(19.2) 残高 3.8	口縁部膨張。口縁部表面に 凹痕文3条。	磨滅の為不明	ナデ	G・K(1~4) ○	B-9	
306	甕	口径(19.4) 残高 4.5	口縁部をやや拡張。器 面に凹痕文2条。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	G・K(1~3) ○	表採	
307	高杯	口径(12.1) 残高 3.8	口縁部膨張。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~4) 全 [○]	C-7	
308	把手	残高 6.7	ヨコナデ形上唇の斜手 型。扁平な骨柱状を呈す。	ナデ		石・長(1~3) 全 [○]	D-8 トレンチ	
309	高杯	残高 1.8	前孔状口部。板状内側。 (約3.5cm)1ヶ。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	短(1~3) ○	D-8 トレンチ	31
310	高杯	口径(31.2) 残高 2.8	漏光状口部。内面は貼り 付けるによる突出部をも つ。上面は凹む。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石(1~4) 全 [○]	D-8 トレンチ	31
311	ジロキ	底径 8.8 残高 1.6	底部分、上げ底。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	G・K(1~2) ○	C-6	
312	ミナマ	底径(4.0) 残高 4.0	蓋ないし跡形上唇。 相当陥落している。	ナデ	ナデ	短(1~3) ○	表採	

出土遺物観察表

表採及び層不明出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面			
313	斧	直径(3.7) 残高 6.0	直口刃鋸形。刃縁沿辺は細 く丸い。くびれの上に低。	ハケ(範方向)	磨滅の為不明	石・長(1~3) 金	C-6	
314	鎌	直径(14.6) 残高 7.4	折り重ね刃鋸形。刃縁削 ねずみに抵抗。	①ヨコナゲ 側面ハケ(6本/1cm範 方向)	②ヨコナゲ 側面ハケ(6本/1cm範 方向)	石・長(1~3) 金	C-9	
315	鎌	直径(17.2) 残高 5.0	刃縁削ねをわずかに抵 抗。	磨滅の為不明	ヨコナゲ	石・長(1~3) 金	C-6	
316	鎌	直径(20.4) 残高 5.4	刃縁削ねを抵抗。培面に 複数凹溝3条。口は崩下面 丸い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~3) 金	C-5	
317	鎌	残高 2.3	当合口刃鋸形。刃縁部外側 に4条(圖)の山形文。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	石・長(1~5) 金	表記	
318	鎌	残高 5.5	頭部に粗造押捺の貼り付 け凸部2本。	範ハケ	磨滅の為不明	石・長(1~4) 金	トランナ	
319	直刃	直径(16.0) 残高 5.0	底脚跡付か。刃縁部外側 に複数凹溝3条。	磨滅の為不明	ナゲ	石(石長) 金	入出ト 東トレ ンナ	31
320	直刃	直径(20.5) 残高 3.6	刃縁部外側はナゲ削み。刃 縁部外側は複数複文3条 以上。	磨滅の為不明	ヨコナゲ	石・長(1~2) 金	B-9	31
321	直刃	残高 8.2	光頭状面。シボリギ。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1~6) 金	C-6	
322	直刃	残高 10.2	光頭状面。上部はややふ くらむ。	ハケ(3本/1cm範ハケ)	ナゲ	石・長(1~3) 金	表記	
323	器台	直径(20.4) 残高 6.3	脚端部下端を點り付けに より底面。培面に複数凹 溝3条。底部に浅い複数凹 溝。	ハケ	ナゲ	石(1~2) 金	表記	31
324	漆鉢	直径(34.2) 残高 6.0	縄文上巻、外側に山形文 の文様。24条の沈溝。 原体112g。	椎又	ナゲ	石・長(1~6) 金	C-8	
325	环	直径(6.4)	頭部器・後孔高台。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	石 金	C-5	
326	轍	直径(17.2)	直轍、内側する直轍。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	石 金	西研 ンシナ	
327	鉤	直径(20.4) 残高 3.5	高台付離しない刃の直轍 部片。刃縁部外側はナゲ 削み。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	石 金	直接	

出土遺物観察表

表52 表採及び層不明出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
328	石劍	ほぼ完形	結晶片岩	9.7	4.8	0.8	57.6	表採	32
329	石劍	完形	安山岩	2.6	1.75	0.32	1.5	B14. 表採	32
330	石劍	完形	本色頁岩	2.45	1.8	0.25	1.1	C-5	32
331	石劍	ほぼ完形	安山岩	2.4	2.05	0.40	1.3	D-7 表採	32
332	石劍	完形	安山岩	3.0	1.4	0.43	1.3	D-6	32
333	石劍	ほぼ完形	安山岩	2.55	0.9	0.32	0.9	B14.	32
334	石斧	ほぼ完形	結晶片岩	6.3	3.0	0.9	39.3	表採	32
335	石斧	ほぼ完形	結晶片岩	11.0	4.1	2.6	322.5	C-6 D-9	32
336	(336)	完形	安山岩	8.0	9.7	4.2	532.6	表採	32

図 版

図版例言

1. 遺構の撮影は、大西朋子・梅木謙一・武正良浩が行った。

使用機材：

カメラ アサヒペンタックス67 レンズ ペンタックス67 55mm F4 他
ニコンニューFM2 他 ズームニッコール28~85mm 他
フィルム ネオパンSS

2. 遺物の撮影は、大西が行った。

使用機材：

カメラ トヨ／ビューアー45G レンズ ジンマーS240mm F5.6 他
ストロボ コメット／CA-32 2灯・CB2400 2灯 (パンク使用)
スタンド他 トヨ／無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム 白 黒 プラスXパン4x5
カラー エクタクロームEPP4x5

3. 遺構写真の焼き付け及び遺物写真のフィルム現像・焼き付けは、大西が行った。

(白黒に限る。)

使用機材：

引伸機 ラッキー450MD レンズ エル・ニッコール135mm F5.6A
ラッキー90MS エル・ニッコール50mm F2.8N
印画紙 イルフォードマルチグレードIII RC

【参考】『埋文写真研究』Vol. 1 1990 Vol. 2 1991

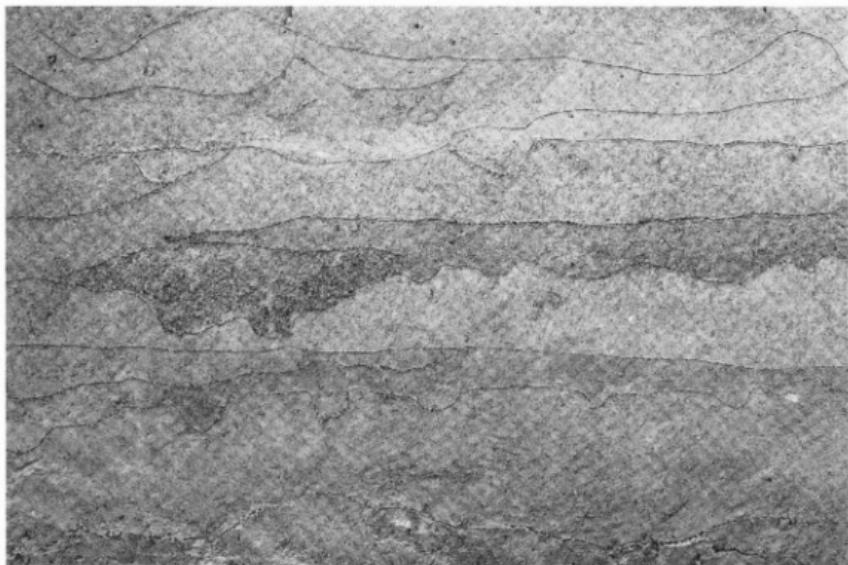
〔大西朋子〕



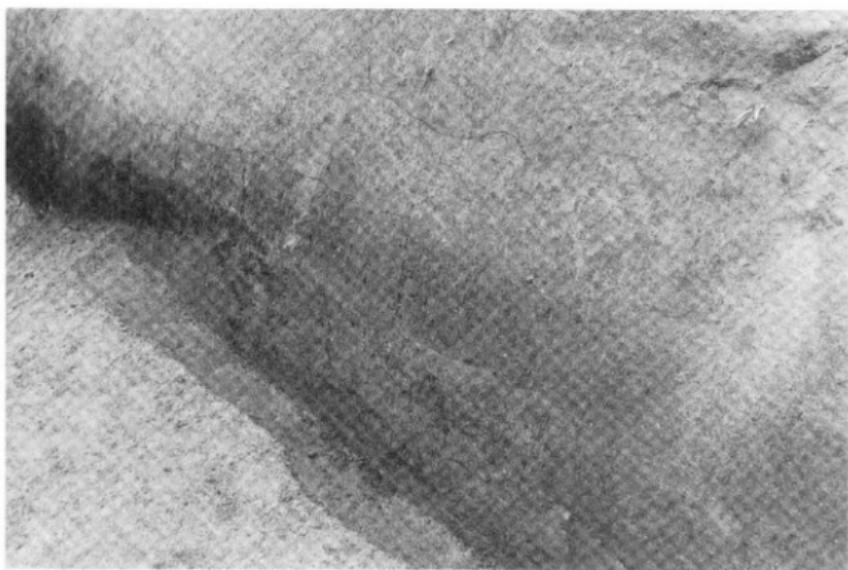
1. 祝谷アイリ遺跡遠景（西より）



2. 祝谷アイリ遺跡近景（西より）



1. 南壁上層（北より）



2. 西壁土層（北東より）



1. 遺構検出状況〔全景〕(南東より)



2. 遺構検出状況〔北部〕(南より)



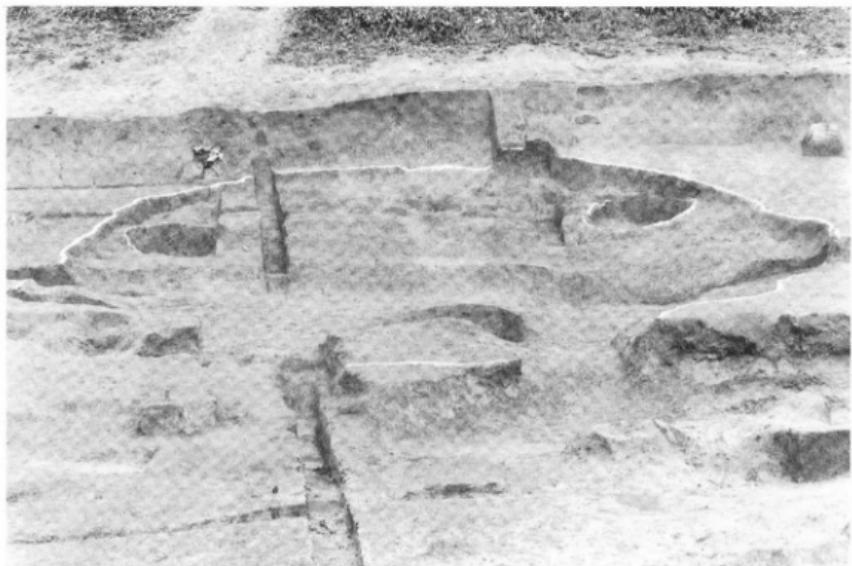
1. 完掘状況〔北部〕(南より)



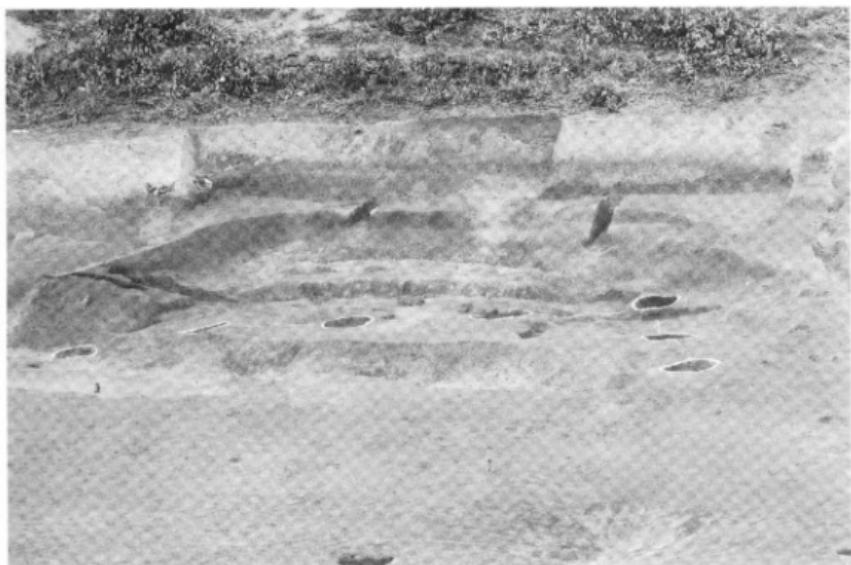
2. 完掘状況〔北西部〕(南東より)



1. SB 5 断面（南より）



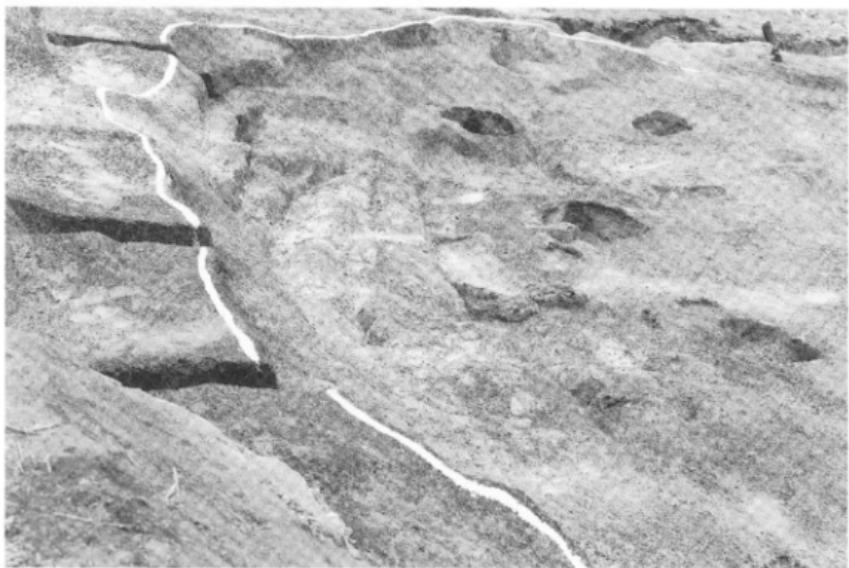
2. SB 5 （南より）



1. SB 2① (南より)



2. SB 2② (南東より)



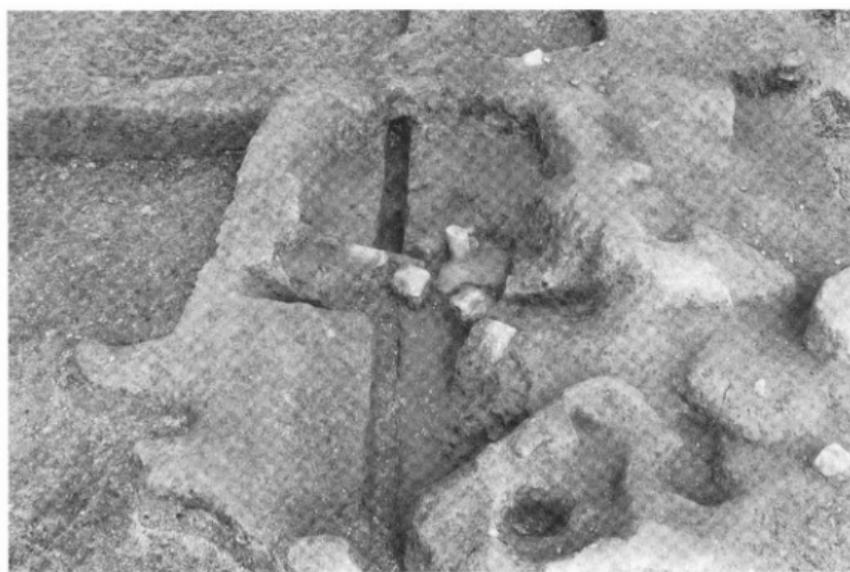
1. SB 2 炭化材検出状況（北西より）



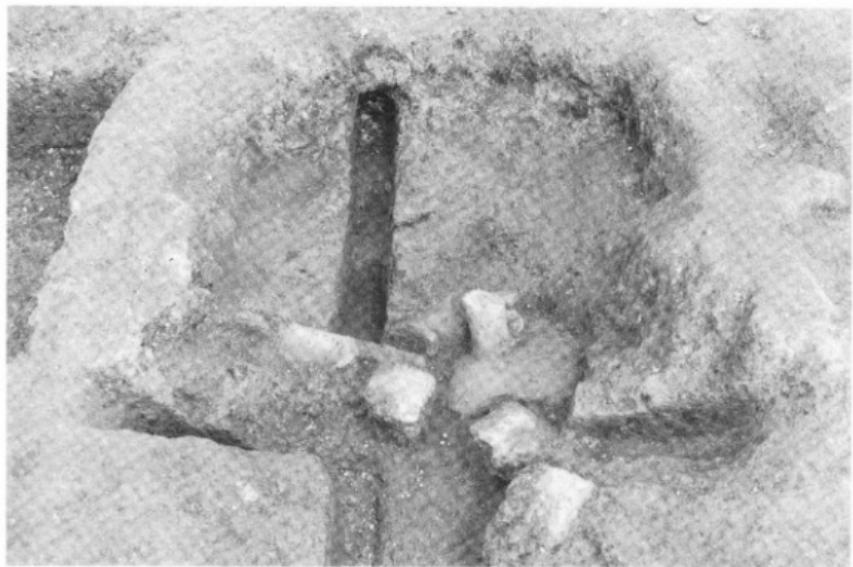
2. SB 2 炭化材検出状況（南東より）



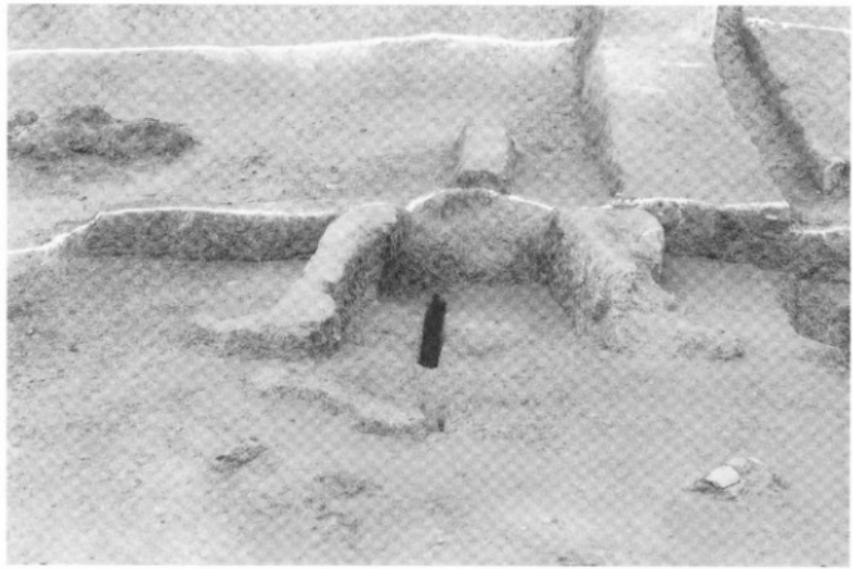
1. S B 1 (南より)



2. S B 1 カマド内遺物出土状況〔遠景〕(南より)



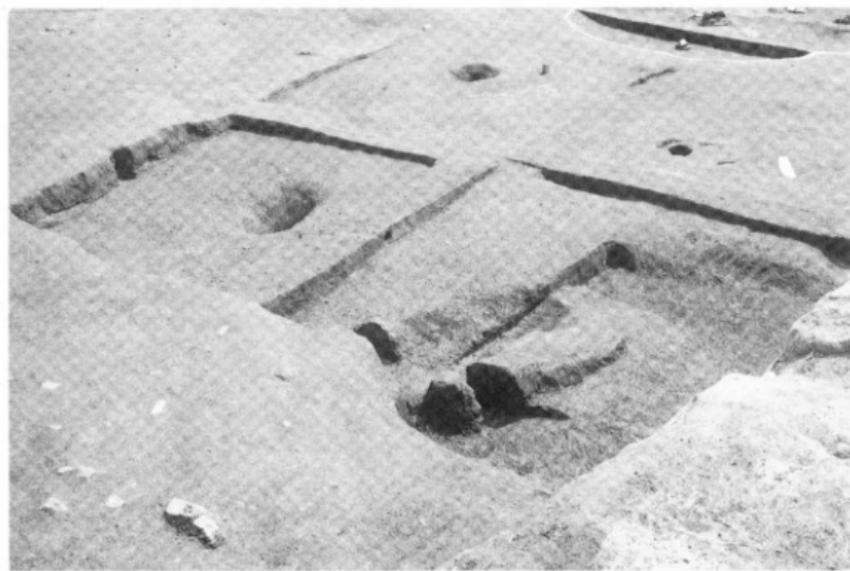
1. S B 1 カマド内遺物出土状況〔近景〕(南より)



2. S B 1 カマド (南より)



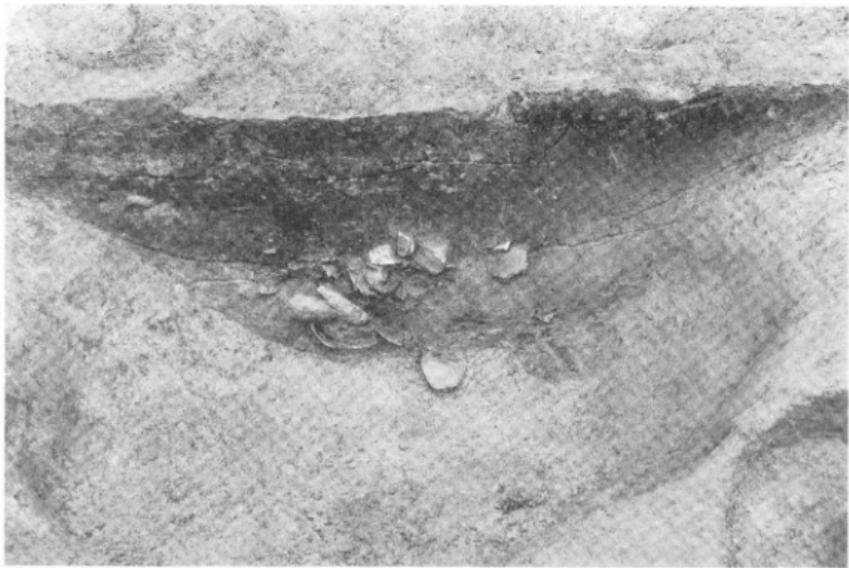
1. SB 3① (南東より)



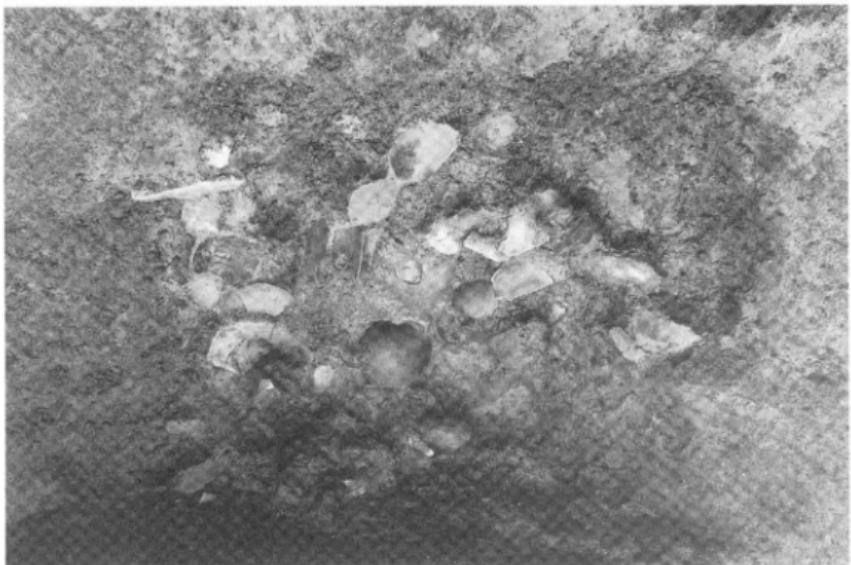
2. SB 3② (北西より)



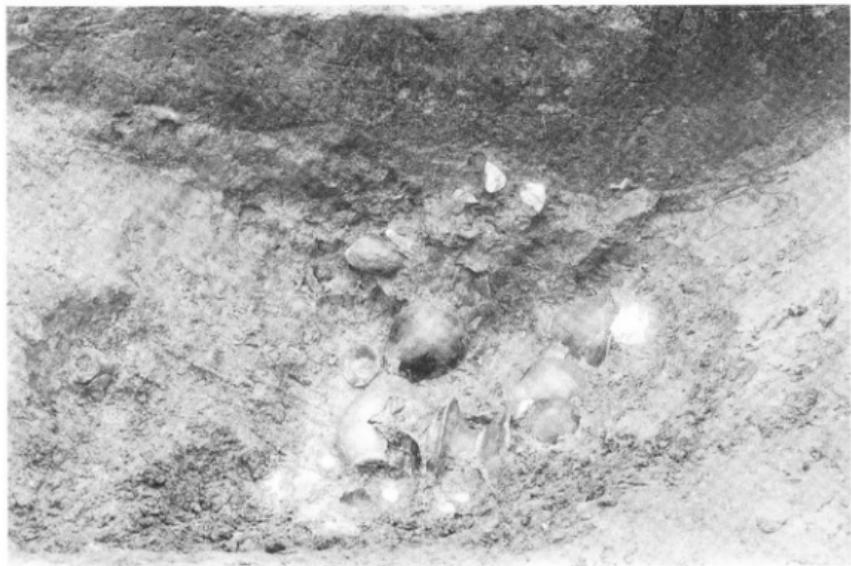
1. SK15 碓群検出状況（北東より）



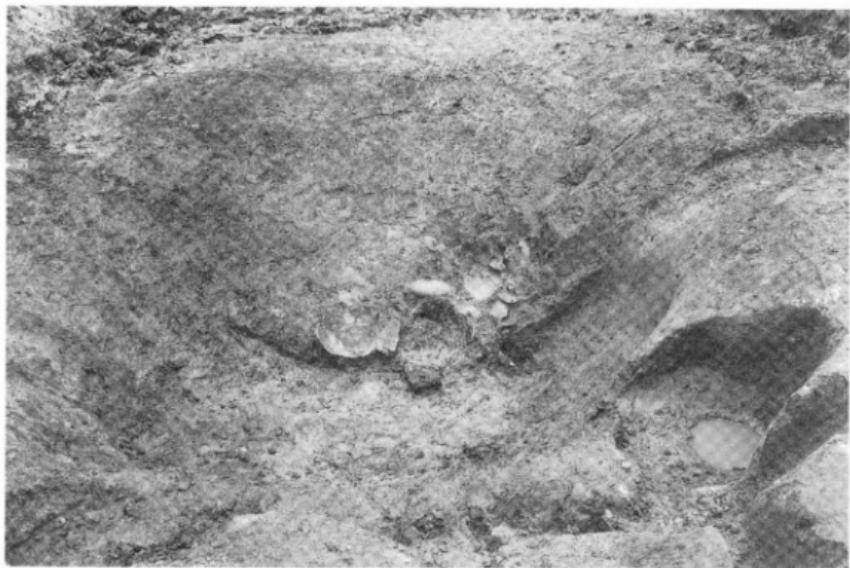
2. SK15断面（東より）



1. SK15 遺物出土状況① (束より)



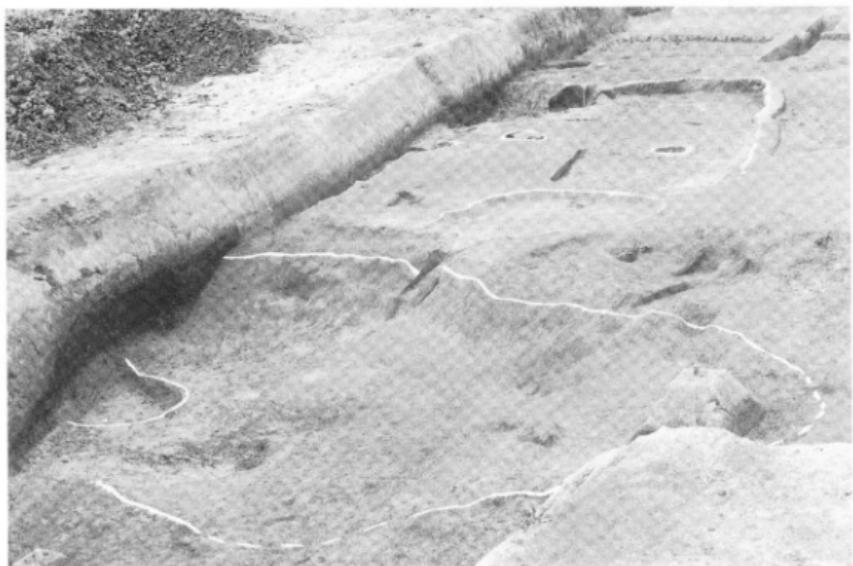
2. SK15 遺物出土状況② (束より)



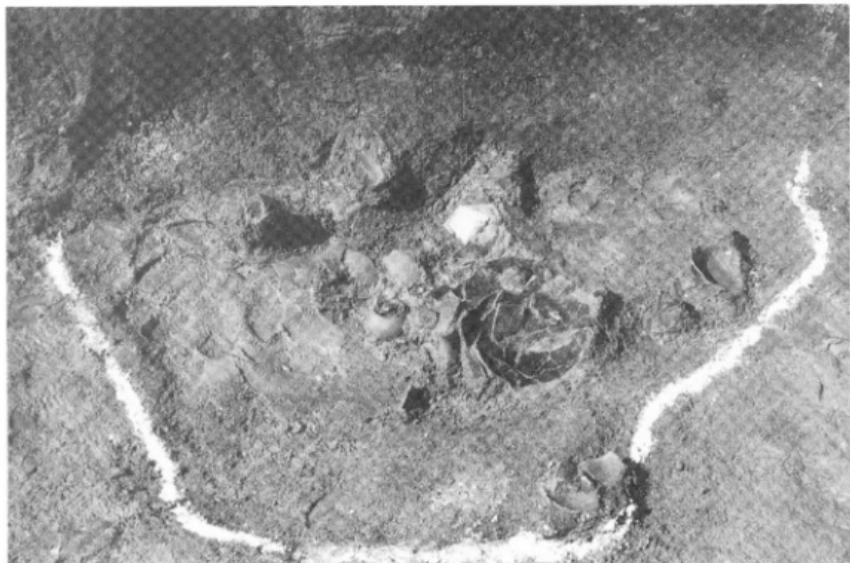
1. SK15 遺物出土状況③（東より）



2. SK15（東より）



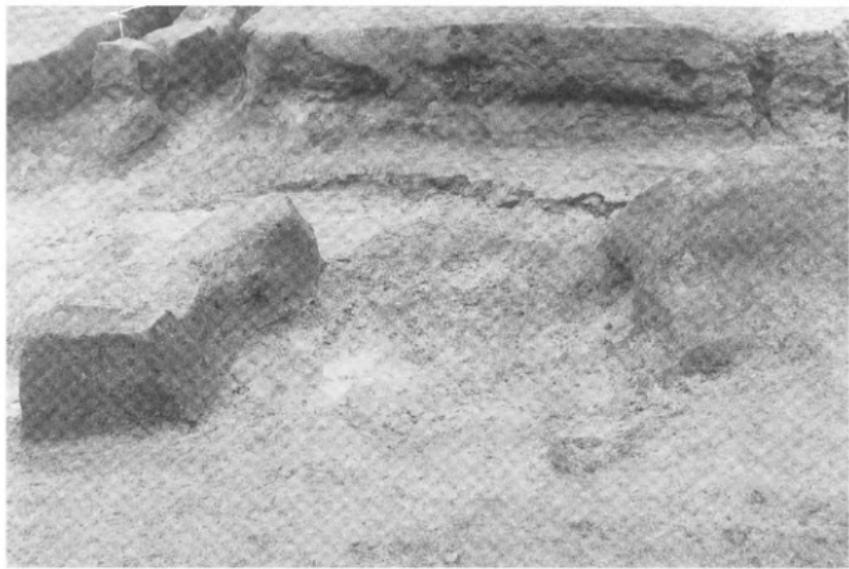
1. SK4 [左下] SX010 [下] SB4 [上] (南東より)



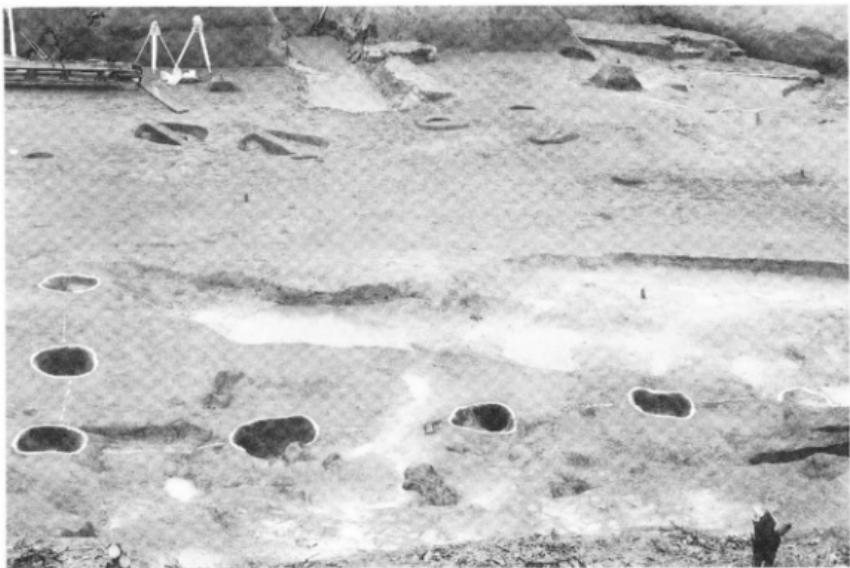
2. SK4 遺物出土状況 (東より)



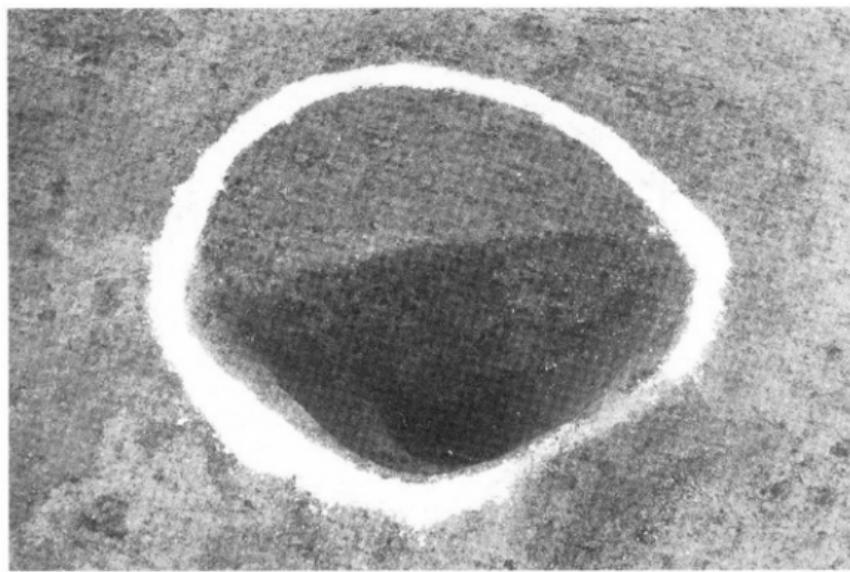
1. SK13 造物出土状況（北より）



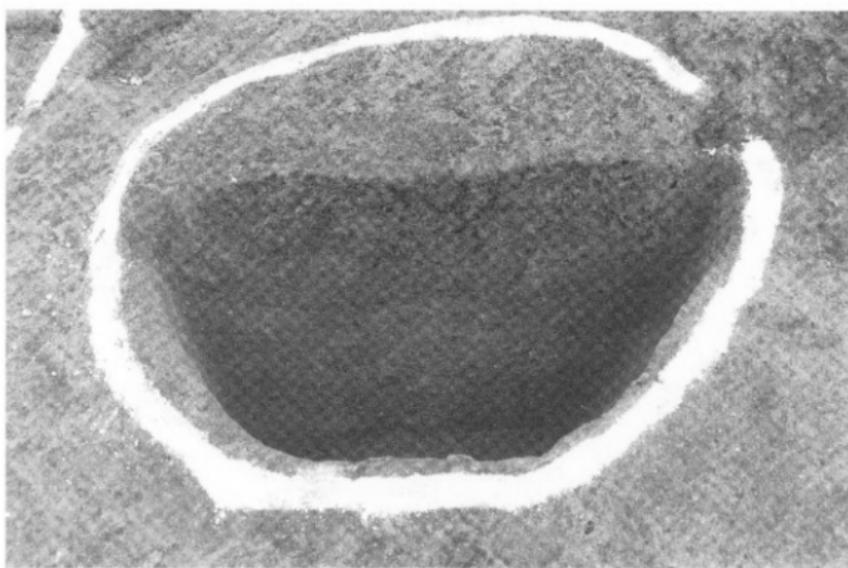
2. SK13（南より）



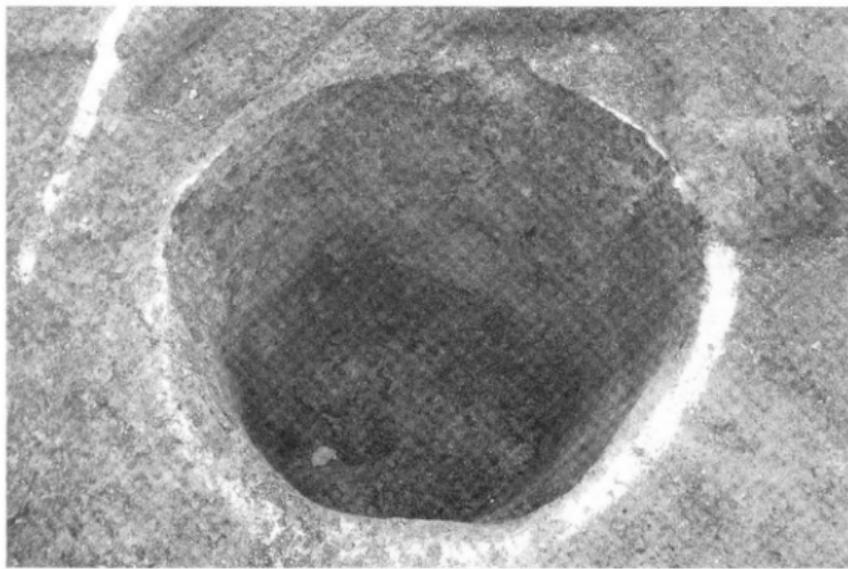
1. 掘立1 (北より)



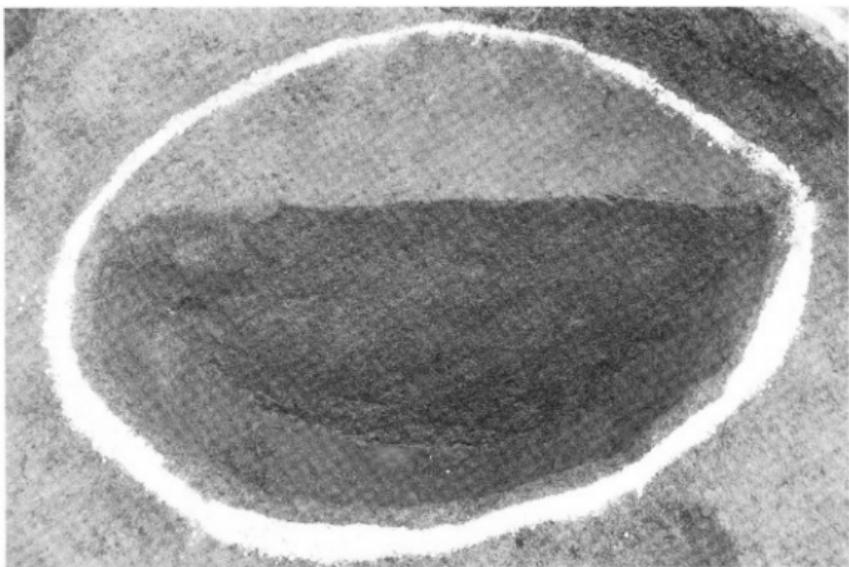
2. 掘立1 SP12 断面 (北より)



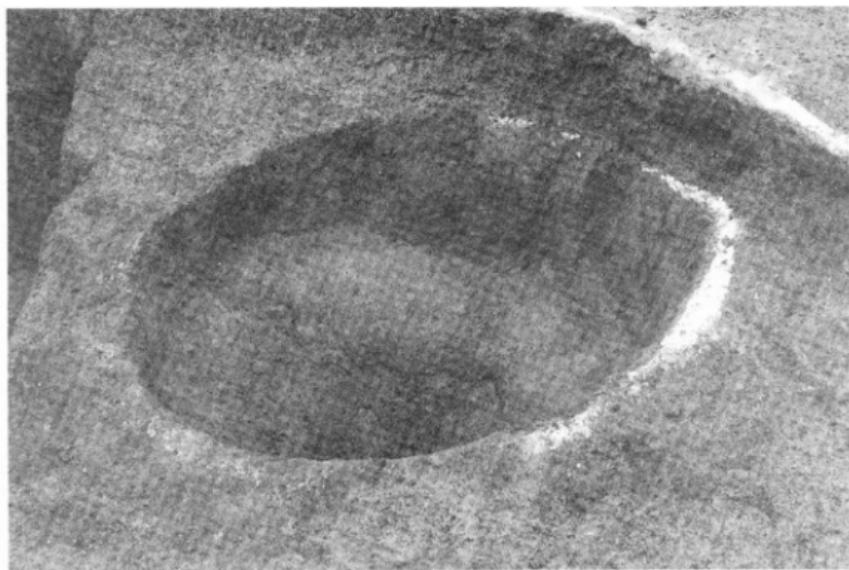
1. SK 2 断面（南より）



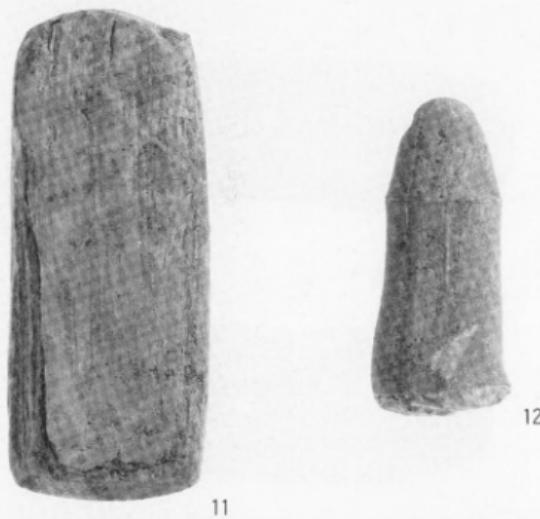
2. SK 2 (南より)



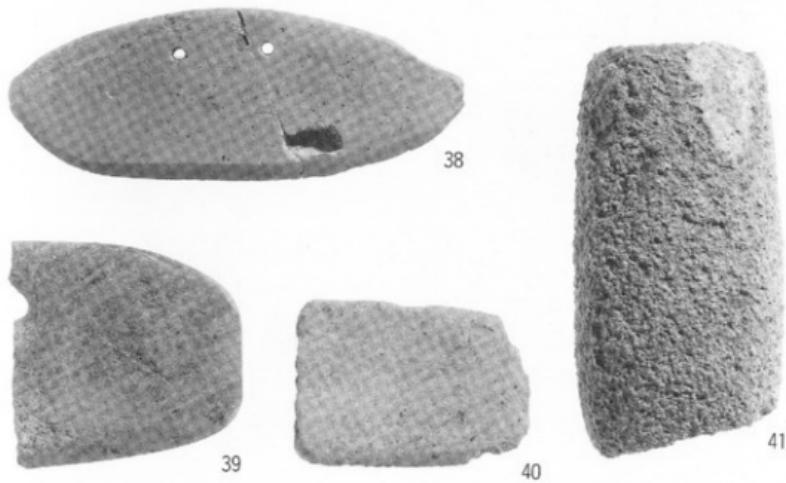
1. SK 3 断面（南より）



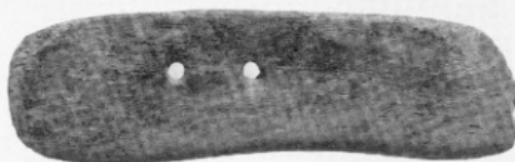
2. SK 3 (南より)



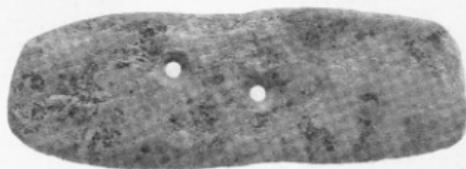
1. SB 5 出土遺物



2. SB 2 出土遺物



42



43



46

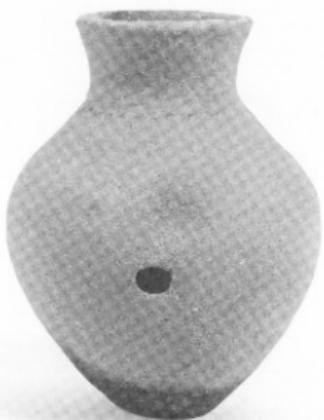


47

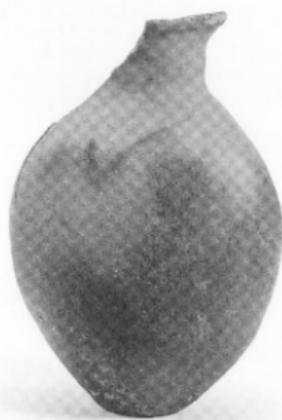


48

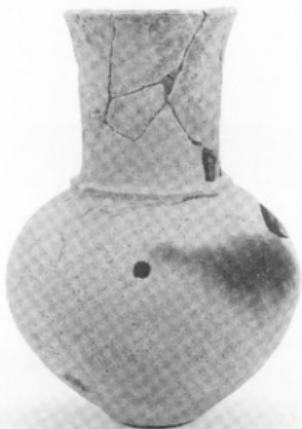
1. SB 7 出土遺物



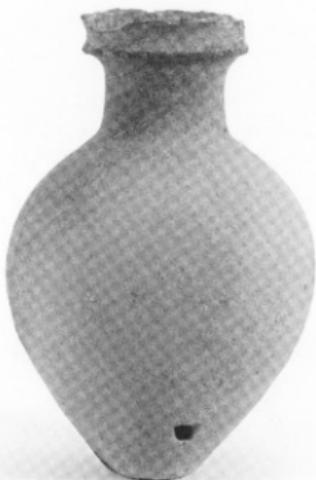
56



57

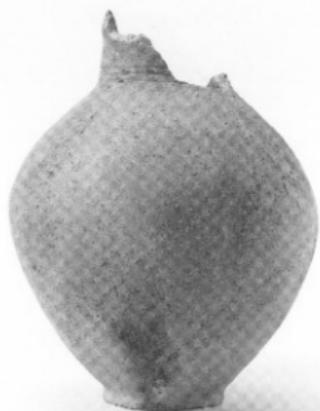


58



59

1. S K15 最下部出土遺物



60



61



62

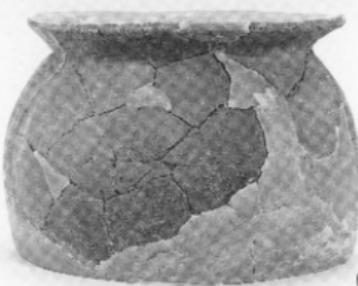


63

1. SK15 最下部他出土遺物



65



64



70

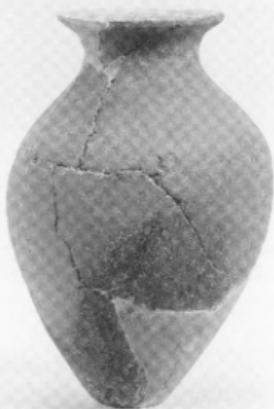


76

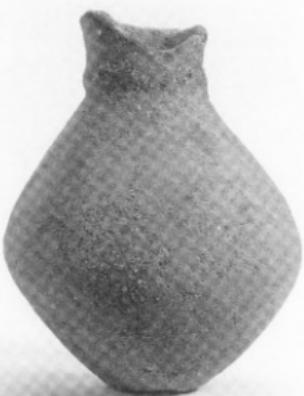


80

1. SK15 III層出土遺物 ①



91



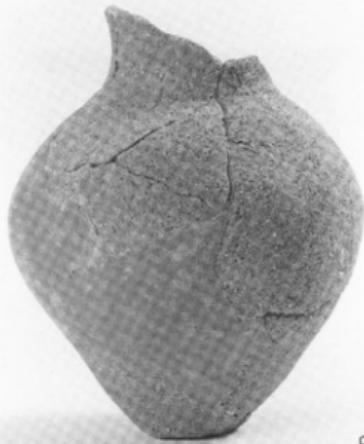
92



94



94



93

1. SK15 III層出土遺物 ②



101



108



112



113



114

1. SK15 III層出土遺物 ③



124



136



140

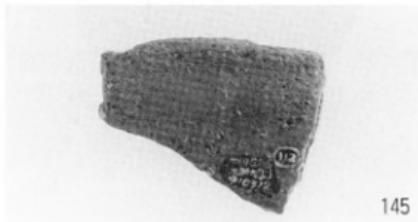
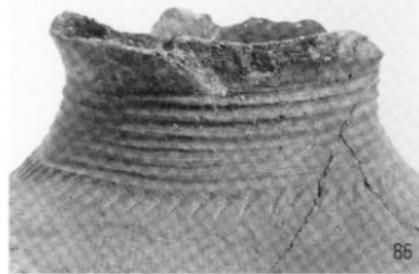
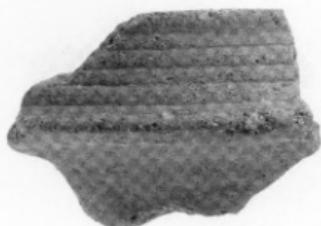


146



148

1. SK15 II層出土遺物



1. SK15 最下部他出土遺物(59・63) SK15 II層出土遺物(124・126・145)
SK15 III層出土遺物(84・86・105)



153



154



155



157



158

I. SK 4 出土遺物